Shukyo vol IV (19-24) Published Japanese Unitarian Association

H. S. L. DUPLICATE SOLD.

○合本第四巻

宗教

（自第拾九號
至第廿四號）

May-Oct.

宣言

宗教とは、人をして上帝を知覺せしめ、自ら神意と信する處に從ひ、生活の方法を決せしむる處の教訓なり。

此の雜誌宗教は、日本「ユニテリアン」弘道會に於て發行し。其の目的は純正なる宗教の智識を明にし、其の實踐を奬勵し、之れか改良進歩を計るに在り。元來「ユニテリアン」教は、宗教上の一運動にして、其の起原と歴史とに於ては基督教たり。然れとも宗教は、決して表題に掲けたる潤大包容の名目に負き[illegible]宗一派に偏するものに非ら[illegible]り。

「ユニテリ[illegible]は、基督教の自由及び進歩的[illegible]にして、吾人はこれをして普及[illegible]理及び普及宗教と、異名同義た[illegible]しめんとの希望を有す。[illegible]に曰く世界の宗教は、千差萬別[illegible]其の形状を異に[illegible]雖も、均しく是れ圓滿なる一大[illegible]の一方面に過きされは、「ユニテリアン」教徒は、誠實に上帝を[illegible]し、宗教的智識と生活とを探究するの徒に向て同情を表し、交友たらん事を企望するものなり。

日本「ユニテリアン」教徒は、上帝の天父なる事、及び人類の同胞なる事を信し。此の雜誌を奉し、以て完全なる至眞と正道との本領を世界に擴張せんとす。

今「ユニテリアン」教の何者たるを一層明瞭にせんが爲め、左に該教徒基本の主義及び普通の信仰を記せん。

ユニテリアン教 基本の主義

一基礎　ユ教は口碑の教權によらず、合理的大道、科學的眞理を以て基礎となす、

二方法　ユ教は全く自由討究を以て方法となす、

三目的　ユ教は個人的及び社會的たる人類の徳性を最も高尚に發達せしむるを以て目的となす、

ユニテリアン教徒 普通の信仰

一ユ教徒は信ず、宗教は人類の上帝に關係する所以及び人類の義務(上帝の意志とも稱すべき義務)に關係する所以を自然に表明するものなり、

二ユ教徒は信ず、基督の教理に於て上帝を[illegible]人類を同胞となすの[illegible]

三ユ教徒は信ず、上帝[illegible]無窮の權力、智惠、慈悲[illegible]物質界、精神界の源泉、教[illegible]及び整理者なり、

四ユ教徒は信ず、人類は神造力の最も高大なる生産なり、人類は發達すべき智力と精神とを賦與せられ、宗教的及び道德的感情を有し、併せて上帝を知覺し、生命無窮の希望を有す、故に曰く人類は上帝の子なりと、

五ユ教徒は信ず、舊新約全書は人類幾多の著書を蒐集せるものにして誤謬の存するあるも人類の宗教的性質を表明せる最良の書籍なり、

六ユ教徒は信ず、基督は精神界の最大なる豫言者なり、宗教上の發達に於て人類を導きたる諸師の最高なるものなり、

七ユ教徒は信ず、諸宗教は皆優劣の差あるべきも、其本源同一にして、其目的も實際同一なるを以て互に教友なり、

宗教　第拾九號

（明治廿六年五月五日）

林

浸禮教の地位

教授　ローレンス

吾子は在横濱米國バプテスト共同傳道會社に向ひ、今般『バプテスマの略解』なる小冊子を世に公けにし、以て浸禮教の何物たるを明らかにせられし好意に向て謝詞を表せさるへからす。抑も該書は米國のダブルユー、ダブルユーエヴアルツ氏の原著にして、エフ、ジー、ハーリングトン氏幷に日本の久代外治氏の共譯に係り、植字鮮明、順序其の宜しきを得、而して飜譯者の目的とする處は明らかに其の緒言に明言せしが如く＝固より説教の是非曲直を論するに非ず、要は唯々日本帝國の公平なる眞理探究者にして、新約全書中數々用ゐられたる「バプテスマ」てふ希臘語の深遠なる意義を知らんとするも、希臘語に通曉せさるの故を以て隔靴痛痒の歎ある者の爲に眞理探究の一助となさん＝とするに外ならざるべし、勿論浸禮教の團躰は誠實にして、其の辯護者は必らず彼れ等の正確なる地位幷に信仰を抱持し、且つ正義と至眞の本源を振興せんとするに在るものなるべし、然らば則ち吾子は欣んで浸禮教徒が彼の厭ふべき教法上の羈絆にして異教徒に向つて少なからざる妨害を與ふる處の固執迷信を離脱し、實際に於ては甚だ自由なる信教者たる事を世上に吹擧するを憚らざるべし、然れども凡べて人間社會に在て、各人各自其の歸する處に依り組織せられたる集合團躰は實際甲乙丙丁の差異あるを免かれず、譬へば或る一事あり、甲派に在ては明白なる事實として承認し、非常に之れを必要視して熱心すと雖も、往々乙派に在ては唯々に之れを輕忽に看過するのみならず、反て之れを以て有害無効なりとするが如き實例少しとせず、世間多數の教會に於ける一般の性質としては、定期の會合を以て通則となし、之れに依て一致結合の精神を強固にせり、而して一般の傾向よりして觀測を下す時は

4418

大に意見の相類似するもの丶如しと雖も、其間多少之に對する思想上の自由存するありて、深く之を極むれば其間甲乙の相違なしとせざるべし。兎に角教會を一致結合せしむるものは或る法教上の禮典なりと雖も亦之れに對する神學上の意見に至りては實に一様ならざるものなり、浸禮教會一般に其の組合を維持する處のものは法教上の一禮典なり、此の禮典は專ら其の團結力の中心點たるを以て彼の教會に在ては他の宗教的事物に向ひ左まで嚴酷に非ざれば、或る點迄では一般信徒の宗教的思想の自由を與ふるものにして、此の邊に在ては吾子の自由宗教信仰者と相距る遠からざる也。浸禮教徒の滿足とし、常に自負する處の者は、彼の新約全書中に散見せる希臘語の「バプチゾー」或は之れと同義の文字に正當なる飜譯を下すに在るか如し、隨て彼れ等の唱道する處の浸禮は嘗て耶穌幷に其の門弟子等の實際行ひし浸禮の方式なりし事は眞實なるべしと雖も、吾子は此れ等文字上の解釋を論ずるを以て教法上の問題と爲さんよりは寧ろ文學上の議論として見るものなり、彼の浸禮教徒は此の文字の正當なる譯字を英和譯の新約全書中に適用せざりしの故を以て、飜譯を不精密なりと議し、粗漏なりと論せりと雖も、吾子は今日之れ等の事物に向て評議するの必要あるを見さるなり、然れとも吾子は又彼の『バプテスマの畧解』なる小冊子の著者と等しく、世に欽定飜譯聖書の譯官等は、彼の＝王者の小才子、有名なる固執者ゼームス第一世＝の嚴命に束縛せられたる事を以て遺憾とする者なり、且つ又校訂英譯の聖書も未だ以て充分なる自由思想、合理的精神を應用する事なく、近代の飜譯書として甚だ不似合なる束縛を崇りし事を哀まざるを得ず吾子は又彼の小冊子の著者と共に日本譯書の上に於ても亦多少隔靴の憾みなしとせざるなり、

加之ならず、吾子は「キリスト教」の日本人民に傳へらるゝに當りても亦西洋各國民の歴史幷に思想を以て着色せられ、時としては全く西洋風に轉化せられたる「キリスト教」の此の國に布教せらるゝを見る。元來聖書幷に「キリスト教」は東洋に於て其の端を發らきしもの

なれは、必らす自然天然に東洋人種の適合せさるへからさるものなるに、事の茲に出でさりしは蓋し西洋的思想を以て解釋せられたる聖書、神學、或は西洋諸國に於て成立し隨て其の氣風を帶ふる處の「キリスト敎會」の此の國に輸入せしを以て自然東洋人に對しては外國樣の觀あるは理の當然にして、今日外國の傳道師達が此の國に於ける傳道策の一大缺點たるものは即ち、此の帝國に「キリスリ敎」を布敎するに當りて、西洋流の思想、西洋流の風習、西洋流の形狀、西洋流の方法手段を其の儘用ふる事是れなり、何となれは此れ等は唯だに「キリスト敎」と直接の關係なきのみならず、全く「キリスト敎」の本色に非れはなり、彼の『バプテスマの畧解』なる小册子の飜譯者は、正しく該書に依りて此の帝國に於ける公平なる眞理の探究者に向つて、單に新約全書中に散見せる「バプテズマ」てふ外國語の意義を知らしめんとの目的に止らず、之れに依りて「キリスト敎」即ち深廣純粹なる意義に於て宗敎の大本を知らしめんとの趣意に外ならさるべし。

前陳の如く吾子は此の國に於てキリスト敎諸派の運動を窺ふに、往々西洋流に偏して一種異變の宗敎的形態、組織、定見等を此の國に輸入せんとするが如しと雖も吾子は何れも皆失敗を免かれざるべしと豫言するに躊躇せざるなり、如何となれば吾人西洋流の宗派は全く西洋人の思想并に歷史的事物に依り吾人の故國に於て發生せしものなれば、如此事物は吾子の愛友なる日本人士とは直接の關係を有せざるものなれば、吾子にして眞に活水の源なる「キリスト敎」を此の國に傳搬せんと欲せば、必らずしも此れ等の地理上及び歷史上の限界を離脫し、全く單純質樸なる宗敎的眞理のみを以てせさるべからざるなり、

扨て浸禮敎徒(バプテスト)の地位として最も重要なるものは、則ち新約全書中に載する處の希臘(ギリシャ)語なる「バプチゾー」の飜譯正當なる事、并に「キリスト」敎會創始以來の洗禮式として今日に於ても猶ほ受洗者の身躰を水中に浸す事の必要を主張せりと雖も、吾子の地位よりして之れを見れば、此の結論を應用して=總べての時代、總べて

の國々、總べての氣候風俗＝の人民をも等しく其の身を水中に浸さゝれば以て「キリスト」教會に因みを結ぶ事能はざるものなるや、或は之れを以て「キリスト」教洗禮式の唯一なる形狀となすべきやを疑はしむるの要なしとせざるなり、故に吾子をして之れを論せしむれば、彼等の弱點は則ち聖經に過當なる要求を爲し、之れが爲め人をして神の人間に對する處置の如何に奇怪にして如何に狹隘なるやを思議せしむるに至るべし、浸禮（バプテスト）教徒の吾子自由派と相違する點は、如此聖經の上に過當なる要求を爲し、次に一般キリスト教非浸論者（ノンイマーシヨニスト）に異なる處は則ち聖經文字上の飜譯に最も重きを置き、此の文義を以て全く宗教的信仰幷に實踐躬行の標準とするに在り、故に吾子を以て之れを見れば、浸禮（バプテスト）教々理の地位は實に奇怪畏るべきものゝ如し、何となれば今吾子をして假りに浸禮（バプテスト）教徒たらしめ、聖書の一言一句盡く眞神の唯一なる聖旨と信仰する時は、其の本意なると不本意なるとを論ぜず絕對的に之れが教訓を違背なく遵奉すべきものにして、彼の「バプチヅー」の文義を以て眞に水中に浸すとの義なりとせば、苟も浸禮（バプテスト）教徒たる者此の他の方法に依りて教會を組織せし者と全く兩立し能はざる者なるや明かなり、然れども浸禮（バプテスト）教徒は實際に於て之れと正反の地位に在るの觀なきにしもあらず、是れ即ち他教會の信徒等が元始以來の洗禮式を其儘に應用せざるのみならず、加ふるに每日曜日に於て聖晩餐禮を擧げ、唯だ醱酵素（パンダネ）の入れざる麵麭（パン）のみを用ゐて教會の古禮に擬し、或は之れ等の禮典に洗足の禮を加へ以て教祖が往昔其の使徒を就職せしむる時に行はれたる古禮とし、或は第一日（今日の土曜日）に代ふるに第七日(今日の日曜日)を以て聖安息日と定むるが如き、別に聖經の上に判然たる命令なき事物を奉じ以て聖禮典の一なりとする者と雖も、之れ等の者と虛心平氣に兩立するを許し、相互に「キリスト」教友なりとせる事實あるを記憶せさるべからず。

有名なる博物學の泰斗アガッシー氏は曾て學生等の處見相反し、其の議論の兩立し難き事あるを見て曰へるあり＝今日新發明の結果を得んと努むる者にして其の議

論昨日の考案と同様なる時は必竟陳腐の説たるを免かれず、故に總へて世の進歩に向て無益なり」と、氏の意味は則ち今日の些細なる異論は必らず將來高尚なる同意を生するの萌芽ありとに外ならざるべし、人は眞實に自己の高尚なる思想に到達せんが爲め、往々以前の自己即ち以前の思想に不忠ならさるべからさる事あるべし、故に吾子は此の論法を進めて、間々又人の生涯に於て自己の議論に反對せる行爲あるの故を以て強ち其の人を怨悪する事なく、反て之れを賞せさるへからさるの場合あるべし、何となれば彼れは自己の議論に優りたる自己即ち思想を有すればなり、彼の普通「キリスト」教徒は往々神學上の議論として、人類を以て全然罪悪に沈淪墮落せりと主張するも、之れと同時に人類を以て盡く同胞兄弟なりとし、隨て尊嚴なる天父の兒子なりとせるか如き、或は多數の人類を以て永久に天罰の下とに定められ、小數の殘者は救はれて永久の快樂に入ると主張し、他の一方に於ては全然之れに反對し、世上一人として全く心を頑にし以て此の教へを信する事能はざるものなしとて、恬然前後矛盾の論説を主張せり、通例人間の乾燥せる腦髓より生ずる考案は往々人生を痲痺せしめ、不具ならしめ、或は暗黒ならしむると雖も、吾人の心臟より流出する感情は往々人をして強健ならしめ、且つ人生の不幸困究より吾人を救濟せり、浸禮教徒は吾子と議論上兩立せさるの故を以て、又其の教會全躰の因て以て成立する處の根本的教理に向て忠實を缺く事に依り、吾子は浸禮教徒は已でに其の議論の上に超過して善良なりと賞讃せさるを得ず、彼の徒は其の乾燥なる神學上の考案に依り教會の建築を文字的解釋の一片に建立せんとするに當り、必要上自然に其の隣人の安全に立てる處の道理及び實際的必要なる礎石の上に彼れ等の柱梁を支持せんとする事を稱せさるへからず、絕對的文字主義は實際に於て他の諸教會の因て以て成立する處の地磐に到達するに非ずんば到底失敗を免かれさるなり、故に吾子にして浸禮教會の成立を窺ひ窮め來れば、其の根本的教理たる彼の絕對的文字主義は全く該教會の運命をし

て死地に陷らしむるに足れる最弱點なりと云はさるを得さるなり、

茲に於てか吾子は彼の小冊子に論するか如き傍若無人なる專斷的意見、即ち聖書には文字上一も誤謬なしとする議論を全然否定せさる可らず、彼の書の飜譯者は其緒言に彼れの信仰として論して曰く＝神の子は（中略）此の「バプチゾー」の文字を撰擇せざるへからざる一定の道理を有せり（中略）之れに依て敎會創始の大典禮を明解し以て其の禮式に名つくへき爲めキリスト及ひ聖氣（聖靈なる神）は之れを撰擇採用せり云々＝然れとも吾子を以て之れを見れば、是れ最も極端なる專斷的意見にして、吾子は之れに向て最も不同意を表せざるを得ざるなり、何となれば斯くの如き文字的神託（インスピレーション）を主張する時は、論者の如く全く神、宇宙の統治者、永遠の天父は自己の思想を判然表明するに當つて、之れに適當せる文字を古代の希臘（ギリシャ）語中より採用せりと云ふに等しければなり、聖書中何れに於てか聖書自らの一言半句誤謬なしと明言し、或は誤謬なき事を要求せるや、或は聖典の中何れに於ても今日の聖書全躰を以て神敎の全躰なりと明言せし事ありや、六十六卷の書冊は所謂今日の聖典中に抱藏せられたるものにして、各々遙かに隔離せる時代に於て、各々獨立して記錄せられたるものなり、然るを後世にいたり集めて一冊となしたるものなれば、現に早き時代に在ては聖書中に幾卷の書冊を抱有するものなりしやを知らざりし事實あり、何となれば聖書の成り立ちは或る人の既往を追想して慷慨せし記事、或は一箇人の記憶を縷述し、或は之れを記錄する以前已でに數百年間口碑として或る國民の内に流布せしものを當時の必要に迫られて記錄せられたるものもあれば、記者其の人と雖か恐くは當時必要事件の他に特別なる目的あらざりしや知るべきなり、其他聖書は朦昧なる歴史的暗黒時代を經過し、加ふるに無學にして不注意なる人々に依りて復寫せられたるものなれば、隨て一字一句の上に於ける議論は勿論、一節一章の上に於ても實に少なからさる誤謬を伴ふものにして、今日の學理的討究の精神より之れを

見れは歴史的事實の記事として實に輕少の信用を置くに過ぎさるなり、尤も多數なる福音主義の神學者等は聖書に神託(インスピレーション)を含有するものなりとの信仰を抱持せりと雖も、是れ決して浸禮教徒(バプテスト)の考ふるか如く、字々句々の上に迄でも神託(インスピレーション)の故を以て誤謬なしとせさるなり、蓋し福音主義の神學者等は聖典文章の全躰、或は著書全躰の上に於ては神託(インスピレーション)を包藏し、隨て全躰の意向に於て誤謬なしとする事ありと雖も、決して一字一句の上に於て論ずべき限りに非ずと主張せり、實際見易き事實として聖書中の或る章句は全然實際の事物と齟齬し、氷炭相容れさるを見れば、聖書を以て誤謬なしとて如何に辯護するも之れを支持する實に容易ならさるなり、然れとも吾子は强ち聖書の誤謬あるを承認せりとて之れを以て吾子の生活を導き又之れに依て大に人生の悲境を慰むる處ある事實を抹殺する者に非ず、見よや人は思想の現象として、學問上より來る處の言詞文章の法則を要求する者に非ずして、人心の深き經驗より出づる處の宗敎的思想より特に賦與せられたる言詞に依りて、其の心を慰め奬勵せんと欲するものにして、此れ等は常に吾人の失敗して悲哀に沈める時、或は身心の罪惡に患める時に當りて、聖淨潔白なる人生を遂くる事を奬勵する處の潜勢力とはなれり、吾子と雖も決して新舊兩約書を愛讀する事他人に一歩をも讓らさる考へなり、さりとて文法的言詞の上に、歷史的、科學的事實の上に全く誤謬缺點なしとして愛讀する者に非るなり、此の點に於て吾子は唯だに言論の上に之れを主張するのみならず、確證ある實事として主張するものなり、故に吾子の管見より彼の聖典文字の上に其の基礎を置ける信仰を見れば、決して確固不拔の信仰なりと云ふ能はさるなり、今若し吾子の教友浸禮教徒(バプテスト)をして其の身躰を水中に浸すの式を以て古來動かすべからさる禮典とし、耶穌と關係あるの故を以て、或る深遠なる法敎上の意味を含畜する一表象とし、之れを以て彼れ等が議論の起點とし、信仰の標準とせは恐くは、彼れ等は文字の上に依賴する字典學者にして、無限絶對なる眞神は自己の意見を表示す

るに當り、一種の希臘語（ギリシヤ）を撰擇採用せりとの牽强附會なる空想に陷り、随て近世の一大潮流なる合理的精神と全く己れを正反對の地位に置くの危險に陷らさるを得さるべし、

然らは則ち上文に論述せし處のものは、全く希臘語（ギリシヤ）の神託（インスピレーション）及ひ聖書の神託（インスピレーション）に於ける疑問に歸着するものにして、換言せば、神の人類を處置し待遇する方法の如何に在るなり、夫れ神に關する思想は人心の成長と共に成長せり、人智の發達、四海の交通、及ひ道德的概念の發達は終に造物主なる觀念に一大變遷を來たせり、往古に在ては博識の聞へ高き學士と雖も神の愛憎には偏頗あるものなりとし、全く或る法敎的禮式、即ち外形的の禮典を行ふと行はさるとに依り、甲は無限の快樂に入り乙は無限の悲哀に沈淪する者なりとせり、然れとも一旦豁然として近代の宇宙なる思想に接し、無限悠久なる神の觀念を多少獲得したる者は、必らずしも此の神は外形的の禮式を定めんよりは、遙かに高尙なる典禮として敎法の目的、宗敎の必要なる天然の性狀を制定する者なる事を想像するに至るべし、彼の外形的浸禮（バプテスマ）を墨守して之れを主張するは恰も彼の咒文を唱へ袈裟を懸け、妖術、魔力を修するを以て宗敎的行爲なりと主張すると相離る遠からす、所謂死滅せし神人同形説の餘孽にして、宗敎的不必要事件に向て信仰を呼ひ、注意を返へさしめんとする者なれば固より徒勞たるを免かれず、随て宗敎的必要事件と相去る遙かに遠しとす、

浸禮敎徒（バプテスト）は其の依て以て成立し、其の敎會を組織し、彼れ等の專有とせる浸禮（バプテスマ）の儀式を應用せりと雖も、實際に於ては之れに向て甚た誠實ならすして冷淡なり、如何となれは彼れ等は公然眞面目に說敎して曰く、天父は決して外形上の行爲を以て人を審き玉はず、專ら內心の行爲如何を鑑むる者なれば、唯一なる救ひの浸禮（バプテスマ）は即ち精神的浸禮（バプテスマ）なりとし、随て浸禮敎徒（バプテスト）の廣大なる宗派的團躰の運動は勿論、神と人とに對する愛の精神を以て穿ち、神の意思及ひ人間の要求として高尙新鮮なる思想を以て貫けり、彼れ等は斯くの如き目的に向

て種々なる運動を爲しつゝ、神の撰民として世の表面に立てるものなれは、所謂文字上の議論は實際に於て全く微少なる事物として顧みさるか如し、然れども『バプラスマの略解』の著者は或る他の方法を以て洗禮を受けし神學者等の議論として、身を水中に浸すの式は全く古禮なりとするを以て、論證とし之れを奉じて滿足せるか如し、而して一般の浸禮教徒(バプテスト)は實際と議論との齟齬せるを無遁着にも之れを哀むの色なく、反て高尙なる實際的眞理に隨從せり、何となれば、神の王國は決して飮食、虚禮、專斷的敎義に非ずして、人生の正義、心靈の安泰、高尙なる信仰の慶びなれはなり、

隨思隨錄

文學士 大西祝

理想

吾人は正善眞美等の想念を有す、吾人は此等の想念を以て我を圍繞する現象、我の遭遇する事件を品評す。又此等の想念を以て、我の眼前に現存する事物を改造せむと力む。此等の想念は即ち品價の標準、改造の摸範なり。然るに翻つて此等の想念の何たるを明瞭に言表せむとせば、吾人はみづから其想念の不明なるに驚かずんばあらず。此等は頗る漠然たる想念なり、正善とは何ぞや、眞美とは何ぞやと問はゞ、これに明答を與ふるに苦しむ。然れども此等の漠然たる想念が、吾人の生活を形つくる動力なり。此動力の何ぞしかく漠然たる、何ぞしかく模糊たる、之を名つけて理想と云ふ。

理想なるものは、吾人の既に明瞭に想念し得たるものなりと云ふは、固より非なり、その實際模糊たるは否む可からず。然れども其の模糊たるの故を以て、そを無力無効なりと云ふ亦非なり。實際吾人の生活の上に、そか改造の力を有するを見よ、革命も美術も學術も此想念の生む所ならずや。詩人の筆は何が動かす、哲人の冥想は何を求むる、志士の氣慨は何の激する所ぞ、此模糊として手に觸るゝ可からざる理想に、能く吾人の手足を動かすの力あり、而して吾人は此理想をしてますく力ある者たらしむるを要すと覺知す、是れこ

の理想とつくる一種無類の想念の特性とする所なり。此等の想念は實現されんとを要求して止まず、而かも之を實現せんとするに當りて、その想念の模糊たるを如何せんや。模糊たる者は模糊たる間は實現さる可からず。恰も知らさる顔を描かんとするが如くなる可し。而かも此模糊たる者が、實現されんとを要求して止まさるなり。是に於て乎かの哲學なる者のなかる可からさるを知る。

此等の模糊たる想念を明瞭にせんとするが哲學なり、此等の想念の模糊たる間は、哲學は死せさる可し。此等の想念に從つて吾人の生活を形ちつくるが道德なり而して此等の理想に對する嘆美欽慕尊崇の熱情が、かの所謂宗敎心なり。此情に燃ゆる者は皆宗敎を有する者なり。プラトンの語を假りて云へば、此心即ちエーロス(戀愛)なり。此等の理想を慕へばこそ之を明瞭に想ひ浮べんとは力むるなれ、又之に從つて吾が生活を改造せんとは欲するなれ。故に哲學道德の原動力は宗敎心に在りと云うて可ならん。此原動力の動かす所となりて、我が戀慕心の對境を明瞭に觀むとするが哲學其戀慕心の對境に從つて吾が生活を形ちつくるが道德なり。吾が戀愛する者と、吾れとが合躰するに至る、是れ宗敎、哲學、道德の極致なり。此三者は同一の中心を廻轉す。哲學によらずば吾人の戀ひ慕ふ者を觀るを得ず、哲學なくば宗敎心は模糊たる追求の情に止まらん。恰も闇夜に物を探ぐるが如くなる可し。哲學なきの宗敎心は盲目なり。噫哲學なるかな、哲學なるかな、吾人は既に見つゝも猶ほ未だ得ざる者をのみ戀ふるにあらず、未だ見ざる者を戀ふるなり。見初めて戀ふるにあらず、未だ見ずして戀ふるなり。このまだ見ざる者を戀ふるの心が、是れ人生の根底に潜まる所の大秘密なり。吾人の存在の妙義は、理想に對する無際限の戀慕に外ならず、理想に對向する無窮の進步に外ならず。

ゆけど／＼到らぬ空を慕ひても、
　　のぼるや人のこゝろなるらん。

生物

生物は物界の花なり、彼等は生れて死せざるを得ず、其齢を云ふ何ぞ巖石と比す可けん、何ぞ彼等のはかなきや。譬へば花の散り易きが如し、散らざる、うつろはざることを云ふ、幹根の花にまさること萬々、而かも花は是れ草木の極美ならずや。生物は物界の花なり、うつろひ易き花なり。

然れども亦生物は皆造化主なり。樹木の種子は水土を造化して樹木となす桃李の生活は桃李の形なき所より桃李を造化し出すに在り、犬馬の生活は犬馬の形なき所より犬馬を造化し出すに在り。宇宙にかの所謂造物主なる者あるや否やを知らず、又宇宙は一大生物なるや否やを知らず、但だ知る生物の各自皆造化主なることを。

吾れ人は有自覺的、有理想的生物なり。吾れ人の理想的生活は、理想界を造り出して之を實現界となすに在り。即ち此經驗界に、此現象界に理想界を造化し出すが吾人の職分なり、理想界の造化主たるが吾人の眞個生活なり。吾人みづから造化し出すにあらずば、吾人の世界に何時か理想の實現を期す可けん、吾人を措いて誰か此人界に於ける理想の造化主たる者ぞ。手を束ねて大に之を成就せしめ給へと叫ぶも、天は答へざるべし、耶蘇基督よ、阿彌陀佛よと呼ぶも、耶蘇何かせん、彌陀佛何かせん、理想を實現するの責任は、天にあらず神にあらず、吾人にあり、吾人の働くことに於て働く者を神と云はずば、如何なる神によりてか能く理想を實現せしめん。生物は物界の花、理想的生活は生物界の花なり。

花はうつろひ易し、生物は死し易し、曾て吾人の理想を實現せしめたるものも永久なる能はず、吾人の曾て正義と見、善美と見て造り出したるものも、今は既に老朽して更に改造されんことを要す、改造して更に改造せざる可からず。空間時間とを以て裹まれたる吾人の此世界に、吾人の成就し得る理想は、到底するに圓滿なる能はず、故に改造は窮りなかるべし。吾人の世界に永久のものあるなし、但だ永久なるは進んで止まざ

る理想的改造のみ。此無窮の理想的生活こそ、吾人の眞個の生活なれ。

進化

理想の進化、是れ吾人が生活の本義なり。理想を念出して而して之を實行せしむる、是れ我心靈の職分なり。我心靈が行く處、その痕跡を遺さゝるなし。其痕跡は、其理想を實在界に編み込みたるものに外ならず、恰も蠶虫の匍匐する處、桑葉を化して繭となすが如し、吾人は實世界を化して我理想界に協へるものとなさゝる可からず、吾人はこれが爲めに生れ出でたるなり。而して一たび實在界を化して理想に協へるものとせば、又更に之を化して猶ほ高等なる理想に協へるものとせざる可からず。一たび實在となりし理想は更に理想に化せられざる可からず、理想は枯死せる者にあらず、動きゆくものなり。天地は吾人に開拓せられんが爲にあり、吾人は開拓せんが爲めに生れ出でたり。實在の眞意は其理想を現せむとするにあり、理想に移り行かんとするにあり、恰も種子の萠芽を發生するの意味が、枝葉を出さむとするにあるが如し。理想は實在に根ざせるの理想、故に空想にあらず、理想的生活は恰も植物の生長の如し、譬へば桃の樹は、桃の種に根ざして出でたる樹なるが如し。若し梨の樹を桃の理想と云はゝ、是れ理想にあらずして空想なり。然れども桃の樹は、縦令ひ未だ生れ出でずとも、其桃の種に對して空想にあらず、理想なり。理想は實在に根ざして而かも實在に超越せるものなり、否な寧ろ吾人の今實在と名づくる者は、假の實在にして理想をこそ眞の實在と云ふべけれ、假は眞の現せむが爲めにあるなり、否な假と云ふもの全く假にあらず、唯だその進化の全躰にあらずして、一段階に過ぎざることを言表せるなり。而して進化の一段階は、一段階として寔に眞なるものなり、敗れたるものも全く敗れたるにあらず、其上の段階の中に成就され、融會さる。成るものも全く成れるにあらず、全く成れるにあらざるが故に、自ら敗れて其所を其上の段階に讓らざる可らず、之を進化と云ふ。此進

化の道行、それ自身に無限無窮絶待の意味の存するなり。絶待の意味は卷物を展ぶるが如くに、進化の道行に於て始めて開展せらる。此進化の水流に棹して進む、是れ吾人の生活なり。豈彼岸に到るをのみ、價値ありと云はんや、進歩の道行それ自身に價値あり、力行それ自身に絶待の價値あり。自然界を吾人の理想に從ふて改造して又更に改造するの力行、それ自身に絶待の價値あるなり。

道德界は是れ人界の眞意なり、吾人は此眞意を實現せむが爲めにあるなり。昔日の道德界は今日の道德界にあらず、吾人の理想の絶えず進化しゆけばなり。止むなきの理想の進化、是れ吾人が心靈の生命なり。苟も停止するか是れ心靈の死せるなり。

不善は善に勝たれんが爲めにあり、理想の實現は更に理想に化せられんが爲めにあり。何をか不善と云ふ、理想の實現に抵抗するもの是れなり。何故に理想の實現は抵抗に遇ふことあるか、その完成し了れる者にあらずして、進化しつゝゆく者なればなり、生長しつゝある者なればなり。曾て理想の實現されたるものも、更に進化したる理想の出づるありて、その實現されんとする時に、若し之に抵抗せば、是れまさしく不善なり。不善とは理想によりて改造されべくして、而かも其改造に抵抗する者の謂ひなり。何故に此の如き惰性のあるか、曾て實現されたる理想の、未だ全からざるものなるが故なり。全からざるの理想が、實在界にて一の固定の形を取れるが故に、更に進歩せる理想の來れる時、直に其所を讓ることをせずして、却つて之に多少の抵抗を呈するなり。不善は即ちパウロの語にて云はゞ『舊き人』なり、理想は『新しき人なり』。知れ、不善は理想の不完に免れざる者なることを、不完なるが故に進化あり、進化の止まざるが故に不善も止まざるべし。

何の故に此の如き進化の存するか、此進化の本原を天道と名つけ得べくば、天道は善なるか不善なるか、其天道を基本とする進化の道行に、善と不善との二境あるより云へば、善なると共に不善なりと云ふを得ん。而かも善と不善とは只だ進化の道行にありて、本原そ

のもの丶處に存せす、對待界にありて絶待界にあらざるの點より見れは、而かも對待界を假妄と云ふにあらず、絶待界をのみ眞實と云ふにあらず、天道それ自身は、善にもあらす不善にもあらず、即ち善不善の差別を沒したるの境なりと云ふを得べし。而かも其天道が、吾人に於て（細しくは對待界に約せらる丶吾人の心識の發達に於て）善を以て不善に勝つべきものなりと、思ふの心に現る丶よりして云へば、天道を善なりと云ふべく不善なりと云ふべからず。即ち我本心に於て、吾人は善に味方すべき者なりと思ふ。而してこの吾人なる者に天道の流行すと云ふの意味よりしては、天道は善と云ふべきなり、善なる神ありと云ふも不可なきなり。天道は吾人が善に味方する事に於て善に味方す、吾人手を束ねて善の不善に勝たんとを待つ、何時か善の不善に勝たん。善をして勝たしむる者は吾人の責務なり。而して打勝つべき敵勢は盡くるとあらざるべし、故に吾人の力行も止むべき期あらざるべし。然れども誰か此消息を聞いて失望する者ぞ、何すれぞ此無窮の力行それ自身に、無上の代ふべからざる價値あるとを見とめざる、涙なき處に、汗せざる處に、我安福を求めんとす、迷へるかな迷へるかな、不滿足なき處に我滿足を求めんとす、惑へるの甚しきならずや。思へ、足らざるとのなく、求むるとのなきばかり、言ひ難き空虛を感するとはあらざるべし。滿足は不滿足の中に求む可し、休息は進步の中に求むべし、安心は力行の中に求むべし。

釋迦牟尼佛畧傳概論

佐治實然

別項の記事に見ゆるが如く、日本ゆにてりあん第一協會に於ては、敎義の濶大寛容なる指導に依り、世界四大聖人の生誕日を奉祝するを恒規とせり、仍て去る四月八日は四大聖人の一位なる、釋迦牟尼佛の生誕日なるを以て、協會の會員及江湖有志者、該會に參同して、談笑娛樂の間に、古聖を追慕するの高情を表せり、協會幹事其席上に於て、予に釋迦牟尼佛の畧傳を演述せ

んことを請はる、予直に其清需に應ぜり、頃日「宗敎」記者、予に就て右演說の概要を筆記して、「宗敎」紙上に投寄せんことを囑せらる、予も亦夙に釋迦の傳記に就て、聊か思慮を措く所ありしを以て、取り敢へず其約諾を爲せり、請ふ先つ端を傳記の概論に開き、次に古傳逐項の批評に移り、後に予が演說の大要を記すべし、

夫釋迦牟尼佛の傳記は、古來已に多くの經典と諸書に出でたれば、彼此を參考して、記事の起盡を序つることは、敢て至難なる業にはあらず、殊に佛滅後數年を經ずして、常に佛陀に隨身せし高弟なる、阿難伽葉（あなんかせう）等の、結集にかゝれりと傳ふる經典、即ち＝增一阿含經＝長阿含經＝十二遊經＝菩薩本行經＝觀佛三昧經＝五仙人經＝因果經＝涅槃經＝念佛三昧經＝菩薩處胎經＝普曜經＝瑞應經＝などいへる經典の中に、佛陀の行實を詳に載せたり、此等の經典に散說する傳記は、釋迦或時自ら弟子及ひ公衆に對して口演せしか如き文躰を用ひたるゆへ、世間普通の佛敎者の所爲に倣ふて、之を正直に信受せんには、斯る確實なるものは、恐くは世界無比ならん歟、如何となれは俚諺に所謂本人の口上に虛言なけれはなり、而して斯る機會には、佛陀の傳記に於る歷史上の考察のみならす、佛陀の敎理に關しても、最早疑問を容るへき些子の餘地だもなしと云ふを得へし、又其等の經典に散說せる材料を一處に輯めて、一帙の釋迦傳となりたる者は、先つ支那撰述に係る僧祐禪師の釋迦譜、道宣律師の釋迦氏譜、及ひ道世和尙の法苑珠林等なり、此は是れ諸經典の散說を見るよりも一代の前後を審にしてあれは、彼奇跡の間に、靈敏なる感情を投入するをのみ、無上の信仰なりと認定せし佛學者より、一字一句不可加減の寳典として、歡迎せられしも實に道理あることなり、又吾國に於て古く著作せられたる書目を擧くれは、釋迦一代傳記、釋迦傳記圖繪、釋迦八相記、「三世の光」等なり、近時の刊行に係る冊子は、大内青巒先生の宇宙の光、小粟栖光頂氏の十二宗綱要の序文、豐國義孝氏の鈔譯佛敎要義全書第一卷の卷首に揭くる「釋迦畧傳」等なり、又翻譯になりしものは英人アーノルト氏の亞細亞の光、英人デ

ヴイス氏の菩提の花、米人チルコット氏の佛教問答等なり、此外尚ほ千歳不磨の寶典として、法庫に珍藏するものあるは、必然なれとも、予か從來閲覽せし所の書目は、大略斯の如し、而して此數多の經典諸書に掲載せる條項に就て、釋迦牟尼佛を一箇人と認定して、即ち凡て人類の履むへき帙序を經て生長せし人類の上に置きて、記されたる記事のみは、撰者の學識と氣質とに拘はらす、畧々一致符合するものゝ如し、例之は、

釋迦牟尼佛の幼時は悉多と名けられしこと

印度列國の一なる迦毘羅衛國王淨飯大王と摩耶夫人の嫡子なりしこと

悉多太子即ち釋迦牟尼佛は世俗に從ひ正妣數人を納れしこと

羅睺羅といへる實子ありしこと

壯時踰レ城入レ山のこと

婆羅門の仙人に遇ふて學業を受くること

終に仙人の教說に滿足せすして新主義即ち佛法を唱導せしこと

菩提樹下金剛坐に於て成等正覺のこと

成道の後印度諸國を歷遊し數多の弟子を得しこと

凡そ八十歲の前後に入滅せしこと

右等の諸項は、歐米學者の考定も、支那日本の佛教學者の信認も、大差なし、但し誕生の年紀、踰城入山の年齡、成等正覺の時期等には、多少の異說ありて、未た正確なる歸結を見さるものゝ如し、然り而して佛陀の成道の後、五十年間に爲せし事業、即ち說法の順序と、法義の如何を論するとは、歐米學者の考案と、支那日本の諸先輩の信認と、齟齬するは勿論、同一系統の下に屬する、支那日本の佛教學者、即ち各宗派の高祖等の上にも、大に見解の衝突する所あるを免れす、此見解の衝突する由來は那點にありしやと云ふに、國土の性格を異にし、時世の文野に從ひて、各自の所見に勝劣ありしゆへなりと云へり、其然り、予を以て之を觀れは、各自の所見に勝劣ありしは勿論、其勝劣の所見は、共に倶に多少論理的誤謬と宗教的迷信の氣臭を帶ひさるはなしと云はさるを得す、斯の如く釋迦牟

尼佛の生涯は、夙に迷信の黒雲を以て遮蔽せられたるか故に、上に列擧せし數多の典籍の記事は、摘事詳論すれは、正否不齊なるへしと雖も、概括通論すれは、的確に宗教的迷信の怪象なりと批評せさるを得す、江湖の學者、試に上に指示せし册子の卷首二三葉を閲讀するの勞をとらは、直下、予か批評の矯激に渉らさるとを承認し、賛成の兩手を擧けらるゝは、予か今より堅く保證しをく所なり、左れは釋迦の傳記を起稿するの困難は、實に材料の過多なるに在り、詳言すれは、釋迦の靈蹟として傳ふる所、頗る著明にして、而して其著明なる價を保てると同時に、奇怪荒唐の狀をも併有するものなれは、斯る材料の多きは、却て材料の寡きに如かすと云ふにあり、故に純粹なる釋迦の傳記を作らんと欲するときは、先つ歴史的個人性なる、釋迦の幼、壯、長、老、の生涯を寫すとを勉め、附論として、專ら靈性的釋迦の、敎理行果の起盡を考察するも可ならん、而して飽くまて此二者の區域を攪亂せさるとに注意するに非すんは、釋迦の傳記を讀む人をして、釋迦は人乎。神乎。將又妖怪歟。の疑問の下に彷徨せしめさるを得す、古來の典籍は、此正當なる疑問を招きたる紹介者としては、實に與て力あるものなり、而して予の釋迦に於ける關係は、世俗界に於ては上下二千又餘載、邦土數千里を隔つと雖も、自然界に於ては、古今なく東西なく、同時に生存する舊相識なれは、焉そ老朽せる典籍の紹介に藉るを得んや、直に宇宙の大法に照らし、正に自己の智識に訴へ、歴史上の悉多太子と、理想上の大釋迦佛を、劃然分域して、之を紙上に現すは、誠に愉快にして實に有益なる業ならんと思はる、雖然、古來世人の持重し來れる釋迦傳を、一齊に宗教的迷信の結果なりと論斷するには、必す其義趣なかる可らす、請ふ少しく之を論せん、曰く古來の傳說は、要するに宗教的迷信の結果、即ち痴人夢裏の現象として、一齊に之を排斥するは誠に易し、然り而して其傳說を滿載したる典籍は、悉く釋迦滅後數千年に至り、印度支那日本に於て、迷信の萠芽業に既に鬱茂せし世紀中の著作ならは、則ち牽强附會の妄說を帶ひ

たる數頁を、破鞋の如く放棄し、其著作の由來發生せし、原種の紀事に溯り單純に散零する眞種を獲得して、再ひ之を正當なる觀察の心田に播種すへき方法もあらん然れとも今予か齒牙に懸くるも慚く思ふ所の忘說は佛者か盥嗽して讀誦する、神聖なる經典の上に滿載せられたるを奈何せん、況や奇々怪々龐大荒唐なる傳記の談話は、釋迦の口舌より出てしが如く記されたるをや、去れは釋迦傳記の材料は、求めすして得らるへく、呼はすして來る、而して尺材寸石も眞質堅牢なるものゝ得難きとは、假令始皇か威權を張り、徐福をして再ひ蓬萊に向はしむるも、恐くは徒勞ならんのみ、是を以て予は諸有舊記を信奉するの弊害を認め、寧ろ一齊に放棄し去らんと欲する所以なり、嗚呼釋迦牟尼佛は百福莊嚴の身なりと云と雖も、予を以て之を觀れは、唯々一の福報を缺きしかの疑なき能はす、何者、佛陀は墓木未た拱せさるに、已に渠か動天震地の名聲は、淼々たる迷海に沒了せられ、僅に數百年間も歷史的俊豪の中に籍を懸け能はされはなり、吁嗟浩嘆を發せさらんと欲するも、豈夫れ得へけんや、

予か經典諸書に載せたる釋迦傳記の概論は、漸く盡頭に達せり、次に諸有舊記中、簡明詳略其宜を得たるものを擧け、逐條に批評を加へん、

（未完）

殖民事業と外國布敎

法學士　堤　定次郎

天下の大勢を達觀し宇內の趨向を利用し、以て現在に施し將來に應するの計をなすは、獨り爲政家商略家に貴ふ所なるのみならず、宗敎家も亦た此識見技倆なかる可らず。爲政家商略家にして此識見技倆なからんか、國家百年の事業何を以て經營するを得んや、宗敎家にして此識見技倆なからんか、敎門千載の基礎何を以て計圖するを得んや、予輩か本論を掲け來りて、殖民事業と外國布敎との關係を說かんとするものは他なし、以て我國現時の宗敎家に、國家百年の大計と、敎門千載の基礎とを談せんと欲するにあるのみ。

何れの國何の時か競爭なからん、優勝劣敗は天地の大

則、適者生存し不適者滅亡するは古今の通理、故に上は部落聚合の時代より、下は國民對立の今日に至る迄未た嘗て競爭紛擾を免る能はざるなり、然れとも人類競爭の方法は、時を追うて漸次に一變し、愈々進みて而して愈々巧を加ふるに至れり、之を歴史に徵するも、古は個人的闘爭の世より、今は國際決勝の代に至る迄、腕力競爭の時代より、進みて精神的競爭の時代となれり、彼の殖民の如きも亦此順序を追うて進むものなり、是故に均しく民を殖するに於て、古は劒を以てしたるも、今は商業を以てし、宗教を以てするに至れり、是れ即ち腕力的競爭より、精神的競爭に移りたるの徵候なり、劒を以て民を殖するものは、其の實我か民を殖するに非ず、力を以て異種の民を服するものなり、歴山王の如き、マホメットの如き、鐵木眞の如き是なり、商業を以てし、宗教を以てするは、十七八世紀以來歐洲人の用ゐて以て民を殖する所の手段なりとす、英國の印度に於ける如き即ち是なり、蓋し商業を以てするは、所謂利を以て人の心を誘ふもの、宗教を以てするは、即ち德義を以て人の心を服するもの、其の方法兩なから穩當にして而かも其の効の大なる、夐かに劒を以てするに勝る所以なり。

今や我國殖民政策の論盛に起り、朝野の有志相集りて、殖民協會を設立するあり、或は移民會社を興すあり。北海に、米洲に、將た又南洋に、帝國の民を殖し、以て國家千載の基礎を建てんとするの企圖あるを見る、蓋し人種競爭の時代に於て、勝を千載の後に決せんとせば、渾圓球上到る處に我が民を移殖し、異種の民を誘導して我に同化せしめざるべからず、殖民政策の振はざるべからざるは固より偶然に非ざるなり。然れとも徒らに民を殖すといふ、豈其の策なくして可ならんや、放言高論以て經綸の道を興さんとせば、詳に彼の土の風土人情を察し、我が國人民の適否を考へ、以て之に處する所以の方法を講ぜざるべからず。予輩は之が方法を得たり、曰く、商業を以てし、宗教を以てするに在り。

所謂商業を以てすとは、彼の地の事情を考へ、我が固

有の産物を以て彼の人民の嗜好に投じ、其の好意を博するに在り。所謂宗教を以てすとは佛教にまれ、將た又耶蘇教にまれ、我國の宗教家たるもの、自ら進みて己の奉ずる所の教を彼土に普及し、我が國化せる宗教により、一は以て我が殖民を率ゐ、一は以て彼の土の民を感化するに在り、商業と宗教と併行せんか、彼我の利全ふして、而して相信じ、相愛するの情は、油然として其の間に生ぜん。

夫れ然り、商業を以て民を殖するの方法は、既に世人の注意する所となりしや疑なし、然れども殖民宗教兩ながら擧ぐるの方法に至りては、蓋し何人も意を注ぐに至らざる所なるべし。請ふ予輩をして殖民事業と外國布教との關係に付て、予輩の懷抱を吐かしめよ、予輩は以爲らく、宗教を以て殖民事業に伴はしめば、殖民布教兩ながら其の功擧からんと、何を以てか之を云ふ、曰く、宗教は一方には移民を率ゐて精神的の運動を爲さしめ、一方には異種の人民をして精神的に我に同化せしむるの功あり。古より心性的の征服を彼に加ふるは、蓋し宗教の力多きに居る。夫れ民を殖するに當り法律的に之を率ゆるは、寧ろ害あるも益なきなり。民をして自ら天命の安んず可き所を知らしめ、欣然艱苦を冒して地角天涯に向はしむるものは、精神的に之を率ゆるにあらすんは能はさるなり。所謂法律的に之を率ゆるは、上より命令を加へて指導するものなり、他より鞭韃を加へて驅使するものなり、民自ら悅んで之に趨くと、其の効果の優劣如何そや且夫れ殖民の事業を以て、始より政府の事業となすは、策の得たるものにあらす、何となれは、政府先つ自ら手を下して我か民を移殖するときは、則ち武力を以て他國を壓倒せんとするの觀あり、忽ち異邦人の怨恨を惹起し、隨て國際上の紛擾を生するや必せり。夫れ國際上の紛擾を生するは策の得たるものにあらす、彼の歡心を得さるは術の拙なるものなり。是故に凡そ殖民の事業は、我が民先つ移りて而して後政府已むを得すして保護するの途を立つるを以て上策となす、民先つ移りて而して後政府之に手を下さんか、根本固くして安く國際上の

關係亦極めて圓滑なるへきのみならす緩急之を保護するに於て、我に充分の辭ありといふべし。是れ予輩が今日の殖民事業は政府より起らすして、人民より起らんことを望み、世の商業家宗教家に其の力を盡さんことを求むる所以なり。

若し夫れ民を殖すると同時に之を率ゆるの宗教なからんか、遠く自國の地を離れ、社會的制裁の範圍を脱したるの民は何を以てか其の身を修め、其の家を齊ふへき、飲酒姦淫の弊は以て自ら其の身を傷ふに足り、放恣暴亂の弊は以て他を害するに至らんとす、豈恐れさるへけんや。果して然らは何を以て我か移民の團結を全うし、彼の土民の信用と敬愛とを搏するを得んや是れ予輩か精神的に殖民を率ゆるは、宗教に在りといふ所以なり。且つそれ、無知朦昧、猛獸的生活をなすの未開地に足を踏み入れ、如何にして其の身の安全を得可き。唯能く彼れ等に精神的の感化を與へ、能く我に怩かしめ、吾が德を慕はしむるを得て、始めて殖民の實擧がる可く、世界を擧げて蠻野の地なからしむ可し。若し然らずんば移民恐れ畏れて常住するを肯ずるなく、未開は依然未開にして、遂に開明の空氣に浴するの期なからん、ヨシこれありとするも、機械的、腕力的の征伏をなすが如きは、此の民を富强ならしめ、彼の民を救護するの手段に非ずして、全く我國の利益上の爲め、他を殘害する者と云はざる可けんや、今日開明の世に處して、これ等の强迫的殖民を試むるあらば、其の結果は遂に擾亂を以て終り、且つ其の効果甚だ僅少なる者なり。是れ予輩をして此の論を草して以て、天下志士の一考を煩はす所以なり。

今日の宗教家は、徒らに經を誦するのみを以て足れりとすへからす、道を講じ敎を布くと共に、社會の改良、貧民救助の策を講するは、豈其の人類中の先覺者たるの責務にあらすや、我か國に於て宗教の種類は頗る多しと雖とも、之を弘め之を布くの徒は皆此の責務を負はさるはなし、是の故に世の宗敎家たるものは、獨り國內に於て布敎に力を致すのみならす、進んで我が國化せる宗敎をば、海外に弘めさるべからす。夫れ然り、

然らは則ち殖民事業を助け、民を殖すると共に我が宗敎を布くは、宗敎家の當に進んて爲すべき所にして、又布敎上の一大得策にあらすや。

夫れ頭顱を圓くし、緇衣を穿ち讀經終日、粥を喫するを以て僧侶といふへきか、會堂に臨み、一段高き所に立ちて、徒に慷慨淋漓の說敎を爲し、信徒の義捐に依りて生を送る、之を以て牧師といふべきか、若し此の徒をして僧侶たらしめんか、將た又牧師たらしめんか、宗敎家は即ち一種の遊民たらんのみ、無智無識の民尙ほ且つ遊惰と稱せらるゝを愧つ、自ら天民の先覺者を以て任するもの、豈に斯の如くにして可ならんや。予輩は此に至りて、今の宗敎家の無氣力なるを慨せさるを得さるなり。幾多の大中學林、幾多の神學校、全國到る處に其の設けあらさるはなし、然れとも其の年々歲々養ひ出す所のものは、果して如何なる人物ぞ、京都同志社の人物は同志社其の者の出せしにはあらすして、寧ろ熊本の產出物にあらすや。明治學院、英和學校等の其の規摸決して小なるにあらす、而して其の養ひ出す所の人材は果して見るべきものありや。凡そ今日の學生にして、無氣力なる、其の意氣地なき、宗敎學校の人物に如くものはあらじ。滔々たる幾多の傳道師、徒らに信徒の喜捨に食み、洋人の糟粕に衣るのみ。世人の目して奴隷根性となす豈に偶然ならんや」然りと雖も、此の如きは豈に我が宗敎家の本分ならんや。內に在りては其の敎を布くと共に、社會改良の策を講じ、外に在りては我敎旨の粹を拔き、精を拾ひて之を弘むるは、是れ即ち宗敎家其の人の天職なりといふべし、況んや今日殖民事業の將に興らんとするの時に當り、一は以て我が移民を精神的に率ゐ一は以て彼の土の民を感化して、彼我の親愛を全うするは豈に宗敎家の宜しく爲すへき所ならすや。

抑も又予輩の唱ふる所は、決して宗敎たるものゝ精神に背くものにあらすして、寧ろ相合するものなりといふべし。イエス使徒に語りて言へるあり。

天のうち地の上の凡の權を我に賜はれり、是故に爾曹往きて萬國の民に「バプテスマ」を施し、之を父と

子と聖靈の名に入れて弟子とし、且つわが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に敎へよ云々、

夫れ布敎家の糧は、青山碧海到る處にこれあらさるはなし、只た其の闕く所のものは一片の氣力是れのみ。」近來博愛主義と國家主義との評論頗る喧しく、宗敎家、哲學家、政論家、皆な其の是非得失を論せさるはなきに至れり、蓋し心性上の關係は予輩の玆に論する所にあらず。然れとも予輩は信す、所謂博愛主義と國家主義の調和は殖民事業と宗敎との關係に於て始めて之を見るへきなりと。

終りに臨みて一言すべきことあり、殖民と共に宗敎を海外に布くに當りては、大に外敎排斥の攻擊を受くるの恐あり、殊に未開頑固の民にありては然りとす。然れとも温順の德寛大の量淳々として我か民を率ゐ彼の民を化するは、宗敎家の識德如何に在るのみ、一人斃るゝも廢する勿れ、十人斃るゝとも退くこと勿れ、忍耐を以て勝を制するは、蓋し古來宗敎家の德なりとす。進んで敎を異域に布かんとせば、此の一大決心と確信となかるへからず。

以上予輩は殖民事業に對して、世の宗敎家に望む所を說き了せり。予輩か最後に一言を要するは他なし、我か國風に化せる宗敎を海外に弘むること是れなり、夫れ佛敎は渡來後既に二千年ならんとす、其の分派多しと雖とも、既に皆我に國化せり、彼の耶蘇敎の如きも、宜しく我に國化したるものを以て、彼の土に布かさるへからす、徒らに邦人の口を假りて洋產的の宗敎を彼に弘むるものは、豈に予輩の望む所ならんや。

社會の目的

矢部新作

社會は何か爲に成立し、何か爲に生存し、何か爲に維持するものなるや。是れ余輩が社會の目的を認識するに於て考窮すべきの論點なり。今玆に此論點を論議するに先つて讀者の注意を呼ふべき事あり。今は早や過去の說に屬し、殆ど多數の同意を得ると能はざるものなりと雖とも尙ほ宗敎家哲學者幷に老成なる事業家の腦底に纒綿して頗る勢力を占むるの論なり。支那に在

つては老莊の説あり、希臘に大儒派あり、社會の進歩は個人の快樂を減殺するものにして聖人出るや大盜起り、法律定まりて犯すもの多きを加ふと爲す。是れ一理なきに非らず。半生の心事世と違ひ、前途望は消へて轉た暗憺を加ふるの時、徐ろに朦朧の眼を開いて、過去の經歴を回顧せよ。胸中一坪の虚影なく眞如の月と晴れ渡り笑ふも笑ふ所以を知らず、泣くも泣く所以を知らず、好いた同志と手を連ぬ、山に上ほりて倚ほ身の疲れを覺へず、川に遊んで日の傾くを問はず、未だ浮世の塵に染まざれば世辭追從の何物たるを知らず、況んや又權謀術數他人を籠絡して且つ之を陷穽に陷るが如き事をや。天國に入るものは赤子の如くならざるへからず。

更に之を社會全般の上より考ふるに、我國今日の如き社會上の激變を受けて、身維新の前後に跨るの人は時に今昔の感なき能はざるべし。殊に其性質古時を好み、變遷進歩の間に特に批評の眼光を有するの人は今日文明進歩の是なるや否やを疑ふと多かるへし。人生の快樂は相愛の情に在り。家人相愛し、鄕人相親み、而して一國にして一家の如くなるは是れ人類の爲に大に希圖すべきの事に非らずや。學問智識器具財寶有用は則ち有用なりと雖ども、是を以て彼に代ふるの價値ありと爲すべきか。文明社會の有樣は隣人も路人にして路人も隣人なり。而して其利を爭ふの點に於ては、烏鳩の相讓るに似ずして犲狼の相搏噬する如きものあり。世事日に繁にして身を安んずるに所なく殆ど余輩をして惱殺せしむるに足る。是れ豈余輩の厭うて而して忌む所に非らずや。若し其れ韓退之所謂夏衣冬服に變へ難く時勢の變遷止むを得ざるの事とせばまだしもの事、世人漫に生長を希ひ漫に進歩を希ふて、且つ全力を擧げて其の速ならんとを圖るは抑も何事ぞや」と。

茲に至て余輩は、何か爲に社會は成立せしかを推定せざるべからず。蓋し物は皆必要よりして生ず、社會の成立せしも必要に迫られしなり。如何なる必要に由てか。人は孤獨の生活を爲すと能はず、世に孤獨程淋しきものはなし、此淋しさを避けんが爲め、妻となり、

夫となり、家を爲し鄕を爲し以て社會を爲す。人あれば必ず家あり、家あるは則ち社會あるの始にして、家内の交際の必要なるを知らば又社會の交際の必要なるを知らざるべからず。思ふに人は皆快樂を希ふて苦痛を避けんことを欲するものなり。此希望は終始古より今に至る迄人生の行路を指揮し來りたるものにして、實利說といひ、感情說といひ、或は自他兩立說といひ、皆共に此上に成立したる見解たるに過ぎず。

人は此希望を以て社會を爲し、此希望の中に生存し、此希望を達せんが爲に持續するものなり。已に人は希望の動物なりとせば、何故に余輩は此將來の希望を放擲し去つて徒に過去に戀々の情を寄するか。好古論者の言ふ所は恐くは相愛の何物たるを知らず、快樂の何物たるを知らず、併せて社會の何物たるを知らざるものに非らざるか。彼等は古代に相愛の情厚くして今人に快樂少きを嘆ぜり。是れ果して事實か。事實ならざるには非らざるべし。余輩も自ら幼少の生活の無心なるを羨み往時の風俗の質撲なるを好む、然れとも能く〳〵考へ見れば個は一時の感情に過ぎず、余輩の希望は遙かに前途に横はることを知るべし。此一時の感情は恰も途上に於て疲れたる旅人が身の疲れに、暫ばし行くべき所を忘れて、斯くては旅せずして家に居るの萬安きに加かずと思ふが如し。併し旅人は旅せずては叶はぬなり。余輩嘗て米國に遊ぶに當り、胸中一片の希望を懷て横濱灣頭に立てり。故國の情を絕ち、知友の愛を割く何人も多少の感慨なき能はず。併し希望の力は之に打ち勝てり。巨船浪を蹴て天外に走り、無限の名殘を富峯の雪冠に托して以て征途を急ぎしの時は我々なから。實に壯快なりし。已にして我心少しく變れり。羸身船居に堪へす、忽ち船醉を催ふして心地次第に悪しく數々嘔吐を爲して眩暈愈よ加はり果ては身、身を支ふること能はず、床上に平臥して死人と一般。此時余は思へり、余は實に失策を爲せり、徒に血氣の驅る所となりて船中此事あるを知らず、若し今日我れをして故國に在らしめば父母の溫顔に喜悅を呈し、彼の人と語り、彼の人と談じ此時を樂むなるべきに、嗚呼

馬鹿〳〵しき事を爲しけりと。斯くして船は桑港埠頭に着くや氣色一變、精神頗る壯快を覺へ、其市街の景況を見、人々の有樣を察するに及びて、愈よ益す、取つて以て參考に供すべきもの多きを喜び玆に始めて一の希望を達するの快樂を興せり。

人生も斯くの如く社會も斯くの如くならん。されば人は目的を定めて進行せざるべからず社會は目的に向つて進行せざるべからず。併し斯く單一に論じ來らば好古論者は恐くは、此言に從つて其の步を進めざるべし。何となれば彼等は常に、將來の快樂と稱するものは不確にして而して其步を進むるもの往々蹉躓を招くを知り、且つ又人生快樂の本源なる愛情は自ら定量ありて少數に接すれば親密なるべきも、多數に接すれば稀薄ならざるを得ず。見よ村落の人は其接する所少きを以て其情も眞なり、都人士に至ては然らず、其接する所多きを以て勢其情の虛なるを見る。之に據りて思ふに交通頻繁なる文明社會は余輩の希望すべきものに非らずと。

個は未た愛の理を知らず、智の働を知らざるに由る。愛と智とは固と定量なし。其形恰も日光の如し、人日光を私すると能はず。之を一人に分つも千人に分つも。本源に影響なくして人其不足を感ずるとなし。好古論者の所謂愛情に定量ありと言ふは今人の有樣を指すものにて決して愛の本質を知るものに非らず。已に愛の性質に定量なく唯、今人の愛に若しくは野人の愛に定量あるものとせば他の道理を養ひ來つて此定量をして濶大ならしむると決して爲し難きに非らず。又愛情の性質に付ても論議すべきものあり。愛なるものは唯心を傾けて親切に其人を思ふのみを以て足れりとせず、假令絕へず之を思はずとも時に其人の危急を見て策を立て之を救ふは却て愛の實を得たるものとす。父あり病に罹る、二子あり、甲は父を思ふの情切にして父の顏を拜し父の病に泣き未だ曾て其側を離れず。乙は之に比して恐くは父を思ふの情は切ならざるべし。併し日々商業を營みて多少の金を貯はへ、之を以て父の爲に醫者を招き醫藥を調へしとせんに、此二者何れか父

の爲に盡したるものと爲すか、甲者の愛は愛なり然れども乙者の愛の稍々全きに加かざるなり、甲者の愛は溺愛若しくは妄愛といふべきものにして尊ぶに足らず。余輩は都下に於て都人士の輕薄なるを感ずると同時に地方に數月を送れば、田舍人の愛の少しく妄なるを悟る、始めて彼等に接すれば頗る親切なり、併し此親切の心を以て彼等は、我身の爲には、或る塲合に於ては輕薄なる都人士が爲す事だも尙ほ爲さゝるなり。故に實際に於ては大差なきなり。

彼の愛に定量ありといふは全く誤謬の見にして而して好古論者の愛として尙ぶ所は少しく余輩の所謂愛と異るものあらん。智識あるの人は此愛を濶大にするとを得。一人一個を負ふて川を渡らんよりは橋梁を架して人を渡らしむるの愛の大なるを知るべし貧民に直接に金錢を施すは愛たるに相違なきも世上をして貧民なからしむるの大法を講ずるの博愛なるに加かず。されば文明人士が野蠻人よりも薄情にして都人士が田舍人よりも殘酷なりといふは形の相違を見て實の大小を知らざるものなり。未開の國に在つては人々各自に貧民若しくは病人を憐むの情盛んなり文明の國に於ては人々各自に之を爲さゝるも公に其法を定めて救貧院若しくは施療院を供ふ。被救者の爲には後者の遙に前者に勝るを見る何となれば其道開通するを以て之を個人に求むる程の困難と辛苦とを要せず、又爲に私恩を賣らるゝの恐れなければなり。其他諸般の事是れに似たるものあり。事業を起すもの少なくして細民を飢寒に委し之に惠むに數錢を以てするは事業を起すもの多くして細民を勞働せしめ之に與ふるに數十錢を以てするの勝れるに加かず。然らば眞正の文明社會には未開社會よりも愛の力大にして各人從つて快樂を覺ゆるの度多きや必せり。則ち社會は文明社會に進むべきものにして、余輩の希望は彼處に在り、余輩は成るべく速に此點に向つて進まんとを勉めざるべからざるなり。

余輩は尙ほ社會進步の理を明にせんが爲に「時」なる一大疑問に喫着せざるべからず。時は猶ほ宇宙の如し。宇宙は天の財産にして、時は天の壽命なり。宇宙は森

羅萬象を容れ、時は千變萬化を含む。已に然り宇宙は廣大無邊なりと雖ども、同一物を二個容るゝの必要なく、時は永遠無窮なりと雖ども同一事を再演するの必要なきなり余輩の茲に同一物同一事といふは則ち眞の同一物同一事を指すものにして相似たるものを言ふに非らず。今森羅萬象と言ひ、千變萬化といふ、其似たるもの多きは勿論なりと雖ども、此間一も全然相同じきものは是れなきなり。余輩は我國維新以前の天地が大に今日と異なる所ありしを知るべく而して十九世紀の社會は決して十八世紀と同じからざるなり。彼の草木は年々同ふして人は歳々同じからずといふは詩人の造語に過ぎずして、去年の花と今年の花は、其枝に於て、其葉に於て、又顯微鏡に依て驗すれば、其花に於て必ず相同じからざる所あるなり。則ち物の相同じからざるは自然の元則にして事の相同じからざるも又自然の元則なり。時は猶ほ駿馬の如し吾人を載せて間斷なく走るなり。否吾人は寧ろ遞傳の急使を務むるものなり、行く先は遠くして一生を以て到着し得べからず茲に於てか子孫をして又其子孫をして之を繼續せしむるなり。

是を以て見れば、余輩は時と共に進まざるべからず。一分一秒は皆金なり、皆智識なり。余輩は此智識を以て、社會の文明を搆成せざるべからず、余輩は此金を以て社會の文明を裝飾せざるべからず。余輩は余輩が六十年間の時に對して其義務を盡さゞるべからず、祖先の遺産を續て之を蕩盡するものは其の罪固より大なりと雖ども此遺産を續いで徒に之を守り毫も增加することを爲さゞるの輩は則ち此六十年を空ふするものにして斯くの如きものは生れて直に之を扑殺するとも社會は其罪を咎めざるべきの理なり。果して然らば十九世紀の人にして其學問才能倘ほ十八世紀の人に及ばず荏苒此歳月を偷むもの豈に又羞辱の甚だしきものに非らずや。時に、急ぐを妨げず、余輩は如何に急ぐとても時は之を羨んで而して悪まざるなり。時は矢よりも早く丸よりも速なり、一秒時間に數千里を涉る光線を容れて倘ほ釋々として餘裕あるなり。余輩事を計畫する

に當ては苟も其秩序を紊さず、其方法を誤らずんば如何に之を急くとも時は其成果を猶豫せざるべし。此故に余輩は發達せざるべからず、社會は進歩せざるべからず。彼の漫に保守を好み徒に舊株を守るもの〻如きは未だ時の何物たるを知らず、又人生の何物たるを知らざるものなり。

ペルリコ道議要論（承前）

在大學　宮本平九郎譯

第三章　宗教を論ず

人は禽獸より優等にして多少靈智を有すとの原則に本き、人をして高尚ならしむる感情は大に之を尊敬せざるべからず、蓋し如何なる感情と雖も、人をして困厄に處するも尙ほ泰然として完全、幸福、神を想望し、以て天命に安せしむる事の至難なるは明白の事實なり、是に於てか人は宗教の高妙深遠なるを認めて之を信奉せざるべからざるに至る。

世間に僞善家（イポクリーチ）多くあるも決して之を畏る〻なかれ、汝の宗教信者たるがために、汝を呼びて僞善家と嘲弄する者あるも亦決して之を畏る〻なかれ。氣力盛ならずんば人は一の德義をも踐行するを得ず、一の重大の本務をも踐行するを得ず、故に敬神者たらんとせば宜しく其心軟弱なるべからず。

宗教の高妙なるを理解する能はざる多數の通俗人に交接することと猶基督教徒の如くなるも、敢て之を心に屑とせざることと勿れ、何となれば凡俗人と雖も、亦宗教信者と爲るを得又爲らざるべからざるが故に、宗教は獨り凡俗人の奉ずべきものなりと云ふは、眞理に合せざればなり。宗教の力に依り、無學不識の徒も之れを誠實（オチストー）ならしむべし、然り、智者豈獨り之がために誠實となるを以て自家の耻と思惟すべけんや。

汝の研學と汝の推理とは汝をして基督教の如く、純粹にして誤謬なく、神聖にして且つ高妙の性質を有する宗教は天下に希有なるを認めしむるに至らむ、蓋し基督教の如く開化を進歩せしめ、普及せしめ、奴隷制度を廢滅せしめ、弛解せしめ、普天の人民をして神前に

在つては互に相同胞たり、且つ神自躰とも相配する所以を知らしむる事等に於て、與つて力ありし宗教は他に之なかるべし。

汝宜しく心を萬事に用ゐよ、殊に信を確乎たる歷史上の證左に措け、歷史上の證左は總て不偏不黨なる研究を維持せしむるの性質を有するものなればなり。

歷史上の證左の價値あるを認めずして、嘵々する詭辯家の玩弄物とならざらんとせば宜しく研究に研究を加へ、下は今日の深遠なる哲學より、上はダンテ、セン、トーマス、セントーギュステン其他の諸高僧に到る迄、多くの諸大家が博援旁證以て歷史上の證左の確然不拔なる事を是認せんとして後、昆に垂敎せる所說を咀嚼して以て其心を養ふべし、其他此の事に關し因て以て憑據となすべき著名の人物は、萬國何れに行きて之なからんや。而して此等著名の人は不信者と雖も肯て之を輕蔑せざる人々なり。

かの大學者ベーコンは實驗學派の仰ひて誇る所の人なれども、常に基督敎を唱ふるを以て其職分とし、反て氏を熱心崇拜する末派の徒の不信仰なるが如きにあらざりしなり。グロチュウスは基督敎徒なり、其觀察の點は誤謬に陷りし所多しと雖も『宗敎の眞理』といへる書を著はして宗敎の必要を說けり。ライブニックは熱心なる基督敎の保護家なり。ニュートンは「福音の契合」に付き述作するを辭せず、ロックは「基督敎の道理」を著はせり。我國のヴォルタは物理學の大人物にして、科學に於ては該博の稱あり然るに其一生涯は正實なる加特力敎徒なりし。

以上の諸大家及び其他の諸大家の說に依るも、基督敎は人の眞智(センノ)と全く一致調和するものなることを證するに於ては、豈に幾分の價値あり。眞智とは他なし、其智識(ココチオーニ)、其推究力(リチエルケー)は一般人の有するもの、其判斷力は狹隘ならざるもの、事物を觀察するに一方よりのみせず諸種の點よりするもの、且嘲弄、非宗敎の如き情熱のために腐敗せられざるものを云ふ。

第四章　宗敎に關する二三の學說

世界に其名を轟せる人士中二三の非宗敎者あれども、

信仰に關しては其心中誤謬撞着の見を抱く者多し、故に其結果として彼等は天下の事物に對し論斷せし所多しと雖も、加特力教並に基督教全般に對しては、毫も其非を證明せしとなく、且其重なる人の著書中に於ても、其嫌惡排斥する宗教の教旨と相合致するとあるを免れざるは豈暗に宗教の是なるを證するにあらずや。

次に抄錄する所說は敢て新說とするに足らずと雖も亦重要なるを失はざるを以て、之を茲に揭ぐるとす。

ヂャン、ヂャック、ルーソーは痛く基督教を排斥せり、而れども其教育論(エミール)中に左の記臆すべき語を爲せり。

『余は聖書(スクリツトウーン)の神聖(マエスタ)は余の心に訴ふる所の論證なりと信ず……盛譽ある哲學者の著書を見よ之を聖書に比すれば實に眇然たる物に過きす、人工に出てたる物にして此の如き高妙と、此の如き簡淨とを并有し得る物之あるか……之に載するものは獨り人類自躰の事實のみならざるなり。ソクラーテの事蹟は何人も疑はざれとも、基督の事蹟に比すれば更に確ならず……聖書は此の如く眞理の大性質を保有し、此の如く人心を感動せしめ、此の如く全く人の得て擬似すべからざるは、豪傑の士よりは寧ろ創作家自ら驚く所なるべし』

ルーソーは又云へり『自然(ナトウーラ)を講明(スピエガーレ)すと稱して、人心に撒布するに壞亂的學說(ドツトリーテ、デヂランタ)を以てする如き人を遠けよ、人の尊敬する所の物は一切之を顛倒し、破壞し、蹂躙する如き人を遠けよ。此等の人は困厄者をして慰籍するの道なからしめ、富家豪紳をして其情態を拘束する唯一の羈靮を脫せしめ、加之、人の心底より罪を懺ひ、德を嗜むの念を奪ひ去り、此の如くして尙且天下の善人たるを誇れり。而して彼の徒は又云ふ眞理は決して人間に害あらずと、余の信ずる所亦此の如し、但余は此れ、彼等の敎ふる所の眞理ならさるの一大證左なりと思ふ』

モンテスキューも亦宗教上よりは非難すべからざる人に非ずと雖も、また世人の基督教に歸するに其有せざる弊害を以てすると怒り。曰く『バイルは一切の宗教を嘲罵し盡して遂に基督教をも辱め、其極眞正の基督教徒は存在し得べき一切の國家をも、組織することな

かるべしと放言するに至れり。嗚呼何ぞ其れ然らん、蓋し基督教徒は能く其本務を明知し之を踐行するに熱中する人民にして、能く自然防衞（ヂッフエーザ、ナトゥラーレ）の權利を會得する者なり。彼等は宗教のために致す所多きに從ひ、其本國のために致す所も亦大なるべし……基督教の目的は來世の福祉を得るに在る如く、尙現世の福祉を得るに在るを見れば、豈嘆美すべきことにあらずや』（萬法精理廿四篇第六章）

モンテスキュー又曰く『宗教の世に爲せし功績を稱せず、單に其惹起せし弊害を列擧して、之を其書中に揭ぐるは、宗教に對して論述するの躰に於て、豈事の宜きを得たるものといふべけんや。予若し世界の國法（レッヂ、チヴィーリ）、帝國、共和政治（ゴヴェルノ、レプブリッカ）、此の數者が惹起せしめたる弊害のみを稱說せんと欲せば、許多の恐怖すべき事項を枚擧して之を人々の眼前に提供するを得べし……人一方に於ては古來の諸帝王、希臘、羅馬の諸首長等が、互に搏噬攘奪せる狀況と、彼の亞細亞を掠搴せる鐵木眞、成吉思汗のために幾多の邦國、民族が暴掠せられし狀況とを目擊するときは、彼の一方に於ては宜しく吾人は行政上に於ては、基督教のために政法を得、戰時に於ては基督教のために人類の天性が未だ十分認むる能はざる國際法を得たるを想ひ、深く基督教の惠を謝せざるべからず』（萬法精理廿四篇第二、三章）

大詩人バイロンは大才子なり、時としては德を崇拜し、時としては惡を崇拜し、時としては眞實、時としては虛僞をも崇拜せり。然れども其心常に眞理と德義とを愛するに熱中し、加特力の教旨を尊敬せざるべからざる所以を證明せり。則ち氏は其女をして加特力教の教育を受けしめんことを欲し、其書面中にて此の決心を取れるをいひ、且つ氏の之を欲するは、加特力教の如く眞理の光輝を以て充さるゝものは、一も之なきに由れることを云ひしは、能く人の知るところなり。

バイロンの友人にして氏の後に生存せる大詩人トーマスムーアは、久しく宗教の採擇に躊躇し、深く基督教を研究せし後、基督教徒となるは出來べからず、加特力教徒に非ずんば、善良なる論理家となる能はざるを

認め、其多年潜心して研究せし顛末と、自身が到達せざるべからざりし必至の決論とを論述して曰く『嗚呼唯一眞正の加特力敎に敬すべきかな、敬すべきかな。・・・・我魂は汝の神秘の蔭に憩はんとを望む、神秘を曖昧なりとして之を輕侮する不信實と、强て神秘を知らんとする無禮とは、共に遠く余の傍を去れ。此の二者に對するには余はセントーギュステンの語を以てせん、いはく「推論して余は驚嘆し、論爭して余は信憑し、假令ひ達する能はざるまでも余は高大を望むと」』

第五章　宗敎に對する意向を論ず

基督敎と加特力敎とのために存在する、諸種の觀察と證憑とは、吾人をして確信して次の如き語を發せしめんことを欲す、

『我は吾が宗敎を攻擊する特種曖昧の議論は常に意に介するに足らずとして之を排斥し、宗敎が文化の開進に反對するといふは、眞理に合せざるを知る。宗敎は野蠻時代にのみ適合するものにして、今日に在つては無用なりと云ふ說の謬れるを知る。何となれば宗敎は亞細亞の開化にも、希臘の開化にも、羅馬の開化にも、又中古の諸國にも何れも能く適合せしものにして、中古以來開化の途に上りし人民には總て能く適合し、且今日と雖も其精神の高尙なる敢て他人に一步も讓らざる高德の人にも亦適合するを見ればなり。余は彼の古代の異敎徒（エレジアルキー）又はヴォルテールの徒より、下りて今日のセン、シモンの輩に至るまで、皆其敎とする所、自ら宗敎に優れりと云ふと雖も、其說の毫も勢力なきを知る。然り、故に余の如く野蠻の敵、文化の友たるを以て自ら名譽とする者は、亦加特力敎徒たるを以て名譽となし、或は余を嘲り或は余を以て迷信者となし、僞君子となす人を見て、反つて憐憫を催すあるのみ

此く決心し宣言せし以上は、宜しく確乎として終りあるを要すべし。汝の全力と、汝の全心と、汝の全智とを擧げて宗敎の光輝を發揚するに勉め、信者不信者に對して齊しく說得する所あるべし。只敎を說くも、徒に宗敎の儀式を形式上に於て踐むべきを說かず、只管（ひたすら）高逸なる思想を以て能く儀式を奉守するの念を勵すべ

し。神秘の事を嘆稱するも敢て決して之を講明し得るを矜るなかれ、唯之に因て感得せる德義を峻にするを勉めよ。汝若し行住坐臥神を崇拜するに意なくんば、其崇拜は唯祈禱のみを以て躰を得たりとなすが故に、毫も尊ぶに足らず。此の如き虛僞の崇拜は之を忘却するも可なり、眞心の崇拜に至つては決して之を忘るべからず。

加特力敎の美と眞とは已に人心に透泌し、如何なる哲學も加特力敎の如く純理的なる能はず、一切の不正に敵對する能はず、又た人類一切の利害の朋たる能はずとは、萬人の一致する所なり。然し此等の人と雖も亦不幸の道途に蹈み迷ひ、基督敎を見る、猶凡俗の獨り奉ずべきもの丶如くし、少しく人に標異せる人は、敢て信奉するに及はずとなすに至るものあり。此の如き人は、其罪の大なる眞の不信者より甚しく、天下常に此種の人多きは、嘆すべきの極と云ふべし。

余も亦曩には全く此種の人なりしも、今や全く基督敎徒たれば、能く人は心を勞せずんば此の境遇より脫離する能はざるを知る。故に邪路に陷る人は、宜しく力を盡して之を脫するを勉めよ。自ら高尙なる感情を抱けば、他人の輕侮は汝に於て何かあらん。而して百般の感情中最も高尙なるものは、則敬神の情なり。

然れども虛僞と無頓着とを拋擲して、着實(シンツェーラ)の業(プロフエッショーネ)に從事するに當りては、不信者に示すに、徒に諂諛奉迎以て人の笑柄となる如き觀を以てするなかれ。神と人とに對しては、宜しく謙遜なるべし、然れども決して人たる品位を忘却するなかれ、神聖なる推理心を遺忘するなかれ、汝に敎ふるに驕慢と怨恨とを以てする推理は唯天意に背反するものなり。』

第六章　仁(フヒラントロピア)と慈(カリータ)の德

人が無上の仁、廣大の慈の人生本然の務なる事を感ずるは、唯宗敎の力に依る。慈といへる字は高尙の語なり、仁といへる字は、詭辨家の多く濫用する所なれども、亦多少神聖のものなり。使徒(アポストーレ)は此の語を用ゐて人類の愛(amore)を言ひ顯はせり、此の愛は元と神の有する所なるに、世人は寧ろ之を人類に應用するを常

とす。チーャの手翰第十一章にいへるあり『我々の神なる救世主の善と仁の現はるゝ時』と、神は人を愛し、而して亦人々の神を愛するを欲せり。吾人の己にいへる如く、神の此の世に照臨するや、吾人の善を爲すを欲し、吾人の自ら滿足する所あるを欲し、吾人の自敬せんことを欲す。而して神はまた人の之を爲すも亦唯人の神の仁に則り、人類一般の德義幸福を希望し、出來得る丈け善を人に爲せんことを欲す。故に博愛は則ち人の人たる所以の價値の存する所にして、吾人は之を神の有する愛の主要なる部分とす、乞ふ聖書中に散見する下の數語を見よ

「國王は其右に侍する人にいはん、來れ、我れ爾のために天の冥福を祈らん、汝は世界開闢以來汝の出つるを待ちし斯の王國を保て、何となれば我れ飢を感ずれば爾は我に食はしめ、我れ渴すれば汝は我に飮ましめ、我に居住なければ爾は我を迎待せり、我の裸なる爾我に衣せたり、我れ病めば爾我を見舞へり、我れ牢に在れば爾我を慰問せり。是に於て君子正人は正に天を呼び王に答へていはん、我々は何時君の飢ゆるを見しか、我々は何時君を養ひしか、君が渴せし時之に飮を與へしは何時ぞや、君の住居なく我の君を迎待せしは何時ぞや、また君の裸なるに我之に衣せたるは何時ぞや君の病めるは何時にして其獄に在りしは何時なりしか、而して我の君を慰問せしは何時ぞや。王はまた之に答へていはん、爾は我が同胞の一人に向て此の如き善事を爲したればこそ、我はまことに爾に云ふなれ、爾の之を爲せしは則ち我に向てなり。馬太傳第二十五章」

吾人は宜しく其精神中に高尙なる人類の摸型を作り以て之と一躰とならんことを求むべし。その摸型とは如何なるものか。宗敎は既に其摸型を吾人に與へたり。嗚呼宗敎の高尙なる果して如何ぞや。宗敎が吾人をして摸範とせしむるものは極めて剛にして又極めて溫なる人なり、壓制虛飾の大敵人なり、寬厚の慈人なり、復讎を爲せば爲し得るも之を欲せざるの人なり、貧人を憫み、且世の富者にして貧者も亦己れの同胞なるを想起して能く之を遇せば敢て之を非難せざる人なり、

人を敬するに其學問富貴を以てせず、其精神の高尙なる感情と行爲とを以てする人なり。

此の如き人は眞正の哲學者にして一點の汚心を有せざる人なり、形は人なれども神自躰の出現せる者なり、其人を誰となす、基督これなり。

現に其思想中に右の如き摸型を有するの人は、人類を尊敬するや大なり、凡そ愛は敬に比例するものなり、博く人を愛するは博く之を敬するに在り。

之に反して鄙劣、卑陋、曖昧なる人を摸型とする人、人類を見ること猶狡黠、獰悪なる獸類の如く、徒に生活し、繁殖し、塵土より生れて塵土に歸するために生出し來れるものなりとなすを好む人、又は開化、學問、技術、正義の講究及び美、善、靈に漸次に近接する人類の不死傾向は、盡く之を輕蔑する人、此等の人は誠心人類を尊敬し、之を愛し、且相携へて德義に進み、或は身を棄てゝ之を救ふ如き思想は、夢にだも之を有せざるべし。

人類を愛せんには、決して嫌忌の念を抱くことなく、人類の弱點と弊所とを能く觀察せざるべからず。

無識の人を見ば、則ち人類は强大の堪能を有し、其智を使用して以て無識の域を脱し得るものなるを思へ。

此種の人は、たとひ無學無識なるも、其堪能は能く高尙なる社會上の德義と、勇氣と、憐情と、感恩の情と、正義とを實行するに適當なる力を有するものなるを、能く心に記すべし。決して智を求めず、德を行ふを勉めざる人は、唯個人に過きす、人類に非ず。此の如き人をも之を恕すべくんば、如何なる點まて之を恕すべきか、神は則ち之を知らん。吾人は唯宜しく、神は其受納せし額外には、毫も要望せらるべき理なき所以を知らざるべからず。

（未完）

佛教家が惟一教を研究するの必要

伊東洋二郎

惟一教は佛教家の研究せさる可らさる宗教なり、何となれば惟一教は合理的大道科學的眞理を以て其主義と爲せばなり、否な唯た然るのみに止まらず個人的社會

的たる吾人の德性及智識を精勵揮摧せしむるは此惟一敎の有する冀望なりとすれば今日に當りて、苟くも將來社會文明の進運を豫想し統一圓滿せる宗敎の下に吾人人類が生命無窮の冀望を充たすに至る可き時あるを先見するの明ある佛者ならんには、即ち今より專ら惟一敎を研究するは最も其策の得たるものなりと謂はさる可らす

吾人は深く佛敎の至眞なる事を知る者なり、然れとも合理的大道科學的眞理を以て吾人人類の宗敎的德性及智識を精勵揮摧するとあらば、即ち吾人が佛敎に對する觀念及信仰の趣きも亦た將來に至りて其異なる所なきを保せす、尙ほ語を換て云はゞ則ち吾人が佛敎を信仰する心は變せされとも佛敎の敎理を解釋し佛敎の趣味を咀嚼する次第に至りては必ず多少相異なる所なかる可らずと云ふにあり、試に思へ嘗て釋尊は佛法を說くに本性の眞理實法に契當せんことを主とされしに依り十方佛土中唯有一乘法と宣言し一切衆生悉有佛性と獻說されたるなり彼の三界十界六凡四聖六師九十六種等の名目多しと雖も所謂合理的大道の上より詮し來らば則ち眞理の範圍に漏るゝもの一も亦之なからん然らば則ち釋尊が一切の有情非情微塵法界を指示して菩提涅槃眞如法性と說かれしものは實に至言なるにも拘はらず釋尊滅後に至りて漸次に有宗を執する者、空宗を談する者、中道を說く者等を頻出し終に其長短得失の異論を囂然たらしむるに至りし所以のものは人類の情想智識千差萬別なるに由るは敢て論を俟たすと謂ふと雖も抑も亦た社會の進運、思想の發達より其然るを致せしものにあらさる無きを得んや此の如く論じ來らば假令佛者の佛敎を信仰する心は將來亦た變すること無しとするも佛敎の敎理を解釋し佛敎の趣味を咀嚼する次第は必ず多少相異なる所なくんばある可らず蓋し此の如き事情あるは特に佛者のみならず何れの宗敎者にも亦た免かる可らさるの通狀なりとす

然り而して惟一敎が銳意合理的大道科學的眞理を以て人類の德性及智識を精勵揮摧し以て人類が生命無窮の冀望を充たさしめんと欲しつゝあるは間接に佛敎の圓、

滿なる意義理趣を發揮しつゝあると言ふも亦た決して不可なきなり其然る所以は彼れ惟一教は耶蘇基督の系統者なるにも拘はらず神を人間以外――道理以外に立せさるのみならず新舊聖書を稽査するに付ても亦自由探究に任ず是れ豈に佛教に於ける釋尊は釋尊の自性を大覺して釋尊たり彌陀は彌陀の因緣を思惟して彌陀たり黄卷青軸何ぞ其れ貴からん是れ唯だ叩門の瓦子拭穢の故紙に過ぎずと談するに毫も其れ異ならんや知る可し惟一教は間接に佛教の圓滿なる意義理趣を發揮しつゝあることを唯夫れ然るのみならす惟一教は尋常基督教の專制的なる途轍に傚はす濶大包容を主と爲し世界に宗立する異教を敬して交友と爲せり其中に就き彼れ惟一教は佛者を特に歡迎して交友と爲さんことを欲しつゝあるもの〻如し、果して吾人の所見に違はざれば佛者は彼れ惟一教の歡迎を見つゝ躊躇すべけんや宜しく佛者は彼れ惟一教の交友となりて彼れの教義を研究し、又彼れ佛教の教理を聞かんと欲せば佛者も亦た彼れに教へ互に臂を把り手を握りて歡呼談笑し、以て世の妄誕に迷溺し苦淵に沈淪する者を救ひ誠實なる信仰と堅全なる生活とを決せしめ、尙ほ之に由りて以て社會文明の光輝をも增進せしめんことを計るは、佛惟兩教徒に取りて其最も一大快事なる可きなり、世の佛者以て如何と爲す歟

實然曰伊東洋二郎君曾て居を東京に占む、予も亦偶々此地に滯留せり、而して相逢ふこと兩三回、共に佛教演說の席に臨みしこと一兩回、回顧するに已に十有餘年前の事に屬す、其後予は此地に來りて居を占め、君は去て尾の金城に在りと云ふ、予夙に君の風采を識る、又其佛教を信ずることをも知る、然れども佛教を解信するの樣子如何を識らざりしなり、今此消息に逢ふ、濶然として君の佛教を解信するの機要を觀ることを得たり、因て思ふ、予と君と十又餘年前に於ては面識の交友なりき、將來必す主義の畏友たらん、君夫れ斯道の爲に加餐せよ至祈至禱、

雜　錄

○神の實躰

宇宙を指して進化と云ふ、之を覆載間の森羅萬象に適用して決して誤り無しと雖とも、審かに宇宙の本躰、神の實躰よりすれば、不變不易、永劫進化無く退却無き也。世の所謂進化、退却なるものは、唯其の外觀に現はるゝ幻影而已。今日は昨日に比して一歩を進めたるに相違なき也、今年は昨年に對して一段の進歩をなせることも疑ひ無く、近世は古代に比して其の進みたること幾層なるをも否む可からず、然れども是れ其の實相に非ず、實相に至りては、敢へて進みたるに非らず退けるにも非ず、誠に千古不易なるもの也。世に發明と云ひ發見と云ふ、此の社會に該の事物を增加せしに相違なきも、決して實躰に於いて增減を生じたるに非ず、唯吾人が進化と云ひ退歩と云ふも、發見と云ひ發明と唱ふるも、其の實皆實相に近づき、實躰の幾部を覺知せるに附する名目に過ぎざる也。彼のコロンバスの亞米利加大洲の發見と云ふ、素より吾人に新に其の地を與へたるに相違なけれど、其の實決して米洲はコロンバスの爲めに地球外より携へ來られたるに非ずニユートン引力の發見と雖とも、ニユートンを俟て引力生ぜるに非ず、引力の引力たる所は千古に通じて存立せる也、其の他總てに於いて皆斯くの如し、復疑ふ可からず。

吾人は此の進化退歩の以外に立ちて、不變不動、宏大無邊、無極無限の宇宙の實相、惟一絶對の本躰を湛へて神とこそ稱ふなれ、決して神なるものゝ宇宙以外に存ずる對待のものに非ず、宇宙の爲めに包括せらるゝ如き少量のものに非ず、又其の力は宇宙に瀰漫するものとは云へ、決して數多の神ありとする者にも非ざる也。而して吾人が今日神に關して無極無邊、永劫不滅、圓滿完了唯一絶對と、吾人が理想の及ぶ限りに於いて、最も完全に最も高尚なりとなす所の言辭を以て湛ふれども、是れ吾人が嘗て實驗、經驗、試驗によりて得たる

る者亦尠きに非ず、即ち道德家及び宗教家これなり。」道德家の力能く社會の德風を維持するに足る可き乎。今や我が國に於いて、此の目的を以て立つ所の組合の最も見る可き者は、西村茂樹先生の許に招聚せられたる一盟社なり、名つけて日本弘道會と云ふ、明治九年の創設、今や日一日に會員の增加を見ると、これ先生の德望と熱心との致す所、誠にこの道の爲めに祝せざる可からず、たとへ其の取れる主義外面上稍や異なるが如しと雖ども、得んと欲する所の結果は、吾人と同じく社會の改良、德風の發達に在り。吾人はこれ等篤志家の功勞を謝せざる可からず

○經濟の點

よりして、果して能く持續し得るや否、或る人曰へらく、迷信者は最も有力なる宗教家‥慈善家‥道德家なりと、その故を問へば、意志の善不善は兎に角、財力を吝むなく進んで之を投じ、以てその道の者の運動を充分ならしむると、識者知者の及ばざる所なりと答ふ、吾人未だ其の迷信家と合理的信仰家との比較を知らずと雖ども、現今の有樣に徵するに、何より先きに立つものは資財なり、若し宗教界道德界に於ても亦然りとせば、其の言當れりと思ふ節なきにしも非ず。そは兎まれ角まれ、道德界なる盟社は、これを全く義俠心に訴へ、良心に謀りて以てその資財を募らざる可からず現今の道德心斯くまでに發達せるか、或る人は云へり、之を政府の力に借りては如何と、斯る依賴心を以て能く不覊獨立なる精靈的形而上の改良をなし得る乎。（此の事之れを理論上に於ては兎に角實際上よりの疑問なり）

○其の方法如何

假りに資財能く之を爲し得るとせば、その方法如何、從來道德會の有樣を觀察するに、主に少數なる教育家によりて結社せられ、その結果は以て單に教育上（普通教育に止まるが如き觀あり）の道德方針を高めしに存せるが如し、而して社會全般の制裁は能く學校內に於ける教育に於いて管理し得るや。若し其の運動をして社會全躰に及ぼさしめんには、そをもて職とする恰も今の宗教界の牧師傳道師の如き者を置き、以てそのとを司らしめざる可か

らず、是に於いて教會の必要を見、寺院のこともも爲さゞる可からず、換言せば宗教と同一の方法によらざる可からざる也

○最後の結果

而して最後の結果は、有神論と無神論との衝突に終るなり、即ち一は各自の判斷力に訴へ、以て淺近なる現世の道德的觀念を涵養せんとし、一は良心の指導により、神の信仰の下に於て、單に現世のみならず悠久高遠なる道德的觀念を惹起せしめんとするに在り。換言せば淺近なる根據に於て養はれたる道德心と、深遠高尙なる神の觀念の下に養成せられたる道德心と、何れか優何れか劣なるや。再言せば、有神論と無神論とは、理論上何れか深、何れか淺なるや、實際上何れが適、何れが不適なるか。敢て問ふ世の道德家たる者果して如何なる定見かある、諸士幸に敎示の勞を厭ふ勿れ。

○理解

知らずして信ずる者あらば、これ迷信の極たるを免れず。人あり愛の如きこれを理解せば乾燥無味のものとなると云ふ、何ぞ思はざるの甚だしきや。素より空論に馳せて實行を踈するが如きは、稱す可きに非ざるも、眞正の理解は、理論と實行との必ず相伴ふ者にして、殆ど知行一致する者なり、見よ、生れて直に乳母の手に渡り、遠く父母の膝下を離れて成長せるの兒童は、その何れをか愛し何れをか慕ふや。見よ吾人社會に立ちて一度二度の交友と、明け暮れ互に手を携へ、寢食を伴にせる知人と、其の交情果して何れか細やかなる、知行相反するものたらば、相識なき生母を慕ひ、一二度の交友を愛す可かりしに、その是に出でざるは何事ぞ。西諺に曰ふ＝遠き血肉は近き朋友に如かず＝と、

○先つ己を匡せ

妄に人を議すると勿れ、己も亦同じく議せらる可ければなり。妄に人を譏ると勿れ、己も亦同じく譏らる可ければなり。凡べて人を議し人を評せんと欲する者、先つ己の身に省み、己の身を匡して而して後人に及ぶ可し。世に人を譏り人を罵り、悪口雜言到らざるなく、以て人を陷いれ人を傷けんと圖り、己れ却つて其の弊

る者亦尠きに非ず、即ち道德家及び宗教家これなり。」

道德家の力能く社會の德風を維持するに足る可き乎。今や我が國に於いて、此の目的を以て立つ所の組合の最も見る可き者は、西村茂樹先生の許に招聚せられたる一盟社なり、名つけて日本弘道會と云ふ、明治九年の創設、今や日一日に會員の增加を見ると、これ先生の德望と熱心との致す所、誠にこの道の爲めに祝せざる可からず、たとへ其の取れる主義外面上稍や異なるが如しと雖ども、得んと欲する所の結果は、吾人と同じく社會の改良、德風の發達に在り。吾人はこれ等篤志家の功勞を謝せざる可からず

○經濟の點

よりして、果して能く持續し得るや否、或る人曰へらく、迷信者は最も有力なる宗教家：慈善家：道德家なりと、その故を問へば、意志の善不善は兎に角、財力を吝むなく進んで之を投じ、以てその道の者の運動を充分ならしむると、識者知者の及ばざる所なりと答ふ、吾人未だ其の迷信家と合理的信仰家との比較を知らずと雖ども、現今の有樣に徵するに、何より先きに立つものは資財なり、若し宗教界道德界に於ても亦然りとせば、其の言當れりと思ふ節なきにしも非ず。そは兎まれ角まれ、道德界なる盟社は、これを全く義俠心に訴へ、良心に謀りて以てその資財を募らざる可からず現今の道德心斯くまでに發達せるか、或る人は云へり、之を政府の力に借りては如何と、斯る依賴心を以て能く不羈獨立なる精靈的形而上の改良をなし得る乎。（此の事之れを理論上に於ては兎に角實際上よりの疑問なり）

○其の方法如何

假りに資財能く之を爲し得るとせば、その方法如何、從來道德會の有樣を觀察するに、主に少數なる敎育家によりて結社せられ、その結果は以て單に敎育上（普通敎育に止まるが如き觀あり）の道德方針を高めしに存せるが如し、而して社會全般の制裁は能く學校內に於ける敎育に於いて管理し得るや。若し其の運動をして社會全躰に及ぼさしめんには、そをもて職とする恰も今の宗敎界の牧師傳道師の如き者を置き、以てそのことを司らしめざる可か

らず、是に於いて教會の必要を見、寺院のことをも爲さゞる可からず、換言せば宗教と同一の方法によらざる可からざる也

○最後の結果

而して最後の結果は、有神論と無神論との衝突に終るなり、即ち一は各自の判斷力に訴へ、以て淺近なる現世の道德的觀念を涵養せんとし、一は良心の指導により、神の信仰の下に於て、單に現世のみならず悠久高遠なる道德的觀念を惹起せしめんとするに在り。換言せば淺近なる根據に於て養はれたる道德心と、深遠高尙なる神の觀念の下に養成せられたる道德心と、何れか優何れか劣なるや。再言せば、有神論と無神論とは、理論上何れか深、何れか淺なるや、實際上何れが適、何れが不適なるか。敢て問ふ世の道德家たる者果して如何なる定見かある、諸士幸に敎示の勞を厭ふ勿れ。

○理解

知らずして信ずる者あらば、これ迷信の極たるを免れず。人あり愛の如きこれを理解せば乾燥無味のものとなると云ふ、何ぞ思はざるの甚だしきや。素より空論に馳せて實行を疎するが如きは、稱す可きに非ざるも、眞正の理解は、理論と實行との必ず相伴ふ者にして、殆ど知行一致する者なり、見よ、生れて直に乳母の手に渡り、遠く父母の膝下を離れて成長せるの兒童は、その何れをか愛し何れをか慕ふや。見よ吾人社會に立ちて一度二度の交友と、明け暮れ互に手を携へ、寢食を伴にせる知人と、其の交情果して何れか細やかなる、知行相反するものたらば、相識なき生母を慕ひ、一二度の交友を愛す可かりしに、その是に出でざるは何事ぞ。西諺に曰ふ＝遠き血肉は近き朋友に如かず＝と、

○先づ己を匡せ

妄に人を議すること勿れ、己も亦同じく議せらる可ければなり。妄に人を譏ること勿れ、己も亦同じく譏らる可ければなり。凡べて人を議し人を評せんと欲する者、先づ己の身に省み、己の身を匡して而して後人に及ぶ可し。世に人を譏り人を罵り、惡口雜言到らざるなく、以て人を陷いれ人を傷けんと圖り、己れ却つて其の穽

中に陷れるを知らざる者あり。誠に其の曚や愍む可く、其の愚や嗤ふ可し。馬太傳中記あり、『爾視ニ物屑在ニ爾兄弟之目ー而不ㇾ覺ニ梁木在ニ己之目ー何耶。爾豈語ニ兄弟ー曰ㇾ容ニ我出ニ物屑於爾目ー而有ニ梁木在ニ己之目ー也。爾僞善者乎先出ニ梁木於己目ー則爾可ニ明見以出ニ物屑於爾兄弟之目ー矣』と、特に其の身に敎を施き人を導く可き責ある者、幷びにそれ等の指導者たる宗敎上の新聞雜誌記者たる者は、猶ほ大に鑑みざる可からざるなり。

○朝鮮の暴動對宗派心

昨今我が邦內頻りに聲あり、敎育と宗敎との衝突を說く。彼の盲目なる敎育時論記者の如きは、その第二百八十五號紙上に於いて外敎を杜絕す可しと吐き、今猶これ等の聲、東西甚だ喧囂たり。折柄我が隣國、而かも東邦の咽喉たる韓國變あり、その徒黨相結ぶ殆んど十萬餘、京城內外相聲援して以て政府に迫り、彼れ等の二大宿願を貫かんとす。その徒黨は一に宗敎上の固信迷執と、政治上不平の欝積とを漏さんとするに過ぎずして、頑迷なる攘夷論、偏執なる國粹保存と、狹隘なる宗敎心との凝結に外ならず。名つけて東學黨と云ふ、所以のものは、一般外敎を指して西學と云ふ、この西學に反抗するを以て、大主義とすとの意を表はしたる者也。則ち前者とこの暴動とは大に異なるありと雖とも、歸する所、愛憎即ち宗派心の爲めに動くの出來事たるなり。

○東學黨とは何物ぞ

東學黨とは四五十年來、同國に存する一種の敎徒にして、その敎祖を崔福成と呼び、儒佛僊の三道を混成したる如き奇異の敎義を奉じ、身に行衣を着け、頸に珠數を掛け、背に頭陀袋を負ふ。その黨類淺薄なる自己の道を信ずる極めて深く、師を尊ぶ極めて厚く、隨つて自負心に富み、迷執に失し。その敎義の玄妙なる天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、遁甲藏身或は雲を呼び風を起すが如き、神變不可思議の術を得たるものなれば、政府若し外敎排斥の一事を擧げて我が黨に托するに於ては、咄嗟の間にその効を奏せんのみ、又我が敎祖崔福成は今年三月を以て再び世に生れて、大に我が

東學を弘め、遂に外敎を驅逐す可し抔、荒誕無稽を極むるものなりと、東學黨にして若し斯くの如き奇しき仙術を得るものなれば何ぞ政府に迫て其の請願を爲すの愚を學ばん、何ぞ自ら其の仙術を應用して瞬時に外敎を攘ひ鷄林八道を風靡せざる。嗚呼東學黨の仙術も亦微弱なる、朝鮮政府の准許を得るに非ざれば應用する能はざるか、十九世紀末路の仙術奇跡も亦微力なりと云ふべし。

○東學黨の二大宿願

東學黨には二大宿願、或は二大黨議とも云ふ可きものを有す。

第一　外敎を排斥することにて、自國に東學の如き善敎の有るを忘れて、狼狐多僞の外敎を妄信すること、近來益甚だしき有樣なるに、政府が之を不問に措いて顧みざるは、寔に謂れなき次第なれば、速に之れを驅逐して禍根を永遠に絕たんとするに在り。その第二は彼れ等の黨祖即ち敎祖崔福成なるもの、今を距る三十年前、外敎信者と誤認せられ、死刑に處せられたるが、彼れ等は深く之れを遺憾とし、我が敎祖こそ外敎排斥の目的を以て此の學派を創立したるものなるに、却つて外敎信者の疑獄を受けたりしは、永く泉下に瞑する能はざる次第なれば、今日改めてその罪名を取消したる上、之れが功德を追賞する爲め、政府に於いて相當なる旌表の典を擧げられんことを懇請すと云ふに在り。而して彼れ等黨員數百人入京し、更に其の內より數十名の總代を撰定し、宮闕の正門の側に莚を敷きて一同之れに居並び、上封に『敎天正心保國安民』と大書したる一封の上疏を、赤き風呂敷に包みて前に置き、其の執達方を求むること四日間に及べりと云ふ。恰も是れ維新前我が邦の位地に相似たるものあり、その今日に至りて如何に鎖國を唱へ、外敎排斥を主張するも、十二分の理由存するに非ずんば到底能はざることなるに、彼の頑迷是に出づるとは誠に憐む可きの至りなり。世の固信派の歸局は概ね斯くの如きものなり、豈鑑みざる可けんや。

○都新聞の美擧

都新聞の名をば、吾人從來新小聞紙として聞き、又往々風俗上如何なるものかとの疑を懷かしめたることありき。而して今や正に此の美擧あるを聞く、記者の此の如き精神果して全紙に透徹するあらば、吾人は仰いで大新聞とし、道德新聞として憚からず。而かも吾人は之を以て諸他新紙の首位に置かんと欲するなり。都新聞揭ぐる所の『要望』を轉錄して、其美擧を賛す。

我讀者中には宗の異同こそあれ身何の敎をか望み籍何派にか屬せざる者殆と之なからん而かも現今の僧侶敎師等の敎を充分傾聽し居らるゝや否を知らさるも若し以上に望たる如き趣意（其要望は別章なりき）にて說敎講話等あらば諸君は必ず喜んで其席に列し其行を勵まるゝとならんと信ず」此に於て宗敎家諸君に望む說敎講話ある每に須らく其一兩日前に於て時間と說敎者の名前を且つ其說敎する名題とを本社に通知せられんとを我社は之が爲めに餘白を割くを辭せさるべし是れ亦新聞紙が世に盡すの一端ならずとせず

吾人は斯る注意の、社會に及ぼす力決して尠少ならざるを信ず。世の社會改良、世運開進に心ある者、大に熟慮す可きとにこそ。

彙報

◉釋尊降誕祝祭　ユニテリアン第一協會にては四聖人の一なる釋尊の降誕を祝せんが爲め去月八日午前十時第一協會內に會合し先つ神田氏立て開會の趣旨を陳べ佐治氏は釋尊の經歷槪畧を述べ其他數氏の祝詞演說等あり後茶菓の饗應ありて散會せしは正午頃なか〱の盛會なりき

◉唯一舘定礎式　豫れて報せし如く唯一舘は這回芝區三田四國町一番地に建築の計畫なりしが去月廿八日を以て定礎式を擧行せり。

◉マツコーレイ氏送別會　自由神學校々長マツコーレイ氏には豫れて報せし如く今回米國に於て開かる可き宗敎大會及びユニテリアン大會へ出席の爲め一時歸國するに付き去月廿日自由神學校內に於て送別會を開けり來り會する者數十名當日の施行順序は次の如し開會の詞（神田氏）送別演說（佐治、前川、荒川其他神學校生徒數氏）及びマツコーレイ氏の答辭右終て茶菓の饗應ありたり

◉マツコーレイ氏の出發　マツコーレイ氏は去月廿八日午後三時新橋發の滊車に乘じ歸途に上れり當日の見送り人はなかなか多かりき

◉日本弘道會懇親會　こは西村茂樹先生の許に締盟せられたる道德會にて去月廿三日午後二時より品川御殿山觀櫻館に懇親會を開く來り會する者無慮百五十餘名三輪田氏東海道筋巡回の報告籠手田知事は新潟縣下の景況を述べその他數氏の演說あり右終て宴に移り十二分に歡を盡し當に散會せしは黃昏頃なりき、吾人も會員の一人たるを以て席に列したり其の盛會は吾人の意想外にして是れ等の力を團結して以て熱心に道德發達社會改良に從事するあらば正に爲すべきあらんと大に望を屬する次第なり

◉東京教育社九周年紀念式　教育報知なる教育雜誌は今より九年前即ち明治十八年四月を以て東京教育社より發行せられしものにして玆に九年の星霜を重ね去る三十日大日本教育會講堂に於て其の紀念式を擧行せり招待に應じ出席せる者無慮四百餘名此の盛會は以て同社の盛衰を卜す可く又以て教育社會の盛衰を卜す可き也吾人は其の席に列し其の盛會を祝すると共に大に感ずる所ありたれども是等の感慨を論ずるは本欄の免さゞる所なれば吾人は聊か『正々堂々正に正義の友たる可し』との數語を殘して該社の盛大を祝するなり。今當日の施行順序を擧ぐれば奏樂、社長日下部三之介の挨拶、文部大臣井上毅氏大日本教育會長辻新次氏日本弘道會長西村茂樹氏東京府知事富田鐵之助氏の祝辭、奏樂、大森維中氏(教育談)文學士三宅雄次郎氏(教員)福池源一郎氏(文章論)西村貞氏(教科書に關する希望)文學博士南條文雄氏(知識と道德論)等の演說、奏樂、右終て茶菓の饗應ありけり。

◉基督教主義教育會　今回府下基督教主義諸學校の人々が聯合して基督教主義教育會なる者を設立せられしとは豫て聞く所なるが今其趣意書を得たれば之を左に揭載すべし

趣意書

既に基督教徒あり尋常人に特立せり既に基督教主義の學校あり尋常の官私立校に特立せり苟も基督教主義の教育會あらんか必ずや尋常の教育會と特立せざるを得ず東京近傍同主義の學校森然として二十內外儼立せり是れ生等の玆に教育會を設立せんとする所以なり

其目的は則ち基督教主義の學校教育の發達を圖るにあり其會員は則ち現に同主義の學校に從事する內外教員理事員商議員及び其他の職員なり會友あり以て同感の士の意見を聽くべし委員あり以て各校を代表せしむべし其主眼とするは即ち獨立不羈偏せず倚らず以て我國眞正教育の基礎を確立鞏固にするなり教授法監理法を開拓進步せしむるなり其他教科書の撰定より教員間の交誼に至るまで細大洪纖餘力を遺さず互に其抱負を交換し其所長を採擇して以て大に他日の玉成を期せんとす生等敢て當らずと雖も同志會合する玆に數月而して今や稍く之れが發軔として會則を定む乃ち謹で之を諸君の座右に呈し併せて諸君の同盟協贊を望む

若し夫れ生等が本會の爲め拮据經營するは固より其所なりと雖も之れが盛大隆興を企圖するは實に諸君將伯の力に依らずんばあらずと云爾

明治二十六年

明治女學校教頭　巖本善治
明治學院總理　井深梶之助
東京英和學校々長　本多庸一
立教學校教頭　木村駿吉
東洋英和學校々長　平岩愃保

◉新發見の聖彼得傳福音書　ストロース。ルナン、マシウ、アーノルド等前後相踵ひで、聖書批評學起り、第四福音書ヨハネ傳を其攻擊の中心とせり。近頃ろ、英國のハムフリ、ワード夫人が一團結の如き、亦此討究に熱心せり。然るに、一千八百八十六年、一人の探見者が上部エヂプトの墳墓に偶然一卷の古書を發見し、爾來世界の批評論場に一大影響を喚起したり。此の古卷は言はゞ一個の欠本にして僅に基督の生涯の最終四五時間の事歷を記述するに過ぎずと雖ども、約翰傳福音書に對する批評家の冒瀆は十分之を壞破する丈の價値を有せり、所云る聖彼得傳福音書即はち是なり。今や、ケムブリヂ大學のスヰート博士、專心之が編纂に從事し居れりと風說せり。約翰傳福音書辯護に最好なる間接の證據出たるを喜こぶ也。此書吾人の手に落つる遠きにあらざるべし（信仰之友第十七號）。

◉女子夏期學校いよ／＼起らんとす　女子のため夏期學校を開設せんとは昨年來その筋に關係ある人士中に相談せられたる事なるが今回巖本善治、小方仙之助、田村武治等の諸氏首として此事を唱へ各女學校之に應じ既に代員會委員會等數回開かれたる末いよ／＼去月中數寄屋橋教會に於て開かれし代員會に於て來る九月上旬橫濱に於て女子夏期學校開設の事に決定しそれ／＼委員等も撰定せられしと云ふ

◉東北佛教會　東流一代と稱へ來りし佛教は今や泰西諸邦に侵入して行々全歐洲の宗教を凌駕せんとする徵候を示したり而して其の本部とも云ふへき我日本佛教の不振なるはそも／＼何の爲めぞ今や東北佛教は遠大の志望と重大の責任を負うて秋田城下に產み落されたり彼の朝に起りて夕に仆れ昨日組織して明日瓦解するの醜態を呈すること無きは吾人の信して疑はさる所本會の健兒否會員たる者奮然努力して日本佛教の光輝を失せさらんことを勉よや尙同會は來る五月十四日を以て當市倶樂部に於て盛大なる發會式を擧行せんとて創立員諸氏の計畫中なりと云ふ（秋田縣通信）

◉日蓮上人眞筆　は極美麗なる寫眞石版として東京虎の門外今入町二十四番地高知堂田中福馬より出版せられたり定價金十錢特に望によりては實費を以て懸軸製にもする由。こは日蓮上人が佐渡が島に流さるゝ前文永六年鎌倉に於て認められたる南條七郎へ宛てたる書簡にして眞筆の外に別紙として說明をも附したり

在秋田市　　七郎

何を郷土教育と云ふ。郷黨を目的として子弟

して、且其皆ならしむるの目的を以て方法を施設す

むるを得

の必要 … 必ず其の市及町村固有の歴史あり、氣

を養成するを以て目的とせざるべからざるなり。

論林

郷黨教育論

在秋田市　戸城傳七郎

本論は頃日故ありて起草し置きたる未定稿なり、今宗教記者の需に應して之を寄す、其の所説宗教に關係ある者に非すと雖も、幸に讀者の覽に觸るゝを得ば大慶なり。

何をか郷黨教育と云ふ。郷黨を目的物の一として子弟を教育することなり。詳しく云へば、郷黨の利害を以て目的とし、其の地の歴史を重んじ、其の地自然の地形風土を利用して、其の繁榮福祉を増加するに堪ふへき人物を養成し、子弟をして自家郷黨の利害に熱心にして、且忠實ならしむるの目的を以て教育法を施設するもの、之を名けて余は郷黨教育と稱するなり。

案するに、邦國には必す其の國固有の歴史あり、又特殊の氣候風土あり。此の歴史及ひ氣候風土の異なるに從ひて、夫々特殊の人情風俗を形成し、文學、宗教、言語、文字より以て衣食器具の調度に至るまで、必ず一種の特色を具へたり、而して此の特色は即ち其の國の獨立を維持し、其の繁榮を増加するに一日も缺くへからさる必須の要素なりとす。是の故に、國家として其の國の教育法を施設せんとするや、必す其の國民子弟を率ゐて此の特色に順應せしめ、其の國の獨立繁榮を維持するに最も有力なる資格と、能力とを具備せしむるを以て眼目とせざるへからす、是れ即ち國家主義教育法の由りて起れる所以に非すや。余輩の郷黨教育の必要を言はむと欲するも亦同しきのみ。或る特殊の市又は町村には必ず其の市及町村固有の歴史あり、氣候あり風土あり、乃至固有の人情風俗習慣あり、之を其の郷黨の特色とす。故に其の教育法を施設するや、必ず一郷の子弟を率ゐて此の特色に順應せしめ、其の市又は町村の獨立繁榮を計畫するか、最も有益なる人物を養成するを以て目的とせざるへからさるなり。

例へは、秋田市に就きて之を云へは（余は現に秋田市

に在り、故に姑く例を此に取る）秋田市には其の地固有の歴史あるへし。此の市は如何にして建設せられたるか。今日の秋田市民の祖先は、世々如何なる政治の下に生活したりしか。今日の秋田市を以て古昔の秋田市に比較せは、市民生活の程度は如何。余の聞ける所を以てすれば、之を古に比すれは漸く將に衰頽せんとするの傾向ありと云ふ、果して然らば、其の原因は如何。此の市には古如何なる偉人傑士ありしか、而して彼等の事業は此の市の幸福に如何なる影響を與へたりしか。夫れ是等の事實を以て之を子弟に敎授し、以て自家の鄕邑を愛する情を發起せしめ、從て此の市の繁榮を希望せしむるに至らは、市將來の運命上豈幾分の効力なしと云はむや。勿論、今も小學校の歷史は鄕土の史談を以て始むるの制なれは、不知不識此の希望を充たすに足るが如しと雖も、而も今の謂はゆる鄕土の史談なるものは、只歷史上の觀念を誘發せしめんが爲め、敎授上の方便として假に授くるものなるに過ぎされは、余輩は決して之を以て滿足すること能はさるなり。

又地理上より之を云へは、秋田市天然の地勢風土は、果して商業の地たるに適するか、工業又は農業の地たるに適するか。若し商業なりとせは、如何なる商業を最も適當なりとすへきか。若し工業又は農業の地なりとせは、又如何なる工業又は農業を振興せしむるを以て得策なりとするか。今日市より出つる所の生產物は、知らず如何なるものぞ、其の當業者は如何なる識見を有し、如何なる方法を以て其の品物を販賣しつゝあるか、將來其の販路を擴張するには如何せば則ち可ならん。彼の土崎港は如何に之を利用すへきか、彼の日本海は只渺茫として自然の廣大を代表せる一の長物たるに過ぎざるか、若し然らすとせば、我に如何なる利益かある。酒田能代は我に對して貿易の友たるに足らさるか。函館、新潟、及び浦鹽斯德は如何。鐵路貫通して一聲の瀛笛市民の眠りを驚かさむ曉には、如何に此の鐵路を利用すへきか。縣內には各種の礦山あり、利益收得の狀況果して如何、而して此の利益は年々何人

の手裡に歸しつゝあるか。聞く所によれは、多くは他府縣殊に上國人の專有するものなりと云ふ、果して然らば、秋田人は何が故に斯くは人後に落つるの不幸に遇ひたるか、將來斯かる不幸を豫防するの策は如何せば可ならむ。嗚呼、此の如きの地理學問題を以て之を市の少年子弟に授け、以て一面には其の地理學上の知識を發育せしむると同時に、他の一面に於ては切に自鄕の爲に其の地勢風土を利用するの急且切なるを覺らしめんか、市將來の幸福に關して亦豈幾分の補益なしとせんや。而して彼の敎則に謂はゆる鄕土の地形方位に就きて敎授の端緒を開き以て地理上の觀念を得しむるが如きは、未だ能く此の希望に副ふに足らざるなり。

若夫れ人情風俗は如何、人情果して敦厚なるか、風俗果して醇朴なるか、輕薄に流るゝの傾きはあらさるか、勤儉質素の美風は果して實際に行はれつゝあるか、風儀は紊亂せさるか、事を處するに遲緩にして機に後るゝの弊はあらさるか、余は素より未た之を知らさるなり。然れとも是等は最も敎育家の注目を要する緊要の問題たること論を待たさるべし。

之を要するに、秋田市には秋田市特有の自然的及ひ歷史的事情の存するあるを以て、苟も此の市の敎育に從事せんと欲する以上は、必ずや是等の事情に應じて特◎別◎に其の方策を講ずるの必要あること言を待たさるなり。而して是は啻に秋田市のみならす、土崎には土崎特有の事情あるへく、本荘には本荘の事情あるべし。而して日本國中の市町村各々此の覺悟を以て其の敎育法を施設し、其の地の敎育家亦此の覺悟を以て其の職に從事せば、直接には一市一町一村の繁榮福祉を來す所以の原因となり、而して間接には國家の福祉を進むるに足らむか。余の鄕黨敎育と稱するものは、即ち此の如きの敎育法を指して云ふなり。

人或は曰はむ、汝が言ふ所の如きは普通必然の事にて、敢て事々しく之を今日に唱道するの要なしと。誠に然り、余が說或は遼東の豕たるやも知るへからす、果して然らば余復た何をか云はむ、國家の幸慶之れに過く

るものあらさるなり。然りと雖も、世の教育者流の弊として、其の言行輙もすれば則ち遠大に馳せ、目前脚下の利害は却て措きて問はざるが如きの傾きはあらさるか。彼等は外國の地理を詳悉せり、彼等は又日本の歴史に通曉せり、曰はく世界第一の高山はヒマラヤ山なり、第一の長流はミスシッピー河なり、曰はくブラジルに降雨多きは云々の理由に因る、曰はく英國の輸出總額は實に幾億萬の多きに達せり、曰はく日本國名の由來は云々なり、曰はく本邦の外交は遠く人皇何代の御代に始まれり、曰はく京都の地勢は此の如し、曰はく琉球の氣候は云々なりと、風俗人情より物産交通等の事に至るまて、彼我内外の大勢略ぼ通せさる所なく、且つ苟も日本國と云ふ名稱の下に概括せられたる歴史地理若くは博物等の事實一として忽諸に附するものなし、而して之を以て國家教育の材料とし、以て國家に對して忠實にして且有用なる人物を造成し出さむと欲す、誠に務めたりと謂ふへし。邦國競爭の激烈なる今日に方り、日本の教育家たる職分としては素より當に然るへきことにて、是亦國家の大幸之に過くる者あらむや。然れとも、此の如く熱心に國家的教育を主張し、且つ實際に勉强せらるゝ教育家に對し、試みに問ふに其の地生産物の多寡輸出入の狀態を以てし、若くは其の將來の運命如何に關し何等の意見ありやと問へば、漠として適切の答へを與へ得る者極めて少なきは何ぞや。或は往々此等の質問に對し滿足なる答へを與へ得る者なきに非ざるも、其の實際教育に從事する狀況を察すれば、忽ち之を度外に放置して顧みさる者比々皆然りと云ふも誣言に非さるなり。(口を公共の利害に藉り陰に自家の名利を博せんとするに急なる者、多くは如是の弊に陷り易し、宗教社會の狀勢亦之に類する者あり、豈獨教育社會のみならんや)而して其の弊や遂に子弟を率ゐて實際の實務に迂遠ならしめ、徒らに志望を遠大にして一の得る所なきに終らしむ、誠に慨嘆に堪へさることなり。昔氣質の父兄にして往々今日の教育を非難し、學校の教育は子弟をして生意氣ならしむるの結果あれども、家業の實際には用に立たずと云ふ

者あるも無理ならぬ次第と謂ふへし。近年頻りに彼の無謀無頼の壯士なる者世に跋扈し、名を政治的運動に假りて、到る處良民の迷惑となる者多きも、其の因を推究せば、明治の教育家たるもの亦幾分の責を免るゝこと能はさらん。嗚呼、妄に國家主義を唱道し漫に忠君愛國の士を養成せんと務むるのみにて、郷黨實際の利害得喪は却つて之を忽諸に附するの弊たる、今日に於ては復た掩ふへからさる者あるなり。是れ余が或は遼東の豕たる嘲りを受くるの恐れあるにも拘はらす、敢て郷黨教育の説を今日に主張せんと欲する所以なり。其の詳なるは更に他日を待ちて論述する所あるへし。

附説

案するに、普通教育には少なくも三箇の目的物あるへし、一には個人、二には郷黨、三には國家是なり。個人を以て目的物とするものは之を個人主義とも云ふへき歟。然れとも世に謂はゆる個人的教育とは稍其の趣を異にするが如し。世に謂ふ所の個人的教育なるものは、彼の世界一家説（コスモポリタニズム）とか云ふものを大本の眼目とする者なり。個人主義と云ふことを適當に解釋せば、一個々々の人間を其の住する所の國家及び郷黨の事情に順應して生活せしむるに、最も有益なる勢力を具備せしむるを以て目的とするものなり。

本邦明治の教育は蓋し個人主義を以て其の端を開きたりき。遠くも今より十年前までは個人主義の教育にてありしと思はる、何となれは、當時の教育たる只個人の知識を啓發し、其の徳行を進め、其の技能を長せしむるを以て唯一の目的とし、其の他は法令上にも實地教育家の眼中にも一として教育の目的らしきもの存在せざりしを以てなり。斯くて個人主義の教育法漸く發達し完備するに從ひ、漸く其の呼聲の高まりしものを國家教育とす、國民教育と云ふも同しかるへし。

國家主義の教育は當初漸く本邦教育家の注目する所なりしとは云へ、其の最も勢力を得るの機會となりしものは蓋し獨乙教育法の採用せられたるに在り、

而して此の主義は今に至るまて毫も衰へさるのみならす、尙益々發達せんとするの景況あり。

茲に注意すへきは個人を以て目的とする敎育と國家を以て目的とする敎育との關係なり。世往々此の兩主義を以て相反對せる目的を有するものとし、二者兩立することを得さる者の如く思惟する者ありと雖も、此の兩主義は决して其の方向を異にするものに非す、從て彼此相撞着するの虞なきものなり。然るに今の國家主義を唱道する者、動もすれは個人主義を排擊して徹頭徹尾國家に不利なるもの丶如くに言ひ做すことあるは余輩の解せさる所なり。思ふに彼等は個人主義を以て前に謂はゆる世界一家說とか云ふものと同視したるに非さるなきか。彼の國家敎育社の如きも、其の名稱より考ふれは、卽ち個人主義に反對して起れる者の如しと雖も、其の實は如何にや。世人或は彼の社を評して、敵なきに矢を發つ者なりと云ふ、蓋し亦同樣の疑察に原因せしものならむ。」此の兩主義の異なる所は只輕重の一點に在り、卽ち個人を以て重しとし國家を第二に置かむとする者は個人主義なり。故に素より國家を度外に放棄するに非すと雖も、其の弊や流れて世界一家說の端緖を開くことあり、彼の北米合衆國の如き是なり。然れども、合衆國も近年は漸く國家主義の勢力を得んとする傾向ありと聞く。又之に反して、國家を以て重しとし、個人の利害を第二に置き、寧ろ個人の幸福を犧牲に供することあるも、先つ國家の爲に謀りて忠實ならざるへからずとするは卽ち國家主義にて、彼の獨乙國の如きは卽ち此の主義を執るものなり。思ふに北米合衆國は個人主義の好代表者にして、獨乙は國家主義の好代表者なるへし。本邦に於て獨乙敎育法を採用するに至り俄に國家主義の勢力を高めたるも亘に以あるなり。然らは則ち本邦に於ては此の兩主義の孰れを執るへきかと云ふに、本邦にては無論國家主義を以て第一とし、國家の爲には個人の利益幸福を犧牲に供することあるも顧みさるの覺悟なかるへからす、蓋し此の點に就きては何人も異議

を容れさるへし。

然りと雖も、吾人は單に國家敎育の隆昌ならむことを希圖し、國家の爲め忠實にして有用なる人物を養成するを以て目的とし、日夜此の希望と目的とに依りて其の職に從事せば則ち以て足れりとすへきに非す。吾人の今日職に從事するや、此の如く國家主義を以て眼目とすと雖も、其の他尙大に熟慮を要する所のもの一にして而して足らさるなり。就中敎育の目的物としては先つ其の鄕黨即ち或特殊の市又は町村の利益を計畫し、此の計畫に向ひて最も有用なる人物を養成するを以て主なる目的の一とせざるへからす、即ち鄕黨敎育の要ある所以なり、而して今や此の敎育のみ獨り忽諸に附せられたるを見ずや。

植民事業と外國布敎（續論）

法學士　堤　定次郎

予輩曩者植民事業と外國布敎との關係に就き一編の意見を草して之を世に公にせり、然れとも其方法に至りては未だ論及せざりき、一日客あり來りて談偶ま此事に及ぶ、客乃ち難じて曰く、子の意見は余之を宗敎雜誌に見るを得たり、然れども植民と布敎と一擧兩得の方法は如何、此の方法にして未だ講究し得ずんば、子の意見は放言高論の譏りを免れざらん、子以て如何とすと。

抑も植民事業と外國布敎との關係は、其初めは予輩の腦中に浮び來りたる一種の感想たりしなり、此一種の感想は實に社會事物の反影たりしなり、社會の形勢は予輩の口を借りて之を公にせしめたりき、然れども予輩は一たび之を公にせり、豈に徒らに空言放論以て快を一時に取るものならんや、夫れ國家百年の大計と敎門千載の事業と相一致して以て其基礎を固うせしめんと欲せば、之が方法を講究するの必要は、亦言ふを待たざるなり、予輩是に於てか客に約するに續論を草して其方法を論ぜんことを以てせり。

蓋植民事業は主にして外國布敎は從たり、植民の目途立たずば布敎の功は擧ぐるに地なからん、是故に植民

と布敎とを兼行せんと欲せば、先つ植民の方法を講じ、其方法は既に成立せるものと看做すにあらずんば、以て布敎の方法を談すると能はざるなり、

夫れ然り、植民の方法たゞに立たば布敎の方法は敢て難きにあらず、植民事業の大方針玆に定まり、其經營全きを得、其基礎固きを得ば、宗敎の種子を蒔くは蓋し容易ならん、觀じ來れば所謂布敎論は即ち植民論のみ、若し外國布敎の方法如何と問はゞ、請ふ去りて先つ植民事業の方法を講究せよといふを以て至當とす、然らば則ち何を以て植民事業の大方針を定め、其經營を完うし、其基礎を立つべきか、是れ予輩が先つ論せんと欲する所なり、

人皆口を開けば輒ち曰く、植民々々と、抑も植民とは如何なる義ぞ、讀んで字の如くせば我が民を移植するの謂に非ずや、然ども均しく民を移植するに於ても、亦種々の方策あり、或は政府自ら兵力を以て外國の土地を侵略し、我が國民を移植して以て我が版圖を擴張せんとするものあり、或は土地を侵略するとなしと雖も、外國政府と特別移民條約を結び、自ら保護を加へて以て我國民を移住せしむるものあり、或は別に移民條約を結ぶとなしと雖も、我國民の隨意に條約國に渡航して以て彼の地に移住するに任ずるものあり、蓋し第一の方法は古來の所謂植民にして、第二第三は移民たるのみ、植民と單純なる移民との差は他なし、植民は我國民をして我國權の下に立たしむと雖も、移民は然らず、我國民をして移住國の政府の治下に立たしめ、彼の政治に服從せしむるに在り、是故に前者に在りては外國に在りて獨立の位地を有するも、後者に有りては民の保護を以て外國政府に任するものなれば、本國政府の處置强硬にして宜きを得ずんば、我が良民を驅りて徃々奴隷の境遇に陷らしむるを免れざるべし、

夫れ然り、隨意渡航と雖も、本國政府は移住國の政府と確實なる條約を訂結し、之に依りて以て我民を移すにあらずんば、我が國民は其生命、身躰、財産の安全を得、公私の權利を享有すると能はざるなり、是故に植民事業は假令政府自ら手を下さゞるも、大躰に於て

政府は我が移住民の擔保を爲すの方法を盡さゞる可からず、是れ政府が國民に對する本分なり、

夫れ茫々たる滄海の外、何れの處か民を移植するに適すべき、若し尺寸の地だに未だ他國の有に歸せずして以て我が國民の移住に適するものあらんか、地球到る處以て我が民を移植すべきなり、絶海の孤島以て我が國旗を立て我が國權の下に我が民を移植すべきなり、然れども今日の世界は昔日の世界にあらず、今日の國民は昔日の國民にあらざるなり、今や普天の下、率土の濱、處として主あらざるなし、是故に今日我國の狀態に在りては、地を海外に略して以て我が民を移植するは一大難事に非ずや、是れ只た爲し得べきは移民事業ならんか、

或は南洋諸島なり、或は熱帶地方なり、或は大陸なり、或は島嶼なり、我が民を移さんと欲せば、一大會社を起さゞるべからず、會社を起さんとせば、只た個人の集合に成る資本のみを以て其事業の隆盛を期すべからず、政府は多少の保護を之に加ふると必要なり、政府の保護とは何ぞ、政府自ら會社を起すの謂か、曰否、予輩豈政府自ら手を下すを好んまや、只た政府は一方には多少の資本を與へて以て會社の成立と基礎とを鞏固ならしめ、一方には移住外國と確實なる條約を結びて以て我が移住民の生命、身躰、自由、財產の擔保を完うせしめ、且我が移住民をして公私の權利を享有せしめざるべからず、然らずんは移民何を以てか安堵するを得んや、公私の權利確保せられずんは移民は何を以てか昔日の奴隷と異ならんや、彼の布哇と我國との關係の如きは、修好條約以外に別に渡航條約なるものあり以て我か移民の利益を擔保するに足るべしと雖も、其實際に至りては我が移民の利益未だ十分に保護せられたりといふを得ず、我が移民の權利は未だ安全に擔保せられざるなり、況んや近來布國の內訌、白人の專橫、殆んど我が移民を驅りて半ば奴隷たらしめんとするに至る、斯くの如くんば移住事業は徒らに奴隷の臣民を作り出すのみにして已まんとす、豈に慨するに堪ゆべけんや、予輩故に曰く、政府は大躰に於て確

實なる保護の途を立てざるべからずと、

聞く我が政府は曩きに佛領南洋の一孤島に移民を送りたり、其孤島には猛獰無頼の悪徒のみ住居し、人を毒殺するを以て毫も意とせずと、夫れ一片の條約だもなくして此野蠻蒙昧の地に移民を送るもの、豈に我が移住を奬勵するの途といふべけんや、

地を海外に略して以て民を移植するは國家の事業にして、今日之を行ふは容易の業に非ず、然れども移民の事業に至りては、政府少しく之を保護し、大躰に於て我が移民の利益を擔保するの計をなすときは、之を爲すに於て敢て難からざるべし、民間有志の資本茲に集まり、政府の擔保確實にして、移民會社既に成立せりとせば、之に伴ふ布敎の事業は果して如何すべき、

移民の計既に熟し、會社既に成立せりとせば、布敎事業は敢て難事にあらざるべし、蓋し宣敎師牧師僧侶の勞は精神的にして其艱苦固より小に非ず、然れども資本を集めて移民事業を經畫するに比すれば、亦難易の別ありといふべし、然らば如何にして宗敎家をして植民と共に敎を布くを得せしめんか、

此問題を決するに當りて只た困難なるは宗敎家資本の問題是なり、宗敎家は自ら費を抛ちて布敎に從事すへきか、或は有志の資を仰きて以て其事に從ふべきか、其兩者の孰れを取るも、予輩は宗敎家が獨立して布敎に從事せんよりも、寧ろ會社の一員となりて渡航し以て力を布敎に盡さんことを望む、何となれば、獨立して布敎に從事するときは、其位地たる恰も賓たるの形ありて、内部の事情に通すると難きの弊ありと雖も、躬自ら移民會社の一員となり、移民を率ゐて之を都督し併て之に敎を布くときは、一は以て植民事業を助け、一は以て同時に敎を播くを得べければなり、且夫れ宗敎家の弊は己の信する所を以て直ちに人に强ゆるに在り、恰も病客の患所を發見せずして徒らに之に藥劑を投ぜんとするの醫に似たるものあり、若し宗敎家にして會社の一員として布敎に從事せんか、能く内部の事情を明にし、其短所患部を發見して、之に藥劑を投ずるを得べきなり、其移民の心を得るや必せり、

又た植民事業と布教と兼行せしめんと欲せば、必ず學術經驗兼有の醫師を伴はざる可からず、夫れ遠く郷國を離れ、地角天涯孤身煢々、而して一夕病魔の侵す所となれば、誰か悽然として憂を懷かざるものやある、此時に當りて恃む所は一片の信仰と醫師其の人とあるのみ、加之、平生住み馴れたる郷國に在りてすら衛生に注意し以て其萬一を慮らざる可からざるに、况んや居を異國に占めて未た住み馴れざるの地に生を寄するもの、氣候風土の激變に遇ふ、其平生意を衛生に用ゐざるべからざるは固より言ふを待たざるなり、故に治療上衛生上必す醫師を伴ふの必要あり、且夫れ野蠻未開の地、醫師の良好なるもの土民間にあらざるは言ふを待たざる所、若し我移民會社にして醫師を伴はゞ、獨り我が移民の便のみにあらず、彼の土民に治療上の便利と衛生上の智識とを與へ、以て彼をして我に悦服せしむるに於て其効蓋し顯著なるものあらん、

彼の眞宗の如きは、我國の佛教中最も强大の力を有するものなり、信徒を有すると幾千萬、全國到る處に宏壯輪奐の寺宇あらざるはなし、加之、其富亦幾千萬、法主一たび門外に出つれば信徒の喜捨忽ち鉅萬に上る、若し方今我國の佛教家にして植民事業と布教とを兼行して以て其効果を收めんとせば、其容易なる蓋し眞宗の右に出つるものなかるべし、其莫大なる富は以て一大移民會社を設立するに於て何かあらん、是に於てか予輩は獨り怪む、今の眞宗僧侶にして未だ一人の起りて此事業に從ふものあらざるを、彼の郡司大尉の千島行の如きも、亦宗教を以て之を率ゆるの必要は識者の既に認むる處、而して我國內佛教僧侶の未だ一人も之に應ずるものあるを見ざるは何ぞや、聞く一人の耶教宣教師の仙臺に在るものは奮然志を決して之に從ふの約を爲せりと、嗚呼何ぞ我國の宗教家の無氣無力にして國家の大事を輕々に看過するの甚しきや、

予輩は歐洲幾多の宣教師が野蠻未開の亞弗利加內地に蹈み込み、瘴煙毒霧を恐れず、猛獸妖蛇を懼れず、蠻民の虐待に遇ふを甘んじ、一命を堵して以て布教に從事し、泰然として天命に安んじ、淳々として無智の民

を化するに力を致すを聞き、只管嘆賞の外なきなり、顧みて我國の宗教家を見るに、何ぞ其這般の信仰、熱心、勇氣に乏しきや、

以上予輩は植民事業の方法より布教の方法に論及し畧ぼ其意見を述べ了せり、

予輩は前回に於て曰へり、國家主義と博愛主義との調和は始めて植民事業に於て之れを見るを得んかと、請ふ其理由に就き聊か茲に辨明する所あらん、

國家主義とは何ぞ、之が定義を與ふるは難しと雖も、試に予輩をして其面相を察せしめば、予輩は將に言はんとす、曰く、國家主義とは、國家を以て本位とし、標準とし、內に對し外に對する皆此標準に據り此本位に基きて其行爲の方針を決するに在りと、是故に國家主義の應用は政治經濟法律より宗教美術風俗に至る迄、一に國家を標準として其原則を定む、夫れ然り、國家の利益は先なり、個人の利益は後なり、歷史は先なり、理想は後なり、主權は先なり、臣民は後なり、國家主義は人類擁臨の眞相より來り、戰伐時代の思想より發生せり、國家主義の本領は一國の本色を維持するに在り、一民族の特質を保存するに在り、外人は之を疎んじ、內人は之を親しむ、外國は友たらずして寧ろ敵たり、其發動するや保護貿易となり、非內地雜居となり、國家教育となり、國敎保護となる、而して其弊や外國思想を排斥し、外國の文物を杜塞し、攘夷となり、鎖港となる、一短一長一利一害は亦免れざる所なり、

若し夫れ博愛主義とは何ぞ、讀んで字の如くんば博く愛するの謂なり、韓愈が所謂仁か、然れども茲に所謂博愛主義なるものは、只た仁の謂にあらず、若し試に予輩をして其面相を察せしめば、予輩は將に言はんとす、曰く、博愛主義は世界主義なり、人類主義なり、世界を擧けて一家となし、萬民を擧けて同胞となすものなり、是故に國境の區別なきなり、人種の異同なきなり、地の東西なきなり、洋の南北なきなり、邦土、山川、江流、河海、以て萬民の間を隔つることなく、汎く相愛するの謂なり、平和は博愛主義の親友なり、戰伐

争闘は博愛主義の仇敵なり、故に博愛主義は歴史的に非ずして理想的なり、人類呑噬の境を脱して驩然和樂の域に至らしめんとするものなり、昔者博愛主義の鼻祖基督汎く萬民にバプテスマ授けよといへり、是れ則ち博愛主義の唯一の標準に非ずや、博愛主義の發動するや、自由貿易となり、内地雜居となり、自由敎育となり、内外雜婚となり、宗敎自由となり、社會主義となり、貧民救助となる、而して其弊や外人崇拜となり、自他の別なく、平等の結果は君父の敬禮なきに至る、一短一長一利一害は亦免れざる所なり、

國家主義と博愛主義との面相は其れ此の如し、然らば予輩が所謂國家主義と博愛主義との調和とは何ぞ、蓋し植民の事業は國家主義の發表なり、國家を標準とし、其利益を謀るを以て目的となすに在り、然り而して劍を以てするは其最も古きものなり、商業を以てし宗敎を以てするは歴史上最も新なるものなり、劍を以て地を開き民を移植するは、呑噬主義の發動なり、然れども宗敎を以て我が移民を率ひ、彼の土民を感化し、以て彼我相愛し相親しむの情を起さしめ、精神上の征服を彼に加ふるは、豈に眞に高尙なる平和の手段に非ずや、果して然らば植民事業をして呑噬主義より平和主義に進ましめ、國家主義の目的を以て博愛主義と相調和せしむるものは、豈に宗敎を以て植民事業を助成するの致す所に非ずして何ぞや、

是故に移民を率ゆるに農工商業を以てするの傍ら、宗敎を以てするときは、獨り我が移住民の道德淸潔にして安心立命の地を得るのみならず、我が德を以て彼の土民を感化し以て我に悅服せしむるの功あり、蓋し劍を以てするときは其功一朝にして擧ぐるともやあらん、然れども怨恨、仇讐、不平の氣は磅礴鬱積して百年盡くるの期なからん、是予輩が劍を以てするに贊せずして商業と宗敎とを以てするを望むといふ所以なり」

夫れ然り、國家主義の目的を以て之を行るに博愛主義の方法を以てするは、宗敎を以て植民事業を助成するの特色なりとす、予輩が稱して國家主義と博愛主義との調和は植民事業に於て見るを得べしといふは、豈に

空々漠々の言ならんや、世の宗教家、植民事業家、以て如何となす。

職務難

前川太郎

家犬の吠ふるあり時に其聲獅子の如し、途行く少女不意を撃たれてこれに慄き、老媼亦驚きて躓き仆る、こゝに於いて、犬竊に謂へらく、乃公の猛威熾盛なる哉、われ人類を制服するに足ると、又思へらくわれは守門の有司なり警固の將帥なり、凡そこの門に入らんとするもの、一に皆乃公の意を迎へざるを得ず、誰何の權われに在り、拒否の權われに在り、傲然たる濶歩にはわれ其脚を噬まん、悄々たる微行にはわれわが一喝を與へん、而して知らずやわれ又關門の鑰をも有せり、わが適意の人ならんには直に以て通過し得させん、われ幸ひにして嗅官鋭なり、人毎に嗅ぎて其好惡を別たん、英傑臭きは忌まん、學者臭きは拒まん、大人君子らしきは皆入ることを得せしめじ、人は二人の主に事ふる克はず、犬亦然り、何んぞわれ倚二主に堪へんや、凡そわが首を抑ふるものは今後皆絶たんと、

憐むべき哉、この犬己が分際を忘れ、痴愚の痴たるを知らず、鄙陋の陋たるを顧みず、傲然自ら坐して家主の尊貴を汚さんとはす、汚さんは姑且恕すべし、然れどもこれが爲めにこの神聖なる家主の榮光を害なひ、其事業を誤まり、遂に以て潑剌の生氣を阻み、偶々家主が齎らしたる千年不見の寳血を、空しく一派の偏僻頑陋の輩に遺り、徒らに俗了枯竭せしむるが如きに至りては、これこの犬、實に惡むべく亦恐るべきの毒獸にあらずや、而してこの犬の災害、終に空想にあらず、

我が愛すべき日本の國、同胞四千萬と稱す、島嶼の面積固より廣からず、國財の多寡未だ富饒といふべからず、然れども朝野擧りて啓發に心を潜め專念鶩進國家の改造に筋骨を碎くは何ぞや、或は山に隱るゝものあり、或は河に流るゝものあり、國粹を死守するものあり、死守せんとして斃るゝものあり、歐米の潮を酌み入るゝものあり、酌み入れんとして躓づくものあり、

政治に狂奔して寢食を忘るゝものあり、商業に從事して自から棄つるものあり、器械の精巧なるに魂を消すものあり、美術の雅趣あるに誇るものあり、軍事、警察、法律、道德、文學、教育、又宗教一として邦人の憂慮を煩はさゞるものなし、而してこれ畢竟何事ぞや、何等の現象ぞや、乞ふ井底の蛙見に委ぬる勿れ、

人動もすれば云ふこの競爭場裡に馳騁して假りにも油斷する勿れと、其言や善し、然れども人多くは其競爭場裡に在るを知りて未だ其何故に競爭するやを知らず、これを問へは優者の勝、劣者の敗、正に歴然として轍を餘せり、われ唯敗者と爲りて興國の辱を稟けんを恐ると、悲しき哉これ夭々たる利己の私念に過ぎず、其衆民の辛苦刻勵寔に驚く計りなる絶大太甚に比べ、其成績の過小なる纔に今の發達を得て以て、これを慰めんとするの悲劇を見るも、理の當然に近かるべきか、

嘗て伯爵板垣君を麻布六本木の邸に訪へり、語り出でて、君が明治六年以降身を堵し命を犧牲とし諄々自由の大義を說きて今日に至る、而して其勞と今日の結果と、果して當初の成竹に償するものありや否や、君は質されて沈默數分す、頓がて疎髯は動かんとす、まづ現狀を以て滿足せざるを得ずと、何ぞ其句調の寂寞として憂はしき、思ふにこの老雄亦脫俗の徒にあらず、首を回らせば禽獸娛んで林野に翔り、花卉咲ふて山谷に香ばし、共に天稟の機能を全ふして其職務を卒へり、風雨の災乾濕の變、犯せども犯す克はず、害へども害ふ克はず、榮枯は憂へず、死生は慮らず、唯務むべきを務めて怡々如たり、人これを見て思はずんばあらず、

キリスト死に臨んでピラトの廳に拘かる、衆俗の罵聲雷よりも喧しく兵卒の苛責鬼よりも慘し、劔は胸に迫まりて心血の迸しるを待つが如く、礫は背後を襲ふて體軀を釣らんが如し、時に一聲の乾坤を震動せしむるあり、曰く我は王なりと、更にこの意を舒べて曰く我はこの世の王にあらず神の國の王なりと、何ぞ其言辭の宏壯にして沈着なる、何ぞ其語韵の秩然として靜肅なる、これを彼の英雄の悲嘆に比ぶれば、只天淵の差のみにあらず、欽仰の念崇敬の心、勃々として自から

禁ずる克はざるを覺ふ、蓋しキリストこれ何者ぞ、彼は渺たる木匠の子のみ、ナザレに生れしヨセフの子のみ、彼れ人にあらずや、疑も無き人の子にあらずや、而して泰然、岳然、又悠々然として、よくこの偉觀を呈す、豈驚嘆に堪ふべけんや、空の鳥、野の百合すら、詩人の爲には其眞美を謳歌せらる、誠に自然の平和あるを以てなり、況んやこの眞率美麗なる一大自然の平和に於いて、キリストを拒否せんとするものあらば、これ狂盲癲聾の大痴漢にあらざらんや、然れどもこの人を以て人類の外に超越せるものと爲しキリスト即ち神なりと云ふに至りては亦僻事なり、人は驚異の性を有す、驚異の性動もすれば覆へりて妄と亂とに逮ぶ、妄亂は共に人心の雲霧なり、竊に惟ふ、人は咸な王なり、キリストなり、キリストと成る可きなり、キリストと成らざるべからざるなりと、何をかキリストといふ、若し夫れ彼が生涯を一瞥するものあらば其疑團立どころに融解するを得ん、其天父の完全を以て理想とし標準とし、愛神愛人を以て終生の訓戒とし、成敗を天に委ねて顧みず、利損を擲つて拘はらず、嚴然として己が尊貴を守り、藹然として己が温容を保ち、放擒進退意のまゝに行ひ、自から信し、自から王と成りてよく其爲す處を務む、他人の以て思議すべからずといへる天命は、彼が爲めに朗々たる慈父の聲と成り、忌避せんとして隱家に窮せる死鬼の襲來は、彼が爲めに忠實なる奴僕となる、未來の信仰堅固にして手に取るが如く確實なり、現世の職務絶大にして而かも其方と法とは知らる、仲尼謂はずや朝に道を聞きて夕に死すとも可なりと、キリストは朝に道を行へり務むべきの任務を卒へり何んぞ夕の死を怖れんや、惜しひ哉吾人魯鈍を以て生る、王の身を以て王たる克はず、齡三十にして立つもの太だ尠し、桴萍を蹈んで海を歩み浮雲を望んで天を走る、東奔西走徒らに力め徒らに疲る、飽倦に飽倦みて遂に爲す處を知らず、修羅の窮鬼と成りて空しく其位と命とを棄つ、自然に安んじ道を重んじ、よく其希望を遂げたるもの果して幾人かある蓋しこれ吾人互に天命の任務を知らず、時流に追はれ情慾に驅

られ、わが爲すべきの務を稽ふるに遑あらず、金色に眼眩みホザナの聲に耳惑ふ、風吹くがまに〳〵彼方此方に流離ふ身の思念を鍛ふに餘力在らんや、人生失敗の基因實にこゝに存すといふべし、然れども眼を轉して彼の競爭場裡の眞相を察するときは所謂競爭なるもの、然かく冷酷ならざるを知るべし、ゼ、イ、カーペンター曰く人生の競爭は群がる犬兒が親犬の乳房を探る如しと、豈夫れ然らざるを得んや、わが喜もしき乳房とはこれ天職の謂なり、天賦の任務を指せるなり、彼の競爭に餘念無きの輩、少時沈まりて思をこゝに致さは蓋し得る處些少のみにあらざるなり、噫、競爭は競爭の爲めに競爭するにあらず己が天職を得んが爲めにこれを尋ぬるなり索むるなり揣摩るなり、

噫競爭の眞意こゝにあり、今やわが國の現狀漸く將に一歩を轉じ競爭の戰到る處に急ならんとす、あらふる社會を徹してこれが準備に忙はしからざるはなし、これ恰も春眠覺めんとして未た醒めず、鷄鳴既に報じて將に天職の太陽を見んとするが如し、今は素より盲動に過ぎず、雲霧靄靆の朦朧たるなり、然れども旭光炳として照さはそれ如何、待ち遠しきは太陽登天の曉にぞありける、吾人幸にしてこの時に生る、天職の啓示を受くるは正に千歳一遇の光榮なり、而してわれ等の素質よくこれに待つものありや、威權飛ぶ鳥を落し財貨山の如くに聚り金銀泉の如く湧き來るとも死しての後は何にかせん、たとへ人全世界を獲るとも若し其生命を失なはゞ何の益も無きことなり、夢幻に均しき露の身、今宵汝の魂奪はるゝ事もやあらん、僅に五十年なる人生を堅城鐵壁と頼みつゝこゝに萬事を收めんとするは頗ぶる危し、百の競爭千の艱苦、咸な泡沫と爲らんを憂ふ、キリスト嘗てニコデモに訓へて云はく汝水と靈とに因りて再び新らしき生命を得よと、家亦然り國亦然り、わが國の今日若し頑迷徇破ぶる克はず、荏苒この事態を繼續して瀰久の時を費せは、其間或は好事の士の古を括くり、或は奇僻の以て遇々珍説に逢ふことあるも、遂に氣息奄々として自から滅せざるを得ざるに至る、嗟呀今や他の抜を求むべからず、須ら

く國に靈氣を加へ人に靈化を與へ、新らしき生命を國家民人の上に灌ぎて以て永刧不朽の礎を爲すべし、蓋しこれ天職を辨ずるの鑵鑰なり、競爭善導するの秘藥なり、人性を悟了するの捷徑なり、一旦濶然として大悟すれは凡夫猶佛にあらずや、靈命に浴し生氣を更へ、この不朽なる國に基を築き、以て彼の職務を營まんとす、こゝに於いて其事業天に繫りて亡びず其氣力隆々として衰へず、天職の觀念愈瞭にして其人の品位倍尊く、責務の觀念愈重うして其人の德操倍具はる、五尺の孤影寂しげなりといへども魔鬼襲ふに隙無く纖腕瘦たりといへども敵するに刄無し、威權銃鎗、毀譽褒泛、逸樂苦患、將又誅罰に至るまで皆以て其行路を遮る克はず、而して彼は直進直行寸毫の顧慮すべき無し、故によく任務を全うするとを得るなり、わが邦人の缺く處蓋しこの勇猛卓絕なる鋭氣にあらずや、老雄の悲嘆亦旨ある哉、素貧の修養忽にすべからさるを覺ふ、利己の私念さしもに猖獗なりといへども遂に其本性を蔽ふに足らず、德は孤ならず必らず隣あるなり、事に莅んでは友愛の情、禁ずるに難し、こゝに隣邦白晳の人、われに金を贈り又人を贈り、彼の最も緊急なる靈命の嚮導を爲さんとす、宗敎宣傳の團躰即ちこれなり、人若し取捨其宜しきを察し純如として道に遵ふことあらは、窮竭を救ひ困迷を補ひ起死回生の大益を受けんこと、火を賭るよりも昭なり、然るに世人の誤まりてこれを雲煙に比し、曠然眼を過ぎらしめて更に知らざるものゝ如きは何ぞや、寧ろ怪訝に堪へず、然れども暗淡たる牢獄猶曙光の洩るゝあり、輓近識者の注意漸く宗敎の事に及びたるが如きは遇ゝ以て歡ぶに足る、要はわれ世人に眞の宗敎を推薦せんとするにあるなり、愛國憂世の士試に探らずや、

然れども斯門狹小なり、この靈活の道を得んと欲せば窄き門より入らざるべからず、然るにこの門多くは彼の毒犬の爲に塞がる、硬骨の義人率直の君子、何んぞ犬に親むに忍びんや、況んや與みするとをや、避けて近づかず望めども入らず、其微々として振はざる慣れにも亦道理なり、犬は終生人たる克はず試にこれを屋

上に扛ぐれは彼れ忽ちにして逡巡悄々遂に轉々墜落して死を視るのみ、宛がら胸に經綸大策の見るべき無く、腕に盤根錯節を料理するの伎倆を供へず、徒らに大權を握りて却つて進退に窮するが如し、時に漫然として或は下風に傲らん、然れども是れ識者の解頤を招くのみ、抱腹の資を爲すのみ、人は嗤笑に付して或は允すべくもやあらん、大毒に至りては斯門衰滅の恐あり、咄愧死せしめざるを得ず、

平等を論じて信の一字に及ぶ

坂下龜太郎

平等とは果して如何なる事歟。社會平權論、天賦人權說、財產共同論は慥かに這平等の吹聽者なりし也。請ふ先つ之を露國の歷史に徵せむか、彼の猛烈驚悍なる虛無黨が傍若無人の運動を爲して陰謀危機暗擊の血路を奔り、彼の胡笳曉に聞え牧馬悲鳴するシベリア野に活ける骸骨を行列して日に月に放謫せらるゝことを顧みさるは何ぞや、渠等實に平等を欲すれば也。渠等は天賦人權を欲し財產共同を望み社會平權を希ひ熱心にも破壞の運動を爲して世界の人類に一種の惡聯感を作さしむ、渠等は吾人平民の權利恢復者なるか抑も忌むべき吾人の仇敵なるか、是れ吾人の疑問なり。

抑も人類は如何なるものなるか古の佛者は云へり＝人間は眞如一點の曇を受けて成りたるものなり＝と、吾人竊かに思ふ人間とは造化の意匠に成りたる無形の搆成にして此の身躰ありて後始めて人間なる名稱ありしにあらず、必らずしも出來すべきの理由ありて出來したるものなり、則ち眞理の人間と化すると是なり。吾人若し眞理の廣大たるとを想像するときは天の茫々として無邊無涯なるか如く法界に遍滿として極まる所を知らず、若し之を形容するを得ば無始無終不生不滅極めて圓明にして極めて無垢なるものなりと謂はさるべからず。

今吾人か言をして若し誤なからしめば人類はもと平等のものなりと斷するを得べし、則ち吾人か眼中には貧富賢愚卑顯優劣なき也、然れども平等は吾人か幼年時

代の議論なり、人の漸く生長するや社會の制裁自然の境遇、目にふるゝもの、耳に感するもの、悉く思想の材料ならさるなし、かの所謂倶生の感若くは思想なるもの則ち是に非らすや思想長するに從て是非善惡の判斷を起すべし、而して人心の異るは其面の異るか如く其見解は實に千差萬別なりとす、唯夫れ見解異るか故互に我意を張らんと欲して競爭拙ふるときなく其極嫉妬偏執自負貪慾恨むべからさるに恨み疑ふべからさるに疑ふ、之を小にしては個人と個人との競爭、之を大にしては一國と一國との戰爭となる、吁人世は何等の齷齪世界ぞ、吾人必すしも枯木死灰と其伍を同ふする山寺の老僧を以て一も二もなく賞讃するものにあらすと雖も餘りに其心の偏執我慢なる人類を見て驚かすんばあらず。

抑も吾人々類の性質の支るゝ所を考ふるに其原因太た種々あるべしと雖も、風土敎育身邊の境遇父母の遺傳等尤も其主となるものと謂はさるべからず、是に於てか冷笑自墮落輩の蜀山人となり、熱腸慷慨の男子高山彦九郎となり、秀吉となり石川五右衛門となり猿廻し與次郎となり菅原道眞となる。同しく是れ東海の水同しく江南の橘、一因十果を生し十因百果を生し百は千に及び千は萬に及ぶ。此異想奇思を以て組織せられたる社會の習慣及び出來事が種々無量雜多にして怪彩絢爛幻光眩燿吾人をして嘆息せしめ吾人をして喫驚せしむるもの豈又怪むに足らん乎哉。

然れとも若し這般無量多種なる現像も萬果を打て千因となし千果を打て百因となし、百を收めて十に歸し十を收めて一に歸せしめば是實に碧空に橫はれる一點の黑雲、かの偏執我慢に歸するのみ、人は唯我意を主張し自己か新に建設したる小世界の道理に制伏せしめんとするが故に此の如き現像生し來るのみ。觀して茲に至れば人間界の大波瀾を通して一箇の道理は串然として存するを見る吾は之を稱して因果といふ、吾人は因果に依て支配せらるゝ動物のみ、碩儒ダーウ井ン氏は絕叫して曰く世は優勝劣敗なり而して優勝劣敗は社會の眞理なりと、釋伽は曰はく世は生住異滅の相なりと、

其他無常といひ進化といふ亦此意なり渠等の聲期せすして相同し、優勝劣敗は吾人の眼前に實際行はれつゝあるなり。然らば優勝劣敗は常に動すべからさる道理なるか實に人生の眞理なるか、社會平等論財産共同論天賦人權說は悲し矣哉遂に其凱歌を奏する能はさるか。世若し優勝劣敗なりとせば、いかに貧者の哀れなるとよ、いかに富者の幸なるとよ、世若し平等なりとせばいかに惰者の喜びを增し勤者の失望を來すとよ。吁優勝劣敗は道理にして不道理なり、如何となれば優勝劣敗は固と我慢競争より生したるものにして唯一の我慢競争は因果の理に因て千態萬狀の差別を現して遂に優勝劣敗となりたるものなり、差別を生したるものなり、貧富賢愚を生したるものなり、而して其我慢競争は優勝劣敗の最大原因なるか故に人にして若し根因たる我慢競争を破らば俄然として玆に其差別も破れ法界圓滿の姿となり、神通無碍の自在を得んかな、然り今吾人が陳べたる如く優勝劣敗は世相なり（進化の法則ある間は）法界圓滿は眞理なり、故に世は優勝劣敗なるにも係はらず、或は吾人の先輩の胸中に於て本來の圓滿圓明の事が電の如く大花の如く感せられたるを如何にせん、渠等か最後の琴線を禪叩したるを如何にせん。社會平等論、天賦人權說、財産共同論は渠等が眼により渠等か舌により、渠等か聲により說明せられたるなり、甚しきは「我に自由を與へよ然らずんば死を與へよ」と呼び自由と生命とを以て其輕重を較せんとするに至る、偶思ひ起す、セキスピヤーか顯理第八世の詞曲中に謂へる言。

"Corruption wins not mone than honesty.
Still in thy right hand carry glutle peace,
To silence envious tongues.
Be fust," "and feat not:
Let all the ends thou aimst at be thy country's
Thy God's and truth's."

吾人若し前者の言を咀嚼するときは實に高尙にして眞理に向つて進むの一階級なるを知るべし、然れとも渠等は惟將來此の如くならさるべからさる人間界の眞理

を說きたるのみ、而して其說の小信者は得たり賢しと直ちに之を採て社會に現實にせんと欲す、虛無黨社會黨は即ち是なり。

進化論者は優勝劣敗を以て世の眞相なることを打ち忘れ直ちに眞理なりと謳哥するか故に、我慢と自負とを常とする凡夫共は善き口實(プレテキスト)なりとし強者は弱者を制し富者は貧人を侮り智者は貧者を欺き上下私利を爭ふて父子兄弟内に爭ひ君民朋友外に戰ふ、世間一切の事人間相率ひて修羅道に墮落し人相食ふに至る。

平等論者の木葉落武者は世相の奇怪變幻は一因萬果の理に因て生したる事を忘れ小兒の紙鳶を引裂くか如く直ちに之を破壞せんと欲す抑も妄なり矣、因緣の滅せさる間は差別も消滅することなし我慢を破らされば平等に歸せぬなり、千年混々たる濁河を通して清流に化せんと欲す一日の業にあらず十日の業にあらず百日の業にあらず。一つの我見を以て他の我見を破らんとするは火を以て火を救ひ水を以て水を救ふの類のみ、見よ惡平等の極端は父子兄弟君臣長幼智愚貧富乃至一切の人間が皆自己の言ひ前を負ふて自己の權利を主張し自己一分の自由を主張せんと欲す。

然らば優勝劣敗も非にして自由平等も遂に望むべからざるか、何ぞ夫れ然らん、來れ天下明眼の士よ敬虔義俠の男子よ愛國殉難の志士よ、何ぞ吾人と共に此我慢の毒虫を殺さゞる、若し一度俄慢を破らば圓明圓滿首尾なく終始なく無窮無極不滅不生所謂是れ平等なり差別に偏せず平等に偏せず平等に即して差別、差別に即して平等是れ眞の平等なり、必すしも平等を主張するにあらず必すしも差別を議論するに非らず、ア、差別は猶ほ鏡花水月の如きか因緣來れは花開き源泉涸るれは月隱る、然して其平等に至つては圓明圓滿の故を以て來りもせず去りもせざる也、無去來は眞個に是れ眞理の生面目。

熟々明治社會を觀察するに凡て我慢の毒虫にかゝらざるもの殆と稀れなり、かの宗敎家にして猶ほ我慢の偏見に陷るものあり、孔子の仁佛の衆生濟度督敎の愛煎し來れば信を以て人を愛し我慢の偏見を去れといふに

過ぎず、吁宗敎家よ經典の言語に着せず文字の葛藤に縛せられず直ちに敎主の心田に耕すべし、天下億萬の人々よ信を以て宗敎を自得すべし眞實を以て硏究すべし、一人如此十人如此百人如此千人如此にして止まざらば社會平等自由權利求めずして得べき也、佛敎の衰頽して僅かに瘦骨を擁するか如き基督敎の不振にして秋風寂寞の感あるか如き儒敎の頭を擡けんとして而も羞色あるか如き、皆是れ我慢の旗章を翻へし强いて偏見の道理を以て建立したる狹き宇宙に引き入れんとするか故のみ、宗敎世界にして既に如此なり他の俗界の偏見我慢を怪まむ、今日に於て若し吾人に問ふに不偏不立能く自由平等のある所を察し澹泊に已れの意見を開陳し公平に他か議論に傾耳し眞理の硏究者となり自由の辯護者となり信者の師父となり信者の弟子となり平民の呼聲と捧げて平等差別の權衡を示し誓ふて眞理の希望峯に達せんとを期するものは獨りユニテリアン敎徒あるのみ、若しかりに我社會を區別して上下ありとすれば上流の士内は下に對しては人間は本來平等の者と覺悟し同等に待遇することと是なり、下等の人は上に對しては人間は我慢あるもの、差別は世の眞相なりと思ひ之に敬禮を盡すことと是なり、一人我慢を破つて此理に通し上下互に相讓る十人を薰化し十より百、百より千と千歲の後百世の下次第に其數を加ふるときは人は平和の顏を以て自由平等の樂園に逍遙するを得べき也。

然らは吾人はいかにして此我慢を破るべきか信の一字是なり、信は眞なり誠なり同情相憐み誠心相愛す渠は自己に對して心切なるのみならず又他人に對して心切なり、渠等は一心に自分の業をはげみ學者は我を忘れて學問を主とし美術工藝政治乃至農夫も商人も工夫も一意に其業に熱心なるなり正直なるなり、信實なるなり、吾人は孔門哲學の德育に於て先つ信の一字を認め既に人而無信不知其可也、信近於義言可復也、或は主忠信或は信以成之。信則人任焉。又は政治上に於ても道千乘之國敬事而信となり又足食足兵民信之と又民無信不立何れも一國を統ぶる上に於ていふ。斯の如く信

の字の區域の擴大にして小にしては一身を修め大にしては國家も治まるもの故前漢董仲舒の如きは仁義禮智に信を加へて五常となしゝなり、教師は之を以て生徒の信用を受け父母は之を以て子弟の尊敬を受け商人は之を以て巨萬の財を運轉す、釋氏は信の字を解して無價寶といふ此の如く價貴き信字を棄てゝ顧みず唯詭詐百端智力の一方に走りて其姦計を逞ふせんとす之薪を負ふて火を救ふの類のみ。

むかし歐陽公朋黨論を作り言へることあり、『所守者道義、所行者忠信、所惜名節、以之修身、則同道而相益、以三事國則同心而共濟、終始如一、此君子之朋也』と唯夫れ信あり、故に人は同情(シンパシー)なり、謙遜なり、忍耐なり、正義なり、勉強なり。見よワシントンは信ありて米國十三州の自由獨立を植て、板垣退助君は信ありて民權擴張の大祖と仰がれ、劉備は信ありて天下三分の計を講し、武雷士の如きは千八百六十七年ロックラールに於て『皇天の前にありては萬人皆同等なること及現政府の前に於ても萬人皆同等の權利を有することを信ずるの信仰は自がら余をして多數人民の爲めに同情の感を起さしむるなり』といへり、かの武雷士の如きは惟常識圓滿に膨脹したる巨人にして詮すれば滿腔惟信の一字を以て充されたるの人のみ、而して今日の歐土武雷士の名を知らさるものなし、あゝ信の一字實に千古不磨の金言にして、唯此信を以て我慢を破り、以て共同一致、以て和衷協合、眞の愛情を以て各々其業を勵み、各々其國につくし。相扶持し相指掖し社會進化の潮流に向ふて更に一層の潮流を加ふるの道理なり、吾人は一日も早く此邪智競爭の世を離れて道理一統の世に打入るを以て眞理に近くものなりと信す又平等を得るの端緒なりと信ず、其行を暴にし其言を虚にし高く論し多く望み徒らに他人の富貴を羨み徒らに他人の顯榮を嫉み太々しきは口角沫を飛ばして社會平等財產共同を論するもの豈共に論するに足らんや。汝薄命の貧者よ不幸の失望者よ先つ汝が靈心を信せよ正義を信せよ職業に勉强せよ、而して信實なれ信實は汝が幸運の靈光を認むべき智慧の始めなり。

無形の勢力

田崎綱三郎

皇國基を開てより玆に三千年天險地緯能く侵す者無し上下相信じ相思ひ秩序整然分毫も其規を亂さず名けて日の本と云ふ外寇至らば神風一度起て忽ち掃除し去る反徒逆旗遂に能く一杯の志を逞するものなし呼で神州と稱す威芙蓉峯の高きよりも高く動かざる泰山の靜かなるが如し一度雲を得ば龍と化し降ては綿羊尙是れを慕ふ天下特有の一精氣あり命じて大和魂と云ふ此神州にして以て此精氣あり噫何如に佳州豐國たる思ふべきなり

何ぞ圖らん西艦突如東海に來る砲聲一發海內に轟き上下愕然天柱挫け地緯亂れんとし遂に殆んど修む可らず爾來有爲の士交々起り俗論轟々殺氣紛々の間に裁し漸く其緒を得たりと雖も數千年來の長夢に安坐したるの國民何んぞ豫め是れに備ふるとあらん時事盡く不意萬機裁定の畧一つも其中に存するなし一意對外の策を講ずるに於て日も亦足らざるの有樣なり即ち何の暇ありて內政何如を顧るに及ばんや志士既に如此し無謀血氣の徒無智の野民又何そ言ふに及ばん士は職を投し農は耕を廢し唯茫然たるのみ而して各國其機に乘じ示威劫嚇百方術を盡して我に迫る其危機實に累卵の比にあらず況んや大和魂の據て以て存在する三尺の秋水も神州の依名ある神風も斷巖絕壁の西艦に對しては寸毫も以て用ゆべからず是に於て全宇宙唯我獨尊の觀念に於て威勢堂々たる日本魂無限偉大の洋々たる新天地を見るに及んでは眩惑迷瞑せざらんと欲するも能はざるなり遂に條約を定結し交通互市漸く繁を爲すに至り空手野人の徒亦大に悔る處あり玆に再び運動を始めんとす然りと雖も一度氣魂天外に飛び再び復活する間無氣瞑然たるを免る能はす宜なる哉是なり又國是の心髓を言ふ者ある無く偏に洋化に混瞑し邦國を擧て一つに異人の巢窟たらしめんとす長弟道義無く男女秩を亂り風俗壞敗して修むへからず而して是を患ふる無し邦家の衰頹此に至て極る痛ひかな嗚呼斯の如くにして何ぞ能く此皇紀を盛ならしめ此國是を定めんや山河破裂し祖宗正

に怒らんとす

聞くブルガリヤの幅員實に僅に吾邦の五分の一に過ぎず其國民亦唯十數分の一に過きず而して彼れの眞率勇猛なる數十倍の强國をして頓に堂若たらしむ其英國の暴威を逞ふするに當りてや彼れの决心果して如何毫厘の退讓寸合も杞憂する所なし彼益迫れば愈固く一進一退威儀堂々縱令擧國紛土と化し全土血に化するも生て國辱を受くべけん决然英國と絕ち曲直を干才に訴んとす實に愛すべきかなブルガリヤ國民の决心盛なるかなブルガリヤ人民の氣力余輩此報に接して轉た痛快に耐さるなり

國是より大人民亦數十倍なるに不係國論動もすれば溟誤す遲止悛々遂に裁する能はず手を拱して只管寬恕を求むる耳顧て內事如何を察すれば擧國無精氣只僥倖を萬一に望むの輩比々皆然り嗚呼神州一度開けてより一毛未た嘗汚塵に穢れす能く鴻名を今日に存せしものは實に祖先の賜なり此國是此皇紀をして一朝風塵の爲めに紛亂するに至りては盖し祖先の志に有さる明なり即ち何の面目ありて此土に餘生を保つを得ん

然と雖も天運未た盡きず元氣未た全く落ざるに當り忽然一大現象を以て映し來るものあり何ぞや即ち宗敎の勢力是なり

凡そ何れの邦國を問ず新陳代謝の際に關し衝突を來さゝるもの稀なり是れ或は進化の法則に追從する一現象のみ且夫れ國民智識の進步は日一日よりも急なり之に反し習慣風俗の時に固着遲止して智識の進步に俱ふ能はす閉塞日を曠する間忽ち破裂壞亂するに至る是今古の常數勢の不得已ものなり

若夫れ國家の存在は一個人に創り一個人尙其心意に在りとせば其心意の何如は實に國家の輕重を爲す所以なり苟しくも此理法を外にして國家の成立するものあらす陋蠻の邦國動もすれば國家の故を以て一個人の心意を束せんとし一個人亦國家に一任して立たんとするものあり其狀恰も無限偉大の泰山を以て些少の柱石に支んとするものゝ如し轉倒亂壞知る可きのみ何者か此偉大無限の心意をして區々たる國家的觀念の內に埋沒

せしめんとする愚も亦甚し知らずや維新の改革を是れ實に國家を偶像視せしもの丶悔悟なるを又見ずや偶像的國家主義の遂に能く鴻紀を維持する不能を噫天地に濶歩宇內に雄飛せんと欲するものは宜しく此狹隘を脫せざる可からず

今や我國既に偶像的國家主義の指南車を失す將に何處に適歸せん茲に於てか何如にして國家の基礎たる心意をして高尙且つ强固ならしめんとする之れ盖し宇內其趣きを等ふするの問題なり實に我祖先の辛苦經營茲に三千年未だ甞て一片の志をだに忽せざる此佳州豊國をして遂に天地と無窮の繁榮を比ふるに足る若しくは消長に關するの大問題なり

此機に乘し忽然萠芽し來たれる一奇觀あり恰も好し邦國正に危ふからんとするの時宗敎の勢力漸く志を逞し來る近時歐洲に於て大激變の最に居るもの實に普佛の戰爭に非らすや而して此兩國の關係に於ける秘密の戰に當りては其淵源盖し一日に非らざるなり會勢の長し來り愈避く可からざるに至りたるのみ茲に至る迄兩國各秘計を運し策略を案じ方法を盡して準備全く終るを期したるもの丶如し此故に其破裂の急激にして且つ悽々たる百雷の鼓して萬丈の怒に向ふが如し一國の精銳を集め計策の薀奥を發して茲に雌雄を決するの處一つは同盟の盟主たり一つは歐洲文明の中心を以て任ずるもの其極遂に如何ん當時全歐洲を超ゑ全世界を震動せしめたるもの誠に宜ならずや

當時普佛の兵練戒機共に精銳入若し單に兵機の上より詮し來らば兩者の優劣容易に斷ずへからす若し亦兵裝の練達に至りては普或は佛に讓る處あるも普且銳意の精神に於て決して佛に劣らざるものあり即ち相補に足る既に然り然るに何ぞ圖らん其期數週を出でず一つは敗伏城下に誓ふの大耻に加ゑ多額の償排ふに至り一つは歡呼萬雷を轟し意氣揚々凱歌と共に十數億の償金を荷て歸る奇と云ふ者は誰か是を奇とせざらん怪と呼ぶ者誰れか是れを怪と呼ばざらん百慮熟圖尙千歲の疑獄なり

然りと雖も事必ず理法あり物必ず因緣あり一宇の大活

眼を開て以て審に此勝敗の據る處を視れば亦焉んぞ百疑氷解の期無しとせん是れを開く佛の其始め戰宣を決するに當り皇帝陸軍大臣を呼び閣議に立て問ふて曰く佛の全力を集めて戰に際し幾何月間能く是れを支ふるの糧食あるや陸軍大臣正に答ふるに三ヶ月間に耐ゆ得て尙餘りあると確答せり而して愈會戰に際し僅に三日を出ざるに早く既に糧食欠乏を告くるに至れりと嗚呼一國危機の大變前に迫り社稷の存亡其機一髮此時に當り身正に此大事運命の中心に居る此種の者にして而して不可信不親切なる如斯爾他可知耳又云ふに不忍なり是れに反し

獨兵の佛都パリィに迫るや都民恐々皆生を思はず而して幾何ならずして靜寧猶平日に不異に至れり何ぞや獨兵の都門を守るもの其精氣堂々たる一塵の微且掠奪するもの無し况んや佛國生民の貴重なる生命をや都民の當時其市中に圍繞せられし者の語なりと聞く余等都民は我佛國兵士の爲めに守護せられしよりも尙安全なりしと何如に嚴法の下に運動する兵卒とは云へ其懇懃丁寧なる一つに何ぞ玆に至る一兵卒尙如斯獨軍の是れか中心たり將帥監督者たるもの察知すへきなり

兩國の眞情既に然り彼れは祖國の社稷の重んずべきの所以をも不知而して遂に自國の民臣すら信を置く能ざるの境涯に位る而して是れに於ては其厚遠深重なる共に天を不戴るの敵國人民すら且其餘潤を慕ふのものありて存す兩々の懸隔天地も不啻是に於て實に彼是の優劣勝敗の決三尺の童兒是れを判するに於て易々たる耳天下不定紛擾咫天を不辨もの一つにして不足と雖も歸する處は遂に一つなり見よ爭ひ得す奪ふ不可の大勢力歷然歐洲の中心を貫通するものあり

近く是れを我國に例せんに昔時德川幕府政權を專有するの日人情風俗且上下の間審に詮んじ來て以て是れを今日に思へば實に意想の外にあるものあるを彼れが專權に於ける害惡一つにして足らずと雖とも其最もなるものは賄賂の惡弊に若くはなし當時收賄の盛んなる恰も社交的の一要素と誤認せられたり是れを要するに上は王侯の進退下は士庶人の相携互交の間に於て其位

置を保ち能く其望む所を達するに欠く不可るものは賄賂なり是あれば達し是れ無んば已む尙甚しきは正邪を審判する神聖の裁判に於てすら尙然り殊に甚しきは無罪を訴願するに是れか功を奏する往々にして罪正に死に當るの極惡と雖も一片賄價直に其危を救ふ此故に無智無能の徒賄賂を散じて以位格反て有爲材幹の上に居る不義邪惡の徒亦正義堂々たる偉人をして堂若たらしむるもの比々皆然り大は一國の大政より小は各個の交通に至る迄皆一つに依之正義地を拂ひ邪惡横行上は下を壓し吏は民を驅使し各其私慾を滿すに在り極遂に多額の收賄を望むにある耳滿天下堂々皆然り而して一朝事變あるに當りては當局百官只啞然たる耳無已は即ち僻逃の道を講ずるにあるなり又何をか憂ん唯憂ふる所は自己の運命に在るなり是に於てか政を爲す者は之れを民の爲めに爲すに非ずして一つに自己の爲めに存す政を爲すの標準は實に利己の二字に於て然り噫民を護するの政反て民を虐するの具に過ぎす上は下を憐み下は上を敬し爲めに護られ據りて立つ此道毎に其塞閉する所となる貴賤隔絶親信の間亦遂に久しきを保たず流離壞敗の情慘嘆の涙に絶へざるもの反て當時に在りて尊重を受くる所以の如き眞に天道是乎非乎の嘆聲を促さずんばあらす是れを

聖明の至尊雲上に有り賢材偉相之れに補佐し政公平を貴び庶民各其所を得人に頼まず頼れす獨自守る可きに守り取る可きに採り進む可きに進む苟しくも正義の向ふ處一髮の微途に塞閉するある無し下情直に九重に達し上意混々下層に漲る和氣洋々の盛時に比ぶれば地獄の苦より脱して極樂の淨土に遊ふの歡ある可し惜むらくは昔時憂苦を抱き空しく不義の名に倒れし義人憂憤の高士をして此盛界を見せしむるに不可とを

凡そ一國の上に於て要する所極めて多し是れを云んとすれば當時世界最大文明國を以てするも且足らざるもの十か九到底得て望む可きに非らず然りと雖も事必ず要あり物必ず主たるものあり此れを得れば萬障尙可忍此一つを失ふに於ては百事足るも尙耐る不能ものありて存す何そや即ち一個人にありては平和の精神一家に

取りては親和の義而して一國家に於いては實に上下相信し相思ひ其喜憂を同ふする倚個人五官四躰の痛痒喜樂相感應する如く至誠遂に身を忘れ此國是如何を顧るの精神に外ならざるなり一國一家一個人其大小懸隔相不同と雖も一度基を此に開くにありては萬根耐ゆ可く千障意とする處にあらす白刀倚踏む可き耳我輩何等の多幸者ぞ此聖代和氣洋々の界に居る百事是より得て期す可きなり

今の時に際し一種の慷慨家あり其説く所忠君愛國の志の漸く衰ふるにあり政界に於ける怪聞の繁なるを嘆ずるにあり余輩不肖忠君愛國の志を抱くに於て政界の怪聞の耳朶に達するに當て是を思ひ是れを憂ふるの情慷慨家自任の諸士に譲らざるとを況んや是を救濟するの道を講ずるに當てや豈拱手傍觀する者あらん然りと雖事物秩序あり進向の順序あり視よ我國港門を開放し各國交通を始めてより日倚淺し然るに其是より得る處實に尠少に非らず恰も暗黒の時代を變して開明の日月に接するの歎あるなり蒼天依舊悽々たりと雖も事物の變移實に驚くに耐へたり昔者忠君愛國の極熱に浮ひ其弊遂に一身を屈め一箇自身の重を置く處を失す而して一箇自身の重き所以は即ち國家の重き所以を忘却するに至る今夫れ是の慣習に沈澱せる士々をして今代の觀察を爲さしめば嘆聲禁ず可からざる者あらん余輩亦嘆なしとせす而して余輩の嘆する所は大に異るあり即ち彼輩の嘆する所は反て余輩の大に喜ふ者なり何そや今の世に於ては偶像的國家主義の迷界は既に經過せり茲に人類世界の大倫を講究し茲に一國の礎一家の基を開くに至る即ち一個人の重且重を加へ苟しくも事正義を欠くあらば一國の權勢を以てするも倚制するを不得の大倫を發現せるあり若し夫れ正義の大倫茲に存するに於ては一命倚一髪の輕きよりも輕し今其時に至れるなり余輩は信ず此種の人民にして以て共に國家の大事を談すへし餘士碌々未た論するに至らず況んや偶像的國家主義崇拜者の末流をや余輩の嘆する處のもの此宇内の大勢を知るの明を有せざるの慷慨家あるを嘆する耳見よ世界の邦國異躰萬情盛衰の度亦同しからすと雖も

其望む所のものは一つのみ各國互に其繁榮幸福を願ふにあり既に一國の獨立安全を思はゞ宇内の萬國互に相携帶し相保護せさるへからす即ち博愛なる一語は以て宇内邦國の崇拜すへきの本心なり宜しく低頭平身之に事ゆ可きの大眞理なり實に博愛なるものは以て萬國の上に置くへく以て一社會の上に寄すへし以て至誠正義の大本となすへく以て公平無私の標準となすへし國家の是れに基くものは榮へ是れに反くものは亡ふ宜なるかな大能大智の大權者正に玆に君臨す博愛の大眞理蓋し是より出つ苟しくも生を宇宙に存し玆に進歩を計るもの據らざらんと欲するも據らざるを得ざるものは此大眞理に外ならず宗教とは其之れを信し是を敬し之れを決行するの意號たるなり

縦令文明各其趣きを異にすと雖も此大眞理の外に求めて得へきものなし實に然り其富强文明の進々たるもの唯に此眞理の賜のたるなるを

我大日本國の今日ある果して四海交通の餘潤に出づるとせば縦令幾多の過失を荷ふと雖も大躰の基礎に於ては一つに彼の賜なり而して國是之より定るあるへし昔者改まりて今日あり實に感謝なくして可ならんや殊に天地の大元理且之れに基く博愛の眞理普く通有され齊しく各物に分配されたるをや噫此無限の活世界天語らず地言ず焉んぞ是れを往昔に今日あるを知るものあらん況んや唯一の大眞理其基礎を定めんとするに於てをや今此基既に成り駸々として此主義に據るの時に際し尙是れを知らざるもの十か九其始めに得て知る無きもの盖し怪しむに足らさるなり

知と信との關係

文學士　辰巳小次郎

人の人たることと、其の能く知と信とを兼ね備ふるに在り。人若し之を兼ね失はゝ、立ろに禽獸の境界に墮落せん。人若し其一を有して其一を有せずば、禽獸に勝るべくも完然の人たるを得ざらん。凡そ人、知大にして信深なれば聖者となり、知大にして信淺ければ奸者となり、知小にして信深なれは迷者となる。人たらん

者能く聖者となるを得ずとも、能く奸者迷者となるを免るゝに勉むべきなり。奸者迷者となるを免れんとするには、知と信とをして相進みて相制せしむるに在り。

知を極むれば、知の極むべからざるを知る。則ち知は極まる所ありて萬物は極まる所なきを知る。唯た然るのみならず、知敢て萬物の本原終歸を極めんとすれば、立ろに其力の足らざるを知る。學者或は無始を說き、或は有始を說く。無始を說くものは無終を說き、有始を說くものは有終を說く。二者の所說孰れが是孰れが非なるや、到底決するを得る所にあらず。無始無終論者暫く無始無終を說くを罷め、有始有終を駁すれば、有始有終論者必ず答ふる能はずして口を閉づ。又た有始有終論者位置を改めて無始無終論者を攻むれば、無始無終論者之れに當る能はず。乃ち知る假定の原理を駁擊するものは必す勝ち、之れを主唱するものは必す敗れさるを得さるを。萬物は無始無終と云ふべからず、又た有始有終と云ふべからず、非無始非無終と云ふべからす、非有始非有終と云ふ可からす、非非無始非非無終と云ふ可からす非非有始非非有終と云ふ可からす。去りとて何と云ふべきを知らず。萬物終始の有無、其の言ひ難きこと既に然り。既に然らは萬物創造の有無亦た然らざるを得す。萬物創造の有無にして既に然らば、造物者の有無亦た然らざるを得す。

宇宙に造物者なくして萬物に主宰なしとせんか。人其の畏るゝ所を失ひ、邪曲の事を行て顧みさるに至らん。此に於て造物者の眞有を說くの必要起る。其の說の由て起る所の必要を知らずして妄りに其說を信するは、是れ强て不可思議を思議するものなり。其の愚言ふべからず。

行を善にするは、固より善なりと云へども、善をなして善を受くるの思想を懷かずして、徒らに善をなすは、其の目的の何たるを知らす。故に俗人に說くに善行を以てせんには、必ず其の目的を說かざるを得す、是れ佛敎に因果應報の說ある所以、耶蘇敎に天帝裁判の論ある所以なり。聖者は身善を行ひて心自から喜ぶ、故

に善をなして善を受くるを望まず、善を受くるを望ますと云へとも善をなすに怠らず。凡俗の者は然るを得ず必ず善を受くるを目的として善をなす。聖者此人心に乘して教を布くが故に、耶蘇教には現在未來の二世を說き、佛教には過去現在未來の三世を論す。

妄りに不可思議を信して專心なれは、迷者となる。迷者は未た人の天眞を全ふするものに非す、不可思議を不可思議として自から畏るゝ所なしとすれは、奸者となる。奸者亦た人の天眞を全ふしたるものに非す。教化の任に當るもの、此二者を正道に導て、各其短を補ひ其を長を進め、其の天眞を全ふせしむるに務むべきなり。

雜　錄

人

退歩學人　實然　誌す

或人か申しおきました言葉に「人は眞理の翻譯者なり」とあります、此言葉は頗る面白き意味を含むて居るかとおもはれます、又或人か申しますには「宇宙は一の大學校なり」とあります、此言葉にも頗る快爽なる趣味を保ちて居るかと考へられます、元來宇宙的空想的の道理は、縦橫無窮に附會らるゝものでありますゆへ、或人は「人を可死的の所造物である」といひました、又「眇乎たる滄海の一粟なり」と慨嘆せし人もあります、此通りに想像の仕方と批評の工合に依りて、人を實に半文錢の價値なき樣にもせらる、又金殿玉樓の如く見做すとも出來ます、就中世界を一箇の大學校として人を世界の眞理を翻譯する善良なる學生として想像するときは、世界の永遠なるか如く、人も亦長久なるものとなりまして、殆と可死的の一粟なりと云ふ考案は、何處へか潜むて仕舞ます、予は右の二說孰れも許容すへき道理ありとして是認致します、然れとも目下予か他人に話して利益の多かるべき樣に考定するものは、即ち人の位置を金殿玉樓の如く見上ける說てあります、少しく其理趣を述へませう、偖天地間の幽玄高妙なる道理を發揮して、之を宗教と名け、學術と稱し、或は

倫理道徳など丶唱へはしめましたものは、勿論人を差置て外にありました譯てはありますまい、左樣てありますから、彼の人間以上に位置を占め、傲然として人世を瞰下し、數億の人類より崇敬を受くる、神も佛も菩薩も聖人も、其根元に溯りて能く〳〵探究すれは、悉く皆太古の原人より近代の文明人に至るまて、數千人の想像より湧き出てしものてありませう或は往古より近時まて、數千年間の中に、一度は此世界に生存せし人の、最も高等なる生活を形容せし一箇の言葉となります、畢竟するに神も佛も人の言葉より顯れて參りました、而して此言葉は其人の意思を親しく代表すへき道具てありますゆゑ、神も佛も人の心を離れて獨在するものてはありませむ、然るに世間に一類の人ありて申します樣は、神は能造者なり、人は所造者なり、所造者の人てありなから、己か材能を慮らすして、漫に能造者なる神を褻瀆し、神の高威を侮蔑せんと欲するは、恰も彫刻されたる偶像か其彫刻者に向ふて雌雄を決せんと企るか如く、實に笑止千萬なる業ならむ、など論辯するものもあるやに聞及ひます、予は左樣なる論鋒を以て、神の威光を示さむと企てらる丶方に、一言申したきとかあります、諸貴邊の仰せらる丶神は、人類の發生以前に已に獨在せし證跡かありますか、又人の本來の靈智を離れて認知せらるへき機會かありましたか、又人類の古記錄即ち諸宗敎の諸經典に依らすして、人世に出現せしものてありますか、恐くは左樣なるものてはありますまい、矢張予か申します通り、毘陀や舊約や或は釋迦孔丘の經典より、隱顯出沒、或時は半面を出し、或時は螺髻を露はし、數千年の年序を經て漸次今日に至り、靈智的智識的人類に依りて、稍々其形狀を完成せられむとしつ丶あるものといはねはならぬ、譬へは圓山應擧の筆にて描き出せし辨財天女の如きものてありませう、此辨財天女か如何程靈敏美妙の形態を具備し居れはとて、如何に數多の好事家より高價を以て囑望を受くれはとて、畢竟死物のみ、一葉の繪畵のみ、夫れに引換へ一管の羊毛を援て、斯る佳趣高姿ある辨財天女の態度を描き出せる、畫家其人の

靈敏なる手腕と、美妙なる意思こそ眞箇活物なれ、實に左樣ならすや、ヶ樣に推窮し來れは、造物者なる神は、無限の能力を有して、常に邊際なき宇宙を攝理せりとて、神に非常なる價値を附し、神の屬性を高倘深遠ならしむるは、取りも直さず左樣なることを首唱せし人の思想が、無限なる能力を許容するに堪へ、邊際なき宇宙を觀察するに堪へたる、屬性を保有せし證劵として領納するを至當とすといはねはならぬ、故に有史以來今日まて數千年間の世紀に於て、人か進歩する如く神も亦昇進せしが、其進歩と昇進の矩合は、例へは鈎股に於ける弦の如く、時間に於ける加速度の如く、正式の比例を誤らす、大小高低廣狹尊卑淺深長短等、逐一齟齬する點を發見せす、眞誠に奇と呼ひ快と叫はねはならぬことになります、予は各時代に於る神の説明は、人智の高低を計る精密の器具なりと考定いたします、故に宇宙間に於て、先つ人か現出せしか、後に神か顯現せしか、人は眞如より來りしか、眞如は人より生せしか、神か人か、人か神か、殆と其先後優劣能生所生を判然區別するの道かないと云ふならは幾分か實相に近似する申し分てあらうと存します、又人は神なり神は人なりと云ふも神を侮蔑し人を教唆したる過言てはありませむ、今日の佛は過去の凡夫にして、今日の凡夫は未來の佛なりと云ふも、自ら因果修證の法理に契當してあると考へます、倘又天文の三大法則も「ガリレオ」の發見即ち翻譯より成立ちました、汽力の効用も、電氣の作用も、總て皆ワットやフランクリンなといへる人の考案によりて、普く世の中へ紹介せられました、論するに宇宙間には、天然物と人造物との區別かあることは、誰しも承認することてはありますが、併し此區別も完全なる區別として領納することは出來ませむ、何故なれは天然物といふも、一度は人の意中を經しものに相違なく、人物造といふも、必す天然の理法を應用して人工にかゝりしゆへてあります、畢竟するに此宇宙は天然物として之を觀れは、萬物擧けて天然の一に歸します、人造物として之を察すれは、一も人造の外に出つるものはありませむ、故にいふ、人は

天地の首位なりと、嗚呼天上天下唯我獨尊とは、一釋迦文佛の放言てはありますまい、各人各箇壁立萬仭の妙境に造詣したる確言てあります、先つ人を金殿玉樓の如く見上けたる方角よりの談話は、大略斯の如きものてあります、

（説の可否は編輯者其責に任せず）

經典批評學

博士 トーイ原著
亡影逸人譯

世の所謂批評なる語に廣狹の二義あり、廣義よりせば批評とは宇内萬般の事實に於ける判定にして、科學と殆むど其の機を同うせり、蓋し科學とは精確にして且つ系統を有する智識を謂ひ、その上になす判定を批評とは稱ふなれ。然れども世に未た絶對的に精確なる科學あるなく、而して又た完たく的中せる批判あるを聞かす。抑も人類が四圍の光景を觀、その出來事を察し、之を説明せむと欲するの願望は、其の始めこの土に出現せし當時に發せるものにして、爾來時移り代換り、觀察の方法その宜しきに就き、材料の蒐集愈よ蘊積するに隨ひ、判定に於ても追々明晰を得るに至れりと雖も、要するに彼等は日夜孜々智識を增進せしむることを勉めたる學生たるに過ぎざるなり、されば大古曚昧の人民若しくは孱弱なる穉童と雖も、各自其の解釋を試み、相應に意見を有するの點に於ては、決してかの碩學ニュートンの輩に異るところあるに非ず、其の間唯た之れを高度に進めたると然らざるとの差違あるのみ。十九世紀は豈に以て批評の時代と謂ふべけむや、今日を以て人智その極に到達せりとなすは未だ當を得たりと謂ふべからす、唯だ探究の念今世紀に至つて最も強く、搜索の方法今日に於て非常に熟達せりと謂ひ得べきのみ。

是を以て批評若しくは批評的なる語は、之を諸般の學術に適應するに於て決して差支あるを見ず、吾人呼んで批評的哲學と謂ひ、批評的天文學と謂ふ、蓋し正確なる事實の説明に據れる哲學若しくは天文學の系統を意味するなり。而して又た是に其の意義を狹くし、單

に著書の年代、記者及び組立に關する考證に用ゆることあり、假令へば古代の詩歌若しくは宗教上の著書にして、其の出現の時期及び事情等に就いて未た詳かならず、恰も彼の地層の見る可き眼なく記すべき手なきの時に於て發達せしか如くなるもの未た嘗て少しとせず、而してこの幽暝を探り、暗憺模糊の間に其の起原發達等の事實を考證し來る、即ちこれ所謂批評學の正的たるに外ならざるなり。

斯の學や近世の產物たるが如しと雖も、その實决して然るに非ず、素より彼の諸般の學術が近世に至つて著しき進歩をなし、往古のものと大に其の趣を異にせるか如き感なきに非さるも、其の創めや遠き古へに淵源せずむばあらざるなり。希臘の往時に當つて、彼等が何程斯學を發達せしめしやの點に至つては、其の詳細を知るに苦むと雖も、確かに紀元前數世紀の昔アレキサンドリヤの批評家が、「イリヤド」の全部は果してホメールスの作なりや、「イリヤッド」「オデッセイ」の兩書は倶に同人の手に出でしものなりや等の問題を討議せしは吾人の知る處なり。而して彼の羅馬帝國の基督教化せらるゝや、文學の勢力一つに神學討究に輳まり、幽妙深玄なる希臘思想はその影跡を之に絕つに至りしより、遙に降つてかの日耳曼の茂林より突出して、全歐洲を蹂躪せし獰猛粗糲の北狄人種が、文學の修練を爲すに至りし迄、其の間數多の世紀を經過して斷て其の消息を聞かざりしと雖も、文學の曙光まさに東天を彩どり、詩歌の嬌聲稍や滑かなるの時に至つて、批評學の萠芽は燒跟を追ふて續々發するに至れり、恰もよし詩仙ミルトンの死後間もなくして二個の頭角嶄然として英國文學界に顯はれ共に大功績を印し去れり、即ち一はホーデーにして、他はベントレーなりき、ホーデーは往古アレキサンドリヤに於て希伯來語經典の希臘語に飜譯せらるゝや、イジプト王の請求によりて來れるパレスタインの學者七十三人の手になりしものなりと記せる、アリスチースの書簡の荒誕にして據るべからざるを辨駁し、ベントレーはファラリスの書簡の遠く紀元前六世紀の昔にものされたりと云ふの虛

妄にして、其の實遙かに後世のものなるを論辨せりき。ベントレーの以後特に前世紀に至つては希臘、印度及ひ日耳曼の古詩、彼斯、回々敎の經典、シェキスピヤーを始しめ其の他諸詩人及び今昔の歷史等に關する批評、跡を接して相起り、大に斯學の隆興を見るに至れり。

而してこれ等の中に就き經典批評學なるものあり、これ新舊約兩書の研究に學術的批評を適應したるものにして、又た長日月の歷史を有す。始しめ紀元一世紀にあつては、其のユダヤ人と基督敎徒の別なく、著書の記者及ひ性質等を論究せしこと蓋し少なからず、彼のユダヤの學徒はエノクの書を經典中に加入するを嫌ひしかば、古代の敎父にものされたりと云ふ傳來の古說を駁撃せしは、疾くに人々の知悉する處なり。而して彼の敎會の親父等か希伯來書及び其の他新約諸書の濫觴につき大に討議せしことあり。降てアベン、エズラ及ひ其の他のユダヤ人は舊約書の初五卷（ペンタチユク）の批評を掇め、マルチン、ルーテルに至つては、彼の剛直摯率なる得意の健腕よく新舊約兩書の是非を辨別し、曲直を批判して毫も忌憚するところなかりき。斯くて前二世紀の間に於て經典批評學は他の學術と俱に長大足の進步をなし、今日に至つて大に見るべきものとなれり、その進步の循々乎として緻密に且つ確實なるは以て其の理道に適へるを證明するに足るものにして、終始一貫、未た曾て斯學長程の旅路にあつて挫折屈撓せしものあるを聞かず。されは今日の批評學を以て、突然勃興せしものとなすが如きは、未た歷史を知らざるものゝ見解にして、素より取るに足らず、然り這般のこと豈に獨り批評學に於てのみ然らむや、諸般の學術悉く皆な然らざるはなし。

經典批評學の精神

人或は近世經典批評學を目して破壞的なりとなす、これ或は然らむ、然れとも斯學に於て眞なるところ、必らず他の科學に於ても亦た眞ならざるを得ず。觀よ、近世の天文學はトレミー、コボルニコスを始めニユートン等の學說或る部分を破壞し居るに非らすや、昔日

の錬金術若しくは舎密學は必らすしも今日の新化學に非ず、凡そ眞理の發見は誤謬の破壞と終始相ひ隨伴せるものにして、人類の進步は個人と社會とに論なく、重に虛妄の排棄に成れるものなり。されはこの破壞の事たるや眞理を得む爲めにして、而してその結果や破壞されたるものより更に善良なるものを建設するにあり。記憶せよ、吾人は決して其の物の善と惡とを問はず、渾べて往古に屬するものは、悉く之を放棄して顧るところなしと云ふ者に非ず、吾人は善を追究して熄まざるもの、豈に善を見て之を捨つるに忍び得るものならんや、善は必らす之を存し、惡は必す之を除き、而して更に或る者を之に附加せむとするものなり。先きに論及せしが如く、都べて學術の進步は對待的のものなれは、前者より相對的に眞なりと謂ふを得ると雖も、決して完全なるものとなす可らず、然れども亦た其の故を以て破壞し排棄して、遂に其れ自らを雲霧に付し去るが如きものに非す、素より其の建築物に至つては打毀することと或はあらは、然れどもその基礎とするところに於ては磐石の如く確として動かす可らざるものあつて存す。

都べて這般の事皆經典批評學に於ても一樣にして、決して單に撲滅の目的を以て舊信仰を破壞し去るに非す、唯た新にして優れたるものを以て、古き劣れるものに換へむと欲するに外ならす。是を以て彼等批評家の行爲や敬虔にして膽大なり、而して彼等の眞理を愛するや又た容易ならず、彼等は之か爲めに多年人口に膾炙せし傳說を破鞋視して惜ます、久しく頭惱に感染せる伴念を破碎して吝ならざるなり、これ等のこと素より明々白々更に喋々の冗辨を要せすと雖も、然れとももこれ等のこと素より他の學術に於て許すべきも、單り斯の學に在つては不敬惡逆の罪、これより甚しきはなしと廣言するもの又た少なからず、然れとも請ふ試に古來大批評家と呼はるゝものを列擧し來れ、誰かスピノザ、ロース、アストラック、シユライエルマヘル、ドウェッテ、エワルド、ボール、ハップフエルト、ブリーク、ルース、デリッツイ、ウエイズの徒が惡逆の

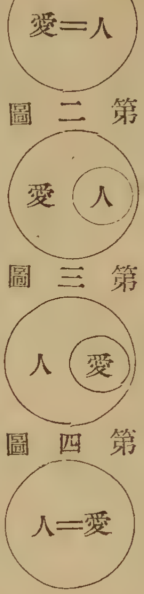
意を以て眞理を枉げしと思想するものぞ。吾人は素より彼の批評家の鋭鋒に觸れて毀損せられしロムラス、セミラミス及びウイリアム、テル等の爲めに敢て一掬の涙を惜まずと雖も、之を以て又た無情の批評家を罪するを好まざるなり、されば「ジヨセフ」「エステル」等の書か眞歷史より轉して稗史小說となり了るに於ても亦た然り、先きにベントレーがファラリスの書の虛妄を駁するや、罵詈僞妄の聲四方に起り殆むと身を措くに處なきに至りしも、彼が希臘文學に忠實なる、よく此の書をして適當の地位を得せしめしの點に於ては、天下恐くは一塵の疑なからん。而して又たラックマンの古代希臘及び日耳曼の詩歌に熱注せしは已に人々の知悉する所なるも、彼はイリヤッド及びニベランゲンを寸裂するに多年を消耗せしに非らずや、這般の學者豈に何ぞ無情木石の如きものならむや、況してやかのベンタチユークを解剖し分析して而して其の濫觴を昭にし、年月を糾さむとの企圖に汲々たる近世批評學者を惡視するに於ては、吾人其の可なるを知らず、蓋しこれ單に歷史的事實問題なればなり。底到するところ批評或は純善なるものに非らさる可し、然れどもこの不順不善は批評的論法にありて其の目的にあるに非ず、彼等豈に始めよりペンタチユーク、イリヤッド及び其他諸書を毀損するを以て其の目的と爲すものならむや、彼等は唯た歷史的事實に忠實ならむことを是れ勉むるものなり、

○愛の人

甲の甲と乙の甲とは其の楷級に於いて大に異なり、甲たらば宜しく乙の甲若しく丙の甲たらずして正に甲の甲たる可し。吾人は將に言はんとす、人たらば正に愛の人たる可く、愛たらば正に愛の愛たる可しと。吾人今言ふ愛とは、その最も廣き意義に於いて、純愛即ち基督の所謂博愛にして、德といふ程の意義に解するなり」何をか愛の人と云ひ人の愛といふ。愛中の人と人中の愛とは、似て大に非なるもの、愛中の人は少くも愛の一部は人なる乎、若しくは愛と同一なるも、人中の愛は正に人に愛ならざる部分の存する乎、或は漸く

同一物たるを得るのみなること論理學上の明示する所なり。即ち前者は少くも愛＝人なる乎(第一圖)或は愛＝人＋x愛なる可きも(第二圖)後者は人＝愛＋x非愛なる乎(第三圖)或は漸く人＝愛に達するを得るのみなり

第一圖　第二圖　第三圖　第四圖



(第四圖)以上第一圖第四圖は差なきが如しと雖とも、審に察する時は、大に其の趣を異にすることと思ふ可し。

〇愛の人とは何ぞ

愛たらば宜しく愛の愛たる可く、人たらば宜しく愛の人たる可しと、「何ぞ」強いて而して作す、これ人の愛たるなり。自然にして而して能く行ふ、これ愛の愛＝愛の人たるものなり。人を救はんと欲して躊躇して強いて救ひ、助けんと欲して荏苒漸く助くるが如きは、未だ身に聞き所有るなり＝身に非愛の心情存するなり。非愛の心情存するが故に、強制するにあらずんば能く愛の目的を達し能はざるなり。これ等は未だ愛の人となす可からず、救ふ可きを救ひ、助く可きを助くるが如きは、鄙夫も猶ほ能く之れをなす、これ人の愛、凡夫の德＝人の小行、敢へて稱するに足らず。救ふ可きの所に應じて強制躑躇なく、能く一擧一動自から救ひの道に適ひ、助く可きの時に適して敏捷活潑、能く一擧手一投足自から助けの法則に合す。換言せば自から愛の道に適合す。これ徹頭徹尾愛の愛たる所、眞に人の大行なり」自から人を愛する愛の人は、これ誠に神の御心に出てしもの、救はんと欲して躊躇し、愛せんと欲して因循するが如きは、決して神の御心にあらざるなり。

〇見識

楫なきの船、轡なきの馬、遂にその到る所を知らざるなり。人にして其の博覽は以て古聖を凌ぎ、その強記は以て古今に冠たりと雖とも、己れに一定の見識なからんか、柁なきの船、轡なきの馬と敢へて撰ぶ所なし、書を藏するの多きを求めん乎、速に去つて圖書館に行

くに如かず、何ぞ殊更に學者を要せんや、字句を記するの多きを求めん乎、靜かに一室に坐して康熙字典と談するに如かず、何ぞ殊更に學者を須ゐんや。吾人が特に學者を愛し、學者を敬する者、その博覽を聽かんが爲めならず、强記を愛でん爲めならず、唯その達せんと欲する所の志を聽かんのみ、その見識を窺はんと欲するのみ、豈他事あらんや。

○學者とは

曲學世に阿り、叩頭權威に屈するが如きは、胸に千萬卷の書を藏し、心に幾億萬の語句を括するも、敢へて稱するに足らず。世の學者の眞相果して然る乎、吾人は學者を以て社會の最下層に置かんとす。然るに吾人の學者を遇するに最も敬虔の意を表するは、彼れ等が威武に曲せず、權門に諛らず、一意專心その主義の爲めに動くの見識あるの故に外ならず。若し世の學者より見識を減き去らんか、匹夫匹婦と敢へて別つ所なし。吾人が呼んで學者と敬する者、博覽强記の謂に非ざるなり。

○日本の泣事

去月の日本新聞は、泣くが如く、訴ふるが如く、合衆國に於ける日本人の評判を載せり、中に曰く『大學所在の地に在りては、送金に衣食する學生のみを知るが故にその評判悪しからず、又た紐育に到りては……儼然たる商店を開き、他の外國人にも劣らざる取引を爲す者少からず、生活の度從つて高く、敢へて世人の侮辱を受けず、桑港に至りては……日本語さへ正當には使へざる輩、無學貧の書生或は臺所働きの少年等、前者に比して其の數多く、加之賤業を營む婦人等あるを以て、到底信用を博すると能はざるなり……シカゴは日本の資財にて衣食するもの多きか爲め、一般に氣受の宜しき方なり、是れも六十三萬圓の御蔭なるべし』と、吾人は其の六十三萬圓の御蔭は之を知らず、然れども歐米諸國到る所賤業婦あり無賴漢あり、無學貧青年あり、遂に我が帝國の名聲を失墜せしむると往々なるは、吾人の常に嘆する所なり。今日にしてこれが救濟策を講ずるなくんば、復搬回す可からず。日本の泣

き事、遂に吾人をも泣かしむ。

○學生の傾向

次世の日本は如何に作らる可き乎、今日の青年學生の傾向に問ふ可し。當時府下在留幾萬の學生、如何なる學問の流行にか驅られつゝある、如何なる種類の書物に向ひ居るか、東京圖書館に至りて見る可し、即ち二十五年中閲覽書の各門百分比例を擧ぐれば

第一門―神學宗教‥‥一、四　第二門―哲學教育‥‥五、〇　第三門―文學語學‥‥一九、一　第四門―歷史傳記地理紀行‥‥二二、七　第五門―法律政治社會經濟統計‥‥一四、九　第六門―數學理學醫學‥‥一六、八　第七門―工藝兵事藝術產業‥‥一〇、一　第八門―類書叢書雜書‥‥一〇、〇なり、故に歷史傳記等第一にして、文學語學之に次ぎ、醫學理學數學第三、政治法律等第五門に屬する者第四、第七八門又次ぎ、第二門第一門を以て最少となす。

○壯圖壯圖又壯圖

壯圖は常に壯圖たり、一大偉人物に非ずんば能く成し能はざるのと、故に何れの世に在りても社會の厚遇を享く。而して近來我が國壯圖の起る頻り、露領內地單騎探撿の福島中佐、北航艇隊の郡司大尉、彼れ等は明治の大勇、冒險敢爲の士となす可し。天下事なく逸遊を是れ貪るの際、蹶然起つて士氣を邊疆に振ふ、古今稀有の偉丈夫として嘉す可きなるも、或は內地自轉車旅行、徒步支那內部遠征、或は彼れ或は此れ、その熱度今や沸騰點以上に上昇せんとす、それの狂熱は延いて世の青年者流を誤ることなくんば幸なり。

○有情耶無情耶

天果して有情耶無情耶、吾人これを知らず。然れども北航の勇士、郡司一行に禍するの何ぞ多き、前きに第三番艇の難破溺死十名、次いで鼎浦丸の難船七名を溺死せしめ、今又郡司大尉の負傷を聞く、洪嘆大息天の無情を悲まずんば非ざるなり。

噫郡司君、君は一個の偉丈夫に相違なし、君は確かに我が國威を輝かす者なり、然るに京童傳へて『君が申譯なし』との女々敷心をもて自殺せりとなし、君の壯圖

は遂に嘲笑の間に埋沒し去られんとし、吾人も亦狂氣的投機として社會の最下流に措かんとせり。然るに幸にして其の自殺に非ざるを聞くを得、吾人が君に囑する望は未だ依然として懸れり。然れども君茲に注意せよ、君が今日までの航路は敢へて危險と稱するに足らず、凡夫も猶ほ能く之れを爲す、只今後一掉は一掉毎に險を加ふ、是れを凌いで始めて君の偉行彰はるゝなり、君が今日の歡待は君を稱し君を利するの正なるものに非ず、君の君たる所は該地到着の後に在り。

○三種の神學校

三種の神學校とは「基督教青年」の載する所、何れか最も能く實際に適し、何れか最も能く眞理を表する乎、吾人敢へて之れを言はず、唯讀者の高評を仰かんのみ

◎三種の神學校　近頃基督教的生活及び思想上に於る三現象を代表せる三神學校あるを見る即ちニューヨーク州オーバン神學校、ペンシルヴエニヤ州ミイドヴヰル神學校及イリノイ州シカゴ神學校是れなりオーバン神學校はプレスビテリアン派に屬し殆ど七十五年間其事業に於て成功を收めたりしが其教育の科程は後半世紀の間諸種の神學校の採用せし者と大同小異にして只組織神學說教及び原語の聖書研究は此學校に於て特に之れを奬勵せり教會歷史及び其政法の如きも亦重立たるものにして神學を攻究すると共に哲學上及び學術上の問題に就て諸種の講義を與へたり然れとも社會上の問題に就ては甚だ冷淡にして僅に教授たる、アール、テー、エリー氏が嘗て交際法に關して四回の講義と一回の說教を爲したるあるのみ、此神學校は六十二人の學生と甚だ有名なる教授の人々を有し過去に在りては其神學は保守的に傾き居たり今後も猶は然るべしと想像せらる只其批評部に於ては轡を駢べて時と共に馳するものゝ如し

ミイドヴヰル神學校はユニテリアン派に屬し三十八人の學生及び四人の寄宿教授と四人の通勤教授とを有し、ジョーヂ、エル、ケリー氏は之が校長たり、而して宗教歷史、哲學、社會學等には其注意を與ふると其他の神學校の比に非ず之を例せば其宗教歷史及基督教社會學の撰科に於て「結婚と離婚」「貧兒の保護」「實業的教育」「犯罪と監獄の改良」「瘋狂と自殺」「民政の危險と其期望」の如き問題は其常に攻究する所たり

シカゴ神學校は宗派の何たるを問はず學生の入學を許すと雖ども元來コングレゲーション派に屬し其の教育の科程に在ては社會學大に奬勵せられ此學部に於て最も熟達せる教授グラハム、デーラー氏其教授を負擔し此神學校は瑞典、ノルレエー、丁抹、及び獨逸の學生等の爲に特別の學部を設置す其物質上の裝置其建物及び其學科課程の完備せるに至りては蓋し亞米利加神學校中の巨擘たりと稱すべし其教授及び教員は總て十有八人ありてエフ、ダブルユー、フヒスク。ジー、エス、

ボードマン。エス、アイ、カーチス。ジービー、ウイルコックスの四博士は最著名なるものなり
以上三種の神學校の年報を閲する時は茲に一の余輩の注意を喚起するものあり何ぞや即ち此等の神學校が各其時勢の精神を認識したると是れなり故にオーバンには高等批評學に其同情を表するの教授を出しミイドヴヰルには比較宗教及社會學に其注意を増し、シカゴには社會學の學部に一層の進化を爲せり然れどもツアイトガイスト(時代の精神)なるものは組織神學上其勞力を及ぼすとの他の學部の如くならざることなり余輩はヘンリー、ビー、スミス氏の猶ほ此世に存在し、教授パーク及びサミユール、ハリス氏の猶ほ壯健ならんとを望む然らずんば組織神學烏ぞ興起するを得んや

○基督教青年の數學

「基督教青年」記者は一種奇怪なる數理を發明せられたり、然れども記者は之れに説明を附せず、故に吾人その理を知る能はず、大に遺憾とする所なり」吾人嘗て聞く $0=0+0+0+\cdots\cdots$ なるを、又 $a+0+0+\cdots\cdots=a$ 即ち a を一と假定せば、少くも其の和は必ず一あらざる可からず、二三と假定せば其の和亦二三ならざる可からず、然るに記者は本誌を評するに算數式を以てして曰く『味噌+醤油+砂糖=佛像+十字架+神籬=0』と、味噌醤油砂糖の和は零(ゼロ)なるや否やは吾人の關り知らざる所、唯基督教佛教神道の和果して零(ゼロ)なる乎。今假に佛教神道全く價値なしとするも、基督教が單に一たる價値だに有するものとせば、如何でか零なる和を得可き。是れ即ち基督教+佛教+神道=0の謂にして三者悉く價値なきものなりとの結論に到着せざる可からず、果して然らば「基督教青年」は自から自身を傷くる者ならずや。自から呼んで基督教を價値なしと云ふ、然らば基督教青年=基督教即零(ゼロ)+青年=青年にして、單に平々凡々たる一躰に過ぎず、何ぞ特更に基督教の三字を冠するを要せんや。記者は更に一歩を進めて基督教新聞、六合雜誌も此の臭味ある者なりとせり、是れ果して眞なる乎。

○寺院住職の統計

第十一統計年鑑によるに、明治廿三年全國佛教各宗寺院及び住職の統計は左の如し

宗派	寺院	住職
天台	四、八〇九	三、八〇五
眞宗	一九、一四二	一六、八七六

宗派	寺院	住職	宗派	寺院	住職
眞言	一三,〇六五	七,〇六八	日蓮	五,〇六四	三,五五二
淨土	八,三〇一	五,九九二	時宗	五一五	三六七
臨濟	六,一五二	四,三五二	融通	三五七	二〇〇
曹洞	一四,〇七七	一一,一五六	法相	四八	一四
黃檗	六〇三	三一六	華嚴	二一	一四

○齎す所何ぞ

全國基督敎徒の同盟會は、去月下旬を以て名古屋市に開かれ、東より西より百餘名の信者は聚まれり。而して彼れ等が齎らし歸る所の土產は何物ぞ。

近刊雜書

敎育と宗敎の衝突
東京本鄉六丁目
哲學書院發行

井上博士と基督敎徒
同所發行

前者は文學博士井上哲次郎氏が基督教に對する意見を公にせるものにて後者は教育と宗教との衝突に關する敵味方の論文五十有餘を蒐集し傍ら編輯者の批評を加へたるものなり前者は全一冊定價三拾錢(郵稅共)後者は全一冊定價金拾五錢(郵稅不要)なり

耶蘇敎衝突論
東京麴町區下六番町
六番地女學雜誌社發行

本書は全く局外者たる蘇村居士久津見息忠氏の手に作りしものにて立論卓拔條理公正正に一讀の價値ある可し其の載する所緒論第一章勅語と耶蘇教第一節忠孝第二節友愛恭儉及博愛第三節愛國第二章耶蘇教の適否第一節非國家主義第二節耶蘇教徒の利弊第三章同化第一節現今耶蘇教徒の傾向第二節適者生存第四章結論第一節教育と耶蘇教第二節宗教の必要第三節宗教の撰擇等なり定價拾六錢

希臘孝子腓立比物語
東京麴町區下六番町
六番地女學雜誌社發行

本書は譯者が自序中に云へる如く小說か事實か且原著者並に英譯者の姓名を詳にせずと雖とも兎に角三十年前の出版にかゝりメサロス夫妻が基督教信者として其の自由と信仰と正義との爲めに兵を擧げ一敗地に塗れて妻子と共に土耳其勢に虜せられ奴隷市塲に顧客をまつ身となり貪婪邪慳のムスタハに買ひ取られ齡やう〳〵七ツ八ツなる其の子腓立比(ヒリツプ)と生き別れ遠く海山へたてし地に墮ちて苦使酷役を受くる悲哀より說き起し男腓立比がミカエル、サントスの義俠心に救養せられ千辛萬苦を經て遂に漸く其の父母を救ひ出せる腓立比が至孝勇猛の段々を最も面白く最も躰よく書き連ねたるものにて日本譯者は明石居士櫻井成明氏自から云へる所曲亭馬琴の著作近松巢林の院本など折衷して書き流したるものなりと何さま文躰に意を用ゐたる譯者の辛苦は行文簡にして流暢大に嘉す可きものあり書冊の躰裁は女學雜誌社出版とて例により清楚愛す可し價金三

拾五錢時節柄基督教徒の孝子とは如何なる者なるかを見るも大に得る所ある可きなり

哲學雜誌

東京本鄕區本鄕六丁目
五番地哲學雜誌社發行

五月十日發兌第七十五號にはチー、エス、チング氏の「ストア學派の道德」夏目金之助氏の「英國詩人の天地山川に對する觀念續論」三宅文學士の「井上博士の勅語衍義を讀む」大西文學士の「ソクラテス前の希臘哲學」（第十四）「ヨハン、エデウアルド、エルドマン小傳」、故紅葉山文庫奉行近藤守重氏の「禮類」（承前）、在京城岡倉由三郎氏の「朝鮮の文學」（承前）其の他「ミュンステルベルヒ氏の心理研究法」とて先づ斥けて用うべからざる方法は第一に批評的方法、史學博言學法學算學倫理學を以て直ちに心理を說き得たりとする者、思辯的方法、數學的方法の四にして眞の方法は二大別して純粹心理的研究及び生理的研究に用ゐるものとすと記せり又「マーシャル氏の美論に就きて」は本號を以て完結し本號よりは特に哲學字彙稿本を載せたり此の稿本のみにても一讀の價値ある可し

眞理

東京神田區三崎町三丁
目一番地世光社發行

第四十三號には三並良氏の「歐洲に於ける佛陀研究」博士キリストリープ氏の「カント以前に於ける良心論の沿革」同氏の「エルンスト、レナン」（承前）ムンチンゲル氏の「行爲と心意」（承前）及び教授博士ハルナック氏の「ペテロ默示斷篇」を揭載せり是れ一度は新約聖書中に編入せられたるものにて其の著述も亦新約諸書著述の時代に遡るべく來世の光景を寫して奇又妙之を名つけてダンテーが『地獄』の前驅ウェルギルの失例と云ひたり又苟も基督教文學に注意せるものは一讀せざる可からずとは世光社の廣告案なり

三籟

東京牛込市ヶ谷仲ノ町
四十一番地三籟社發行

三籟は去る四月を以て世に出でたり松村介石、戸川殘花兩氏の編輯する所、その任ずる所は天道、人情、實力の三大眞理を宣揚せんが爲め世に出で舞文弄筆一時の喝釆を期するものに非ずと其の信仰の自由なる胸臆の剛強なるは以て東洋的純文學を完成するの一段階たるを得ん乎第二號には松村介石氏の淚多き筆に作りたる「世の富豪家に訴ふ」及び「實力の解」百合園主人の百合然として愛す可き筆を以て描き出せる「圓環辨」は六合に渉りて圓滿無垢絕美絕妙の響を奏し殘花氏の「田野の歌」は東洋的ウオールズウオース西洋的淵明を十九世紀の今日に見るはそれ唯此の田野の歌なる哉とあり其他不知庵の「巨人談」植村正久氏の「天地人」透谷の「滿足」戸川安宅氏の「ゴールドスミス」等を載せたり、先づ是れ等は基督教主義東洋的文學雜誌の中心なるものなる可し一冊定價郵稅共六錢五厘

六合雜誌

東京本鄕區東竹町廿四番地
警醒社發行

第百四十九號所揭の項目は「敬畏」（横井時雄）「敢て元勳諸公に人生の覺悟を問ふ」（松村介石）「歸郷後のヂェンス先生」（浮田和民）「近代獨佛に於ける社會論沿革」（家永豐吉）「元良大西二君に答ふ」（三宅雄次郎）「基督教に關する一卑見」（朝野貫一）等なり是れ等は先つ基督教雜誌中の見ものなる可し

早稻田文學　東京牛込區早稻田 東京專門學校發行

今日世上の意向は主に歷史傳記等に傾き神學宗教等のことに關しては一顧をも煩はさゞるは一般の狀況なり故に諸雜誌中此の種の記事ある者は常に人後に立つ然るに早稻田文學は私利上より云へば正にこれ等の記事なかる可きに該誌の常に此の點に意を注ぎ決して等閑に附せざるに至りては吾人同誌の氣慨を嘉稱するなくんば非らず第四十號五月廿五日發兌

文學界　東京麹町區下六番町六番地 文學界雜誌社發行

評論　仝所 女學雜誌社發行

兩誌何れも巖本善治氏の手に作れるものにて文學界第五號には「頑執妄排の弊」「人世の意義」（透谷）「賤事業の辨」「內部生命論」（透谷）「俳人の性行を想ふ」（棲月）「狂僧志道軒」（天知）「琵琶法師」（古藤庵）「伊勢歌集」（大和田）等を載せ、評論は自表女學雜誌の改題にして基督教主義政治雜誌にして大に文學趣味を帶ぶる所大に愛す可きあり第四號は五月廿日發行

彙　報

◉**自由神學校閉校式**　當所に在る自由神學校は來十五日を以て學年試驗を結了するに付き同日閉校式を擧行す司會者は佐治氏にして大西文學士の「希臘哲學の末路及ドラッパー氏の "August Comte and Positicism" 講話あるよし。何人にても無料之を許すよし

◉**第五回夏期學校**　は本年七月八日より向ふ十三日間攝州須磨浦に開かるゝ由入校志願の者は六月中旬までに校費三十錢を添へ申込む可しとのこと、尚諸通信申込等は京都第三高等中學校伊藤俊介同同志社坂田貞之助の內へ宛てらる可く又來校者の便を計り鐵道會社汽船會社等に乘車賃金割引照會中なりと云ふ

◉**神道の活氣**　宿弊を改刷し布教を擴張し各道には巡教師を派し教學校を設け更に機關雜誌を發して教義を宏布せしめ北門鎖鑰の地北海道には特に本部教會所を設け土民及び移住のものをして深く國體の尊嚴を知らしめ護國の基礎を鞏固にするの目的を有し今回の會議には第一案として伊勢神宮本院の改築を議決したり聞く來る二十九年は　皇太神宮伊勢國に御鎭定ましゝ垂仁帝廿六年より一千九百年に相當し祭典を執行するにより年舊く檐荒れたる社殿を改築する事に決し其委員として京都本部長篠田時化雄宇治本部長吉村春梅靜岡本部長神田息胤の三氏を推選したりと

◉**基督教徒の同盟會**　全國の基督教信徒は去月二十三日より三日間名古屋に於て各派連合の一大同盟會を開き布教上の諸事を議定し又た大演說會を開けるよし

論林

文明とは何ぞや

矢部新作

余輩は前段に於て社會は文明に進むべきものにして、人類は之が爲に生存し、之が爲に相續するものなると說けり。思ふに讀者も此間に異議を容れざるべし。斯く社會の目的は定れり、然れども余輩は目的の定まれるを以て足れりとせず、此目的は如何なるものなるやを講究せざるべからず。則ち「文明とは何ぞや」の疑問を解釋せざるべからず。

余輩は今日の所謂文明を以て文明とするものに非らず、十九世期の文明は、則ち文明なるべしと雖ども。社會の目的とする文明に比しなば燭光を以て日光を形容するに異ならず。歐米諸國に遊ぶの人、始めて桑港の街頭に立ち、ニューヨークの塵に咽せびロンドンの霧に迷ひ、倘徨大陸に涉つて、パリスの花を稱しローマの月に醉ふの人は、世界は茲に進步の極に達せしが如きの感を爲すべしと雖ども、心を定めて仔細に人情風俗を視察し、彼等の境遇の那邊に在るかを推想し來れば、蓋し思半ばに過ぐるものあらん。十九世期の社會は將來に、尙ほ至て遠く至て遙かなるの目的を有せり。完全なる文明は決して今日の文明の如くならざるべし。然りと雖ども余輩將來の事を推定せんと欲せば今日の事を明にせざるべからず、今日の事を明にせんと欲せば又論據を過去に取らざるべからず。今や余輩は社會の目的とする文明なるもの丶如何を論定するに先ち、世人が、過去の歷史に由つて十九世期の文明に對し、所見を開陳せるものを擧げて參考に供せざるを得ず。是れ推論の順序に於て必要の事なりと信ず。

兎に角今日の文明は從來に比類なき好結果を呈せり。是れ社會進步の順序に於て固より然るべきとなりと雖ども、過去數十年間は殊に長足の進步を爲せり。併し彼れは恰も其父母を詳にせざる孤兒の如く、世間褓母

若しくは關係人の故を以て之を引取らんとするもの一にして足らず。宗教家は曰く「文明は宗教の力に由て生出せしものなり」科學者は曰く「文明は科學の發達と共に進歩せるものなり」政治論者は曰く「文明は政躰の善良、自由權利の安全强固なるに由て始めて希圖し得べきものなり」と此他に、文學者技術家實業家等も敢て文明場裡に其功を爭ふとに躊躇せざるべきか。併し余輩の見を以てすれば、眞正の文學者は宗教家に近き所あり、技術家實業家は科學者政事家に待つあるものあれば、玆には唯彼の三者則ち宗教家政事學者科學者をして其言んと欲する所を言はしむべし。

宗教家は其要旨を陳述して曰く「人類の尙ぶ所は道義の觀念是なり」。此點唯一、人類の人類たる所にして、他の動物と著しく異る所なり。之を換言すれば、人は道義の動物にして、禽獸は情慾の動物なり、唯其れ情慾の動物なり、故に彼等は飢えて喰はんと欲し、渴して飮まんと欲し、而して其欲するや直に欲する所に向ひ、此間毫も裁制あるなし、他を害し他を傷づく固より妨けず、則ち彼等は自ら生存するとを知つて他の生存を問はざるなり。人類は然らず、其行爲は常に自他を益するを要す、否或場合に於ては自ら損するとも他を益せざるを得ず。而して其自ら損する所以は則ち自ら益する所以となるなり。古來史上の光榮は義人の死にして、彼れは自ら斯生を擲つて社會の爲にせしものなり。社會は此賜に依て發達進歩せるものなり。則ち社會の文明は道德の力に由るものにして而して宗教は之を保持長生せしむる所以のものなり。

夫れ歐米今日の文明が基督教の上に成立せるとは殆ど天下の定論にして動かすべからざるものあり。當時彼等が東洋の人民に比して甚だ幼稚なりしにも拘はらず能く蠻野の風習を打破して新に生れたる人と爲り、相愛の大義を本として相團結し相分裂し、而して其目的に向つて同胞の迷夢を破らんが爲には身を忘れ家を棄て、萬里異風の鄕に出入し、彼等に與ふるに新光と眞精神とを以てし、以て唯一の上帝に從つて其下に人類の義務を盡さしむるに至りしなり。斯くして從來種族

相敵するの心を矯め、各國和親有無交通の利益を實にし、間斷なき殺伐呑噬の社會を一變して諸事諸物を平和の中に發達せしめたり。是れ全く宗教の力は自然の大道を指示し幽明兩界の希望を繫ぎ、安んじて而して怠たらず敢爲にして健全なる精神を發揮せしに由るに非らずや。

政治學者は宗教家に對して說を爲して曰く「足下等の言は足下等の信ずる所の宗教と共に妄誕を免れじ。足下等が宗教中の宗教と誇稱する基督教の歷史を視よ。暫く虛心平氣なれ。基督教が其社會に與たる裨益は果して能く其罪惡を償ひ得べきか。足下等は嘗て公言せしに非ずや、「世界の歷史は則ち基督教の歷史にして基督教の歷史は則ち羅馬法皇の歷史なり」と。思ふに新教の徒殊にユニテリアン。ユニバルサリストの如きは此言に異議を懷くならん。然れども基督教の歷史は羅馬法皇の歷史たるに相違なきなり。ルーザー。チャンニングの如きは自づから他の刺衝を受け、道理の力を假りて基督教を改良せしものにして、基督の精神は重に舊教に屬し、ユニテリアニズム。ユニバルサリズムの如きに至ては最早や基督教に非らずといふも不可なきなり。唯彼等教徒が自ら尙ほ基督教なりと稱する所以は、歐米諸國、基督教を、天啓唯一の宗教なりと信ずるもの多きを以て暫らく之を爭はざるのみ。偖今此基督教の神髓なる羅馬法皇の歷史を讀め、何のページか壓制の行爲なからん、何のページか不法の所置なからん。單に其所說を異にする故を以て無辜の民を死殺せしもの幾許ぞ、正直なる考慮を言ひ見はすは果して何の罪ぞ、此死殺をして一層慘虐ならしめんが爲に土牢石窟已れの心の地獄を畫き餓鬼の鐵槌に加へて鞭韃拷問の具を發明せし者は誰ぞ歐洲人民の生命財產を手中に弄して各國の帝王に向ひ壓制暴戾を教へし者は何人ぞ。世界の歷史は則ち戰亂の歷史なり、戰亂の歷史は則ち羅馬法皇の歷史なり。妄りに口を神意に藉りて千有餘年の久しき歐洲の平和を攪亂し徒らに妄信の迷火を煽ぎて各國人民をして絕へず紛爭の中に生死せしめしもの、是れ則ち基督教の歷史に非らずや。基督教の養成し來

りたる文明の結果は如何ありしか、人々をして卑屈ならしめたり、無氣力ならしめたり君王專制の下に屈從せしめたり。歐洲十六七世期の天地は實に、彼の佛敎と儒敎とか東洋諸國の人民を束縛せしの結果と同一にして、世界の文明は否基督敎の文明は玆に至て殆ど極點に達せしなり。

斯く迄憐むべき各國人民の境遇を一轉し來りて、更に今日文明の局面を開くに至りし所以は何ぞ——自由の精神——是れなり。

米國の獨立、佛國の革命は正に是れ十九世期文明の曉光なり。歐洲各國腐敗の氣を一掃せしとも稱すべき彼佛國の革命は、何に由て起因せしか、知る者は知らん、天眞爛熳たる一般人民僧侶と帝王との世々の壓制暴虐に堪へず、彼の奇にして而も正なるルーソー等の筆端に一點自由の光を認めて奮然蹶起無道の罪を鳴らし以て千歳の積弊を滅絕せしものに非らずや。米國の獨立は何ぞ、永く巨光を史上に掲げて絕海隷屬の民又能く同一の權利を有し此權利や吾人の至寶にして何物も得て犯すべきものに非らさるとを示せり。見よ巨大にして且つ富强なる全英國を擧げて尙ほ此の一群貧弱の民に及ばざりしの跡を。

「我れに自由を與へよ然らざれば死を與へよ」の一言は一寒書生なるパトリツク、ヘンリーをして米國史上に不朽ならしめたり「自由の棲む所是れ我鄕」是れ溫厚篤實世界人類の摸範なるベンジヤミン、フランクリンが明言せしの句にして「我が名を永遠に燒き我が魂を無窮に殺さしめよ、斯同胞をして壓制暴虐の境遇を脫却するを得せしめば」とはダントンが滿腔の熱血を絞りしものなり。

是れよりして世界は始めて文明の途に上りしなり。自由の精神は四方に向つて花咲けり。政事家をして自由に運動せしめしは勿論、學者をして自由に事物を考察せしめ、實業家をして自由に有無を通ぜしめ、且つ壓制束縛を主として他に道理を求むるとを許さゞりし宗敎界をして尙ほ能く其長夜の夢を破らしめたり。自由は人類の天性なり、人類は自由の動物なり。十九世期

の文明自由の空氣を呼吸する人民を除きて他に何處にかある

科學者は之を聽いて默して答へず、笑つて過去一世期科學の進歩諸器械の發明に指さんとす。

科學の力は疑もなく世界の形勢を一變せり。滊船滊車電線電話の發明は端なく世界交通の架橋となりて各國人民依て以て彼我流通の便を得、採長補短の利を占め、此間能く競爭進取の氣象を發揚し、從來永く一國一島の中に閉鎖せる美と善とを擧げて世界に公示し、同時に其害と惡とを明にして各國人をして自他相顧み相戒むるを得せしめたり。此他工業製造等に係る諸器械の發明は人力を十倍乃至百倍し、世界の遺利を發掘して社會に粲爛たる光輝を放たしめたり。則ち社會をして野蠻より文明に、貧困より富榮に其境遇を轉せしめたり。

科學の力を見はせしより以來今日に至る迄殆ど百年間進歩の歷史は其以前數千年の歷史に對せり。又各國今日の文明は、其程度正に科學の發達と之れが應用とに伴へり。英國がヴィクトリア治世の間に於て諸事の改良進歩を來せしとは實に非常にして、古羅馬の全盛時代を以てするも尙ほ遙に及ばざる所あり。殊に驚くべきは米國にして建國以來未だ一世期に過ぎざるに、各地各人其富を十倍乃至數十倍せり、衣なく食なく雪中に奔走し苦痛の叫を擧げしの夢は已に業に其跡を滅して平民新平民の徒尙能く他國の王公を壓するに至れり。誠に桑港に行きて巍然たる樓閣中天に聳え石屋玉窓芳園百花を敷くの邊に立ち、以て其主人の何人たるかを問へ、スタンフホルドと言ひ、ホプキンスと云ひ片手に五六千萬弗を握るの金穴、三十年前は赤手赤足東西賴むなきの一坑夫なりしなり。

世間未だ錬金術を傳ふるものなしと雖ども科學の力は眞に土を變じて黃金と爲せり。

之を邦國の上より考ふるに、此富の增加は社會の威嚴と一國の獨立とに對して至大の力を有せり。世は文明と稱すと雖ども禍亂未だ其跡を絕つに至らず。各國交際の頻繁なるより却て時に爭端を開き、其極之を兵力

に訴へざるを得ず。而して今日の戰爭は舊時に異れり刀鋒相接し鎗弓相交るの間に勝敗定り其結果偏に兵卒の技倆如何に屬せしの時期は已に去つて今は殆ど金力と金力との戰爭なり。數百萬乃至數千萬を價したる軍艦の數と、諸器械幷に武器の精鋭とは大に實戰に利益を與へ、此準備不十分なるものは假令其兵卒如何に愛國心に富むとも又如何に、百發百中の伎倆ありとも、唯切齒扼腕座して城壁の壞るゝを待たざるを得ず。富の存する所は則ち力の存する所にして、力の存する所は則ち名譽と快樂との存する所、世界は之に向つて敬意を表し各國は彼れに對して文明先登の功を讓らざるを得ず、是れ豈に科學の社會に與へたる光榮に非らずや。

以上宗敎家科學者政治論者の說く所各理あり。余輩は何れを排し何れに從ひ以て社會の方針を定むべきや。余輩は之れが判定に苦しむ。已に之を苦しむ余輩は茲に疑はざるを得ず——疑は悟道の烽火なり——余輩は彼等の說に於て疑なき能はず、彼等の見解は狹隘に失するなきか、彼等の所論は誇大に渡るなきか、余輩は今茲に彼等の說を辨駁するの材料を集むるに難からざるを信ずるなり。

余輩は羅馬亡國史を讀んで大に感ずる所あり。羅馬は世界の一大國なりし、其國家は已に久しき以前に地圖の表面より抹却せられしも其歷史は顯然として今尙ほ學者識者の腦中に生存し、以て將來社會の進路に少なからざるの警戒を與へたり。

彼のナポレオン一世の師表とせし所、露國皇室の護神として尊崇する所の豪雄ジユリアス、シーザーの故國にして、其墳墓はカトー。シロセ。ブリユタス。アレトニアス等の威靈ある屍を收むる所、シエークスピーアの筆を借らざるも尙ほ能く宇內活劇中の活劇を演せし所たるに相違なきなり。當時羅馬府は世界の主都にして今日のロンドン。パリスは一小村落だも爲さず、其威力の加はる所英佛獨其他アフリカの一部に及びて優に世界文明の牛耳を執り「花は薔薇花、人は羅馬人」の芳

名を輝かせしなり。然れども其一朝滅亡の期に際するや憐むべし羅馬の人民は、己れの嘗て、見て以て野人蠻族と爲せしものゝ爲に蹂躙せられて其國家は土崩瓦解も啻ならざりしなり。其原因は何なりしか――富なり餘りに富みしが爲なり。

國治り世平にして世界の貨物盡く羅馬に輻輳す、羅馬人は實に富有の民となれり。敎育は盛なりし、兵制は整ひし。彼等は智者なりし才子なりし。然れども是等は彼等に向つて不利なりし。彼等は勞せずして食ひ勉めずして着他の爲に圖らずして他の尊敬を受けたり。個は人生の爲に賀すべき事か將た憂ふべきとか、余輩は憂ふべきとと爲す、何となれば徒食の徒は其罪盜賊より重し、盜賊は尙働て食ふなり、彼等は座して食へばなり、然れども彼等は以て賀すべきの事と爲せり。勢ひ怠惰に流れさるを得ず、勢ひ道義を破らさるを得ず。一個の帽子一足の靴百金を價せり、否一皿の食一瓶の酒千金を價し其一度夜會蹈舞の宴を張るや十數萬金を消却して尙ほ能く顧る所を知らず。勿論衣服裝飾家屋の美之に協ふ。彼等は眞に奢侈の極點に達せり。然るに彼等は揚々として謂へらく己れ等は文明の極點に在りと。忽にして彼等は此極點より墮落せり、峻坂轉石の勢を以て千仭叉上るべからざるの境界に墮落したり。

當時羅馬人の心を支配せしものは宗敎あるに非らずして拜金宗あり、節操あるに非らずして虛名心あり。彼等の政務を運轉せしものは主義あるに非ずして賄賂あるのみ。彼等の前途を指示し其一生の希望を繫きしものは余輩の所謂文明に非らずして唯浮雲に等しき名譽のみ。彼等は一意に突進せり。嗚呼彼等は己に行くに道に由らず、進むに法を以てせざりしを以て、七轉八倒寳を懷て却て益々心を苦しむるのみなりし。或は貪慾界に入れり或は放情界に陥れり。玆に於てか風俗壞亂、人心獸行、社會は全體に腐敗して萬斛の鹽も之を止むるに由なきに當り、天は最早世界の史上に斯くの如きの人民を生存せしむるの必要を有せず、玆に隣人の手を假りて彼等を追放し去るに至れり。彼等は逃れたり

國を棄つると土の如く家を出づること歸るが如く妻を去り子を遺し以て四方に散ぜり、斯くて國家は永遠茲に滅亡を告げたり。

前段科學者の説は之に對して如何なる價値を存するか、余輩は彼の説を以て盡く非なりとは言はず、然れども彼れの概論は此歷史上の事實を解釋するに足らざるを信ずるなり。

經國警世に志ある諸君、誠に印度近世史を繙ひて之を一閲せよ。悲風慘憺滿目をかすめ、殘虐無道紙面を蔽ふ。余輩は其ページを轉ずる毎に未だ嘗て切齒扼腕、大息長大息、印度人の爲に其不幸を憐み、英人の無狀到らざる所なきを咎めずんばあらず。然れども今心を靜めて、自然の道理に由り宇内の形勢に就て大看すれば、印度の滅亡せるは則ち滅亡するの理由あつて自から此間に存するを知るべし。夫れ印度は宇内の故國にして其文化夙に他の師表となり、彼の天にも地にも、唯我獨尊なる大聖釋迦が生死の跡を止めし所ヒマラヤの山は地球第一の高峯にして万古雲邊を護し、其が神妙なるガンヂスの河流には幾多奇異の歷史を流して未だ嘗て止まず。實に是れ東洋諸國幾億無數の人に、子々孫々に仰で以てジユルサレムの上に置きし所のもの、然れども今や則ち無し。五千万の同胞あれども印度てふ獨立國の人民に非らず、否彼等は現在には生存し居らさるなり。身は茲に在るも其眼は長へに閉ぢて人生のものを見ず、心は已に未來に在るなり。意の存ずる所には自から道あり、然れども心の向はざる所には事の起るべき筈なし、如何ぞ能く此優勝劣敗の激烈なる生存競爭場裡に立ちて其地步を占むるを得るや其人心を養成して斯くの如きの極に至らしめしものは果して何か。

印度は世界の印度に非らずして宗教の印度なり、其宗敎は人の爲にせしに非らずして人は宗教の爲にせしなり。此宗教は忍堪を敎へたり、否卑屈を敎へたり。「怒る勿れ、爭ふ勿れ、浮世の事に心を勞する勿れ」此言能く印度人民の心を支配したり、嗚呼餘りに能く彼等を支配したり。彼等は此言の中に生れ、此言の中に育

ち、此言の中に住めり。朝に夕に此言を服膺して唯是れ背かざらんとを勉む。彼等は自由權利なる文字を以て魔鬼の陷穽と思へり。彼等の眼中唯寂滅佛法あるのみ、社會なきなり、國民なきなり、固より其隆替興亡の如きは問ふ所に非ず。彼等は人に非らず、獸に非らず一種奇異の動物と爲れり。其名は何ぞ、佛か佛か彼等は皆生佛となり終れり。彼等の爲には、正當防禦は此上もなき罪惡にして、自殺の極樂に入るの一手段、彼等は好んで自殺せり、社會の爲にせるに非らず他人の爲にせるに非らず唯己れの妙果を得んが爲なり。彼等は此上もなき自分勝手のものとなれり、自ら勝手に此身を殺して顧みざるの極に達せり。此身の社會に生存する以上は社會に對するの義務なかるべからず、彼等は此一大義務を忘却せり。嗚呼彼等をして其身を殺すの勇氣を以て社會の爲に盡すの精神を養成せしめは、十九世紀の天地決して白人種をして我物顔を爲すを得ざらしめしものを、無念なる哉彼等は此心を以て、尙ほ毫も虎狼の侵入に抵抗するの意なかりし。見よ彼のクライブ。ヘーステングス等の鎗を提けて白日奪掠を行ふや、印度人は恰も他人が他人の物を取るが如くに傍看せり。其鞭韃の己れの身に加はるや、萎縮せり。萎縮して尙ほ且つ「忍」の字に背かざらんとを勉めたり。

(未完)

○支那國教概論

佐治實然

一たび東半球の地圖を繙けば、其疆域の廣大を以て矚子に映し來る者は、實に支那帝國の版圖に非ずや、其疆域此の如く夫れ大に、人口亦數億を包有す、輿地圖中の偉觀何物か之に亞く者あらむや、又其歷史を追懷するに、正確なる曆日ありて、之が證明を與ふるに由なしと雖も、恐くは三皇五帝以來其年序を經ると茲に數千百年ならむ、然れば萬國史中世界の古建國を類從するの必要に遇はゞ、必ず支那帝國其一に居らむ、況や闔國の文化時に隆替ありしと雖も、未開原人の狀態は、遙に過去の事實に屬したるをや、其然り建國古代

に屬し文化夙に進む必ず之が職由する所なくむは非らず、諺に曰く人心の異なると猶其面の如しと、是れ即ち個人稟性の自ら殊別するとを曉らしむる妙喩なりと雖も、然れども此活喩は亦啻に個人稟性の上に於けるのみならず、各國性格の自ら流派を分てる上にも優かに之を適用するを得べし、試に前喩の言を換易して、國情の異なると猶其山川の如しとせむか、而して此喩豈夫れ晦澁不咎の言なりといはむや、古代の文明國として今時歷史家の筆に上るもの其數これ多し、曰印度曰希臘、曰亞細利亞、曰埃及等なり、此等の國々を觀るに、政治宗教文學技術等、各其所長あり、又其所短あり、而して支那帝國を彼文明數國に對照して、孰れか其所長なりしやを考ふるに、政治宗教文學技術、一として著しく古代文明の列國中より嶄然頭角を露はしたるものなきが如し、然れば則ち彼が所長として傳ふべき者絕へて無きか、曰く否、大に稱揚すべきものあり、何ぞや曰く、彼が所長は往古より今日に至るまで、終始一貫して專ら實用を倚ひ實地を重むするの氣質に富饒なりしと是なり、已に其所長は實用にあり實地にあり、故に希臘埃及等の如く、開化の精華を以て世界を眩曜するに至らざりしならむ、或人遮きりて曰く、元來支那人は實用を倚ふが如き外觀あれども、內部を凝視すれば大に空想に走るの癖あり、其故は彼國に於ては、五穀登らざれば直に人心の邪惡なる應報なりとし、日月兩蝕は必ず君王の罪過を表彰する天意なりと信じ、總て天變地妖を以て社會の善惡に連結せりと臆斷するは、理由もなき空想に非ずして何ぞや、觀よ四海清平の昭代すら、尾濃の震災盤梯吾妻諸山の破裂は免れざるの理數なるを奈何せんと、然り豈夫れ然らむや、或人は倚唯皮相を觀て能く其內景を窺はさる者なり、何者、五穀の登らさるは水災旱損其他可見の原因あらむ、而して支那の諸賢は固より之を知る、日月兩蝕の原因は、今世の如く天文學の進步せさる時代には、頗る不可思議の現象なりとして驚愕措く能はさりしは固より其所なれとも、然れとも日月兩蝕は凡そ數時間に限るものにて、三日も三夜も天地爲に晦冥なりしとは、未

た曾てあらさりき、去すれは兆民に於ても、君王に於ても、痛く恐怖の念を懷くにも及はさる現象にして、例へは對岸の火災よりも尙利害を感するヽ鮮少なるにあらすや、是等の推理は强ち學者の探究を待て後に知るへきにあらす、古今東西の人情に照すも尤も睹易きものなり、然るを君臣上下戰々兢々として其原因を社會人心の邪惡に歸し、君王の罪過を戒むるの天意なりと云ふは、理學上の空想に耽らむよりは、寧ろ道德上の實地を重むせし證據として觀るを得へけれはなり、或人か認めて以て空想に走れりと云ふ所以の者は、却て予か所謂實用を尙ひ實地を重むするの氣質に富めりと云ふの反證となり來るへし、

西洋紀元前七百年頃、支那帝國に於て著はされたる道德經を觀るに、頗る高尙なる理論を發揮せり、而して此理論は單に理論の上に止まらすして、之を社會人事の間に應用せむと欲する念、勃々として禁する能はさるか如し、紀元前七百年といへる時代は、即ち孔夫子の生誕に先つヽ實に百五十年なり、故に孔夫子か一身を犧牲に供して弘通せんと欲したる道德の法理は、遙に前世紀より簡冊に誌されたる、固有の道德を紹隆するに在りしは、夫子の言に徵して敢て疑ふへきにあらす、孔子曾て曰へるヽあり、愚にして自ら用ふるヽを好み、賤ふして自ら專らにするヽを好み、今の世に生れて、古の道に反す、是の如き者は、災其身に及ふ者なりと云云、去れは孔子敎の綱領は、所謂唐虞三代の遺法を祖述し、專ら舊章に率由せしものなるか故に、孔夫子生涯の事業は、敎理の創始にあらすして、先王の浩範を回復するにあるや掌紋を觀るよりも明なり、去れは支那國敎は人間最古の遺物なるや必せり、今抜鈔するの價値を有する道德經中の一節を擧示せむ、

寂兮寥兮。獨立不改。周行不殆。吾不知其名字。字之曰道。强爲之名曰大道大天大地大王。亦大域中有四大。而王居其一焉。人法地。地法天。天法道。道法自然。

斯文簡短なりと雖も、能く宇宙の原始を想像し、能く其順序を設定せり、後世數多の高儒輩出して慇懃に道

德を論し、惇々政治を說く、其經史實に數千萬言を累ぬると雖も、要するに皆其源を此に發せさるはなし、而して孔夫子の特色として、今世に至るまて幾億の蒼生を感化し來れる、保守的社會道義の根元は、斯文數十言中に蘊在せりと云ふへし、古代の文明國に於ける所長と所短とを比較するに方りて、支那帝國の本性として、何物をか擧示せむと欲するときは、正に斯文數十言を採用するを可とす、何者、斯文中明に其長短得失を包括したれはなり、餘國の文明史を組織する經緯に比して輙く其異色を認め得へけれは也、而して人心の異なると猶其面の如く、國情の殊なると猶其山川の如し、生物の容姿千類萬狀なるは、即ち心機の智愚利鈍を表彰する所以にして、山川風土の景致人工を待たすして不同なるは、國情の殊別を來せる一大因由なり、此は是れ眼前の事實なれは、敢て深く考案を費すにも及はさるか如くなれとも、此事實の顯著なるを確認せし上は、一層深遠なる境界に溯りて、生物の美醜、山嶽の高低、江河の廣狹を來せる、究竟源因を看破するに非すむは、未た學者の本領に達せさるものといふへし、但し天意の妙劑は、人力の得て測知する所に非すといふ、夫れ可ならむ乎、日を換へて詳論せむ、

再ひ道德經の要文として、上に引用せし數十言は、支那帝國の國敎なる社會的道德の本源たる意義を明にせむ、

彼文を觀るに、地は天に法り天は道に法り道は自然より出るといふか如きは、一箇の世界觀としては其價値の甚た輕微なるを如何せむ、何者、形而上の想像として先天地を概念し、其中に道理ありと認識するは、常人の企及し得る所なれはなり、唯大王を大域中の四大の一位として之に加へ、大道大天大地の功德如何に無量なるも、大王なる代表者を待つに非されは、其功用完全ならすと斷定せしは、特に支那帝國國敎の特色なりといはさるを得す、往古草昧の世に於て、斯る敎基を立てし名譽は、永く希臘の文學、埃及の建築と、曠原に馳驅するも決して其背後に落ちさるを保せむ、是則天意の配劑は進歩の途中に在りては一多相容して、

自ら調和を期せしむるにあるを知らむ哉、其然り、孔夫子は支那山川の靈氣を帶ひて出誕せり、本來の面目を以て世に立てり、故に夫子の生涯は、未た生を知らす焉そ死を知らむ、知らさるを知らすとせよ是知れるなり、寂兮寥兮大天大地の現象を探究するよりも、打ては怒り撫すれは笑ふ所の形而下の社會に向ふて、即ち君主と臣民に對して、其本分を激勵し、箇人的正心誠意より延ひて治國平天下に及すを以て畢生の目的とせり、固より哲眼を宇宙に放てる偉人より之れを觀るときは、野嫗か矮屋に在りて、越年の調度を爲すよりも一層可憐なるか如しと雖も、彼も一時なり此も一時なり、其實地を伺ひ實用を重むするに至りては、哲眼の偉人と雖も、豈後に瞠若たらさるを得むや、夫子の眼中には、王も人なり人も亦人なり。人たるの點に於ては、些かの異同を觀さりしなり、天は人を平面に作れりといふ底の理論は、夫子に於て何か之れ有らむ、雖然、彼か所長として又其目的として、現實の世界を九鼎大呂よりも重むせむには、斯る理論は偶々外面的規律を破壞するの要具たるも、社會的制度の根基を固め、治國平天下の美果を收獲するか爲には、夏時の皮裘にたも如かすと思惟せしならむ、故に天命を禀けて王者となるものは天の意を行ふへき位に臨む者なり、其天職に居て天意を行ふ、之を天子と名く、即ち天子は天意の存する所なるを以て、億兆の之に悅服するは則ち上天に服從する所以にして、人者の本分は此外にある可らすと主張せり、是に於てか天子は單に社會的階級の第一頭に立つのみならす、宛然として宗敎的崇敬の目標に當てられたり、故に夫子の堯舜に關する談話、周公に於ける思想は、宗敎徒の神佛に於ける觀念と一般なる樣子を伺ふに足れり、加之、天子は民の父母となりて以て天下に王たりといふか如き、萬民の主は一人に阿ねらすと論するか如きは、宗敎徒か神佛の屬性として論及する所の、公正。純潔。慈愛等の美質は、天子に於ては造次顚沛にも無くむはある可らさる所の者として、總て之を天子一人に歸し、王者の本體なりと論せり、要するに支那國敎は王道を經とし、王

制を緯として、之を組織する者と云ふへし、而して五倫五常三從三德等は其燦爛たる綺文たるに過きさるなり、斯道を紹隆せし代々の元首は、即ち世々の天子にして、伏羲神農黄帝堯舜禹湯文武周公を經て孔夫子に至れり、孔夫子は實に身匹夫より起りしと雖も、其献身的傳道は、支那四百州を風靡し、數億の生靈を擒縱するの大權は、獨り夫子の掌裏に歸せり、嗚呼壯哉、於嘻偉哉、大成至聖文宣皇帝孔夫子

安心立命

三並　良

人天地の間に在りて而して其束縛を劈破し其勢を撻碎し之に勝たんとを欲するもの三あり罪惡、禍災、死是れなり

一氣轉じて和風微かに起り氷解け魚躍り花開き鶯囀る勃々たる遊意は禁ずる能はざるなり墨江に舟し飛鳥に歩す十里の長堤雲か雪か佳景愛すべきなり爛熳たる櫻花の下樂んで歸るを忘れんとす其の快實に云ふべからざらんとす然りと雖とも亦た忽焉として襲ひ來る一種凄凉の氣なくんばあらず無常の感想即ち是れなり錦繡の櫻花も旬日を出ですして片々風前に飛散し流水に隨ひ泥土に化し去るべく今年玆に春を愛し花を賞せし者果して明年復た客たるを得べきや否や年々花相似たりと雖ども歳々人相同じからざるなり是れ唯だに他人の身の上ならで我身も亦た其命運を共にすべき者にぞある。中秋の月玉玲瓏たり之を賞し之に飲み意氣自ら壯快なり然りと雖ども孤雁の影疎なるは愁心を促し月の圓滿なるは忽ち其虚盈を想はしめて凄たり是れ春秋の來往月の虚盈は復た我身の老して益墓塲に近づくを告ぐれはなり人は安然たる能はずして常に深淵に臨むの感あり千百の希望も萬幸福も死來れは忽ち水泡となりて消へ去らんのみ青著たる死の顔は轉た人心をして恐怖戰慄せしめ一日の安静だに與へざるなり

古代に於ける希臘人は氣候温和にして山水明眉の地に住み胸宇快活其の邦土は恰も一個の樂園をなせり其の美術の如きも早く巳に驚くべきの進歩をなし後世人の嘆賞する所となり其の彫像術の如きは永く後世に模範

を遺したり然るに其彫像の顔には一個の注目すべき點あるなり是れ希臘の美術に深く通曉せるヘルデルが云ひし所なり曰く其快活なる面貌にもドコトナク憂愁を帶びたるの氣現はれたりと是れ即ち希臘人の氣象感慨は自ら其の妙手の作出せる所に顯はせし者なり、快潑々たる彼の希臘人の如く、天地の美を謠ひ樂しみ此世を樂土の如く思惟せる彼れ希臘人の如しと雖とも亦た自ら無常を其の感想の中に納め其の作は人世の無常を感ずるの心を自然に現はすに至りたるなり

空の空なり都て空なり死は萬事の終りなりとは萬人の感情にそある

忙々として行くも遲々として歩むも逸樂なるも辛苦多きも世路は決して常に安全なるものにあらず生活の航路は極めて風波繁し地盤は確として千載動かすべからざるの觀を呈すと雖とも忽ち震動しては家を倒し人畜を害ひ忽ち陷沒しては祖先傳來の桑田も海と變ぜん、天も灰を降し火を飛ばすに至りては、財産幸福も一朝水泡の消ゆるが如く滅し去り或は至愛の人、兩親が唯一の望たる子女も奪ひ去らるゝあらん、其緩急にして異なるあらんも是れ等は決して永久に賴むに至らざるなり、人間の智識は能く禍災を防き之を未だ襲はざるの前に退かしむるを得べしと雖とも決して常に之を行ふ能はざるなり

其れ然り人をして常に安ずる能はざらしめ、人の胸中に肅殺の氣を起し戰慄せしむるものは災禍なり

死、災禍よりも更に人世をして慘憺たらしむる者は罪惡なり罪惡は人を生ながら殺す者なり

深夜四面寂として風なく聲なきの時孤燈の下尙ほ能く眠るを得ず雜感交も胸裡に百出し風波高く卷て身危きが如く戰慄するは何の故ぞ是れ罪惡の爲めに打たるゝの心にあらずや、棺の側に坐し潸然として涕泣し慟哭止む能はざるは何の故ぞ是れ此の人善く我を愛したりと雖とも我れは之を愛する能はざりしのみならず多くの罪惡を彼れに爲せり我れ長夜の夢漸く破れ罪を覺り彼れに謝せんとするも今や能はず、彼れに報せんとするも及ばずと轉た憂悶するの狀にあらずや、我れに

罪惡ありと知り己れを責めて己れを擯斥するは是れ誰人も能く堪へ能はざるの呵責なり

誰れか是れ等の憂慮煩悶の域を脱却して釋然自ら安し悟るを冀はざる者あらんや

然るに人あり大に之れに反對を試て曰く汝何んぞ懦弱なるや宜しく古の大和魂を養成すべし災害果して何者ぞや人宜しく忍んで而して能く之に堪ゆるの力なからざるべからず死果して何者ぞや是れ毫も恐怖するに足らざる者なり死は甘く災禍を快と思惟せざるべからず能く此の痛苦に敵し得ざる者は懦夫たるのみ彼れ慚死せざるべからず、吾人大和の民は古來より一種獨特の敎育を受け勇悍の精神を養成し其の模範とする所の者は古の英雄豪傑の士にして能く難に堪へ死を恐れざりし者なり、彼の宗敎なる者は何者ぞや口を開けは則ち死を語り災禍を說き先づ人を恐怖せしめて而して救濟を敎へ安心立命を云はんとす是れ人をして懦夫たらしむるのみ憂鬱の士たらしむるのみ吾人の理想とする所のものは然らず自若として痛苦を痛苦とせず笑て死するにあるなりと

其れ然り豈其れ然らんや其の勇氣や誠に嘉すべきなり吾人と雖とも亦た此の勇氣を欲するなり然りと雖とも此勇氣を養成するに其法宜しきに合ひ其道眞ならざるべからす然らざれば唯た人をして能く勇猛ならしむるも人情を解する能はず美妙細微の感情は跡を絕て粗暴野鄙とならんのみ豪勇の氣象を養成するには實に可なり、されども此の豪勇や他の善良なる性質を撲滅し去りたる野蠻と頑硬の心より出づべからざるなり死を見て笑ひ罪を見て恐れず痛苦に遇ふて泣かざるに二種あるを得べきなり吾人は人情を悉く俱へて而して然かも此の氣象を有せざるべからず若し然らざれは人にして人ならす否人情なき人となるなり、昔しの所謂豪勇の氣象なる者は多く之れに類するにあらずや否か

されは吾人は如何にせは死、災禍、罪惡に勝て安心立命の域に到達し得べきか

是れ他なし慈愛なる神を信ずるより生ぜずんはあらず基督敎の此の信仰や實に人間に與ふる平和を以てする

なり素より此の安心立命を記述するは吾人の爲し能はざる所なり而して此の安心立命なる者は神を慈愛の父と信ずるが故に生ず彼れ慈愛なり故に人を罪惡の裡に沈淪せしむるを以て快事となさゞるべし正道に歸り神の意を行はんと努力する者は亦た之に其力を與ふべし、彼れ慈愛なり故に人をして死、災害の裡に煩悶せしめずして之を救ふべきなり、唯た人は宜しく此の慈愛の神あるを知り之を信じ之に感謝せざるべからず

天暗く風雨猛烈にして波濤高く卷き船躰甚だしく動搖し危機正に目前にあり兒あり何の憂慮恐懼する所もなく平然として船上に遊べり人あり之に云て曰く風濤正に惡しく我船危からんとす汝兒なりと雖ども何ぞ其れ無頓着なるやと兒顧みて之に答て曰く我父船に在りて舵を司どれり我に於て何の危きとか是れあらんと、基督教徒が此の世に處する亦た此の如きのみ世界暗黑となるも風濤高く卷て來るも我父世を司どれり我に於て何の安からざるとか是れあらんや而して此の父や我れに與ふるに能く世に勝つの力を以てする者なり

故に基督敎徒たる者は死の闇黑なる禍災罪惡の恐るべきを知らざるにあらず然れども終に能く之に勝つを知る者なり彼れあるが爲めに人情に遠かるなく此れあるが爲めに懦弱軟情起つ能はざるの人となるとなし、嘗てレッシングは論ぜしとありき曰く「希臘人は感し又恐れたり、彼は其痛苦と憂慮とを表白せり、彼は人間的弱點あるとを耻とせざりき、然れども是れ等の者は一も彼が名譽の路を進行し其義務を實行するとを妨害すべからざりしなり野蠻人にありては粗暴と無情の心より出でし者も彼れにありては主義之を爲さしめたり」と又之をトロヤ人と希臘人との戰爭を記せる詩人ホメールの詩によりて說明して曰く「互の敵兵休戰を告げ彼等は此間に各味方の斃を集めて燒きたりしが共に慟哭して之を爲せり、然るにプリアムースは彼れが部下のトロヤ人に涕泣するとを禁ぜり是れ涕泣は彼等を阻喪せしめて明日戰ふの勇氣滅せんとを恐れたればなりと其れ然らん、然らば余は更に問はん何か故にトロヤの將プリアムースのみ獨り此の配慮を爲し、希

臘の將アガメムノンも亦其部下に同一の令を布かさりしか蓋し詩人（ホメルを云ふ）の意や深し彼れ吾人に教ゆるに唯だ文明なる希臘人のみ涕泣し且つ勇猛たるを得るも蠻風トロヤ人の如きは勇猛ならんと欲せば先づ人情を悉く壓殺し去らざるべからざるを以てする者なり」と

素より古希臘人の道と我基督教の道とは異なる者あるや論を待たざるべし然れども彼れが義務を重んじて強かりしが如く我れも亦た天命を信奉して之に安ずるとを知らざるべからず而して吾人は無上の摸範を基督に見るなり彼れは樂しむ者と共に樂しみしも亦た悲しむ者の爲めに之を分てり、彼れはゲッセマチの園に泣きしもゴルゴタ山上には安然として靈を付せり

此の變遷不定の世にありて此の安心立命こそは吾人が最も必要とする所の者たるなり若し夫れ心平ならざらんか行爲終に序なからんとす事に臨て過らざらんとを欲せば狼狽せざるを要す吾人が此の世に處するも亦た然り、而して此の安心立命や實に吾人が神の遍在を信し此の神の慈愛を信するにあり、此の信仰や眞に吾人をして安心立命せしむ是に於て吾人は人世の眞想を知り其眞價を知り又た眞に之を觀察し此の中に活動するとを得ん

宗教と教育の關係に就て

文學博士　元良勇次郎

宗教と教育とのことは今日世上の一問題となれり甲論し、乙駁し或は之が調和を試むる者なきに非ず、此事の始めは一私人の談話に基きたりと雖も終に日本全國の注意を惹き起すに至れり、而して世人の誤解する所少からず、余井上氏と交際すること淺しと云ふ可からす、又基督教徒中知己少しとせず、竊かに思ふに相方の論一時の感情に激動し平素心中に無きことまても之を痛論し爲めに世人をして其眞意を解せさらしむるに至りしとなき歟、果して然らは玆に其眞情を述べ此問題に對し聊か余か意見をも合せ論するは其勞全く無益に歸せすと信す、

抑々此事は昨年十一月五日教育時論に載するところの井上氏の談話に始まり、而して後大に基督教社會の注意を惹き起し、横井、本多の二氏及同志社文學、自由基督教等之を辯論せり、其論中語氣自ら穩ならざる所なき能はず、即ち井上氏の感情を激せしめたる所以なる歟、次て井上氏の長論文となり數多の雜誌に之を掲載せり、即ち基督教社會の感情をして大に激せしめたる所以なる歟、然りと雖も其實同氏自ら悉く此等の雜誌に投したるに非す、他より轉載せしもの多しと云ふ、次て高橋氏の駁擊となりしことは（三月二十三日國民の友）當時世人の知る所なり、玆に於て井上氏は高橋氏に公開狀を送り自論の完結を待て之を駁す可きを告けたり、是れ世間の所謂休戰にして世人の疑惑を惹起したる所以なり、世上傳ふる所を以てすれは井上氏は高橋氏の攻擊により大に狼狽し横井氏を以て高橋氏に休戰を申込み大に後悔して自說を一變せりとす、其事早く基督教社會に傳はりたりと雖も一般世人の注意を引きたるは自由新聞に於て高橋氏の書翰を掲載したるによる、其記事素より事實に相違するを以て井上氏より取消を申し込みたれども同新聞は此に應ぜざりき、

此事の顚末を大畧記すときは左の如し、高橋氏は「僞哲學者云々」の表題を掲けて井上氏を駁したり然るに其時は井上氏の論文未た完結し居らざりし因て井上氏は横井氏に依賴して高橋氏に言ひ込まれたる事は左の三ヶ條なり（一）僞哲學者云々の表題は學者の論文として餘り穩ならざれは此の題を變すること（二）井上氏は遠からす彼の論文を一冊子として出さるゝ積故其全論を見て後批評されんと（三）横井氏に依賴して「教育と宗教の衝突」の第四附錄にある報道を得つゝありし故に之れを以て井上氏の論文中事實の相違を正さんとのこと是なり、而して彼の世間に流布したる學長云々、一身の地位云々、後悔して說一變云々等は素より無根のことなりとは余の斷言するに躊躇せさる所なり、加之余は先きに此等の附會說の出所を明かにしたりと雖も今之を公にするを好ます、蓋其必要なければなり又

去月三十一日の自由新聞は井上氏の開書を載せ之に附言して前きに井上氏の事に關する記事を載せたるは高橋氏の書面に據るものとなし尙其取消を拒みたり、自由新聞の論ずる所一理なきに非ず、彼の記事の如きは自ら捏造したるに非ず高橋氏の書面に據りたるは余も亦之を信ずるなり、然りと雖も今此說の出所を公にするは無用のとなり、唯井上氏の胸中潔白なるを示し且つ自由新聞は附會說を捏造せるに非らざるを世に明かにして世人の疑惑を解かんため一言すると斯の如し

却說宗敎と敎育との關係は一の社會問題にして吾人社會の一人として必ず定見を有す可きなり、然りと雖も余未だ此問題に就て硏究するの機會を得ず、唯平素此事に對し有する意見なきに非ざれば此を左に述べ以て世人の批評を仰がんとす故に左の數部に分ち之を論ぜん、

第一　宗敎哲學
第二　言語の衝突
第三　精神の衝突
第四　人と宗敎
第五　社會と宗敎
第六　社會と敎育
第七　宗敎と敎育

第一　宗敎哲學の問題は深遠なり、然りと雖も之を大別して二となし唯其大體を論ずるを得べし、宗敎の字義及其の起源是れなり（イ）宗敎の字義に就ては異論多しと雖も數言に之を言ひ顯はさんとするときは宇宙に神の存在するありて宇宙を支配し吾人の心情をも主宰し吾人は之と調和すべきを信ずるにあり、而して神の槪念は其類一ならず、未開人の神と文明國の神と大に異なる所あり、其變實に窮りなきが如し、然りと雖も之に通じて特質あり、何ぞや、其神は人類と等類にして完全なる知と情とを有するものなり、若し此神をして人類の如き知と情とを有せず宋儒の所謂道理の如きもの、或は佛敎の眞如若くは因果法の如きもの、或は又歐洲哲學に所謂理想の如きものに止まらしめば是れ既に宗敎に非ず、形而上理學（フヒロソフイー）と云ふ可きなり（ロ）宗敎

の起源に就ては二說あり、先天說及ひ經驗說是れなり、先天說に於ては宗教的感情を以て人心の先天的本質に屬するものにて世界何れの國に行くも宗教的感情なき人民を見ず、以て之を證するに足れりとなす、經驗說に因れば宗教的感情は經驗上より發し來りたるものにて天然に對する恐怖心、天然稱賛、生前死後の憶想等の精神作用より發したるものとす、此の二說を以て之を觀れば宗教は先天なるも或は經驗に基くとするも其の起因心中に在り、後祭典式となりて社會上の一大現象となる、又國家の組織上にまで及す影響尠しとせず、然りと雖も是れ宗教の枝葉なり、其要點は各個人の心を神と和するにあり、故に個人的のものたるや明かなり、

第二　既に論ずる所は宗教一般に就て論じたるなり、然りと雖も是れ廣きに過ぎ短文の能く載する所に非ず、本論に於ては重もに基督教と日本の教育との關係を記さんとす、抑々言語なるものは思想表出の手段なり、而も甚だ不完全なる表出と云はざるを得ず、思想は種々の境遇に於て應化すべしと雖も言語は其境遇に應じて變ずる能はず、故に殆んど千九百年前の昔時基督教徒が其當時の人に教へたる其言語を譯して以て今日の日本人を教へんとす、豈衝突なきを得んや、夫れ然り然りと雖も之には又解釋法ありて同言語と雖も種々に之を解釋し時勢の變遷に應じ、國風の變化に順するものなり、是れ基督教の歷史に於て顯然たる事實なりと云ふべし、故に基督教の解釋は絕對不易のものに非ず、其言語に生命を與ふるものは之を解釋する人の精神にあるや明かなり、

第三　今一歩を讓りて基督教は其言語上日本の教育に反する箇所ありとせんか、然らば其精神に於ては此と符合すべきや否、抑々基督教は人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むるなり、日本の教育は將來はイザ知らず今日に於ては日本人をして日本帝國の良臣民たらしめんことを以て目的とす、兩者豈衝突なきを得んや、五月二十五日の「基督教青年」は左の如く云へり、

教育と宗教の衝突
教育と宗教は其根據を異にせり、一は國家の上に立ち、他は宇宙に横はる、其衝突の有無を論ずるは既に論理に反す、信仰の自由の憲法に赫々たるは是れが爲めにあらずや、世の識者と呼ばれ、宗教家を任ずるものにして根本的改革を忘れ、徒らに目前の調和に汲々たるものあらば、又曲俗阿世の徒たるを免れざるなり、

是れ其要領を得たりと云ふべし、實に衝突の有無は論ずるに足らず、然りと雖も憲法を楯として宗教の自由を論ずるは是れ大に矛盾する所なきか、蓋し憲法は國家の憲法なり、宇宙に横りたるものか國家の憲法を以て自分を保護するは余の解するに苦しむ所なり、井上氏か基督教を以て非國家主義として之を論したる主眼は悉く同意を表する能はすと雖も大體の宇宙に横はる云々の點にあるならんと信す、基督教の精神と日本教育の精神と矛盾することと明かなり、

第四　世界の人類は宗教のために生れたるか將た宗教は人のためにあるか、抑ゝ宗教感情なるものは心情の骨髓までも入り込み、人をして之に歸服せしむるや信徒は一身以て依賴し、宗教は人のためにありとせず、人は宗教のために存するか如き思想を生せしむ、是れ古來の宗教歴史に於て吾人の見聞する所なり、然るに近世文化の進步と共に人智大に開け世界の人類と宗教との關係漸々明白となり、人類は宗教のために存するに非す宗教は人のために存するの理は教育ある人の一般に承認する所となれり、我日本に於ても一般に之を論する能はすと雖も多くは此理を解するものゝ如し、然りと雖も往々之に反して宗教を誤解するものなきに非す、此の責任其人にあり基督信徒全體にあるに非さるなり、井上氏は各個信徒の例證を以て同教徒全體を批評したるは其當を得たるものと云ふ能はす同氏も亦之を悟り區別をなして曰く「耶蘇教より起る可き非國家的弊害は如何なる耶蘇教の宗派にも等しく之れありとするにはあらす云々」、故に宗教の或一派の解釋を以て神の直談の如くに思ふものと宗教を廣く解釋する人との別をなさゝる可からさるや明かなり、

第五　社會は各個人の結合より生するなりと雖とも偶然相集合して成りたるに非らす、人の社會性に基きて發達したるものなれは異りたる多數の個人相合して其

中に自ら秩序の存するを見る、然り而して社會敎育の上より之を見るときは一主義を以て人民を敎育し之を一統せんとするは人情の常なりと雖も社會の進歩と共に各個人の心情倚々複雜に進み各異りたる觀念を有するに至る、從て之を一統すること愈ゝ難し、外より强迫手段を用ひて之を一統すること難きに非すと雖も若し然るときは其かために人心の發達を害し、一統より得たる利は心情に受たる害を償ふ能はさるなり、是れ工業と等しく宗敎に於ても亦放任主義(避遠主義に非す)の必要ある所以なり、蓋し宗敎は各個人の主觀的觀念に基くものなれは之を放任するは心情の發達を促すの最良手段と云ふ可し、素より或る制限ありて之に干渉すへしと雖も心情を害せさるを以て其標準となさゝる可らす、今夫れ我邦の宗敎を見るに其數多し、然るに獨り基督敎に對して世人の反對あるは該敎の渡來日尙淺く未だ其本邦に同化せさるによるなり、又飜て基督敎社會を見るに其敎師たるものは多くは西洋人にして日本を基督敎化すると同時に又西洋化するの傾向ありと雖も先見ある日本信徒は之を本邦に同化せしめんと大に運動を試むるもの尠からす、西洋の敎師中にも亦其得策なるを解する人尠からす、井上氏の反對も此所にあるか如し、即ち曰く「但し耶蘇敎は非國家主義なるゆへ今より以後此弊を除き出來得へき丈我國の習慣に同化することを希望するものなり」と若し井上氏にして如何に信徒中之を同化せんと試みつゝあるかを知られたらんには氏の論文も大に其趣を異にすべきなり、

第六　此所に所謂敎育とは修身敎育なり、勅語の聖旨に基きたる敎育なり、是れ實利の道德にして國家の安寧幸福を以て基とす、故に小細の敎育法に就ては各敎育家の識見により多少異なる所あるも大體の所に於ては差違を生すること甚だ少しとす、人心の尨雜中に統一を求め國家の統一的精神と相聯合して人心の自然尨雜に進まんとする傾向に抗するものなり、故に宗敎に於ては成る可く放任を主とするに反して修身敎育に於ては統一なき能はす、只統一のために心情の發達を抑壓するに至らさるを要す、放任と統一の界域を定むる

は教育家の一大問題と云ふへし、

第七　以上論する所を以て之を觀れは教育と宗教は其精神に於て相反するものなり、宗教は各個人の自由に放任して心情の發達と共もに漸々尨雜に進む可きなり、修身教育は尨雜中に統一を求むるを以て其主眼とす、換言すれは宗教は個人的のもの教育は社會的のものなり、故に宗教と教育との衝突は個人と社會との衝突なり、吾人の生涯衝突を免る能はさるなり、然れば之を調和せしむるものなきか、

人は活動物なり器械に非るなり、社會も亦有機物なりとは近世學者の一般に容るゝ所なり、加之國民精神なるものありて社會の活動上裁智的作用を有すとは又廣く流布したる説なりと云ふべし裁智の器械活動と違ふ所以のものは、器械は其活動一定して變に應することなし、故に若し些かにても變あるときは必ず衝突或は破壞を生するに至る、裁智に於ては然らず善く境遇の變に應じて順化す故に成る可く衝突を避け調和的活動を以て其主眼とす、

論理は器械の如し、茲に一定の法制あり又其應用の範圍に於て限域あるものなり、若し些かにても之に反するものあるとき、或は其範圍外に於て之を應用せんとするときは必ず矛盾を生ず、教育と宗教との衝突は論理的矛盾なり、碩學カントは純粹理性批評中純粹理性の矛盾を論じたり、是れ理性と雖も解き能はざる者なりとす、人の理性に矛盾あるは免れ能はさる所なりと云ふべし、

蓋し宗教の本質たる個人主義、放任主義と修身の主眼とする統一主義とは其論理的矛盾必ず避く可からざるなり、然りと雖も人の精神は理性のみを有する論理器械に非ず、所謂活物にして論理的矛盾に超越したるものなり、論理的矛盾恐るゝに足らず、兩者善く調和せしむるものは裁智の作用によるものにして苟も裁智を有する人焉ぞ其調和に汲々として、成し能はざる所に論理的調和を求むるを須ゐんや、然りと雖も教育家にあれ宗教家にあれ其裁智に鈍鋭淺深の差あるは數の免れざる所なり、故に教育と宗教との論理的矛盾は終に

一般教育家と宗教家の衝突を來し互ひに怨情を發するに至れり、此の如きは井上氏の精神に非ずと信ず、蓋し同氏は宗教の本邦に同化せざるを以て之を論ずるを止まるが如し、余は世間の教育家と宗教家の反省を促すものなり、若し夫れ吾人事理を輕卒に斷定する如きことありて事業の上に衝突を來すことありとせんか、此に國民精神は輿論となり或は一般感情となり之を調和せんとするなり、教育と宗教の衝突恐るゝに足らず、唯裁智を養成し輿論の制裁に服從し日本國の進歩を主眼とするときは教育と宗教は唯其方法異なりて其向ふ所一に歸すべしと信ず

春晴日記中の一節　　湖　處　子

四月十一日快晴に乘し、早朝出てゝ納戸町（牛込）なる牧師を訪ふ。事あるにあらす、唯快晴に誘はれてなり。牧師既に家に在らす、去はとて其家を出つれは、誰家の垂柳ならむ、街を隔つる屋上より春の空に浮ふか如く高く懸り、すら〳〵と風に靡きつ。數歩清水侯の邸の角なる、天を貫ぬく老杉の梢に烏とまれり、玆處にはいつも烏とまれり。恬快の念遣る所なく、他の友を訪はむと、路を二十騎町に取れり。兩側の人家、見わたせは遠く樹間に沒し、東隣西舍桃櫻枝を雜へて、垣も戸々の春を隔てす。甲良町に出てゝ友を訪へは、家に在り、思ひがけぬ友を得と、喜ふと甚たしく昨日遊ひし上野の春色を審らかに語りきかせ、余をして坐なから共に遊ひし心地せしめぬ。

柳町をは通るもよし通らぬもよけれと、名を懷かしみこゝに出つこゝに來れは、又面白き友あり、久しふりに音なひ、しはしとて晝まて語る、

藥王寺より小路に入に樹多くして人家稀に處々琴の音を聞き幾度か耳を傾けて一處を徘徊す。目を擧くれは、春とてうろたへぬ松あり、春とて感せぬ枯木あり、春とて知らさる桐あり、若葉めにつく柳あり。一羽の烏、奧深き寺院の森より出てゝ何けなく喬木の梢にうつるあるかと見れは、何處ともなく歌ひ

は敎育家の一大問題と云ふへし、

第七　以上論する所を以て之を觀れは敎育と宗敎は其精神に於て相反するものなり、宗敎は各個人の自由に放任して心情の發達と共もに漸々尨雜に進む可きなり、修身敎育は尨雜中に統一を求むるを以て其主眼とす、換言すれは宗敎は個人的のもの敎育は社會的のものなり、故に宗敎と敎育との衝突は個人と社會との衝突なり、吾人の生涯衝突を免る能はさるなり、然れば之を調和せしむるものなきか、

人は活動物なり器械に非るなり、社會も亦有機物なりとは近世學者の一般に容るゝ所なり、加之國民精神なるものありて社會の活動上裁智的作用を有すとは又廣く流布したる說なりと云ふべし裁智の器械活動と違ふ所以のものは、器械は其活動一定して變に應することとなし、故に若し些かにても變あるときは必ず衝突或は破壞を生するに至る、裁智に於ては然らず善く境遇の變に應じて順化す故に成る可く衝突を避け調和的活動を以て其主眼とす、論理は器械の如し、茲に一定の法制あり又其應用の範圍に於て限域あるものなり、若し些かにても之に反するものあるとき、或は其範圍外に於て之を應用せんとするときは必す矛盾を生ず、敎育と宗敎との衝突は論理的矛盾なり、碩學カントは純粹理性批評中純粹理性の矛盾を論じたり、是れ理性と雖も解き能はざる者なりとす、人の理性に矛盾あるは免れ能はさる所なりと云ふべし、

蓋し宗敎の本質たる個人主義、放任主義と修身の主眼とする統一主義とは其論理的矛盾必ず避く可からざるなり、然りと雖も人の精神は理性のみを有する論理器械に非ず、所謂活物にして論理的矛盾に超越したるものなり、論理的矛盾恐るゝに足らず、兩者善く調和せしむるものは裁智の作用によるものにして苟も裁智を有する人焉ぞ其調和に汲々として、成し能はざる所に論理的調和を求むるを須ゐんや、然りと雖も敎育家にあれ宗敎家にあれ其裁智に鈍鋭淺深の差あるは數の免れざる所なり、故に敎育と宗敎との論理的矛盾は終に

一般教育家と宗教家の衝突を來し互ひに怨情を發するに至れり、此の如きは井上氏の精神に非ずと信ず、蓋し同氏は宗教の本邦に同化せざるを以て之を論ずるを止まるが如し、余は世間の教育家と宗教家の反省を促すものなり、若し夫れ吾人事理を輕卒に斷定する如きことありて事業の上に衝突を來すことありとせんか、此に國民精神は輿論となり或は一般感情となり之を調和せんとするなり、教育と宗教の衝突恐るゝに足らず、唯裁智を養成し輿論の制裁に服從し日本國の進歩を主眼とするときは教育と宗教は唯其方法異なりて其向ふ所一に歸すべしと信ず

春晴日記中の一節

湖　處　子

四月十一日快晴に乘し、早朝出てゝ納戸町（牛込）なる牧師を訪ふ。事あるにあらず、唯快晴に誘はれてなり。牧師既に家に在らす、去はとて其家を出つれは、誰家の垂柳ならむ、街を隔つる屋上より春の空に浮ふか如く高く懸り、すら〳〵と風に靡きつ。數歩清水侯の邸の角なる、天を貫ぬく老杉の梢に烏とまれり、茲處にはいつも烏とまれり。恬快の念遣る所なく、他の友を訪はむと、路を二十騎町に取れり。兩側の人家、見わたせは遠く樹間に沒し、東隣西舍桃櫻枝を雜へて、垣も戸々の春を隔てす。甲良町に出てゝ友を訪へは、家に在り、思ひがけぬ友を得と、喜ふと甚たしく昨日遊ひし上野の春色を審らかに語りきかせ、余をして坐なから共に遊ひし心地せしめぬ。

柳町をは通るもよし通らぬもよけれと、名を懷かしみこゝに出つこゝに來れは、又面白き友あり、久しふりに音なひ、しはしとて晝まて語る、

藥王寺より小路に入に樹多くして人家稀に處々琴の音を聞き幾度か耳を傾けて一處を徘徊す。

目を擧くれは、春とてうろたへぬ松あり、春とて感せぬ枯木あり、春とて知らさる桐あり、若葉めにつく柳あり。一羽の烏、奧深き寺院の森より出てゝ何けなく喬木の梢にうつるあるかと見れは、何處ともなく歌ひ

つゝ宛然琴の名殘に似たる鶯ありけり。

行き行きて練兵塲の前に出つれは、春馬心猿狂ひ、曠野も之か爲に狹きか如く、猛將勇士も馴すに苦しめり塲盡きて二坪はかりの小き圃あり。杉垣の圍めるか中に小麥を植えたり。麥青く土黑き間に、ところどころ菜種の花に一蝶垣を洩れ來りて菜種につき目眩がりて麥に向ふ一羽二羽の雀も亦時々下りて土に喙はむ、垣の隅に向ふ一株の梅あり、閑に微風に隨ひて豆まく如くに畦に散れり、また古井あり、垣後に藏る、定めてこれ家の迹ならむ。

通ひすくれは小かなる野店あり、車夫三四、一人の少婦を相手にさゝめきつゝ團子を喰ふ、甘きよりも愉快らしゝ。

小笠原邸後の小徑に入る、仰き見れは神の鉾杉とも云ふへき老杉、肅森として空を摩し杉の觀念をして高く天に達せしめ、蔭は深くして地中に徹す。森は深山幽谷の如く枳殼の垣根の中、太古の風絶えす青葉を吹なびかし、偶々垣の透間よりもれ出る微息たにも冷かにして春秋の如し。

谷より上れは菜花園あり、思はぬ茅屋に思はぬ櫻を看る。家は鎖して少女と稚兒と留守をまもる。

再ひ街に出つれは浮世の春の忙かしさを郵便脚夫に於て見る、音信柱(ポースト)の頭を撫てつゝ野路に入れは、霞濃かにして野を見す、菜つむ少女兩三個、野に餘りて我門につめり、くやしき哉宅(うち)にこそ在るへかりつれ。

ユニテリアン教私解

土谷忠治

今本編を公にするに際し、特に世人の記臆を請はんと欲する所のものぞある、そは余の見解決してユニテリアン教徒を代表せし議論に非ずして、唯余自身の觀察と希望とを縷述せる、一個の日本ユニテリアン第一協會員としての私論たるとこれなり。余の觀察果してユニテリアン教現今の狀況と一致するや否やは、余の敢へて問はざる所。而して本論の記事に對するの責任は、余以外に於いて之を知る者なく、直に取つて以て、ユ

ニテリアン教を論ぜんとするが如きは、決して當を得たる者と云ふ可からず。余は無責任の言論を吐く者に非ず、故に本論に對する責務は、余の正に喜んで受くる所なり、世人請ふ幸に余の愚を棄つる勿れ。

果して正に其の職を盡せるや、果して能く其の名に背かざるや否やは、素より別問題に屬し、兎に角余は自から呼ぶに宗教家を以てする者なれば、その間必ず一定の主義目的なかる可からず。今世に立つて自から宗教家に擬す、如何なる信仰をか有せる。新に一宗を開立せんずる者か、余の淺識敢へて當る可からず。余は唯故師故聖の遺訓を繼ぎ、以て益々その改良進涉を希圖する者、唯に舊法を墨守し、或は妄に破壞を唱ふるが如き徒を傚ぶ者に非ず。

今日全世界に於ける宗派を通觀するに、その數無數、一神教あり凡神教あり、或は顆多の神を作り之に拜伏し、或は禽獸を以て神に擬するあり。即ち基督教、猶太教、火教、佛教、回々教等の數者あるも、就中眞理に最も近く、宗教的感化の最も勢力あるものは、基督教と佛教とのみ、その他は碌々として見るに足らざるなり。

余竊に擬して先人の遺訓を祖述すと云ふ、佛基何れをか取る。余未だ學淺く識なし、一宗を排し一宗を採り、一派に與みし一派を拒み斥けんとする、賢明なる宗派の裁判官と自稱する者に非ず。換言せば、余の自から呼んで基督教徒（クリスチャン）と云ふ、耶蘇基督の教を採ると共に、全く佛者の教を棄却する者にあらず、甲に於いての善は乙に於いても善たる可く、彼れの善たる所我れ採つて以て自からの善とす可く彼れの不德は勸めて以て善道し、吾が力を擧げて彼れを愛し、彼をして益々勵みて失はざらしめんとを期するなり。而して余が兩者中基督教を撰びしもの、その教ふる所最も簡易にして而かも高遠に、最も單純にして而かも深邃なる、正に宗教の名に於いて一も缺くる所なきを信ずるが故なり。若し基督教に價値なからんか、誰か能く之れに着く者あらんや。故に佛教にして之れに超ふるの價値あらんか、余は佛者たるを辭せず、然れども佛教果して價値

ありや否や、未だ余をして有りと斷ぜしめ能はざるなり。碩學チヤンニング氏、主耶蘇基督の德を頌して曰へるあり、曰く

或る者は其の神秘なる性質に依つて基督を愛せん、然れども余は彼の靈と生命との正しきに依りて愛す余は彼れが猶太を通して愚かなる者を教へ、病める者を癒やし、盲なる者を開きたる所の其の仁愛に依り彼れを愛するなり。賤しき税吏（みつぎとり）、厭ましきサマリヤ人、愚昧なる異教徒をも容れ、世を神と幸福とに導かんと求めたる一般の恩惠によりて彼れを愛す。余は如何なる輕侮も凌辱も迫害も之れを壓倒す可からず、その友の幸福を祈る如く熱心に、敵の改悔と幸福とを願ひける、彼れの柔和、温良、忍耐なる精神に依りて彼れを愛す。余は彼れが危難と反抗との間に立ちて神の命じ給へる事業に、忠實に其の身を委ねし豪氣にして確實に、正義の爲めに大膽なる精神に依りて彼れを稱するなり。余は彼れが之れを以て人類の眞正なる心靈的の利益を固執し、之れに依りて彼れ等を其の罪より贖ひ、己れの神と齊しき德に從ひ、彼れ等を創らんが爲めに生き且つ死したる所の、智慧あり光輝ある熱心に依りて嘉するなり。要するに余が夫の基督を愛してやまざるもの、一に彼れの道德上の卓越に在りて、復た他に愛す可きものあるを知らざるなり。

又曰く

人の靈魂上に勢力を及ぼせる者、未だ耶蘇基督の心靈と其の品性の如く大なるはあらず……人間を進歩せしむる所の衝動は耶蘇の品性にして、絶えず愈〻明かに之を曉り、且つ次第に深く之れを感ずるに在り……其の屬天的の愛を有するとこそ、實に彼れが宗教の生命たるなり。

大器は常に晩成す、吾が徒にして先聖故師の摸型に則り一もなすなき人たらんか、世の誤解を招くの恐れなしと雖とも、吾人の期する所、吾人の目的とする所は、實に遙遠悠久にして而かもその擴がりは無限なり、故に常人の眼界より以て曖昧なりとし茫漠と云ふもの全

く理外の理に非ず古來大人君子の世に誤解せられたるを見ば、吾が徒も亦一の大人君子として誤解せらるゝなりと誇る可し。見よ先師基督は如何に誤られけるか、奇蹟を行ふと云ひ、不可思議をなすと稱し、甚だしきは誤解の爲めに、遂に十字架上聖血を滴らしめたるに非ずや。釋伽牟尼は如何、一度彼の經典記錄を閲くあらば果して如何、核提の心を以て老成人の心事を推し、無智曖昧の現象を以て大人君子の所作を推測す、素より合當す可きに所に非ず。余は世の核提の心を以て老者に向ふ、その可憐を愛す、然れども自己の境遇を忘却して妄に艾老に擬せんとする、其の誇や惡む可く、その矇や憐む可し。

（未完）

兒童の宗教思想に就きて

在秋田市　戸城傳七郎

兒童の宗教上の觀念は彼等が成長後に於ける德義の消長に頗る重大なる關係を有することなれは、神佛及ひ未來世界に就きて現今日本の兒童の如何なる思想を有するかは吾人の切に知らんと欲する所なり。若し此の問題に就き精確なる答辯を與ふる者あらば、教育家は勿論、宗教家にも益する所甚た大なるへし。

余は此の問題に就き、頃日余が兒童を教育するの餘暇を以て、試みに一の試驗を施したり。敢て此の如き重大なる問題に答へんとするの意より出てたることに非す且つ其の試驗も極めて粗雜なるものなれは、素より之に由りて何等の斷定をも得るに足らさるを知ると雖も、世には此の種の問題に就き現に研究せらるゝ人もあるへしと信するを以て、左に其の結果の大概を錄し聊か萬一の參考に供せんと欲す。

試驗の方法は、若し充分の時間ありて一々問答して彼等の所思を吐かしめば、極めて要領を得へきなれとも、惜むらくは左る有餘の時間なきを以て、已むを得ず、數十名を一室に集め、塗板に左の問題を掲けて、隨意に各自の考へを筆記せしめたるものなり

第一問　神とは何ぞや。

第二問　佛とは何ぞや。

第三問　人死すれは如何になりゆくべきか。

第四問　魂と云ふは有るものか、無きものか、若し有らは如何なるものか。

右の内往々有力なる質問の起りたるは第三問及ひ第四問なりとす。蓋し余輩をして彼等の地位に置かしむるも、此の如き空漠なる問に對しては必然起らさるを得さるの疑問一にして而して足らさるなり、就中須要なる疑問は左の二ヶ條なりとす。

第一　人とは何ぞや。

第二　魂とは何ぞや。

兒童は素より余輩の如き深遠なる思想を以て質問したるに非すと雖も、要するに、彼等が答案を筆記するに當り、先つ疑惑したる所のものは右の二ヶ條にあるものゝ如くなりき。然れとも、若し當時余が意見を説明して人及ひ魂と云ふ二語の解釋を與ふるに於ては、此の試驗は殆と無効に歸せさるを得さるの憾あり、何となれは、斯の如くするときは、彼等は只管敎師の意のある所を推察して之に適當せる答案を作り出さむとすへきが故に、さては眞率なる兒童の思想を觀察するに由なきを以てなり。さなきだに、如何なる答をなさば敎師の滿足を買ふに足らんかと云ふ思想上の躊躇は、往々彼等の筆端を窘束せしめたる傾向ありしと思はる、師弟の間柄にては誠に已むを得さることなり。然れとも、此の試驗は彼等の身に取りては極めて突然なる出來事にて、余が何等の目的を以て斯かる試驗を施すかは今日に至るまで彼等の全く知らさる所たるなり。さて第三問及ひ第四問の質義に對しては、余は單に左の如き説明を與へたり

第三問の趣旨は、汝等が斯く言動し居る生命は死後如何になりゆくへきかと云ふことなり。

第四問は、汝等は現に魂と云ふ語を使用しつゝあるなり、果して然らは其の魂と云ふは有るものか無きものか云々と云ふことなり。

此の試驗を施したる兒童は、高等小學科第三年男六十四名女十一名、第四年生男三十五名女八名、合計百十八名にて、年齡は最長十七年七ヶ月、最少十年十一ヶ

月、平均十三年十ヶ月強なり。

彼等が答案を草するために用ひたる時間は、速きは三十分、遅きは一時三十分を費したり、而して其の言辭は極めて蕪雜なるもの多く、中には全く其の意の在る所を知ること能はさるもありたれば、類によりて異同を分別し簡畧に其の結果を記錄せんこと頗る難かりしと雖も、姑く其の小異を舍て大同を取りて左の如き結果を得たり。

第一問　神とは何ぞや。

此の問に對する答案は大凡左の五種に分れたり。

其一、神とは我か　皇祖皇宗を始め奉り、世に功德ある人物を祀りしものなりとの意を以て答へたる者……男八十二人、女十五人

其二、神を以て人間以外の靈物なりと信したるもの……男六人、女三人。

其三、御幣の如き有形物を神なりと答へたるもの……男一人。

其四、單に假設の名目たるに過ぎずと云へるもの……男三人。

其五、答辭曖昧なるもの若くは答なきもの……男八人。

第二問　佛とは何ぞや。

此の問に對する答は總て左の六種に分れたり。

其一、死者を祀りて佛と稱せりと云ふもの若くは死者を以て直に佛なりとするもの……………男五十五人、女十五人。

其二、釋迦及ひ阿彌陀如來等を稱して佛なりとするもの若くは其他一般に有德の聖賢にして他を敎化するものは即ち佛なりとの意を以て答へたるもの……男十一人、女一人。

其三、佛敎を以て佛なりと思へるもの…………男十七人、女一人。

其四、假設の名目たるに過ぎずとするもの若くは偶像を指して直に、佛なりと答へたるもの……男七人。

其五、佛とは人の靈魂又は精神なりと云へるもの

……男四人。

其六、答辭曖昧なるもの若くは答なきもの……………………男六人、女一人。

第三問　人死すれは如何になりゆくべきか。

此の問に對する答は大別して三種とす、左の如し。

其一、人には魂魄あり從て人死すれば魂は來世に云々の生活を得へし又は云々の狀態なるへしとの意を以て答へたるもの…………………男二十二人、女三人。

其二、人は肉躰の死すると同時に全く空寂に歸し消滅するものなりとの意を以て答へたるもの……男六十八人、女十三人。

其三、答辭曖昧なるもの若くは答なきもの……男十八人、女二人。

第四問　魂と云ふは有るものか、無きものか、若し有らは如何なるものか、

此の問に對する答は大別し四種となす、左の如し。

其一、魂を有りとするもの…………………………男二十四人、女三人。

其二、魂を無しと云ふもの…………………男四十八人、女十四人。

其三、生前にはあれと死後には無しとするもの若くは人の精神又は心意を以て魂なりと云へるもの……男二十四人、女一人。

其四、答なきもの又は知らずと答へたるもの……男四人。

右の類別は前述ぶる如く極めて粗大なるものなれとも、先つ大躰を知らんが爲には却て便利なるへし、而して此の十數種の答案中最も人員の多數を占めたるは果して如何なる類の答案なるかを知らは、亦以て彼等が宗敎思想の如何に幼稚なるか將た如何に冷淡なるかを知るに足らん。余は今之を更に一層細密に類別して以て此の統計の由る所を明にすへし。

第一問に對する第一種の答案中には更に左の四種の小別あり。

其一、神を以て本邦の　皇祖皇宗を祀りしものと

するもの……男八人、女二人。

其二、天皇を始め奉り、國家に誠忠にして我等を守護する方は神なりと云へるもの…………男一人。

其三、神とは世に功勞ある仁人君子を祀りしものなりとの意を以て答へたるもの…………男六十八人、女十二人。

此の内、別に神と云ふものなしと斷言せるもの男七人女二人、靈驗ありと云へるもの男二人、死して世にあだを爲す者をも祀りて神とすと云へるもの男一人あり。

其四、神とは善人（又は賢者）を祀りしものなりと云へるもの（其の意前項に同きが如しと雖も、答辭極めて簡單なるを以て假に分ちて別項とす）……男五人、女一人。

此の内、祈願の効ありと云へるもの男二人あり。

第一問第二種の答案亦分ちて四種となす、左の如し。

其一、天地萬物の創造者は即ち神なりと云へるもの……男一人、女一人。

此の内、女一人は天主敎徒某の女なり。

其二、神は人間の形を爲し善惡賞罰を掌るものなりと云へる……女一人。

其三、神は善心にして人の形を爲し人の爲し得ざる業をなすものなりと云へる…………女一人。

其四、神は目に見えぬ尊きものにて人に賞罰を與ふるものなりとの意を以て答へたるもの……男五人。

第一問第四種の答案中には左の二小別あり。

其一、神とは人を敎ふる方便にて只名目たるに過ぎずと云ふ意を記したるもの…………男二人。

其二、神は只古代よりの習俗たるに過ぎず其の實は無きものなりと云へる…………男一人。

第二問第一種の答案も細別すれば左の四種となる。

其一、佛とは祖先を忘れざらんために祀りしものなりと云へる意を答へたるもの…………………男十八人、女四人。

此の內、人の死後を保護するためと云へど未來の事なれば信じ難しと云へるもの男一人、少年は信ずるに及ばずと云へるもの同一人あり。

其二、佛とは死人を祀りしものなりと云へる……男三十人、女六人。

此の內、人死すれば哀しみにたへず溺れて祭るなりと云へるもの女一人、死者を慰めんためと云へるもの……男一人あり。

其三、佛とは死人のことなりとの意を以て答へたるもの……男十一人、女四人。

此の內、本躰は無きものなりと斷言したるもの男三人、佛の如きは禮拜するに足らさるものなり吾人は佛敎の行はるゝによりて日本の未開國たるを知ると云へるもの男一人あり。

其四、佛とは死人の魂を祀りたるものなりと云へる……男四人、女一人。

第二問第二種の答案中には觀るに足るべきもの少なからす、而して之を細別すれは凡そ八種となる、左の如し。

其一、佛とは印度の釋迦の事なりと云へるもの……男三人、女一人。

死後の苦樂は愚人の爲に設けたる說なりと云へるもの男一人あり。

其二、釋迦及ひ阿彌陀如來等は即ち佛なりと云へるもの……男一人。

其三、佛とは學問あり又慈悲心ありて自利利他の願行滿足せるものなりと云へる……………男一人。

此の答を出しゝは有名なる某寺院の小僧なり。

其四、仁慈にして人と爭はず其の德無上に高大なる之を佛と云ふ……………男一人。

其五、人に惡の爲すへからさるを敎へ世人を敎化

して善に趣かしむるもの之を佛と云ふ…………男二人。

其六、釋迦は佛なり其他の諸佛も釋迦の如き功德あるゆゑに佛とは稱するなり……………男一人。

其七、佛教信者にて善をなしたるものは之を佛と稱するなり……男一人。

其八、單に佛は神と同しく有りがたきものなりと云へる……男一人。

第二問第三種の答案には左の六種あり。

其一、單に釋迦の教は即ち佛なりと云へる……男十一人、女一人。

此の内、佛教を修すれば心定まり大業をなすに宜しと云へるもの男一人、古の聖人世を教化するため佛法を始めたり故に德義を明にし私欲なきものを今も佛の如き人と云ふと云へるもの同一人あり。

其二、死後の道理を教ふるものなりと云へる……男一人。

其三、單に釋迦の方便なりと云へるもの……男四人。

其四、佛教の一字を取りて佛と云ふ此の教にては死後の苦樂を教ふる故に死人を亦佛と稱するなり……男一人。

第二問第四種の答案は分ちて左の三種となす。

其一、佛とは邪見の人を導くためにしたる假設の言なり……男一人。

其二、寺院(又は家内)に飾りてある佛像は即ち佛なり……男四人。

此の内、木造りの偶像なり迷ふべからずと云へるもの一人あり。

其三、神と同く無きものなれとも只其人を忘れざらんが爲にと云へるもの…………男二人。

第二問第五種の答案は左の一種を除くの外特に記するに足るものなし。

一、人死すれは其の心のみ永く此の世に殘りて居るなり之を佛と云ふ……………………男一人。

第三問第一種の答案には實に許多の小差別あり、今假に分ちて左の十種とす。

其一、人死すれは生前の善惡行によりて更に人間又は他の動物に轉生すと云へるもの…………男一人。

此の答を出しゝものは前に謂はゆる某寺院の小僧なり。

其二、人死すれは魂其の身より脫けて更に別人の身に入りて人となると云へるもの…………男二人、女一人。

其三、人死すれは行の善惡によりて魂の往く所に差違ありと云へるもの…………男五人、女一人。

其四、人死すれは魂天に往きて躰のみ地に留まると云へる……男一人、女一人。

其五、肉躰死滅して魂は永く存すと云へる……男二人。

其六、人死すれは如何なる世界に往くかを知らされとも、現世にて善をなせば死後も亦現世同樣の生活を得へしと云へるもの…………男一人。

其七、人死すれば躰は土中に埋められ魂は死せずして知りたる人を訪ふと云へるもの……男二人。

其八、人死すれは肉躰の機關止みて魂元に歸るなりとの意を答へたるもの…………男二人。

其九、人死すれば魂は漸次稀薄になりて遂に消滅し、躰は土中に腐敗するなりと云へる……男一人。

其十、人の死したる後は長夜の夢の如くなるへしと云へる……男五人。

此の內、睡りて夢みざるときの如くなるへし地

獄極樂の說は虛妄なりと云へるもの一人あり。

第三問第二種の答案は只左の二種をなせり。

其一、人死すれば土中に埋められ後には腐りて土となるのみと云ふ意を以て答へたるもの……男六十五人、女十人。

此の內、地獄極樂の說は信ずるに足らずと明言せるもの男七人、腐りて後のことは知るに由なしと云へるもの同二人あり。

其二、人死すれば只善惡の名を殘すのみと云へるもの……男三人、女三人。

第四問第一種の答案には左の三種あり。

其一、單に魂は有るものなりとの意を以て答へたるもの……男二十八人、女二人。

此の內、魂は有るものなりとて實例を擧げたるもの男四人女一人あり、左に其の一を錄すへし、

魂は有りと云ふ某女子の答案

「魂は有るものか無きものか未だ詳ならざれども、妾が父の入棺の夜寢するとて便所に行くとき、椽側を通りたれば、父の姿にて立ちたるを見る。又母の病氣の時、妾の髮を引きたりと思ひければ、翌日行きて聞きたるに、引きたるなりと答へたり。之によりて魂は有るものと思ひたり。」

其二、魂は有れども形の無きものなりと云へるもの……男二人、女一人。

其三、魂は氣躰の如きものなりと云へる………男二人。

第四問第二種の答案には左の四種を含めり。

其一、單に魂は無きものなりと云へるもの………男三十三人、女六人。

其二、魂は無きものなり之を有りと云ふは神經作用の致す所なりとの意を答へたるもの………男十四人、女七人。

其三、魂は有りとも無しとも言ひがたし只神經作用にて其の物を作り出すときは則ち有るなりと云へる……男一人。

其四、魂は無きものなり世に魂ありとて恐るゝは

狐狸のしわざなりと云へるもの…………………女一人。

第四問第三種の答案は寧ろ第二種中に入るへきものなれど、稍其の趣を異にするを以て、假に別項となしゝものなり、此の內亦左の五小別あるを見る。

其一、單に生前にはあれど死後には無しと云へるもの……男八人。

其二、魂は生前には有る、即ち心なりと云へるもの……男六人。

其三、生前には有る即ち精神なり、而して死後には無くなると答へたるもの……………男三人、女一人。

第四、魂は氣象なり、例へば日本魂は日本人固有の氣象なるが如しと云へるもの…………………男四人。

其五、死後一念の殘ることはあれど魂と云ふものはなしと云へるもの……………………………男三人。

余は此の記事を終るに臨み一言以て讀者の注意を喚ばんと欲することあり、他なし、以上記する所に由りて之を觀れば、余は玆に少なくも左の二命題を假定することを得べきなり。

第一、此の試驗に應じたる兒童の大凡三分の二強は全く未來世界の觀念を有せざるものなり。

第二、彼等は神佛を禮拜するを以て單に社會上の儀式なりとし、神佛は吾人に何等の賞罰をも與ふるに足らさるものなりとの意を表白したり。

若し此の假定をして事實ならしめ且つ彼等の宗敎的思想は永く此儘に留まりて進步せざるものと假定せば、彼等が成長後に於ける德義的行爲は果して何如なるものなるべきか。世の尋常一樣の人物にして、未來世界の觀念なく且つ神佛の賞罰を意とせさる者も、尙能く私慾のために其の身を誤らずして、無事に生涯を經過し得べきものなるか。其の幼時より養成せられたる單純なる德義的觀念と纔に社會の擯斥を恐るゝ區々たる名譽心とのみに由りて、彼等は果して能く此の浮世の

辛酸を甘んじ、邪道に陷らざるを得べきものなるか。宗教は終に世に無用のものなるか。余は大に玆に疑なきを得ざるなり。余の試驗を施したる百餘の兒童は余が最も愛する所の教育盛りの學校生徒なり、彼等の教育に就きては余別に自ら分別する所あり。只恐らくは滔々たる天下、宗教忌避説の勢力を逞うせる普通教育の結果は、終に幾百萬の兒童を驅つて悉く無宗教の人たらしめ、其の未來世界の觀念を撥無し（たとへ妄想にもせよ）、永く之をして神佛の擁護にあづかることを得ざる不幸の人類たらしむるに至らんことを。讀者以て如何と爲す。

雜録

○神──人

片言片語、匍匐行歩にさへ熟せざる乳臭の核提、革包を肩にして漸く校舍に上る童蒙、彼れ等に逢うて問へ、『神耶人耶、人耶神耶の問を』眞理は是れより來らむ。車夫馬丁の如き無智朦昧、爭鬪をこれ事とするの野夫殘忍酷薄の無賴漢、彼れ等此の問に向うて何と答ふ可き、亞非利加内地の禽獸的人種に、亦半開の人種に、開明の人類に此の問を繰り返せ、その他古人今人の何れにも、賢愚老若の誰にも繰り返せ、彼れ等の答辭果して如何ある可き。青年壯丁の無神論者さへ、苦しき時には神を憑み、社會最大の罪人たる彼の盜人さへ、その身の安全を神の御前に禱るに非ずや。是れ等の先天的心理の本質が誤れりとせば、吾人復た何をか言はむ。『大なる神』てふ一觀念は、その先天説によると經驗説に據るとを問はず、今より幾千萬年前來、既に各人の心裡に具はり來れる一現象として信ずるに、敢へて難からざるなり。或る人は言をなして『其の想像の仕方と批評の工合によりて、人を半文錢の價値なき蛆蛹の如しともせられ、又之れを高等なる者に觀せば、人は眞理より來りしか、眞理は人より生せしか、神か人か、人か神かとの問にも迷ふ』と云ふ、此の言果して正理なる可きやは、片紙の能く陳べ盡す所にあらざ

れば、後日期を得て詳論するある可し。今は唯々數語を遺して讀者の判斷に委せん。或る人の人類は高下の何れにも考へらると云ひ、神は人に依て生ぜしにあらざるかと云ふ、果して然らば、天然の法則即ち宇宙の眞理なる者は、能く人力を以て左右し得るとなさゞる可からず、然らば此の宇宙に永遠不磨、終始不滅、絶躰不變なる者の存する理なし、世に無始無終、唯一不二、悠久不變、純善純美にして而かも純愛なる絶對的一大聖靈の存するあるを認む可からず。此の大勢力大々的聖靈が猶人意の儘なりとせば、既に宗教の要はあらざるなり、否宗教なる者の存す可からざるに至らん。即ち彼れも一時此れも一時、遂に一種のソフィストたり了らざる乎呵々。（CT生）

○迷執

迷とは執着なり、偏僻なり、頑冥なり。執着を執着と觀ずるは既に執着に非ず、偏僻を偏僻と悟るは既に偏僻を脱せるなり、頑冥を頑冥なりと自から罵る者は既に頑冥を遠かりたる者なり。迷の迷たる處は迷ひたるに在り。自から自己の境遇を知らず、時を知らず、處を知らず、遂に一も自から自からの存在を知るなき者これ迷の極たるなり。迷は常に人をして盲ならしめ、啞ならしめ、聾ならしむ。故に迷の趣く所に天理正義の光なく、聲なく、言なし、唯彼れに見へ彼れに聞ゆるものは、一種の囈語なり、自負の朦雲たり、唯我的の妄想なり。彼れの爲めには聞くもの見る者一ッとして自負を增さゞるはなく、身外皆仇敵の如く觀ぜられ、遂に彼れは唯我獨尊と稱し、驕傲放肆の悪魔と化了せるを知らず、妄に人を罵り人を傷け自から得たりとなす、何ぞ其の迷の迷ひたるの太甚しきや。吁噫我を死せしむるものは迷なり、吁噫我を誤らしむるものは迷なり。古來家を亡ぼし國を仆し身を滅するもの、一に迷の結果に非ざるはなし。坊主が憎くければ袈裟まで憎く、若し一度吾が嗜好に投じ情慾に適せば、復た再び其の瑕瑾を知る可からず、これ迷の極、百悪の所依たり。於是乎釋伽佛數十年の辛苦は轉迷開悟の四字となり、基督十字架上の鮮血は改悔博愛の因縁たりしなり。

○希望

一は一なり二に非ず三に非ず、同じく一たるなり、彼は彼れたり此は此れたり、此を彼れと云ひ彼を此れと云ふ、既に其の誤たるを免れざるなり。今は『風吹く』と云ふ、決して吹かざるに非ざるなり。『吹かず』と云ふ、既に其の吹かざるを知る可きなり。風の吹くは吹くのみ、吹かざるは吹かざるのみ、吹かざるものを吹けと云ひ、吹くものに吹くなからんを欲す、亦得べからざるなり。これをしも求めて得可くんば世に願つて得可からざるものやはある。決して／＼あらざるなり。既に大々的の自然をして微賤なる人智の爲めに、易々として運がされ得可くんば、時に人に希望てふもの、絶ふるなり。人世の希望てふものは其得難きに於て益價値を高るものなり。世に吾人の願望一として得られざるなくんば、遊惰放縦遂に亂世の民となり。幸福てふものを見可からざるなり。於是吾人決して自然の抂ぐ可からざる知る、故に能く其の自然を率ゐて世益を計り、吾が使命を果すは正に吾人の任務にして、人世の行路は自然との戰爭なり、能く之れを伏する者。これを賢となし聖となし、その自然の爲めに使はるゝもの、これを愚とし痴となす。賢愚聖痴の別るゝ所、實に此の一髪に在り。

○妄想

妄想とは然かある可きものを然かあらざらしめんとし、然かある可からざるものを然かあらしめんとする是れなり。白は恒に白たり。黒ならず青ならず亦赤ならず。白は依然白たるなり。これをしも黒となし青となし赤となさんとする者、これ妄想の太甚しきものと云はざる可からず。世に成さる可きものと成さる可からざるものとは、自然にして存す。此の成さる可からざるを爲さんと祈り、成さる可きを爲さゞらんと願ふ、これ徒勞たるを免れず、空想たるを得ざるなり。『天地爲一物不抂其時、日月爲一物不抂其明』宇宙の萬象皆悉く不可動的の命あり數あり、之を動かさんとする、妄想の極たり。然れども此の意決して放任絶望を意味するに非ず、正に其の抂ぐ可からざる所の自然を率ゐ

て人世の便宜たらしめんとするなり。絶望落魄、妄想迷誤は決して神の使命に非ず、吾人は吾人が稟け得たる使命によりて正しく其の責務を行らば、自然は遂に我が有に歸せんのみ、自然に所有主あらず、得んと行る者に歸るなり。

○世事

『行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかとまたかくのごとし』とは、これ鴨長明をして發せしめたるの嘆聲ならずや。昔時ヘラクリタスをして、宇宙の本質は流轉變化にして、相反の物、互に相克爭して萬物をなす、宇宙の存在は爭鬪にして、一時一刻も停止するものに非ずと觀ぜしめ、『爭は萬物の父、萬物の王なり』『再び同一の水流に入るを得ず、常に散して忽ちに集り、常に流れ來りては忽ちに流れ逝る』と、嘆かしめたるも亦無理ならぬなり。野山に咲ける梅、櫻、桃、桔梗、萩薄、女郎花、彼れも一時の榮えのみ、是れも瞬時の眺めのみ、昨日の淵は今日の瀬となり、流離顛沛も永續するものとては非ず。盈つれば缺くる世の習ひとは、かねて聞きつることなるが、かほどまで淵瀬定めぬものなるにや、起きては倒れ、倒れては起き、榮へては衰へ、衰へては榮へ、集りては散り、散りては集り、咲きては落ち、落ちては咲き、暫らくも停まることなし。生れては死し、死しては生るゝ、人生の行路僅かに一瞬時、何ぞ其の蛆蟲然たるや、蚊蝿に髣髴たるや。空に滿てる野馬、地に殖うる蜉蝣、於戯何ぞ其の蠢々たる。彼れ旦に生を享け、夕に命を奪ひ去らる、於戯何ぞ其の生死の急激なる。思ひ至れば何一ッとして絶望の種子たらざるはなく、厭世の導火たらざるはなし。吁噫世事果して厭世的激變なる可き耶、絶望的反爭なる可き耶。吾人が世事を變化と觀たるは眞相耶。將た妄想耶。この眞想?、この妄想?、遂に世事より離す可からず。この離す可からさる眞想?、妄想?、遂に人事に及ふ可き耶。

○人事

人事はこれ總へて邯鄲夢の枕、人間萬事塞翁の馬、轉一轉して齷齪たる苦海と稱せられ、意の如くならざる浮世と觀ぜらる、一休和尚は以て『門松や迷途の旅の一里塚、目出度もあり目出度もなし』とし、或る者は人事を觀て笑ひ、或る者は泣き、あるは悲しみ、あるは樂しみ、あるは愁ひ、あるは喜ぶ、悲泣する者それ眞耶、笑樂する者それ僞か、眞耶僞耶、僞耶眞耶、吾れ之れを知らず、知らずと雖とも悲泣する者あり、笑樂する者あるを知る。既に然らば人世の事、苦あり樂あると亦巫ふ可からざるなり。その人事總へて苦と觀ずる所厭世家の偏見となり、樂とする所狂樂天家の妄想に過ぎず。人事決して苦に非ず樂に非ず、非苦に非ず非樂に非ず、正に其の中道たる可きなり。何をか中道と云ふ、塞翁的の高蹈乎、邯鄲夢底の超然乎、一休的の無頓着乎、高蹈、超然、無頓着吾れ其の善なるを知らず。これ等は昏迷的佛徒の開悟として尊ぶ所のもの、狂樂天家、厭世家と一ツも撰ぶ所なきなり。吾人が以て中道と唱ふる者、決して斯る片目的觀察に非ざるなり。世はこれ虚と眞、僞と正、苦と樂、善と惡との兩性の對待にして、決して獨存する者に非ず、眞は虚によりて彰はれ、正は僞によりて觀へ、樂は苦の反面、善は惡の側面なり。世事の大活劇、大々的走馬燈を、虚僞苦惡の目を以て觀ぜば、總へて虚僞ならざるはなく、苦惡の舞臺に非ざるはなし。若し眞正樂善に觀ぜば、一ッとして樂園（パラダイス）に非ざるはなし。白粉黑黛はこれ粋人の喜ぶ所、曲學阿世はこれ僞善者の能となり、追縱輕薄はこれ小才子の飾りなり、以て世を慢し人を狂かす具、君子はこれを世の塵埃とし、美酒佳肴は小人之れを食ひて快哉を呼び、君子は之れを食して後果を念ひ、小人は粗衣麁食の苦に泣き、君子は之れを以て氣慨を養ふ。或る者の喜び或る者の悲しむ所、本之れ唯一のみ。その觀察の異なる此の差を出だすなり。故に人世の事は正に苦を征げて以て樂を迎ふるに在り。此の苦を夷げ樂を迎ふるの大活劇、兩性克爭の大運轉を稱して進歩と唱ふる者あり。然れども大活劇は大活劇なり、大運轉は大運轉なり、直に以て進歩と稱す可から

ず。吾人終極の目的は、進歩の行程に勝利を占めんとするに在りて、眞個の進歩は苦痛邪悪を排して、快樂善美に到達せんずる、大活劇、大々的運轉の結果に過ぎず。於是、苦は樂を生す可き母たり、悪は善を彰はす父たるなり。能く苦に打勝ち、悪に勝利を占むる者、之れ正に人事を果せる者なり。

○宗教博物舘

宗教の研究は單に經典等に依りて好結果を得らる可き者に非ず、當時の實物に就て實際の風俗習慣、禮典祭式等の狀況を察し、其の實事を知らざる可からざるなり、然るに我國に未だし、これ神學研究上の一大缺點なり。今や京都同志社にては湯淺吉郎、松山高吉の諸氏是に見るあり、此の缺を補はんが爲め、宗教博物舘の設立を計畫す。この擧や吾人の兩手を揚げて大に賛する所、其の宗派の何たるを問はず、苟も宗教に志ある者は正に奮て此の擧を賛し、左の蒐集種目の內に入る可き物品を有する者は、進んで寄送し、該計畫をして滿足の結果を得せしむ可し。さて蒐集の種類は

第一　佛教之部

一諸　佛　像　金佛、繡佛、木像、石像、陶像、畫像等
一各派之佛具
一各派之法衣
一各派之佛號
一各派之樂器
一各派之呪文及經文等其他凡て佛教に係る新古の物品

第二　神道之部

一諸　神　像　木像、陶像、金像、石像、畫像、神號及神躰に用ひし鏡劍玉石等
一各派之祭具
一各派之祭服
一各派之樂器
一各派之祝詞祓辭、誄詞、訓戒、祈禱文及教書等其他凡て神道に係る新古の物品

第三　天主教之部

一諸像　基督、十字架、聖母、聖經等の木像、石像、金像、畫像等
一樂器及諸器具
一聖經　讚美歌、呪文、祈禱文等及初代の信徒に係る古き書物、禁制の高札等其他凡て天主教に係る新古の物品

第四　雜宗之部

一儒教、道教、其他諸宗教の典籍像具及諸物品

噫是れ我國神學の一大光輝を發す可きの曉なり。今後の宗教爲めに一新面目を開かむ。

○教育と宗教の再衝突

井上博士の衝突論は、教育と宗教との衝突といふに非ずして、我が國現今の教育主義と基督教との衝突を論ぜしならざるかとは、吾人の嘗て記せる所なり。而して今や文學博士元良勇次郎君は、高橋五郎氏の麤豪なる筆にかゝりて辯護説とか、眞君子の豹變とか、詈られつゝ陣頭に立てり。而して其の論ずる所は、井上博士の着眼の點とは異にして、宗教と今日の所謂國家教育との衝突を議せるが如しとて、大西文學士の反駁に逢ひ、始めて學者的の議論となる。而して其の兩説の可否は、未だ劇に決す可からずと雖とも、元良博士の所論、吾人を滿足せしめ能はざりし所尠少ならざりしは、吾人の千萬遺憾とする所なり、就中、氏が教育と宗教との衝突を以て、一は國家の上に立ち、一は宇宙に横はるものなれば、其の衝突は免れざる所なりと解し、或は教育は國家の臣民を造らんとし、基督教は神の民を造らんとするものなれば、兩者豈衝突なきを得んやと云ふが如き、誠に其の論據の幼稚に驚かざるを得ざる點あり。素より教育と宗教とは其根據を異にし、同一秤量を以て測る可からず、故に衝突のことあるの理なしとは、吾人が嘗て詳論せる所なり。（本誌第十八號二七九頁「第三、國家主義と世界主義」の項を參照）然るに猶ほ此の言をなす、返す々々も吾人が博士に俟ちし所の案外なりしを惜しむ。

○僧侶腐敗の影響

吾人が現今の僧侶社會＝佛教家の腐敗を慨するや久し矣。而して今や其の影響は延いて哲學文學社會に及ばんとす、吾人は當代學術社會の爲めに大聲疾呼、排斥し去る可きの責務を有す、是れ等の瘴霧を鏖滅するは吾人の正に爲す可のことなり、吾れ人決して默して停む可きに非ず。見よ『天則』（雜誌の名）は如何、彼れは創め批難の間に天則居士の手に生れ、後移つて他に歸し、今や其の第五編第十二號を見る、吾人は彼れが特色否臭色に嘔吐を催さゞるを得ざるなり。天則と批難、天則と頑僻とは不可分の因緣の存するあるにや、彼れは終に批難を負うて墳墓の土介と化了せんとす、否社會の爲めにせしめたる可からず。彼れの特色とは何ぞ、腐◎

敗的僧侶の臭氣これなり。彼れは高橋五郎氏の人物評を掲げて罵詈讒謗至らざるなく、頻りに人身攻擊をなして怗として顧みるなく、却つて他の失言を責めて得色あり、何ぞ其の向ふ見ずの太甚しきや。尙ほ此の敗德汚穢の言行恕す可しと雖も、彼れが瘋癲白痴的眼光を以て、府下の文學雜誌を評す、曰く『早稻田文學は……惜い哉耶蘇敎の臭味を帶ぶ。文學界、評論、國民之友の類は皆耶蘇敎徒の機關……眞誠の日本男兒は顧みずして可なり。城南評論は井上博士の一擊に逢うて滅亡し……。同志社文學は……固より一顧の價なきもの』と、何ぞ其の言の暴戾なる、彼れが價値ありとする者は如何、幇間的の阿世文學か、頑迷なる佛敎文學か、偏僻なる攘夷的文學か、彼れが愛する所此の三者に出でざる可し。類は友を呼ぶ、彼れの知る所の者は曲學阿世、頑迷偏僻の徒なる可し。彼れは是れ等の標準よりして文學社會の評價を定めんとするか、何ぞ其の無鐵砲なるや。其の他彼れが得々記する所の者、「朝野新聞の五郎征伐」と云ひ、「敎育報知の五郎征代」、「高橋五郎氏への進物」等、全誌の二分の一を塡めて惜まざるもの何ぞ其の誌面の安きや。吾人敢へて高橋氏の辨護をなす者に非ず、亦爲すの必要も非ざるなり、然れとも天則が此の貴重なる誌面を妄用して惜まざるを責むるなり、彼れが其の腐敗の精神を以て哲學文學社會を攪亂せんとするを咎むるのみ。彼れ常に妖怪彙報を載す、今や其の誌面を擧げて哲學文學社會の妖怪と成り了す。雞鳴に遇うて其の象を藏すは近きにあらむ。彼れが高橋氏に抗し、基督敎主義に敵する、其の正理公道の爲めに存せば、反抗深く咎む可きに非ずと雖とも、彼れが其の阿世の爲めに死にもの狂ひとなりしは、げに可笑の至りなり憎む可きの極なり。

○國民と日本の衝突

今春來何ぞ思想社會に衝突の盛なる、先きに井上博士と基督敎徒との衝突あり、今又國民之友と日本との衝突を見る、二者何れも至重の問題、國家成立の上よりして、亦哲學神學宗敎上よりして決して輕忽に觀過す可からず、國家の一員として、學者、敎育家、宗敎家、

道德家、政治家として、正に充分の論究を要す可きとなり、而して二者の衝突何れも其の根底する所は一なり、即ち進歩派と保守派との衝突これなり。這般起れる國民之友と日本新聞との衝突＝個人制と家族制との衝突は、是れ進歩と保守、開放と攘夷、文明と頑固、活動と睡眠、生靈と模型との衝突に歸するなり。去月廿三日の國民之友は、彼れの活潑々たる理想と、燃ゆるか如き心情と、加之雄健なる筆とを以て、家族的專制なる一長篇を草し、社會の本位を個人制に取らんとを論じて左の如く曰へり、

社會をして個人的本位となすは個人をして責任的職分的自主的自動的自活的人物たらしむる所以にして人性の自然に順ひ之を疏通したるもの也人間の清福固より此中より來らずんばあらず慈父孝子愛夫順婦友兄悌弟固より此の中より出でずんばあらず

而して「日本」は之れを以て謬論悖見と叫び、治安妨害といひ、國憲に對する大罪惡と絶叫し、違勅と呼ぶ、前きには基督敎を以て勅語に反すと云ふ者なり、今復た違勅の語を見る。主義の爲めに正理社會に立つて、堂々公論するを之れなさず、聖勅を濫用して其の庇蔭に己が醜を奄はんとするは、彼れ等の常にして敢へて珍しきに非ずと雖とも、勅語の濫用茲に至りて極まれり矣と云ふ可し。國民の所論悉く吾人の意を得たるものに非ずと雖も、親類縁者の關係は往々青年志士をして其方向を誤らしめ、或はそが爲めに空しく斃るゝ者あり、或は親類縁者の故をもて、他人の勤勞に衣食し、己れは却て安然怠慢を事とするあり、或は義理と稱して心にも非ざる惡事を働くあるに至りては、家族專制の流弊も、遂に默視す可からざるなり。然るに猶家族專制を維持せんとする者あり、吾人其意を知るに窮しむ。

近刊雜書

去月中本會に寄送せられたる書籍雜誌中の見る可きものを載すれば左の如し、而して其の詳細の批評に至りては本號に餘白なきを以て遺憾ながら次號に於て讀者に紹介することゝなしぬ。猶最後に本會發行の書籍を附記せり詳細は廣告に就いて見る可し。

强者の權利競爭及び其の發達（獨逸文）	加藤博士著		同氏發行
ビーチャル	松村介石氏著	東京神田區仲猿樂町七番地	青年會
宇宙神敎確論	アリン氏著 吉村星野兩氏譯	東京飯田町四丁目宇宙神敎	出版所
比較宗敎學 二	アイ、ドゥマン氏著 米田庄太郎氏譯	東京銀座二丁目大日本聖公會	書類會社
道德之危機	ビックスビー氏著 西村謙三氏譯	東京京橋區加賀町	ユニテリアン弘道會
チャンニング氏一語千金	杉山重義氏譯	仝	仝會
パーカー氏一語千金	麻生繁雄氏譯	仝	仝會

⊙三　籟　第　三　號　東京牛込區市ヶ谷仲ノ町　三籟社
⊙早稻田文學　四十一、四十二號　東京牛込早稻田　東京專門學校
⊙評　論　第　六　號　東京麴町下六番町　女學雜誌社
⊙哲學雜誌　第七十六號　東京本鄕六丁目　哲學雜誌社
⊙眞　理　第四十四號　東京神田區三崎町三丁目　世光社
⊙自由基督教　第　十　號　東京麴町區飯田町　自由基督教
⊙六合雜誌　第百五十號　東京本鄕區東竹町　警　醒　社
⊙同志社文學　第百六十六號　京都市　同志社文學社
⊙思　想　第　一　號　東京神田駿河臺東紅梅町　國聲社
⊙中央學術雜誌　第　六　號　東京南豐島郡戸塚村中央學術雜誌

彙報

◉自由神學校閉校式　は去月十五日を以て同校舍內に於て擧行し來會者五十餘名大西文學士、ローレンス氏、ドラッパー氏等の演說あり後茶菓の饗應ありたり。猶同校も近々新入生を募集する由

◉ソクラテス祭　日本ユニテリアン第一協會にては去る二日ソクラテス祭を擧げ佐治、神田、蓮沼の諸氏の祝詞演說あり後茶菓の饗應ありたり

◉新敎神學校の生徒募集　小石川區上富坂町三十九番地なる新敎神學校にては來九月十一日午前八時より入學試驗を執行するに付志願の者は規則熟覧の上願書差出す可しと而して新入學生に講述する學科はイスラエル國家進化史、哲學史、哲學論理學智識論の緖論、敎會歷史、希臘語學、新約聖書等なりと云ふ

◉同志社生徒募集　京都なる同志社にても理科、政法、神學、普通、豫備、幼年の各學校へ入學を許す由、入學試驗は來九月學行に付志願者は八月中に申込む可しと云ふ

◉明治學院卒業證書授與式　は去月廿八日同院講堂に於て擧げられレナルド氏、井深氏、中島哲學博士の演說及び卒業生總代の答辭ありたり來會者殆ど三百名頗る盛會なりし

前々號の本誌

《論林》「浸禮教の地位」敎授ローレンス氏「隨思隨錄」大西文學士「釋迦牟尼佛畧傳槪論」佐治實然氏「殖民事業と外國布敎」堤法學士「社會の目的」矢部新作氏「ペルリコ道義要論」宮本平九郞氏等《雜錄》神の實躰、西村泊翁の哲眼、博士井上氏の爲に、社會の制裁、經濟の點、其方法如何、最後の結果、理解、先つ己を匡せ、朝鮮の暴動對宗派心、東學黨とは何物ぞ、東學黨の二大宿願、都新聞の美學《彙報》數件

前號の本誌

《論林》「鄕黨教育論」戸城傳七郞氏「殖民事業と外國布教」堤法學士「職務雖」前川太郞氏「平等を論じて信の一字に及ぶ」坂下龜太郞氏「無形の勢力」田崎綱三郞氏「知と信との關係」辰巳文學士《雜錄》人（佐治氏）、博士トーイ經典批評學（亡影逸人譯）、愛の人、愛の人とは何ぞ、見識、學者とは、日本の泣事、學生の傾向、壯圖壯圖又壯圖、無情耶有情耶、三種の神學校、基督教靑年の數學、寺院及住職の統計、濟す所何ぞ、《近刊雜書》十一種《彙報》數件

來號豫告

《社說》「佛教の覺醒」ローレンス氏《論林》「日本將來獨創的基督教」松村介石氏「感化制度設定の必要」堤法學士「文明とは何ぞ」矢部新作氏「ペルリコ道義要論」宮本平九郞氏「ユニテリアン敎私解」土谷忠治氏其の他諸大家の寄稿數篇及び雜錄、近刊雜書、彙報、等

論林

日本將來獨創的基督教

松村介石

古昔基督教がグリシヤ、ローマに入り込みしときに當りて、天下宗教の情態はいかゞありしか。曰く下民を除くの外は、皆其信を失ひ居たり。何故に然かりしか、曰く當時彼等の神なるものは所謂る偶像にして、此偶像は一地方若しくは一國を守護すと云ふ神なりしが、侵代奪掠の時に當りて、其地方若くは其國家を守護すると能はざりし故を以て、威信を其民に失ひ居たればなり。道德の情態は如何ありしか。上等社會には、哲人君子なるものありて、縱令ひ宗教を信せずとも、人倫を辨へ、本心に訴へ自ら其身を守り居りしもの少からざりし。然れども戰亂の餘弊として、又一般無宗教の結果として、云ふに忍びざるほどの情態とはなり果て居たりぬ。

無宗教不道德是れ永く人心を滿足せしむる社會に非ず。於此乎、心ある人々は千歲不磨の宗教を尋ねて止まず、又道德の大本を覓めて止まず。眞正人間の價値は何れに在る、安心立命の根據は何れに在る、神なるものは如何なるものぞ、道なるものは如何なるものぞ、人なるものは如何なるものぞ、宇宙は抑々如何なるものぞ、現當二世の歸趣は果して如何、萬國歷史の去來は果して如何と。此等宗教的、道德的、哲學的の問題は、當時混沌にして亂れたりしに關はらず、又營々として尋ねられぬ。

基督教は斯時に當つて入り込みしなり。而して證據的なる議論と、宇內的なる教理と、實行的なる道德とを以て彼等に臨めり。ローマ、グリシヤ等の人民は、地方宗教若しくは國家宗教に信仰を置かずなり居たりぬ。而して心細く世を渡り居りぬ、口舌的の詭辯と批評的の學理とに饜き、今や實際的なる活道を求め居りぬ、而して又誠意的確信的なる宗教を尋ね居りぬ。於此乎、

直に基督教に傾き來れり。基督教は如何なる教理を以て彼等に臨みしか。曰く第一宇內的なり。曰く天地一なり、人民一なり、神一なり。月はローマ、グリシヤのみの月に非ず、萬國の月なり。人は犬猫の如く、異種類の者に非ず、同胞なり。神は父なり、造物者なり、主宰なりと頌しも四海交通の便路開け、人民互に其好情を覺ゆるの際なりけり。されば如何に此教理が彼等智識に適中したるや、知るべきなり。又斯眞理が如何に彼等の宗教心に投合したりしや、知るべきなり。第二は實行的なり。如何に奇警なる理窟あるとも、實行よろしからずんば、民の之に依らざるや明かなり。然るに基督教徒は實行を主張し、嚴重なる道德を以て彼等に臨み、高潔なる生活を以て彼等に來れり。是れ亦た大に其信仰者を起したるゆゑんなりとす。第三は證據的なり。ユダヤ人は徵候を求め、グリシヤ人は智慧を求めたり。斯教の正物たるとを顯はさん爲めには、應分の證據を要したりし。於此乎、使徒等は舊約に憑り、豫言者に據り、畢には自己の目擊したる證據により、肉を裂き血を流して、此れが證明を確かめたり。是れ實に非常なる勢力を此教に與へたるゆゑんのものとす。彼等は實に安心立命の人たりしなり。而して宇內の觀念を明示し、人類の歸趣を指教し、遂には道と生命と眞理とを具躰したる活人物を示し來りて、是れ即ち神の子なりと宣べ傳へ、神と人との關係を說き聽かせ、千歲不磨の大道を明かにし、永遠に對する眞人物の覺悟を教へたり。是れ實に靈界上非常なる革命の時代とす。然れば十字架に逆ふものは皆崩れ、十字架の上に落つるものは皆碎かるべしと。聖書の中に書き記されたるが如く、諸々の哲學も諸々の偶像教も、諸々の道德論も、諸々の政治も、諸々の風俗も、諸々の文學も、諸々の迫害も、遂には皆基督教に呑まれ、基督教の中に消化せられ、而して皆悉く基督教の形躰と變じ去りたること尤もなれ。

然れども玆に一事の考ふべきことあり。基督教は大躰より云へば一貫不磨の綱領を有すと雖も、其細目に至りては、最初より數多に分れ居るものなりとす。基督は

其本領のみを示して、組織的神學を説かざりし。曰く予れ多く汝等に語るべきことありと雖ども、汝等今之を悟る能はず、故に敢てせずと。是れ基督自己が其弟子に語りたる言なりとす。保羅は三年の間アラビヤの野に冥想し、基督の眞意を開悟したりと云ふ。然れども當時已にヤコブの徒と合はず、又ケパ、アポロの徒と其衝突を招きしことなきにあらざりし。加ふるに保羅の神學は、一種自己の經歷より推し出したるものなると、パリサイ宗的の教味を帶ぶるものあるとの故を以て、之を完全不缺のものなりとは云ふべからざるものあるに似たり。

於此乎、當時猶太人の中にも、異邦人の中にも、已に保羅に服せざる基督信者のあるありしなり。又異邦人と猶太人との間に於ても、自ら其の歷史を異にし、風俗を異にするとの故を以て、往々神學の議論を同ふせず。神、基督、聖靈等に關する大躰の綱領に至りては、敢て一致を欠かざりしと雖ども、其他の細目に至りては、支流四方に分て各々其説を主張したる事跡あるを見るなり。サレバ基督教は到る處に諸々の宗教、政治、文學、哲學、風俗、習慣、等を呑み、又之を消化し去りしとは雖も、又自ら其呑みたる宗教、政治、文學、哲學、風俗、習慣等によりて、大に其形色を變じたるものあるを記憶せざるべからず。猶太人に入ては、猶太人的の基督教となれり。異邦人に入りては、異邦人的の基督教となれり。其グリシヤの哲學を呑むや、グリシヤ哲學的の神學を起し。其ローマの政治を呑むや、ローマ政治的の教會を形造れり。乃ち今日に在て之を云はゞ、アメリカに在ては自らアメリカ的の基督教となり。イギリスに在りては、自らイギリス的の基督教となり。ゼルマンに在り、ロシヤに在りては、亦た自らゼルマンロシヤの基督教を現出し居るなり。是れ蓋し基督教本來の性情なり、今更怪しむに足らざるなり。月は一天隈なく照して區別なし。然れども須磨に入ては須磨の月となり。カンバァランドに臨んでは即ちカンバァランドの月となる。其照すもの異ならざるも、之を受るものの異なればなり。

今や基督教亦た我國に入り來れり。而して其情態亦かのローマ、グリシヤに入り込みしときと大に相似たるものあるを見るなり。想ふに眞人物たる標準を失ひ居るもの、安心立命の地位を失ひ居るもの、宗教心を失して混沌の中に世を渡り居るもの、俗氣の中に嘆息し居るもの、空論詭辯に饜き果て居るもの、批評三昧に青蠅がり居るもの、而して饑渴生命の活道を求め居るものは、必ずや將に相率ひて皆基督教に投ぜんや必せり。然りと雖ども記憶せよ、基督教は、決して一様の形色を以て我國に來らざるべし。英米獨魯各々旗色を飜へして來るべし。又各々其神學を異にしつゝ來るべし。否、已に來り居るなり。吾人は其何れに隨はんか。曰く其の何れにも從ふべからず。即ち其形色を見るべからず、其旗色を見るべからず、其神學を見るべからず、其宣教師を見るべからず、よろしく玆に基督教の大綱を認め、眞髓を認め、而して自ら一個獨創的の神學、教會、傳道會社を起すべきのみ。曰くユニテリアン、曰くメソデスト、曰くプレスピテリアン、曰くコングレゲーショナリスト、曰くエピスコパルと。嗟呼是れ何物ぞ、外國の歷史と思想と風俗とに應じて、それぐ其時代に生れたるものに外ならず。之を全然採り來りて以て今日我國の基督教たらしめんとす。抑々迂なり。將た又今日外國生なるユニテリアン、メソデスト、エピスコパル、コングレゲーション、プレスピテリアン等の神學と、其の政治とに固着熱注する人は、未だ基督教の大乘に入らざる人とす。余想ふに具眼なる基督信者は、將に外國より入り來れる、諸宗派、諸神學、諸傳道會社、諸宣教師等を度外におき、玆に日本基督信徒獨創の諸宗派、諸神學、諸傳道會社等を打建つべしと。

吾人は諸宗派、諸神學、諸傳道會社と云ふ。何となれば、何れも日本獨創的には相違なきも、其中には必ずや多少意見を異にする者ありて、各々其旗色を飜へすべければなり。尤も獨創の旗色たればとて、全く歐米宗派の影響を蒙らざるものとは云ふべからず。歐米の宗派とても相互の間に緻密なる影響を互に蒙らしつゝあるものとす。我國何ぞ獨り然らざるを得んや。然れど歐

米なる何れの宗派神學にも偏せざる、我國生産の宗派の起るべきや必せり。

然則如何なる宗敎や起るべき、曰く先づ第一に佛敎的、儒敎的を帶ぶる基督敎派起るべし。基督敎がグリシヤの哲學を呑んで、グリシヤ哲學的神學の起りしが如く、佛敎的、儒敎的の基督敎起るべし。是れ古今基督敎が其呑むものの事物に應じて、其形色を變じたることを以て知るべきなり。目下我國なるユニテリアンの如きは、萬敎を合せて基督敎に歸せしめんと試むるが如しと雖ども、猶ほ其れ米國渡來のユニテリアンが爲すところたるを免かれず、畢竟するところ外國人に加勢を願ふ間は、相談を願ふ間は、主坐を與ふる間は、日本獨創的のものは起らぬものとす。其傳道會社も、神學も、敎會も、宗式も皆悉く然りとす。我れ已に獨立せず、何ぞ獨創的の者を望むべけんや。

其傳道の上より云はゞ。日本獨創の宗派の中、三四の者に分るべし。一は下民に向ふもの、是れは心學道話的のものとなり。實際普通の德義を敎へ、之を下民の間に躬行實踐せしめんと謀るもの、而して其宗敎は他動的、所謂る信仰にのみよりて安心を得せしむるもの、即ちムーデー等一派の唱ふところの如きものとなるべし。一は修養練磨を通じて眞人物の資格を要め、天に搆て其靈性を養ひ、實際基督敎の大主義を、人間社會百般の間に行はしめんと謀るもの、即ち社會的基督敎たるべし。而して其他は幽玄奥妙の界に入り、古今を一にし、萬國を同ふし、人類を一圏となし、永遠を諦明し、神と共に歩み、萬有と共に記するもの、所謂る理想的基督敎、是れなりとす。斯他厭世的に沈むもあるべし、現世的に狂するもあるべし。蓋し基督敎は、其視るところの者の境遇に應じて、それ〳〵摸樣を異にすべき性質を具ふるものなればなり。然れども基督敎は矢張り基督敎なるべし。ケパと分れ、アポロと去り。ポーロと其意を同ふせざるとも、基督に於ける大綱は即ち一なり。是れ萬古に照して變らざる眞理なりとす。吾人は獨創的基督敎の形成を早く我國に見んと欲するの情に堪えず。

宗教の新系統（其一）

緒論

竹内楠三

智識と實行——余が茲に所謂智識とは事實の關係を定むる意識の狀態を意義す、如何となれば凡て智識は斷定の形狀を有せざるべからず、而して斷定とは論理學上の眞正命題に當るものにして甲と乙との關係を示すものなり、其最も簡單にして且つ具躰的なるものは嬰兒の知覺に於て現はる、プレー氏が其著書中に記載せる事實の一に曰く、「余嘗て生れて二ヶ月半なる嬰兒が一の牛乳壜を厭惡なる容貌を以て拒絶するを見たり蓋し此壜は以前一たび水を容れられたることあり又た一たびは其牛乳甘からざりし事ありつればなり」と、未開人の斷定は甚だ簡單なるもの多し、斯る單一なる智識は吾人常に高等動物に於て觀る所なり、又た「生者皆歸死」、「道可道非常道」、「富與貴是人之所欲也」、「不好犯上而好作亂者未有之也」、「名者實之賓也」など云へる如きは抽象的の斷定にして複雜なる智識なり、推測式の如きも斷定の重複したるものに過ぎず。

余は便利の爲め智識を二別して一を獨斷的智識となし他の一を實驗的智識となすべし、前者は精密に事實を觀察せずして自動的に事實の關係を定むるものなり、昔支那人が日蝕を見て之を蝕するものあるべしと斷定し、コロムブスの初めて亞米利加に達せしとき土人は其船の帆を擧げて走るを見て大白鳥ならんと言ひ、又過般來遊の南洋トラック島王弟サミが我國に來着の際觀音崎の燈明臺を見て彼は王宮なりやと問ひ、新橋停車場に人馬の往來頻繁なるを見て大戰爭起りしかと聞き、圓太郎馬車の瘦馬を見て人を食ふ猛獸にあらずやと云ひたる如きは、凡て己れが從來の狹少なる經驗の範圍に於て得たる智識を以て全く異りたる新事實を演繹的に獨斷したるものなり、斯の如き誤謬は吾人が俗人の推理に於て常に視る所なり、蓋し人類の性情として一回相繼續して出現したることは再回出現すべし再回出現したることは往く先々も亦出現すべしとの豫想を構成する傾向あるものなれば事實を離れて獨斷するときは誤謬に陷り易きものと云ふべし、斯る例は單に

凡俗中に見るのみならず思辨的哲學者の中に多く見る所なり古代グリシヤのターレス氏が萬有の根源は水なりと云ひたる如き、アナキメニス氏が空氣は萬物の基本なりと敎へたる如き、又た近代の哲學者にてはスピノザ氏が無限的實躰（インフイニツト、サブスタンス）と稱する唯一の概念を以て宇宙の本躰と定め、ライブニッツ氏が預定調和説を獨斷し、ヘーゲル氏が思想と實在は同一にして實在は合理なり合理は實在なりと斷定し、ショッペンハウエル氏が此世界は苦界なりと思惟し、ハルトマン氏が意志と智力の結合所謂無意識を以て宇宙の實躰と斷定せる如き皆思辨的に實際世界の關係を獨斷せるものと云はざるべからず、又た彼の釋迦が死せんとするに當り其弟子純陀に諭したる辭の中に「三界皆無常諸有無有樂」と云ひ、又た唯識論に「三界虛妄唯是一心作」と說ける如き、老子が「無名天地之始有名萬物之母」と斷定せるが如き亦た皆然りとなす、斯の如き例は甚だ複雜なる斷定にして大に智力の開發せる結果なれば前述の例と同日の論にあらずと雖ども虛想の極端に走り概念を實在物の如く斷定したるものにして到底獨斷的の範圍を脱する能はず、偶々其斷言にして事實に符合し萬世不變の格信とも稱すべきものなきにあらずと雖ども是れ決して必然的のものと云ふ能はざるなり、

實驗的智識とは精密に事實を觀察して受動的に其關係を認むるものなり即ち科學を指すものとす、例へば近世科學の一大原理とも稱すべきエネルギー不滅論の如き其率先者たるジョール氏が試驗の成蹟を考ふるに、吾人若し一キログラムの水を携へて四百二十五メートルの直高ある斷崖に登り此水を散することなく一塊となし重力の力を藉りて墜し進みて地面に接觸するとき全塊の運動卒然として停止すと見做すときは其水の溫度攝氏一度を進むべし、他語にて言へば何れの物躰たるを論せず其重量一キログラムを重力に逆行して四百二十五メートルの高さに擧ぐる爲めに費ゆる所のエネルギーは其物躰が該高さより墜下し地面に達するとき得る所のエネルギーと等しきものにして即ち一キログラムの水の溫度を攝氏一度迄進むるに要する熱力とな

る之を稱して攝氏一度の水温は四百二十五キログラム、メートルなりと云ふ、斯の如く精密なる實驗によりて得たる智識は單に事實間の關係を性質的に確定するのみならず之を分量的に定むるものなり、而して之を實驗觀察するに當り吾人が五感力の不足を補はん爲めに望遠鏡の發明ありて水星金星の盈虧、星霧の存在等を知らしめ、「スペクトロスコープ」の發明ありて太陽星晨を圍繞する氣躰の性質を分拆せしめ、顯微鏡の發明ありて細胞の形態黴菌の分裂運動等を知らしめ、「サーモパイル」ありて熱量を精測せしめ、「クロノスメートル」ありて一秒時の一千分の一を計らしめ、精密なる秤ありて七百萬分の一の重量の差を知らしむ、故に科學者の斷定たるや事實の來るを待て受動的に起るものにして若し吾人の能力之れを實驗するに不充分なるときは機械を發明し其補助により之を成功するものなり、倂ひ事實を觀察するに困難なればとて決して獨斷的に斷定して滿足するものにあらず、されば近世之れが方法著しく進歩したりと雖ども未だ充分なるものと云ふべからず從て實驗の範圍狹きものなれば、從來確實なる智識と信し來りしものも實驗の範圍廣まると共に多少變せざるを保し難し故に科學的の智識なればとて一の命題を保持して萬世不變の絶對的眞理などと信するは甚だしき誤謬と云はざるべからず、然りと雖ども是れアウグスト、コムト氏の所謂智識發達の三期――神學的、形而上學的、實驗的――の中其最高期に達したるものにて吾人之を措て他に確實なるものを求むる能はざるなり、抑も吾人が智識を貴重する所以は何ぞや之を腦裏に蓄へて自ら樂むも固より一種の貴重なる所に外ならずと雖ども、之れ恰かも財貨を蓄積して徒らに之を樂むと同しく眞實の目的にあらず、智識眞正の價値たる事件の活動する形狀を未發に確知し以て吾人が行爲の先導となし吾人が目的を達するにあり、されば實際と一致せざる獨斷的智識の如き如何程多量に之を得たればとて人世の幸福を增進する實に僅少なるものと云はざるべからず、

吾人の活動は智識に先て起るものありと雖ども一定の

目的を以て起る活動即ち行爲は智識に基くものなり、例へば渴を感するに當り水を飮む如きは水は渴を止むるものなりとの智識を有すればなり、寒を覺へて衣服を重ぬる如きは衣服は躰溫の放散を防ぐものなりとの智識あればなり、多額の資金を投ずるは此事業は如何程の利益ありと知ればなり、又た病にかゝり神佛に祈る如き神佛の冥護ありて我禍福を左右すとの智識に基くものなり、凡て行爲は一定の目的を達する方法にして此方法たるや甲の事實と乙の事實との因果的關係に依らざるべからず、即ち彼の境遇は幸福なり故に之を得んとの願望を起し然るに彼の境遇は如何なる事情に依て得らるゝや、甲乙丙乙の四事情を結合するとき得らるべしと斷定して行爲を始むる者にして、換言せば智識を實行する事に外ならず、是を以て實行の形狀は智識の形狀と變化を倶にし智識正確なれば實行も正確にして其目的を達し智識誤謬なれば實行も從て誤謬にして其目的を達する能はず、譬へば物理學は純然たる智識にして機械術は之れが實行なり故に物理學の未だ進步せざりし時代に在ては機械術も從て幼稚にして現今の如く蒸氣電氣等の力を利用して社會の便益を計ることなかりし、又た生理學病理學等は純正の智識にして醫術は之れが實行なり故に是等の學未だ進步せざりし時代に於ては疾病治療の術甚だ不完全にして非命に死せざるを得ざる不幸に陷りし幾許なるを知らざるなり、余は斷じて云はんとす實驗的智識の增加及び之れが完全なる實行は文明てふ語の眞意なりと、

宗教は智識に屬するものなるか將た實行に屬するものなるかと云ふに智識にあらずして寧ろ實行的のものなることは余が辯を待たずして明なり、例へば供物を捧げて鬼神を祭り、會堂に集まりて上帝を拜し、靈魂未來の賞罰を畏怖して苦行をなし、上帝の聖旨に適はんとして德を修め、寂滅爲樂と念して塵世を避け寂寞の境に慾を殺滅するが如き皆な一種の實行にあらずして何ぞや、宗教的實行たるや亦た必ず一種の智識に基きて起りたる者に外ならず、而して此等の實行の基礎となれる智識は予が前述中無論第一種に屬するものにし

てコムト氏の所謂第一期即ち神學的の時期に屬するものとす、その中佛敎及び基督敎の最高等に位するものは第一期を轉じて第二期即ち形而上學的時期に既に入りしもの或は將に入らんとするものなり、例へば鬼神ありて吾人の禍福を左右すとか、吾人に靈魂あり不滅なりとか、現世を離れて涅槃の樂境ありとか斷定せる智識是れが基礎となれるなり（斯る智識の起原に付きては後に詳論する所なれば茲に略す）斯る智識は既に述ぶる如く獨斷的のものなれば稀れに事實に符合することなきにあらずと雖も之れ全く偶然的のものなれば、宗敎の敎ゆる所果して實際に合するや否やは實驗的智識の光明を受けて始めて判定せられざるべからず、然るに近世科學の進歩に依り古代に在て其勢力を逞ふしたる獨斷的智識の誤見謬説を破棄し社會萬般の實行上に其影響を及ぼし實行の形狀を全く一變したるもの實に夥し、例へば黴菌學（バクテリオロジー）の進歩は傳染病に關する世俗の迷夢を破り其治療法豫防法等に一大改良を與へ而して公衆衞生の必要を覺らしめ、心理學生理學の進歩は敎育法を一變し、法理學の進歩は國家の組織に大變化を與へたる如き一々擧ぐるに暇あらず、畢竟するに近代五十年間世界の驚く可き進歩は科學の賜にあらずして何ぞや、然るに眼を轉じて宗敎界の狀態を觀察するときは浩嘆止む能はざるものあり、固より近世科學の影響を蒙り多少其形狀を變ぜざるにあらずと雖ども之れ唯だ少局部の變化に過ぎずして、其根本的主義幷に全躰の系統に至りては依然として古代の獨斷的智識の基礎に立つものと云はざるべからず、世界の諸宗諸敎の高等に位する佛敎基督敎の如きすら尙ほ然り況んや餘他のものに於てをや、若し今日古代の醫術敎育法政治法を以て社會に應用する者あらば狂愚と何ぞ擇ばんや、若し斯る者ありて社會の未開者を誘掖せば文明の增進を妨ぐると幾許ぞや、請ふ試に基督敎多數の敎派を見よ頑然有心的上帝の實存及び天地の創造、靈魂の存在及び其不滅を信じ之を根基として宗敎を維持するにあらずや就中正統派キリスト敎に至りては三位一躰説の如き悪魔の如きイエスの再來靈魂復活の如

き實に妄誕聞くに忍びざる者を信條中に保持し之れを教理の重要なる部分として主張するにあらずや、又た佛教の如きその俗間に行るゝ宗派にありては未だ毫も科學の光明を受けず依然迷夢中にある勿論なり、然りと雖ども其高尚奧妙なる部分に至りては深遠玄妙なる哲理あり、莊嚴優美なる文學あり實に貴重すべき點少なからずと雖ども之れ全く冥想の結果に過ぎず、近來佛教中の有識者にして其教理中歐洲哲學と符合する點を抜きて之を基礎となし其合理的なることを主張して現時の佛教を改良せんとするものありと雖ども其誇る所歐洲哲學者殊にヘーゲル、ショッペンハウエル、ハルトマン等の形而上學と符合するものなりと云ふに過ぎず、而して彼等の哲學系統の根本たるや余が前述する如く獨斷的智識にして實際世界を距る實に遠く、又たコムト氏の所謂第二期に達したるものなれども未だ最高期に進みたるものにあらず、故に佛教にても基督教にても獨斷的或は迷信的の範圍を脱せずして何物か他の事情によりて社會に勢力を逞ふする事あらば實に文明の進歩を妨ぐる害物と云はざるべからず之れ恰かも古代醫術教育法行政法等を明治の社會に應用せんとするものに異ならず、

然りと雖ども科學的智識の普及は必然世人の腦裏に其影響を及ぼすものなれば宗教家神學者が舊來の教理を固持しながら如何に熱血を灑ぎて布教すればとて周圍の諸物——教育及び自家の組織等——と調和する能はず日に月に進歩發達しつゝある社會一般の思想を停止する能はざるものなり、故に舊來の宗教は漸々其勢力を減ぜざるを得ず是れ近代各文明國の歴史に徴して明なり、然るに基督教の歐米に於ける如き積年の慣習により深く人心に染着せるものなれば一朝科學の光明を受けつればとて直ちに變化し難き事情ありと雖ども我國の如き大にその國風を異にするのみならず古來より斯る慣習なきものなれば、既に科學の光を受けたる今日に於て正統派の教師が碎身粉骨以て布教すればとて其功を奏する能はざる白晝燭火を點するものゝ如く唯だ勞して益なきのみ、試に正統派の教會に屬するもの

にして少しく教育ある人に就て其思想を叩かば、其教會に屬する所以は其教理の根源と一致するにあらずして反て其枝葉たる所の點にあるを見る、此の如き人々の思想を單純潔白に表はさしめば實に其教會の主義と殆ど全く反するを知るならん、固より彼等は「バイブル」を神の聖言と信し理屈嗅きものと云へば組織神學有神哲學などの偏癖論の外に味ひたることなき內外の教師等と其思想を同一にする能はざればなり、余一日近頃正統派の神學部を卒業しつる友人と會し談偶々諸學校の評に到る時に一友曰く「近來オルソドックスの學校はラショナリストを製造する塲所なり」と實に名言眞に近きものと云はざるべからず、平々凡々の頭腦を有する外國教師等が一方に於て如何程熱心に神學を講して學生の腦裏に宗教的幻影を起さしめんと勉むればとて彼等は他方に於ては之れを破壞する科學的智識を得る自由なきものにあらず反て科學的研究に注意を向はしむる刺戟となるものなり、將來宗教を以て社會に利益を與へんとせば舊來宗教の基本的主義を一變し獨斷的の智識を棄て實驗的基礎を取り以て新系統を立てざるべからず、余や常に舊來の宗教が弊害多くして益少きを憂へ之れを考ふる久し、余が理想的の宗教を發表して世人の高評を仰がんことを欲し薄識淺學を顧みず本紙を借りて續々高覽を煩はさんとす、是れより舊來一般の宗教の起源發達等を成るべく事實を擧げて評論し而して新系統に入らんとするなり、

（未完）

文明とは何ぞ（承前）

矢部、新作

斯くして印度人の道德は如何ありしか、彼等は朋友に信義をなせしか、他人を待つに寬厚なりしか、思ふに彼等は宋襄の仁微生の信ありしなるべし。然れとも眞正なる道德の光は彼等の頭に宿らざりしなり。虛禮虛言下に尊大にして上に卑屈、其爲す所皆一日を苟偷するの事にあらざるはなし。彼等は數々ヘースチングス等に約するに過大形容の事を以てせり。始めより之を

實行するの意あるに非ず、唯一時を免れんが爲なり。奇慧なる英人は之を以て奇貨となせり。巧に彼等をして約束を爲さしめ、嚴に之を實行して遂に邦國を擧げて其有に歸せしめたり。

宗教は果して文明を養成するものなるか、此印度の結果は如何。基督教は佛教に比して萬勝る所ありとするも、余輩は今日の文明は其獨力の致す所なりと云ふは信ずる能はざるなり。

政治に全力を傾くるの國又決して安全なると能はず。專制の世に在つては極端の壓制國となり、自由の世に在つては極端の教科國と爲る。政治家をして啻に自由權利を口にし、實業を問はず、道德を顧みず、其爲さんと欲する所を爲さしめば人民は能く其幸福と快樂とを全ふするを得べきか。邦國は彼等貪名者の賭物となりて情意の下に之を賣らるゝの危險なきか。將又我意強き不熟練の船手各其方向を爭ふて結果船を山上に艚ぐの慮なきか。余輩は少しく觀察する所なかるべからず。

現今歐米諸國に於て佛國は尤も政治家の多き國にして國內の事物尤も多く政事熱に由つて支配せらるゝの邦なり。彼等は一般に名譽心に富めり、此名譽心を飽かしむるは政治舞臺に加くはなし。唯如何せん役者多くして見物少なきを。ナポレオンを扮せんとするもの數十、ダントンを演せんとするもの數十ロベスピーア其人に乏しからずルーフー又時に之れあり窮民を扮し暴徒を演ず、尤も其技の勝れたるを見る。然れども比較的に、ルーサーなく、チヤンニングなく、グラットストーンなく、ワシントンなし。人多くして塲所少なし政海廣しと雖ども國民を盡く此中に容るゝと能はず。茲に於てか紛爭起り紛爭絕へず、內閣に每年の交迭ありて人技倆を見はすとを得るも、此結果を收むると能はず。彼等は概ね皆實働家に非らずして演戲師と爲れり其働くや眞に國民の利益幸福を增進せんが爲に非らず、身を以て事を以て弊害を除去せんとを圖るに非らず、唯一塲の喝采を博せんが爲なり。斯くして佛國は面白き國となれり。政治家に附帶せる美德として義俠

の風を養成せり、然れども其害は是れより多く國内を擧げて侈奢豪壯の弊を助長し人々外部の爲に汲々として内心は却て苦痛を滿たすの有樣と爲れり。國家萬歳の爲に决して嘉すべきとには非らず。佛國人中に自殺者多し。是れ豈に彼等が社會を樂むの現象ならんや。國民たるものは政治思想に富まざるべからず、政躰は善良ならざるべからず、然れども社會の事は政治のみを以て運轉し得べきものと思ふべからず。

然らば則ち文明とは何ぞや。余輩は此疑問を斷定するに先つて聊か讀者に告げざるべからざるものあり。凡そ宇内の事物は必要より生ず。大は日月星晨より小は海濱の砂、屋下の塵に至る迄盡く皆必要ならざるものなし。又如何に世に害悪視せらるゝものと雖ども之を利用すれば好結果を生じ、如何に世に善良視さるゝものと雖ども之れを害用すれは悪結果を來す。人或は問はん、社會は何故に壓制家を要し何故に人身に疾病を要するか。社會をして自由ならしめんが爲なり、人身をして健全ならしめんがなり、浮世の不如意なるは人生をして其道を需めて意の如くならしめんが爲なり。世に壓制家なく身に疾病なく浮世をして妄想家の所謂天國若くは極樂の如くならしめんか、是れ社會なきなり、人生なきなり。此故に人は情慾を發達せしむるを要す、然れども其目的を達せんが爲には之を制御せざるべからず。人の趣向は種々なるものなり、社會は此種々なる所を必要とするなり。斷して此種々なるとを撰ぶは人類の自由にして此自由に由て人類は進歩し社會は發達するなり。人は發達せんが爲に艱難辛苦を冒さゞるべからず、社會は進歩せんか爲に競争軋轢せざるべからず。四方暗黑百燚千出萬斤の隕石孤身を壓し殆ど如何ともすべからざるの中に在つて英雄男兒か徐ろに一喫の烟草を吹いて欣然笑を含むの状を見よ。又社會が幼稚視せられ未開視せられ侮辱嘲弄の衣服を着し、中心骨に刻み血に注ぎ以て將に大に飛躍せんとするの狀を見よ。何物か是れよりも壯快なるものあらん。艱難災厄も已に斯くの如く必要なり況んや其

他の事に於てをや。害物尙ほ利用し得べし、況んや高尙なる人心の希望に於てをや。

人は生れて農となり商となり工となり士となるの希望を爲し而して社會は盡く皆之を必要とするなり。然らば則ち社會の文明なるものは一事一物の發達進歩せるの形狀を指すに非らずして諸事諸物の併進總合せる結果を言ふなり。則ち政治、實業、文學、宗教の共に發達進歩せる有樣を言ふなり。故に今英國は文明なりと言ふ時は、啻に其政事機關の宜しきを得て改進保守兩黨の主領にグラッドストーン。サリスバリーあるを指すに非らず。又單に其實業の隆盛にして貨物を積むの帆檣各國の埠頭に偏く、宇內製產の運轉其一事を己れの手に握るといふを意味するに非らず。又單に文學宗敎其精と粹とを保ち、ヲヂフン。アーノルド。マンニング。ニユーマン等の諸宗聖僧、人心の開拓保護を怠らず、人々靜穩優美の中に生息して、敬神愛國の念に富むといふの點を指すに非らず。英國の文明を致し、邦家の大を稱する所以のものは此四者其他社會萬般の事物發達の總合より來りたる觀念を云ふなり。此故に眞の文明なるものは、大なれども而も小に廣けれども而も狹き一流一河の時に漲り時に乾く偶然の消長を指すに非らず、正に彼の洋々たる太洋の如くありとあらゆる世上の大川に流を容れ來つて玆に限りなき水嵩を高めしの有樣を云ふなり。

今他の一方より觀察を下すときは、凡そ社會の事物は單獨に發達すると能はざるものなり。勿論其中異例なきに非らず。恰も英雄豪傑の出づるや尋常人の定規を以て論すべからざるものあるが如く宗敎文學の眞說傑作等闇黑の社會より出づるもありと雖ども、社會全躰の上より通觀すれば、諸般の事物は自他相待つて其步を進むるものなりと斷定するも敢て不可なきに似たり。之を一個人に就て考ふれば俚言に「八細工貧の本」といひ「二兎を追ふものは一兎だも得ず」と稱す、理あるに近し。世上の才子多くは成功し難し、其多才なるの故を以て彼等は專心一事を成就するの決心に乏しく、之に移り彼に飛び遂に虻蜂取らずの一生を送るも

のあり。是れ戒めざるべからざる所のもの、然らば則ち余輩は始より何事をも顧みず、唯一物を目的として、專心之に從事すべきか、其結果は如何あるべきか、余輩は恐る遂に個々獨種の人間界を生出して社會の廣さを忘れ事物の道理を誤り、其見識徒に深遠高尙なるが如きも實地に毫も効用を奏する能はざるの人物を養成するに終らんことを。併し此疑問は一概に論斷すべからず、彼れにも理あり是れにも理あり。余輩と雖ども或る場合に於ては個人の業務は廣からんよりは寧ろ深きを尙ぶ。法官の終身法律に從事するを要する如き又理化學の專門家は假令世上の事に迂なるも寧ろ其技に於て深遠ならんことを要するが如き是れなり。併し今更に之を全躰より考察するに、凡そ人たるものは一事一物に長ずるを以て足れりと爲すべからず、所謂「君子は器ならず」の言の如く諸事諸物に通曉して其間に眞理を發見することを期せざるべからず。社會の事物は凡て皆自他相關係を爲すものなり。日月の潮汐に於けるが如く、林檎の落つるを見て宇宙の構成を知るを得るが如く是を知らんと欲せば先づ彼を知らざるべからず。是を知つて彼を知らざるものは、畢竟是れをも彼れをも兩つながら、知らざるものに近し。余輩の目的は完全を求むるに在り深きを以て足れりとせず、又廣きを要す。世間余輩の摸範とすべきの人之れなきに非らず。フランクリンが政事家として理學者として又文學家として實業家として共に一世に雄たりしが如き。グラットストーンが英國第一の政事家として其筆時流を壓し其舌世界に轟き併せて宗敎界の泰斗たるるか如き、以て人類の希望を滿足せしむるに足るべきなり。

以上の理を取つて一國社會の上より考ふれば、更に較著たるものあり。政治實業は單獨に進歩を期すべからず。文學宗敎の發達すら尙ほ前者の力を借らざるべらず。此諸物の相提携するや、時に味方となり時に他山の石となる。狹隘なる宗敎家は曰く「科學は道德の敵なり」と。俗を逐ふの文學者は動もすれば曰く「政事は是れ俗人の事業のみ」と。然れども近世宗敎家が科學者の說に由て大に其妄信の弊を脫却し重もに社會道德

の上に着目するに至りしとは事實にして蓋ふべからず。而して文學者は政事家を待つに非らざれば其筆を神にすると能はず、シエークスピーアのジユリアス、シーザーに於ける、ジユリアス、シーザーのシエークスピーアに於ける自他相待つて其名聲を大にするを得しなり。凡そ識見は事物の差異を識別するの所に於て生じ、而して其發達進歩は競爭軋轢の間に於て尤も速なるものなり。

歐洲が世界進歩の先導を爲し、東洋諸國が三千年來一所に停滯せしの跡は實に能く此道理を證せり。東洋諸國支那印度日本の如き皆始めより拘束的の方針を取り、社會を擧げ道義の範圍内に生息せしめたり。學問と言へば必ず道德の事に限るが如く、政治文學實業の如きは一種の附屬物として他に新說を立つるを許さず。其甚だしきに至ては金錢の出納若しくは世の雜事に心を用ゆるを以て君子の爲すべき所に非らずとなし專ら口に道德を說いて、身を風塵の外に置くを尊しと爲す。若し事物にして單獨に進歩するを得るものならしめば今日東洋諸國の道德は非常の高度に達せし筈なるに實際に於ては然らず、否寧ろ道德を死物にし、虛禮に走り虛式に流れ殆ど其目的を失却するに至れり。見よ此拘束主義の結果は數千年を費して啻に其專心鋭意せる唯一の目的を達する能はざりしのみならず却て全躰の事物を萎靡せしめ殆ど爲すの道なきに至らしめしに非らずや。社會事物の相關係するや頭躰手足の一身に於けるが如し、自然に任せて、全躰に發達生長せしめざるべからず、然るに今單に其頭を大にせんとを勉めて其手と足とを束縛壓迫するの法を取らば人誰か其愚を笑はざらん。嗚呼東洋諸國は三千年來此愚を爲せしものなり、今日歐米の先鞭に一着を輸して後へに撞着たるが如きの看あるもの、故なきに非らず。

是を以て見れば文明なるものは則ち諸事諸物の併進總合せる結果にして、而して之に達するの道は諸事諸物をして自由に發達進歩せしむるに在ると疑を容れざるべきなり。

余輩は前段、文明の眞相を示すに際し將來人心の間に

浸漸せる僻說を破りて諸事諸物をして其所を得せしめんとを勉めたり。然れども已に諸事諸物と云ふ種類なかるべからず、已に種類ある以上は之を以て社會を搆成せんとせば其順序を立てざるべからず。今家を建つるに當り茲に若干の材料ありと假定せよ。此材料中には種類あるなり。則ち大木あり小木あり寸板尺片土塊石材盡く必要なりと雖ども、盡く必要なればとて是も彼も同一の効用を爲すとは云ふべからず。工師は此間に撰擇を爲し諸材料をして各其所を得せしめざるべからず。其上に先づ第一に、家を建てんと欲するものは地位を撰んで基礎を固くせざるべからず。此事尤も意を用ゆべきの所とす。

余輩今文明社會を搆成せんと欲せば諸事諸物の完全なるものを要すると同時に是等をして其地位を得せしめざるべからず。社會は是に於て始めて平和なるを得、苟も其地位を得ざれば如何に諸事諸物は、比較的に發達するとも其全軆の强固安全を期するを得べからず。折角打ち建てたる立派なる建築も一棟にして、若くは一柱にして其宜しきを得ざれば爲に全家を傾覆せしむるに至る。故に其創設の際に於ては大に又此所に注意せざるべからず。

余輩の見を以てすれば、道德は國家の基礎にして國家の地位を撰ぶ道德の種類を撰ぶが如し。政治と實業とは棟と柱となり文具は室內を装飾するの具にして其他の諸事諸物相待つて始めて國家を搆成するとを得。决して此順序を失ふべからず。彼の四者は共に是れ國家の要素たりと雖ども余輩は國民が道德を外にして政治若しくは實業若しくは文學を愛望するとを好ます、又其德道のみを徇んで他の三者を度外視する如きは爲すべき所なり。余輩は今日の米國が其諸事諸物に於て殆ど世界の先着たるが如きの觀あるにも拘らす、未だ全軆に於て英國に及ばずと爲す、是れ其新舊の差あるの故を以てに非らず、又米國の文學が英國に比して及ばさるを以ての故に非らず、唯英國に於ては諸事諸物に自から秩序あり、國民の道德思想其家國の基礎たるに協ふて而して政治實業文學又其所を得たるを以てな

り。彼の米國が徒に平等均一を主張して賢愚者の禮を問はず、拜金宗を以て最上の目的と爲すが如きの傾向あるは同國將來の爲に余輩の大に執らざる所なり。然らば則ち文明に達するの道は諸事諸物を自由に併進せしむるに在つて、而して同時に此諸事諸物をして其順序を失はざらしむるに在ると又疑を容れさるべきなり。

感化制度設定の必要

法學士　堤　定次郎

敎育の種類は大別して高等及普通の二種となすを得べし、高等敎育は國民に授くるに最高等の智識を以てするものにして、普通敎育は普通の智識を與ふるを目的とするものなり。高等敎育は資產の程度高きものに非されは就くこと能はす。然れとも普通敎育は國民一般をして、一國民たるの智識能力を養成せしむるに在るを以て其功用は汎く國家に及ふものなり。故に國家は亦强制的にも遍く國民を率ゐて此敎育に就かしむるの必要あり、是れ庶民敎育の名ある所以なり。夫れ然り、高等敎育は普通敎育を終へて、資產稍高きもの丶受くる所なれは、其關係する所のものは小數なりと雖も、普通敎育に至りては、全國學齡の兒童を支配するものなれは、其範圍極めて汎し、故に其制度の國家に及ほす影響は極めて大なるものなり、是他なし普通敎育は實に一國の新子孫を養成するものなれはなり。今や我國の人口は四千萬の多きに達せり、而して全國小學の學齡に達せる兒童は實に三百萬以上に當る是等の兒童は日本の新子孫にして、將來我國家の要素となるものなり。然らば其敎育制度の完不完、善不善は、我國家百年の大勢に影響する所決して尠小に非さるを知るべきなり。

三百萬の兒童、是れ實に將來日本の新子孫なり、新公民なり。然れとも是等兒童の外に在りて、庶民敎育の力以て之を養成するに足らさる一種の少年あり。此少年や古聖の敎以て之を感化するに足らす、仁者の言以て之を動かすに足らす、粗行暴爲、頑固冥嚚、或は以

て衆人を害し、或は以て父母師弟に抗爭す、知らす此少年とは何者ぞ、曰く世の悪少年是なり。

悪少年、悪子弟、彼亦人の子なり、父あり母あり、或は父なきあり、或は母なきあり、然れとも均しく是れ國民のみ、均しく是れ王臣のみ。而して彼遂に庶民教育の恩恵に浴する能はさるは何ぞや、國之を奪ふに非す、彼等の性質實に之をして悖戾たらしめ、悪兒たらしむるのみ。天の之を生する固と罪なし、而して彼等終に世に棄てらるゝの徒となる、豈に憫むべきの至りならすや。若し彼等をして通常學校に就かしめんか、其冥頑固陋の性質は、尋常少年を教ふる方法を以て之を感化變換せしむると甚た難し、加之、其悪習は他の善良なる幾多の少年に感染し、遂に相率ゐて悪少年たらしむるに至るべし。蓋し少年の時は譬は猶ほ素の如し、所謂血に染めは紅をなし、墨に染めは黒となるもの、一蕕の臭は以て他の衆芳を壓するに足らん。試に世の實況に就て觀察せんに、讀書算術を好むの習慣を作らんよりも、寧ろ犬を追ひ猫を苦むるを好むの風を増長するの容易なるにあらすや。善には移り難きも不善には感し易きは性質脆弱なる少年一般の傾向なり、是れ悪少年と他の少年とを混合するの弊なりとす。夫れ然り、故に悪少年の教育は、通常學校に於てすること能はさるは、決して一己の誤斷に非らすと信す。

更に一歩を進めて、犯罪に係る世の悪少年を處する方法如何といふに、我か刑法に於ては、罪を犯すとき十二歳に滿たさる者は其罪を論せす、但滿八歳以上の者は情狀に因り、滿十六歳に過きさる時間之を懲治塲に留置するを得とあり。而して又罪を犯すとき十二歳以上滿十六歳に滿たさる者は其所爲に付き是非の辨別なくして、犯したるものと審案するときは、情狀に依り滿二十歳に過きさる時間之を懲治塲に留置することを得と定めたり。此二ヶ條の法文は、犯罪に係る悪少年に對する豫後の行政處分なりとす。而して所謂懲治塲とは如何なる塲所をいふか、是れ監獄則に定むる所なり。

監獄則に據れは、懲治塲は一種の監獄にして不論罪に

係る幼者及瘖唖者を懲治する所とす。故に取も直さず其名の如く外形上の苦役を以て世の悪少年を懲戒する所たり、其監房の制は滿八歳以上十六歳未滿の者、滿十六歳以上二十歳未滿の者、及滿二十歳以上の者の三種に分ち、其年齢に依りて其監房を別異するにあり。其執る所の作役は、毎日五時以内農業若くは工藝を教へ、力作せしむるものとす。其感化の方法は、教誨師なる者をして悔過遷善の道を講せしむるに在り。其學術に關するものは、毎日四時以内讀書習字算術を教ふるに在りとす。以上の方法の外、懲治人は毫も囚人と異なる所なし。是れ他なし、苦役を以て悔遷せしむるの目的に出つればなり。此懲治場の目的は、果して能く此手段によりて之を達し得べきや、請ふ予輩をして論究する所あらしめよ。

懲治場は實に監獄の一種なり、懲治人の懲戒方法は果して囚人と何の差異かある、只た寛嚴の差あるのみに非すや。夫れ然り、懲治場は一の監獄のみ、其利害の存する所、亦其趣を同するものといはさるへからず。

蓋し古より監獄は懲戒の目的を以て設けらるゝと雖も、眞正に其目的を達し得るもの果して幾何ぞや。假令年齢の少長、犯罪の輕重により、其監房を別にし、其役務を異にすと雖も、監獄は一種の犯罪學校たらさるもの殆んと稀なり。或一種の罪を犯し捕はれて入監するものあり、他の囚徒と雜居し同く役務に就くや、其舊囚等は新參に向ひて、或は其犯罪方法の拙劣を嘲けり、之に授くるに更に巧妙の手段を以てし、或は監獄を脱するの手段を教ふる等、眞に互に悔過自戒の道を説くもの少くして、益〻以て不善を長するのみ。故に今日監獄を設くる所以のものは、只た其比較的に懲戒の行はれんことの多きを冀ふに在るのみ、其制度の改善の如きは、須らく吾人の研究せさる可からさる所なりとす。夫れ監獄は一種の犯罪學校たり、其弊容易に矯正し得さるものあり。而して懲治場は一種の監獄なり、其能く犯罪學校たらざるもの果して幾何ぞや。

蓋し懲治場の作役は、工藝農業を教ふるを目的とし、其他教誨師の説教といひ、讀書算の教授といひ、世の

悪少年をして道を聞き藝を習はしむるの方法敢て備はらさるにあらす、然れとも此方法は果して能く其目的を達し、悪少年の徒をして改善の途に就くを得せしむるか、是れ予輩の疑なき能はさる所なり。

監獄の目的は犯罪人を社會より離隔し以て、一般公衆をして其危害を免れしむると同時に、犯罪人其者をして自ら改悔せしむるに在り。懲治の目的も亦之に外ならず、然れとも現今懲治の方法は、之を外形より强制するの甚しきに失し、精神上より之を感化するの方法に乏しきものとはいはざるを得ず。精神的に之を率ゆるの法に乏しきときは、少年をして徒らに外柔順を粧ひ、内狡猾ならしむるのみならす、相率ゐて以て犯罪の方法手段を研究せしむるに至るべし。然らは悔過遷善を目的とする懲治場は、却て犯罪の種子を養成すへき一種の學校たらんとす、豈恐れさるべけんや。

夫れ然り、予輩を以て之を見れは、懲治場は未た以て完全に其目的を達するものといふを得す、必すしも留置の効なきに非すと雖も、其一利一害偶ま以て相償ふに過ぎさるなり。然らは世の悪少年を懲治し併せて之を敎育するの好手段は果して如何曰く感化制度の設定是なり。

感化院の長所は、感化敎師其人を得るときは、悪少年を率ゆるに精神的の方法を以てし、智德兩なから修め、之をして知らす識らす感化開進せしむるにあり、彼の懲治場の如く、御役目一ト通りの義理を以て職務を行ふものと大に異なり。蓋し感化院の性質は純然たる敎育に非すして懲戒と敎育とを兩なから兼有するものなり。故に特別の情況に應して、特別に授くる一種の敎育方法なりといふを得べし。夫れ悪少年の腦髓慣習は、尋常一般の敎育方法を以て之を打破改造すること能はず、必すや其特別の情況に應して之を矯正改善するの特別手段なかるべからす、是れ感化院の目的とする所なり。夫れ然り、感化院は單純なる敎育方法によるへからす、必すや一方には懲治の方法を設け、一方には敎育の手段を講せざるべからす、是を以て一は懲治場の性質を有し、一は學校の性質を有するものなれは、

國家は感化院に與ふるに一の懲戒權を以てせさるへからす。

感化院は獨り犯罪に係る少年子弟の爲めに必要なるのみならす、假令犯罪者に非さるも、世の父母たるものをして、頑冥不良の子弟を入院せしむるの必要あるものなり。蓋し犯罪者たる少年を入院せしむるは、既發の事由に對して將來を警戒するに在りと雖も、單純なる不良の少年子弟を入院せしむるは、未發の事由を豫め防遏するものなり。未發の事由を豫め防遏するを得るは、獨り父母兄弟の爲めにあらず、國家の爲め實に希ふべき事といふべし。

夫れ三百萬の就學兒童の外、世には幾多の惡子弟ありと雖も、尋常教育の力以て之を矯正するに足らず、而して又懲治塲の目的未た完全に達するを得す。此弊を救ひて懲治教育の二目的兩なから擧くるの方法は、予か所見を以てすれは、感化院に如くものなかるべし。感化院は實に庶民教育の不備を補ふの効用をなすもの是なり。然らは之れ國家の事業にして之を經營設置するは亦國家の義務に非すして何そや。

我國に於ては古來感化院なるもの之なし、維新以後高瀨眞卿氏始めて之を設立せり、氏の熱心誠實にして、事業に從ふや感化の功績頗る見るへきものありといへり。然れとも其規摸極めて小にして、未だ遍く天下に及ほすこと能はす、甚た惜むべし。予輩は國家の懲治制を舍てゝ一の感化制度なるものを設け、以て感化院なるものを立てんことを望む。若し感化の方法にして其功擧らんか、犯罪者の數を減じ、隨て司法及監獄の費を減少し、其國家に利益ある決して尠少にあらさるなり。

若夫れ國家にして費用供給の途に乏しく、今日の狀勢到底感化制度を執る能はすとせば、予輩は世の仁人君子の士に財を投し之を企劃せんことを望む。近時北米の一豪商スタンフォール氏は自ら二千萬の資を抛ちて一大大學を設立し、無月謝にて幾多の學生を養成すといふ、其公共心に厚き實に嘆賞の外なきなり。我國四千萬の同胞あり、富豪以て陶朱に擬するもの亦た多し

といふべし。世の富豪家何ぞ自ら進んで、東洋のスタンフォールたらざる。

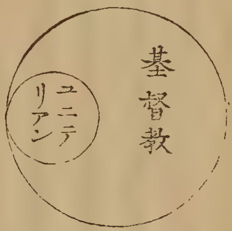
ユニテリアン教私解（承前）

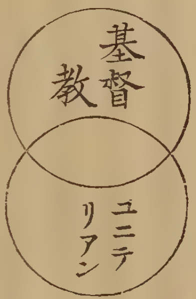
土谷忠治

世に吾が徒の主義を如何なる理想を以て解釋せるか、何れの點より觀察せるかを知らざれども、往々曖昧なりとし、茫漠なりと毀る者あり。然れども評者の究明必ずしも詳密なりと謂ふ可からず、或は妄に外觀よりして全圍を云々せむとする下馬評者流に非ざるか、若し然らば敢へて深く咎むるに足らざるも、或は新聞記者若しくは碩學の聞へある者にして、猶ほ其の下馬評者流に陥いるあるに至りては、余豈何ぞ其の人の爲めに惜まざるを得んや。蓋し此れ等は單に文字上に拘泥し、能くその意義を闡明せざるか、或は一種の我執より起れる所。要するに評者の謬るもの左の點に存するが如し、

一、ユニテリアン教は基督教なりや
二、基督教はユニテリアン教なるか
三、ユニテリアン教と他宗派との關係如何

即ち





と云ふの三問にあるが如し。而して此れ等の解説は『宗教』紙上屢〻散見する所にして、今更耳新らしく論辨するの要なきも余の以て乾燥無味の舊義となす所、世却つて斬新とするに非ざるなきか。如何ぞ以て然か稱する世人が吾が徒の主義目的を誤解する、未だ能く是れを闡明せざるの致す所なり。闡明せざるが故に識らざるなり、識らざるが故に謬るなり。

故に敢へて陳套を辭せず此の稿を起す、幸に深く咎むること勿れ。

何をか基督敎徒と云ふ、新舊約兩全書を奉じて金科玉條とし、一字一句をも崇拜し去る者の謂ひか、彼の福音の全篇を總じて、上帝の默示の直寫なりとする者の謂か、余は此の意味に於いて決して基督敎徒に非ざるなり。某派の如く、耶蘇基督は上帝の降臨なりと妄信する者、字句に拘泥して敢へて進化の大道を妨ぐる者の謂ひか、余は此の意義に於いて基督敎徒たるを忌む者なり。現世の德行を輕じて妄に未來の冥福を迷禱する者、これ基督敎なるか、我執に偏着し世界觀を有せず、外貌に拘はりて其の精氣を穿たず、儀式に拘束せられて活動を知らす、其の他、國君に對し不敬なる者、家父に不孝なる者、兄弟に不悌なる者、夫婦相和せず朋友相信ぜざる者、長上に不遜なる者、心の濆れたる者、心の貧しからざる者、哀まざる者、矜恤なき者、人に見せん爲めに其の義しきを人の前に行ふ者、會堂や街衢にて僞善者の如く鍅を吹く者、聖靈を瀆す者、先師耶蘇及び他の聖人君子を辱むる者等、これ基督敎徒なるか、余は此の意味に於いては基督敎徒たるを否む者なり。余が稱して基督敎徒と云ふ者、瀆罪說を信ずる故ならず、三位一躰說を奉ずるの謂にも非ず、浸禮を施すの所以にも非ず。若しそれ先師の所謂『爾宜悔改蓋天國邇矣』を以て立ち、公に自由に撒但を斥け、聖靈を潔めんと欲する者、これ基督敎徒に非ざるか、余は正しく非基督敎徒と唱へらる可きなり。世に吾が徒の如く書を讀むで書に泥まず、敎を聽いて敎に溺れず、正に以て其の根底たる正氣精神を愛慕し、益〻是れに近かんずる者、基督敎徒に非ずとせばせよ、非基督敎徒の名余に於いて何かあらむ。余は誠實に先師耶蘇基督によりて榮光を天に歸し、我れ等が此の世の罪過を赦されんを祈るのみ。我が身は僅か五十、長くも百歳に過ぎず、然れども我が生は此の瞬間を通じて他に及び、現世の生活は正に我が生命の一起伏、永遠無窮の希望は吾れ人が生命の周圍を圍繞す、これ誠に神の攝理の絕妙絕深なる所、神を拜する一に此の一秘密に

懸れり。

吾が師チャンニング氏云へらく

余は其の合理的性質を擴充し、確實にし、高尚ならしむることに依りて基督教徒たるを誇る者なり。若し基督教にして合理的なるを拒まざる限りは、余は基督教徒たるを躊躇せざるなり……理性は智慧的性質の最も光榮ある形式若しくは操練なり、是れ神と宇宙との一致に合當して、此の宏大なる和合の形象或は鏡影の如く、その靈魂を成さんと求むる者なり。

パーカー氏亦基督教を解して曰へり、

試に拿撒勒の耶蘇の言語を咀嚼せよ、耶蘇教なるものは寔に平易單純なる者なり、その教ふる所は絶對純潔の道徳、絶對純潔の宗教、人に對する博愛、神に對する純愛等にして、修飾なく謙讓に過ぎず坦懷以て之を説述せるなり。而して其の基礎とする所の唯一の信仰箇條は、即ち「茲に眞神存在す」と云ふに在り。これ其の純聖なる心中に油然卓然自發せる一大妙理なり。その唱道せる信號は、即ち「天に在る汝の父の如く完全なれ」と云ふに在り。その要求する形容は、「唯神聖なる生活を送れ」と云ふに存せり。即ち最高の發動心より上乘の方法を撰みて最良の事物を完了し、以て一に眞神の一大天則に服從す可しと云ふに在り。その準許は即ち汝の心中に神の聲ありて之を示し、汝の頭を覆へる日月星晨と、汝其のものを創造せる神とは、造次顛沛も汝を離れずして常に汝の心中に存在せりと云ふに在るなり。夫れ是の如く其の教旨は單純平易にして三歳の童蒙も尙ほ且つ之れを了解す可く、而かも其の奧義の至美至大なるは、世擧げて之れを敬愛欽慕せざるはなし。嗚呼余は未た曾て他に斯る偉人あるを聞知せざるなり。

猶ほ一層ユニテリアンを知らむと欲せば、其の教史に就いて攻究せよ、如何に歷史が世人を教ふるとの明かなるよ。然れども余が本誌を塡めて歷史書となすに忍びず、唯僅に其の端末を附記するに過ぎず。

今ユニテリアン教が特立する所の淵叢を探明するに、基督教内自由思想の一大活運轉にして、福音の研究は

各自の爲すが儘なる可し。而して其の淵源は、單に羅馬加特力の敎權を脫し、新敎徒の儀式的信條の拘束を離脫せんとするに在りて、精神的行動、靈智的敎權を尊信し、唯一なる所の天父を崇拜し、上帝の永遠無窮なる權力(パワー)、智慧、慈悲の下に服して互相の運命を托し、献身的信仰を以て、正に純正なる基督敎を世に發表し、克く其の靈光に浴せんとするに在り。かるが故に當初或る基督敎徒(クリスチャン)は、之れを見て以て外道夷端と呼び、吾が徒を辱かしめ、苦ましめ、甚だしきは邪宗として迫害を試み、或は政府の權力を藉りて死刑をさへ宣言せしと敢へて珍らしきに非ず、寔に彼れ等は自由運動の拒絕に勉めたりと云ふ可し。然れとも眞正の自由思想は、人世の正に經過す可き進步中の一大階段にして、如何なる威力、何たる鐵棚も遂に抑止す可からず、恒久駿々乎として愈自由の域に轉一轉を加へ、步一步を增し、造次顚沛も停む時あるなし。

見よ初め吾か徒がアンチツリニテリアン（非三位一躰論）を以て興り、眞正(まこと)の神は唯一絕躰ならざる可からずと唱ふ。然るに進化の一大活理は、彼の三位一躰論者を驅て漸次其の方向を變じて非三位一躰說に近かしめたり。若しアンチツリニテリアンにして基督敎の夷端外道なりとせば、彼れ等此の時既に夷端外道と化了せるなり、豈特にユニテリアンを目して邪宗の惡名を與ふるの要あらんや。而して天道は決して一物に利するとなく、進步は決して一物を待たず、當初のアンチツリニテリアン（非三位一躰）をして百尺竿頭更に一步を進め、思想界自由の一大活理を說き、恰も兄は何故に我と同年となる迄待たざるや底の嘆聲を發せしむるに至れり。依是觀之、彼の固執派なる者既に自から三位一躰說を革め、今又竊に思想界の自由を欽慕して停まず、既に然り、然るに何ぞ怯なる、公然立つて自由を宣言し、進步的大道を步するを憚る、彼れ等必ず身に闇き所なからざらむや。苟も彼れ等を目して基督敎徒と云ふを得べくんば、何でふ余を以て外道と貶するぞ、彼れが行ふ所余猶ほ一層の純善を謀り、彼れが言ふ所余猶一層の純美を招かむずる者なるに。

斯くの如く余は師基督を崇めて精神界の最大最高なる者と稱し、宗教上の發達に於いて人類を善導せる諸師中最高者なりしは、堅く信じて疑はず、余は余の全力を擧げて基督に事へ、基督に傚ひ、以て純正なる宗教の智識を明にし、その實踐を奬勵し、これが改良進歩を計らむとするに在り。一度第一回年報を閲き來らば、之を證するに足らむ。

ユニテリアン教は、宗教革命の其の初め、一ツの異端外道として英國に起り、當時に在つては異端アナバプチス派の名目の下に忠死し、刑場の露と消へ果てし者其の數實に夥多ありき、是れ即ち古代のエリアン派、今日のユニテリアン教徒なり。

第十七世紀に在つては未だユニテリアン教會の組織成らずと雖とも、ユニテリアン教徒の神に於ける信仰、或は基督に於ける見解は、當時學識名望ある人士の間に漸々波及するに從ひ、英國々教會は勿論、其の他普通基督教徒の間に紛爭の熱度を高めたり。彼の有名なる詩人ジョン、ミルトン、哲學の大家ジヨン、ロック及びアイザック、ニユートン氏の如きは全くアンチツリニテリアン即ち三位一躰說の不信者なりしなり。

第十八世紀に在つては益〻其の氣焰を增發し、夥多の英國長老教會（プレスビテリアン）及び英國ブロードチヨルチ（宏濶なる教會）の人々は、當時ラチユーヂアンスの名目を以て呼はるゝに至れり……此時に際し獨りリンズレイ氏は……ロンドン府に到り、エセックス街の或る會堂に於て第一ユニテリアン教會なるものを世に公にしたるに由り、英國の長老教會（プレスビテリアン）に在ても別に信仰箇條を設けず……益〻自由信仰に傾き、終にユニテリアン教徒の名を以て呼はるゝに至れり。然れども此の名目は當時尙ほ異端外道として衆人の嫌悪する處なるが故に、動もすれば其の教會の上に不幸なる王法の來らんことを恐れたれば、その教會政治及び組織等は猶ほ舊長老教會の如くし、一方の責を禦ぎ、且つ順を逐ふて進歩の途を開けり。その他舊派浸禮教徒（オールド、バプチスト）の間に此の新思想漸次波及するに逮んでや、その多數

は終にユニテリアン敎徒と一ツの連絡を爲すに至れり。

……ユニテリアン敎は歷史上基督敎運動の一として基督敎の範圍內に在り……ユニテリアン敎は常に宗敎的運動にして宗敎以外のものに非ず、又ユニテリアン敎は眞に耶蘇基督の敎ふる處と全く相反する者に非ず、如何となればユニテリアン敎は、其實耶蘇基督の精神より溢れ出でたる者なればなり。

世に吾が徒が自由討究を宣言し、合理的宗敎の建設を期し、諸他宗派に最多の好意を表す、是れをしも曖昧となす、其の義甚だ高遠にして深邃なるの故をもて然るか、我れ等は普通一般の正理を以て標準となす、却つて是れ凡人の難深とする所なり。彼れ等意らく眞理は難澁なる字句に於て索む可きなりと、然れども眞理必ずしも難澁なるものに非ず、一般普通の大道こそ眞に眞理として信仰す可きなり、余の採る所旣に斯くの如く或る者に反す、該者より曖昧の譏を受くる亦已むを得ず、該者の智能く之れを解す可からざればなり。然るに其の身相當の學識あり思慮ある者にして猶ほ此の言あり、是れ自から自己の無識を表はす者に非ざるなき乎。

余は前陳の如く、死せる所の字句、枯れたる所の言語を以て唯一の武器となし、以て外寇に備へんとするが如き愚を倣ふ者に非ず、余は枉れる所の心情、偏れる所の意志をもて人に愛憎を施す者に非ず、活ける神の靈性を稟け、燃ゆる眞心をもて無上の戈とし、誠意正心眞理の爲めに戰ふ。故に向ふ所敵なく後に仇なし、右に徒黨なく左に宗派なし、彼れも人此れも人、その人たる所に何ぞ異なるあらむ、甲も宗敎乙も宗敎、その志、その目的に於いて何ぞ撰ふ所あらむ。余は喜んで同情を表し、共に與に目的とする所に達せんずる者也。素より甲宗と乙宗とは異なるある可きも、これ等は其の發達の前後、人種の狀態如何に存するのみ、敢へて全く排斥し去る可きに非ず。余は寧ろ此を利用して社會の改良進步を劃し、一面には其をして益〻高尙完了の域に善道せんと欲する者なり。

人あり自からを愛する如く他人を愛し、自國を愛する如く隣邦を愛せばとて、なでふ失點とす可き。而かも基督の教は何ぞ、博愛を說き、萬國に福音を傳ふ可きの邊に在るに非ずや。博愛とは敢へて個人と個人との關係に止らず、甲派と乙派とにも應用す可く、萬國とは基督教國に限らず、異宗國にをも傳ふ可きを言へるなり。然れども吾が徒決して正善邪惡の識別なき者に非ず、慭めて惡魔を却け、唯天に在ます父なる唯一の眞正の神を拜し、神の御心に添はむ爲めには、人を棄て自からを殺して憚からず、彼の固執派基督教、迷信派佛徒の如く、一も二もなく自己以外を指して夷端邪宗とし、反目疾視する者ならず。基督教固執派果して惡魔たるか、佛教果して夷端なるか、余學淺く識なし、故に基督教佛教を目して一概に夷端外道とし驅逐し去る可きを知らず、否一時の感情を以て無鐵砲なる獨斷を下す可き時代は速くに過ぎ去れるなり。如何に其の宗旨の蠻民に行はれたる賤卑なる者と云へ、幾日月の間その人民の精神を支配し來る、中に幾眞理なからざらむ。素より自宗以外は外道異宗とは云はる可きも、異宗なるの故をもて、徹頭徹尾排斥するが如きは、君子の潔とせざる所なり。余聞く道理心なきの感情は人をして盲目ならしむと、一時の感情は愛憎の所依たり、感情を以て判定を下すは愛憎の最も甚だしき者。基督教家！爾の師は爾に愛憎あれと敎へたるか、佛教家！爾の宗祖は爾に頗偏なれ他を陷れよと諭せるか。

余は天に在ます唯一絕躰の神を崇めまつり、神の最と高き御仁惠によりて、此の世に平和を來せる德を慕ふなり、師基督は最と限りなき神の生々の力をもて、驚く可き光榮、純善、純美の域を吾人に賜はれり、神の現啓默示は彼の高遠奧妙なる心靈を傳はりて吾人を照らし、勇猛仁慈敢爲篤信希望自由等の諸德は彼の力の反射なり。其他人智の未だ悟得す可からざるを見て、其の語る可きとをも語らず停みぬ、これ却つて彼れが諸師中に超絕逸出する所以なり。或る者は釋伽を以て之れに當つ、それ或は然らん。余も亦少しく知る牟尼佛が、人の執拗を掃ひ、眞如の月に嘯き、慈悲の海に棹す可

きを敎へたるを。然れども宗教は哲學の如く議論的に非ずして機械學の如く應用的ならざる可らず、宗教は智識學問に屬せんより寧ろ感情信仰に屬す可き者なり。特に其の遂に流れて厭世に陷いり、睡眠的態樣を抽き出せるに於いて、余は奮つて排斥し去る可きの責任を有す。超然主義は十九世紀後の人心を支配す可からず、塞翁的の高蹈主義は以て今後の宗教界に蹈入る可からず、下つて俗人と共に働き、社會と共に推移す可き活物なる可きなり。是に至りて出家尊號遂に尊號とするに足らず、十九世紀後の活劇は決して睡眠的佛者の有に非ず、絶望的出家の劇塲に非ざるなり。

抑も吾が自由基督教は最も多くの宗教的希望と、眞正の宗教思想を包有す、之れを稱して純正基督教と云ふ、其の奧義に至りては固より固執迷信派の味ふ可からざる所。若し拿撒勒の耶蘇をして今世紀の人たらしめんか、彼れは如何に敎へ導く可き、言句に跼蹐し、末枝に齷齪として愛憎を是れ事とするの人たる可きか。彼れが小亞細亞地方に福音を傳ふるや、その期する所儀式に在るか。外面如菩薩內身如夜叉底の虛飾か。彼れは妄に人を却け自から代らんずる者か。彼れの來るは律法と預言者とを廢つる爲めか。請ふ言句に跼蹐する勿れ、彼れの敎は決して文字に非ず、虛飾に非ず、彼れ又破壞家に非ず、彼れ曰はずや『勿意我來壞律法及預言者我來非以壞之乃以成之』『爾必盡心盡性盡意愛主爾之神、斯誠之首而大者、其次愛隣如己亦猶是、全律法與預言者皆繫於此二誡也』と、何ぞ其の抱負の大にして而かも精神の寛容なるや。若し夫れ濶大包容自由敢爲の意義をして曖昧模糊とせば、基督の敎より曖昧なるものは非ざる可し。又強いて明瞭判然てふことをば、形象文字的摸型との契合なりとせば、佛典の數千卷に如かず、儒籍の幾億萬言の多きに及ばず。偶像崇拜の意なりとせば、佛者の寺院に詣で、閻魔王の顏にても拜し、遡つて蠻野の生活を行るに如かず、此くの如き者決して師基督の力能くする所に非ざる可し。彼れの來るは至眞と正義との爲めなり、然れば其の至眞と正義との爲めには、處と時と位とを問はず戰へり、これ誠

に師の精神にして、師の精神は此の意を出でざるなり。故に余は基督の一徒弟として天父なる宇宙遍満の神を拜し、同胞なる人類を愛し、都べて純善純美なる理性感情及び意志とに憑りて、至眞と正義とを確認し、その佛者たり儒者たるを問はず、目的に於いて同一なる限りは、共に與に歩して聊か先師の意に添はんと欲する者なり。然れども余は猶ほ恐る、吾れ人は斯く迄抱負を大にすと雖とも、時に或は執拗を起し、或は世事に冷かなる水の如く、熱する火の如く、固まる金石の如く、或は輕きと浮雲の如く、遂に師の意に背き神の御坐を潰すことあるを。

約言せば、余は其の生命としては正に基督の導火に賴る可く、其の身躰としては正に我が國固有の敎誡に賴る可し。即ち從來我が國に行はれける風俗習慣に基督敎の一大活氣を加へ、その運動を益圓滿敏捷、活潑敢爲ならしむるに在り、神儒佛の如きは是れ吾人純正基督敎徒の營養品に過ぎず。

翻つて現今ユニテリアンの狀態を察するに、歐米諸國に於いて基督敎内に於ける一の宗派即ち純正基督敎として、單に固執派基督敎或はアンチツリニテリアンとして、世界のあらゆる宗敎は皆吾が伴侶なり、同情を表し好意を以て接せざる可からずとし、今日東方諸國に於ける佛敎との關係の如きは、彼れ等の夢寢にだに思はざる所なりしに、今や一ッの新なる疑問吾人の頭上に落下せり。そは從來のユニテリアンよりせば、唯單に他宗派（基督敎外の觀念は殆ど無かりし）に同情を表すると云ふに過ぎざりしが、ユニテリアンなる一大自由思想の刺戟は、端なくも佛者を驅りて玆に自由佛敎を形ち造らしめんとし、ユニテリアンに擬する者あらんとす。而して吾が徒ユニテリアン敎徒は、同一名目の下に立ち、共に運動し得るや否、余は其の主義目的信仰に於いて一致する限りは、その名の自由佛敎たり何たるを問はず、之れを容るゝに憚からずと雖とも、自然佛者は佛者たるの臭味を免る可からず、これ等佛敎的臭味を帶ぶる者、未だユニテリアン敎徒とは稱す可からず、ユニテリアンは純正基督敎即ち普及宗敎普及倫理の下に活動

する者なり。故に之れに背かざる限りは同教徒として容る可きなり。世の吾が徒を目して曖昧佛教なりとし、曖昧基督教なりとする者、大に此の點を熟思せざる可からず。

ソクラテス降誕會に於て

蓮沼磐雄

世に一種の動力あり、之れ物理的動力と異なるものなり、物理的動力は單に物質を動かす可し、此動力は能く心意を動かすものなり、恰も物理的動力の神の發顯なると等しく此動力亦た神の發顯なるなり、恰も物理的動力の遍在無窮なると等しく此動力亦た遍在無窮なるなり、然れども此動力や決して彼の物理的動力の如く無味乾燥なる機械的の盲力に非ず、其發するや能く人をして笑はしめ泣しめ怒らしめ奮はしむ、時には即ち春風暢蕩、時には則ち激浪怒噚、其靜かなるや胡蝶戯むれ小兒笑ふ、其動くや猛虎嘯き雷電轟く、其向ふ處山之が爲めに高からず、海之が爲めに深からず、權力之が爲めに威あらず、財産之が爲めに貴からず、而して人は之を見て嘆美し崇仰し逍遙し又た奮勵するなり、

夫れ人多少此動力を感應せざるはなし、然れども未だ能く之を知悉するものあらざるなり、蓋し其本躰は一なり、然れども其活動は數樣なるなり、人其活動の一を見て或は之を德と名け、或は之を精靈と呼び、或は之を浩然之氣と云ひ、又た天地正大之氣と稱す、是皆其一面のみの見にして其本躰に非るなり、其本躰は廣大無窮にして得て名づく可らず、余輩は只た假りに稱して之を眞善美の實躰となす、

此物天に顯はれては日月星辰となり、地に顯はれては山嶽河海となり、詞に顯はれては詩歌文章となり、人に顯はれては聖賢大人となる、是れ皆人の理想となり、人の生命となり、能く地獄の中に極樂を造り、能く暗黒の中に希望を得せしめ、彼の物理的盲力の羈絆を排して、人をして必要以外に逍遙せしむる所以のものなり、嗚呼世若し此動力なくんば我人は如何にして生息する

を得んや、我人は如何にして一日も安住するを得んや、

夫れ然り然れども吾人は天地何物に於てか最も能く此動力を見ることを得可きや、洞庭の月芙蓉の峯固より能く之を顯はさん、ミルトンの詩セキスピヤの文固より能く之を顯はさん、然れども吾人未た曾て聖賢の言行の吾人を感ぜしむるの深くして且つ大なるが如きを見ざるなり、夫れ古今東西聖賢亦た尠からず、然れども吾人の所謂ゆる四大聖の如きは特に其類を出で其萃を抜くものと云ふ可し、基督釋迦孔丘ソクラテスの四聖は古今萬世に於て世界の生命萬民の理想なり、彼等は最も具く眞善美の實躰を顯はせり、即ち最も多く神の道義性を顯はせり、宜なる哉萬代萬民の此四聖を景慕渇仰して止まざること、

夫れ然かり此四大聖は神に次ぎて吾人の渇仰すべきものにして、此四聖の優劣を論するが如きは殆んど吾人の能力の得て許さゞる所なり、然れども一方よりして見れば外界の事情の彼等の敎理に影響する所ありしは疑ふ可らざることにして、其時其世の必要に應じて彼等が說く所の事柄及ひ其方向に輕重强弱の差違ありしは自然の事なりと謂ふ可し、是を以て余輩にして若し此四聖の傳記に就きて之を對比するときは、余輩はソクラテスの言行の彼の眞善美の三者を發顯するに於て最も多く明瞭に且つ實際なるを見るなり、

年を隔ること二千餘年、彫刻者を其父とし、產婆を其母として、希臘亞善の陋巷に生れたる一僕强漢が、如何にして哲學に於て道德に於て又た最も該博なる意義の宗敎に於て、殆んど神に近きの性質を顯はせしやを想起するは今日此「ソクラテス」降誕會に於て不適當にはあらざるべし、

夫れソクラテスの哲學たる當時に橫深せる詭辨學說の反對よりして起るものなり、詭辨學者は名と金とを得んが爲めに詭辨を擅にして眞理を放棄せり、獨りソクラテスは貧賤に安んじて眞理を抱持せり、ターレス以來數種の哲學者が自然を材料として經營せる智識的の殿樓も、今や敢果なく彼等が懷疑の猛火に燒滅せられ

て又々痕跡を止むることなく、人心は玆に依據を失して曠野に彷徨せり、此時に當りて堅牢なる基礎を定め貴重なる材料を備へて、以て後人をして立つ所を得せしめ依る所を知らしめたるもの是れソクラテスの大功に非ずや、即ち氏は道義哲學を創め、歸納法の原種を置き、又た神を信じ、運命を説き、靈魂不滅を敎へ、特に靈魂改良の切要を論ぜり、此等は哲學の爲め否な所謂ゆる眞なるものを發するが爲めにソクラテスが爲せる所の大偉業なりと云ふべし、

然りと雖も單に眞のみを發顯することは惣ての哲學者多少皆之を能くす、而も惣ての哲學者は決して皆吾人の生命たり理想たる能はざるなり、倍根(ベイコン)は大哲學者なり、然れども吾人之を尊敬する能はず、韓圖(カント)は大哲學者なり、然れども彼れ萬民の理想たる能はざるなり、是れ何を以て然る、他なし他の必要なる元素の絕へて彼等に無きか、又は只た僅かに存するを以てなり、何をか此元素となす、曰く善と美と是なり、吾人はソクラテスに於て此善の先つ大ひに發顯するを見るなり、

ペロポンチサス戰爭後の希臘は極めて恐るべき廢德に陷れり、朝には奸雄權を爭うて政綱由て立つ所なく、野には詭辨學者邪說を擅にして惣ての信仰之が爲めに破壞せらる、曾て誇稱せし所の自由は今や其影をだに止むることなく、日として政黨間の血戰の各市に行はれざることなし、社會の秩序玆に分離し、道德宗敎の覊絆亦た用ゆる所なきに至る、夫れ此時に當りて獨り此濁浪中に卓立して、赤手を揮ふて狂瀾を既倒に廻さんとしたるもの、是れソクラテス其人に非ずや、氏は善の傳導者正義の敎師を以て其天職なりと信ぜり、進んでは則ち猛烈なる詭辨學者と戰ふて之を打滅し盡し、退ひては則ち人民の德性を皷舞剌擊して以て社會及ひ政府の腐敗を匡救せんことを務めたり、家貧にして妻子は常に饑寒に叫へるにも關はらず氏は其敎ふるが爲めに一錢の報をも受くることを肯んぜず、幾多の不便幾多の苦辛幾多の勞働も氏の心を亂すに足らずして氏は常に恰々快々として終日公街に立つて群民と談論せり、悲ひ哉朽ちたる大厦の覆るや一木の能く支ふ

る所にあらず、氏の語は誤解され、氏の身は訴へらる、然れども氏の信仰は毅然として動す可らず、氏の性行は凛然として屈す可らず、氏は飽くまで其信仰を保持して毫も哀憐を乞ふことを爲さず、泰然として死刑の宣告を受けて靜かに其判官に向ひて、是にて余輩は別れん、余は則ち死に就き、君は留つて生きん、然れども君と余の運命の何つれか善なるやは是れたゝ神にのみ知らるゝものなり、と云へるに至つては、山嶽も其高きを比するに足らず、江海も其深きを比するに足らず、猛虎も其强きを比する足らず、秋霜も其淸きを比するに足らさるなり、嗚呼氏の名の天地と共に盡きず、氏の節義の日月と光を爭ふて、所謂ゆる千歳の下貪夫をして廉に懦夫をして立たしむる所以のもの眞に故ありと云ふ可きなり、

夫れ眞あり善ある所美亦た從つて存するなり。ソクラテス既に眞を極め又た善を極む、豈に美を極めざることあらんや、蓋しソクラテスの美は決して繪畫音樂の如き一時目を樂ましめ耳を樂ましむるの美に非るなり、氏の美は氏の傳を讀み氏の說を學ふものゝ心情を淸め理想を高ふして、一種微妙の薰陶を以て眞美の躰に融合感通せしむるの美なり、即はち氏の美は物質界の美に非らずして靈神界の美なり、而して靈神の物質より貴むへきを知らばソクラテスの美の所謂ゆる美術の美よりも大なるものあるを知る可し、此に於て氏の風采の卑俗なる、氏の容貌の粗野なるは、却つて之れに反比例して氏の靈神の美を高むるものなりと云ふ可し、

吾人試みに二千三百年の古代に溯りて、假りに身を亞善繁鬧の市中に置くを想像せんか、競ふて華麗を誇るの都士人中獨り弊衣を纒ふて、帽なく又た履なく當世第一の學識を抱持するにも關はらず自ら其無學なることを告白し、自由に富を積み貴を得るの機會を有しながら逐に淸貧に安んして常に卑賤者の中に生活なし、彼等と語り彼等と論し彼等を導きて、智德の何たるを解せしむるを以て畢生の天職となす、しかも其門人たる所のものは皆是れ一世の名士後代の尊敬する所にし

て、彼等が其の師を渇望崇拜するの切なる恐くは孔門の七十子と雖も及はさるものある可し、吾人は如斯き人を見たるの後翻つて現今社會の狀態如何を顧るときは、胸裏美醜の觀念の涌然として鬪生するを禁せざるに非ずや、クセノフォンは不世の歷史家なり、プラトンは稀代の哲學者なり、然れども彼等が其著書に於て如何に景慕渇仰の情を顯はすかを見よ、吾人は「メモーラビリヤ」「ダイヤログズ」を讀むに當りては、吾人の魂飛び肉動くを覺へざるを常とす、是れ必ず之をして然らしむる所以のもの丶存するが爲ならずや、嗚呼彼の眞摯なるクリトーが師を思ふの情止み難く、ソクラテスを其獄に訪ふて逃出せんことを勸むるに當つてや、彼れ分毫も其心を動かさゞるのみならず却つてクリトーに向つて懇々諄々、人の當さに務む可き所のもの丶何たるやを解得せしめんと欲す、藹然たる其情、掬す可きの其趣き、櫻花も其美に過くる能はず、少女も其愛に過くる能はさるに非ずや、又た彼獄裏臨終の歎きに噢べる門人の中に、自若として尙ほ靈魂不滅の敎を說き、夕陽影傾けるを見て莞爾として毒杯を擧けて之を其口にするに至つては、此間の情況吾人之を比喩するに物なきを見るなり、梅花の節操何かあらん、松樹の高義何かあらん、洞庭の月も何かあらん、芙蓉の峯も何かあらん、嗚呼人間の理想も亦た此に至つて極まれりと謂つ可し、

今や吾人は畧ぼソクラテスの生涯を見たり、眞善美の實躰の如何にソクラテスに發顯せるやを見たり、然れども是れ決して正當なる觀察法にあらざるなり、氏の性質は決して眞善美の三者に限られたるものに非るなり、蓋し氏の言行は只々最も能く神の道義性を發表したるものにして、吾人が所謂ゆる心意を動かす所以の動力の最も能く顯出したるものと云ふ可し、抑も吾人は常に物理的盲力の下に呻吟するものなり、機械的生活を送るの止むを得さるものなり、故に世若し此種の動力の存して物理的盲力を排することなからんか、則ち生命何くにかある、理想何くにかある、希望何くにかある、幸福何くにかある、吾人は殆んど我か生の堪

ゆ可らざるを見るに至る可きなり、然らば則ち吾人が樂天の生活をなすは此種の動力の存するが爲めならずや、此動力が天地萬物に顯出するが爲めならずや、此に於て余輩は益々聖神上ソクラテスの價値の如何に大なるかを知ることを得るなり、嗚呼彼の名山大川は幾多の豪傑を出したり、春花秋月は幾多の詩人を生したり、然れども未た曾て聖賢の言行の萬代を感化し萬人を皷舞するが如くなる能はざりしなり、而して此等聖賢の中に就きて余輩はソクラテスを以て最も明瞭に最も實際に此動力を顯はせるものと信ずるなり、昔しタムス、カーライルは英雄崇拜論、クロムウエル傳、及びフレデレツキ大王傳等を著して、理想界と現實界とを調和せんことを勉めたり、彼は現實界に安住してしかも理想界に逍遙せんとするには、是等諸英雄の言行を學んで之を實行するにありとなせり、是固より余輩が信する所のものと契合するものなり、然れとも余輩は寧ろ怪まんとす何故に彼のカーライルが、區々第二流の英雄を論ずることを是れ務めて却つて近くソクラテスの傳を書くことを怠りしかを、ア、彼の常にBoswellism（崇拜主義）を攻撃せる所のマコーレーすら其ミルトンを論ずるに當つては渇仰崇拜の情如斯く淋漓たりしにあらずや、然らば則ち最も神に近きの言行あるソクラテスに對して吾人が如斯き景慕の情を表するは是れ只た人性止み難きの情にして、亦た是れ人間必須の義務なるに非ずや。

編者曰本文はユニテリアン第一協會ソクラテス祭席上に於いて誦まれたるもの一二字の添削を加へて寄送せられたるものなれば茲に登載することなしぬ

雑　録

○基督敎の三潮流

近時我が邦に於ける基督敎に三大潮流あり、一は專ら聖書を本據となし、舊來の敎義を固守して動かざる者、之れを保守派と稱し、自由、拆衷兩派以外の諸宗派是れに屬し。二は歷史上より批評的に攻究し、新神學を組織し、科學的宗教を振興せんとする者、之れを自由

派と云ふ、この派に屬する者三、普及福音敎會、ユニヴァーサリスト、ユニテリアン是れなり。三を横井氏等の率ゐる組合敎會派とす、この派は前兩者の間に立ち、その聖經を尊信し、信條を固守するは、保守派に異ならずと雖とも、舊義に固着するなく、神學説上より新解釋を與ふる者、これを名けて折衷派と云ふ。而して此の三派各利害得失ありと雖とも、保守派の如きは固執迷信に陷いり、不測の災害を招くとあり、唯僅に愚夫愚婦を率ゐるに妙を得たるのみ。彼の折衷派に至りては吾人唯其の怯を惜むなり、彼れ自から學理に於いて自由派に一歩を輸すと云ふ、如何に實行上關係上得策なりと雖とも、既にその眞理に非ざるを認めて猶ほ之れを改むるを憚かる、何ぞ其の勇氣なきの甚だしきや。諸士にして一片の勇氣あらば、蹶然立つて眞理の爲めに力を致す所ある可きなり。

○自由派の使命

迷信は宗敎家の眞意に非ず、空論亦宗敎家の本職に非ざる也。須らく速に迷信の夢より醒め、空論の蜃氣樓より實物に趣かざる可からず、是れ眞の宗敎の行者(やりて)なる可し。而して自由派は、克く從來基督敎社會に於ける迷信流弊を打破して、意想外の喝采を博したり、今日の自由三派、これを以て其の責務終れり矣となす乎、將た再び立つて彼の折衷派なるものと戰ふの意ある乎。起て！起て！　自由派の使命未だ果さず、その能く折衷派を征伏して實際上の凱歌を奏する時こそ、始めて自由派の任務を完ふせる也。未だ永眠安臥す可きの時に非ず。

○自由派の戰略

自由派の過去は破壞時代なり、少くとも消極の方針其の大半を占有せり、故にこれより進んで建設の時代に遷らざる可からず。而して三自由派の各個の力は未だ極めて微々たる者、以て社會の大事大業に當る可からず、その能く大事大業を興し、充分に使命を果さんと欲する者は、須らく小異を去つて大同に就き、感情の盲目より癒へて眞理の光明に浴し、戮力同心大に奮起する所なかる可からず。今日建設時代に當り成すあら

んとする者の、先つ勉む可きは大同小異なる三自由派の團結締盟なり、宗教界に全勝を占む可き戰略は、その三角同盟に存するなり。

○自得

痴人と小人とは自から己れを誹謗して知らず、却つて他を罵詈し、人を怨恨す。然れども其の身の不德は他人の添加せるものに非ず、天に口なく唯人をして之れを言はしむるのみ。故に之れを自から招く所、自業自得と云ふ、敢へて天を恨み、人を怨む可からず。世の或る者は己れの目に在る梁木を棚に上げ、慢然他の物屑を云々す、これ却つて世の嗤を招くなるを知らざる、亦傷ましからずや。基督敎元より絶對的に完全なりと稱す可からず、然れども論者が解する如きものに非ず、恐らくは論者は是れを闡明して云々するに非ず、唯多くも古代に於ける基督敎史二三を素讀して、基督敎は總へて斯くの如しと速斷するに過ぎず、未だ聖書の通讀も終らずして許下せんとす、その大膽嘉す可しと云はんか。吾れ人常に嘆ず、我邦佛者甚だ普通學に乏しく、批評眼を有せず、毎に感情を以て事物の斷定を下すを。故に往々識者の忌避に觸れ、智者の嗤笑を招くに至る、吾人彼れ等の爲めに計るに、策の得たる者には非ざる可し。而して彼れ等現今の佛者は感情的の敎徒となり、超然的(厭世?)の生活をなさんとす(佛敎に非ず佛者を稱す)故に彼れ等の或る少數は德行を以て鳴るあり。彼れ等社會亦德行修養を勉む。然らば今彼れ等より德行を滅き去るの日は、彼れ等の無一物となるの時なり。それ佛者は、初め善なる感情を採つて以て名を揚げ、終に感情の流弊に至つて以て身を滅し、敎を廢つるに至らざるなき乎。

○佛者の大得意

佛者近頃大得意あり、揚々慢然これを天下に誇る、彼れ等の得意想ふ可し、彼れ等の怡悦察す可し。」日に三食は之れ人世の通例、人あり日に三たび飲食すればとて、豈怪むに足らむや、豈誇るに足らむや。况んや日に若しくは二三四日にして漸く一食を得たるを喜ぶが如きは、その料假令美酒佳肴なりと雖とも、敢へて深

く誇稱するに足らず、人は却つて己れの窮乏を自白するの愚なるを嗤ふ可し。」內閣總理、各省大臣は名譽ある政治家に相違なし、河野廣中、鳥尾小彌太は政德を具へざる者とは云はず、福島安正は古今稀有の偉丈夫として尊敬を表す可きの人なり。然れども大政治家必ずしも大宗敎家ならず、大神學者にも非ず、政德を具へたる者必ずしも宗敎の明ありと云ふ可からず、偉丈夫必ずしも宗敎家の明鑑なりと稱す可からず、信徒の導火なりと斷ず可からず。人各々得手不得手あり、その得手なる所に於いて始めて彰はるゝなり、全智全能は決し索む可からず。故に假令今大政治家、大政德家、大偉人の入宗を得たるは、利は則ち利なる可しと雖とも、豈以て該の宗旨の勝劣を判するの標準となす可けんや、豈以て該の宗旨の功德を說く可けむや。一二敎徒を得たるを以て怡々得色あるは、是れ飢渴者の偶々一食を誇ると何ぞ撰ばん。

○評論子の大日本敎育會評

吾人が運命の片面は確かに諸士の作る所なり、國民生活の方針は少くも諸士の力其の過半を占む。諸士が形ち造る所の敎育上の立法部、即ち大日本敎育會、豈其の責任輕しとなさむや。會員諸士の消長は全國の消長に繫り、諸士の精神は國民を左右するに足る。吾れ人の常に意を注ぐも亦それが故のみ。近頃評論子言あり、以て我邦の敎育如何に運轉しつゝあるか、國民の狀態如何に傾きつゝあるかを察するに足る可し。云く

去る二日、大日本敎育會總會あり、評議員の數五十名なるを改めて、十名となさんとするの動議出でしに、議場喧騷として紛擾極まりなく、遂に一二會員は退席を命せらるゝに至りし末、五十名評議員の元則動かす可からざるものとして存せしとぞ。此內情を報ずるものゝ云く、

評議員なる者は一種の名譽職なれば同會員中其選に當らんとを熱望し改選ある每に競爭運動を試みんとする者の尠からざるより昨年の總會は滿場一致を以て評議員增加說に決し多數敎育家の熱望を充たしたるも爾來同會の議論常に區々に分れ却つて機敏の運動を爲す能はずさて評議員一派の人々は評議員五十名なるを五名に減ずるの修正說を總會に提出せんとを事務員に謀りたるに五名に減するを十名

に改めば或は通過すべしとの注意を與へて之に決し遂に評議員十名を置くの修正説を提出したるに會員中評議員を十名に減ずる時は其選に當る能はざるの見込を付けたる人々は評議員二十名を置くの修正説を提出したるに二十名の評議員を置きなば其選に漏るゝならんと思付きたる人々は評議員三十名を置くの修正説を出し又三十名の評議員中に加はる能はざる人々は一切の修正説に反對せり。

之を、大日本敎育會評議員の爲めの評議とす。吾人其の適否を知らず。然れども時下炎威最も酷だし、諸士幸に防腐劑を用意するあれ。

○冷熱調和

其の冷かなると最も酷だしければ以て症寒を痛み、其熱すると最も酷だしければ以て癨亂を憂ふ、世上の事物皆總べて然り。故に熱する所其の半面必ず冷かならざる可からず、冷かなる所其の反面必ず熱を忘る可からず。近來世上殖民熱頻りに流行し、延いて我が宗敎界を侵かさんとす、時に吾れ人特に社會問題に意ある者、當に能く熱して迎へ、冷して考へざる可からざるを思ふ可し。熱すれば爲めに狂奔に陷いり、冷かなれば爲めに人後に立たざる可からず。

○殖民事業と宗敎家

余が知友深澤氏等、同志相謀つて北海道移住民奬勵會なるものを興す。是れ多くは實業家の團躰、時流に熱狂して勃興せるものに非ざる如し。而して此の種の企業決して尠少きに非ず、政府率先して探撿家を派する等、亦勉めたりと謂ふ可し。然れども目下の景勢より考ふるに、殖民のと眼前に横はれる北海道開拓より急なるは非ざる可し。然り北海の天人目を惹く多しと雖とも、彼れ等の多くは投機的に觀察し、射利的に計畫す、其の結果想ふ可きのみ。一夕深澤氏來つて余に實業的精神的殖氏の要を說くや切なり、吾人素より之れを知る、然れども世多くは流行に馳せ、其の終を完うする者甚だ尠きを慨し、其の罪を殖民家の意を精神敎導に用ゐざるに歸し、是を以て之れを氏に語る、氏亦之れを慨し、其の方途を談ずる數刻、在來殖民家の終に憑む可からざるを悟つて別る。世の宗敎家大に此の邊に力を用ゐては如何。餘りに冷淡なる勿れ。吾人は是れを以て特に基督敎徒に勸め自由派に告ぐ、此の社會

最も確信に富み、就中忍耐謹愼の諸德を有し、敢爲勇奮、進取敏活の精神に乏しからざればなり。

○評論子に問ふ

評論子其の第二號來教會論を草し、第八號に教會縮少の因由を論じて曰く、『第一は今の教會に宗派心なきに因る』『第二は今の教會に迫害なきに因る』と、誠に然り、眞理は每に克爭の間に生れ、進步は迫害より來る。其の激信なる處、必らず迫害なくんばあらず、熱實なる處、必らず克爭を免れず。而して宗派の起る亦是に在り。評論子をして『今の我國教會に宗派あることを慨せずして、宗派なきを憂とす』と、絶叫せしめたるも是に外ならず。然れども評論子少しく沈思默考せよ。道に二道あるなく、理に表裡あるなし。善は何れに至るも善にして、惡は惡たるなり。是を以て宇宙森羅萬象遂に一に歸せざる可からず。其の始めに當つて黨派を別ち、旗色を翻すもの、未た進化の道程に在ればなり。而して吾人が目的とする所果して中途に在る乎、吾人が達せんとする所は克爭に存する乎。若し然らずとし、歸一のものとせば豈割據するの理あらむや。而して今の割據するもの、多くは感情の爲めに然るなり、世の宗派なるもの、多くは己れを知ること薄くして他を責むること酷に、公平の眼光を有せざるの爲めに然るなり。故に能く無智的の感情を去り、公平の裁斷を得る時は、必ずや一に歸せざる可からず、道は一なればなり。然るに評論子は別幟割據を勸む、其の意果して如何。謹んて評論子の敎訓を請ふ。然り然れども吾人素より克爭を避け、迫害を恐るゝものに非ず、見解を異にする者は、正々堂々旗色を明にし、截然陣頭に立つて以て相戰ふ可し。眞理は此の間より生る可ければなり。眞理は進化なり、進化は克爭より起ると雖とも、是を以て直ちに各自見解を異にせよ、別幟相割據せよと勸誘するは、果して教會縮少の因由を濟ふに足るや。

○再挑『天則』

輕夢擯斥咳唾嘔吐醜汚卑陋偏淺邪僻等の悪文字は是れ『天則』の常套語、その甚だしきに至りては、人を呼んで強盜とさへ稱す、以て記者の品位知る可きなり。見よ

如何に是れ等の悪文字が列記せらるゝかを、その第十二號の如きは徹頭徹尾悪文字に非ざるはなし、記者は之れを以てその品格を保ち得となすか、學者の本分なりとする乎。吾人は前號に於いて聊か天則子に諷する所ありしに、記者は却つて悪文字占有權を犯されたりと怒れるが如し。吾人素より是れ等の文字を忌む、故に喜んで記者に返上す、天則子幸に安心せよ。然り占有文字と雖とも、妄に濫用する勿れ。少しく學者らしく戰ひ、大人（おとな）らしく論ぜよ、然らざれば記者の勞空に屬するのみ。吾人をして前號に『何ぞ其の誌面の安き哉』と絶叫せしめたるも、此の意に外ならず、天則子悪しくな思ひそ、吾人の意忠告に出てたるなればなり。」而して天則子が前號中高橋氏を詈り、文學雜誌を評する所一も其の旨趣を得るなし、唯妄に悪文字を併列せるのみ。記者若し正直に其の職を盡し、學者たるの品位を保たんと欲せば、少しく果實あることを書け。草卉美なりと雖とも、果實なくんば敢へて尊ぶに足らず。悪口雜言極まれりと雖も、否理歪道ならば敢へて人をして感伏せしむるに足らず、却つて其の卑陋を嘲らるゝに過ぎず。吾人素より高橋氏の人となりは之れを知らず、彼れ果して眞基督敎徒なりや否も知らず、唯記者の常套語を以て學術社會に臨まんとするを恐るゝ也。即ち記者は文學雜誌評價の標準を、佛敎的感情と基督敎的感情に定め、その事實の理否は敢へて問ふ所に非ず。彼れは佛敎的なるが故に價ありとなし、此は基督敎主義なるが故に見るに足らずとす。假令基督敎が佛敎に如かずと假定するも、直に以て文學上の事實道理をも連殺するの適正なるや。況んや基督敎が記者の知るが如きものに非ず、衝突論の勝敗さへ定まらざるに於いてをや。吾人は文學として眼中佛敎あらず。基督敎なし、唯文學の二學あるのみ。記者よ記者の感情を以て基督敎を誹謗し、文學雜誌を誣ふるを停め、左の二問に向つて明答を與へよ、是れ最も正路にして捷徑なればなり。**第一基督敎と佛敎との衝突の裁斷**、**第二佛敎的文學**（即ち記者が採れる所の文學主義）とは如何なるものぞ」最後に一言すべきは、吾人先きに腐

敗的僧侶の臭氣を帶ぶと云へりしに、記者は是れを以て佛教雜誌と云はれたりとて、頻りに辨護說を吐く。思ひ內に在れば色外に顯はれ、身に過ちあれば之れを奄はんとして却つて其の醜を重ぬるの類にあらざる乎。

○國光の一墜

北里博士は是れ正しく當代の學者、國光を發揚するの一因たり。博士かねて芝區內に傳染病硏究所を設立し、大に該學の爲めに盡す所あらんとす、區民の苦情、博士をして怏々として樂まず、遂に辭職に決心せしめたりと。是れ確かに國光の一面を失墜せしめしもの、以て學者の待遇法と云ふ可けむや。區民諸士幸に一顧の勞を取れ

○哲學科卒業生

客月十日帝國大學卒業式あり、文科大學哲學生を出す五、曰く松本文三郞、松本亦太郞、米山保三郞、渡邊又次郞、松平圓次郞。而して彼れ等將來從事する所の業務如何、幸に學位を辱かしむる勿れ。

○眼を開て見よ

佛教公論得意顏（とくいがほ）に性は改まらずと顯し、吾人を評して基督教なりと云ふ、何ぞ其の迂遠の極なるや。吾人が基督教なるとは、三才の兒童も猶ほ之れを知る。況んや其の身宗教界に在りて、主義の宣告、普通の信仰個條をも讀下せずして漫に云々す、何ぞ其の大膽なるや。而して基督教なるが故に、自由ならず、不公平なりと唱ふるは抑も又何等の意ぞ。記者請ふ眼を開き、少しく硏究して後來る可し。吾人喜んで語らむ。

近刊雜書

◉ビーチヤル　ヘンリー、ワルド、ビーチヤル氏は米洲第一流の大教役者。スポルジヨン、ムーデーと共に其の名字內に高し。彼れは確かにヒユマニチー界中の人即ち愛の人明に愛の道を悟得したる者なり。彼れはその世平なる時に當りては平民の友となり親切なる窮民の憫慰者となり保護者となりて以て社會的說教に汲々たり。彼れが嘗て同胞の鐵鎖に繫がれ日々苦使酷役を受くる奴隷の境界を見るや慈眼愛腸の熱淚は一時に激發して社會を警動し遂にロツキー山上自由の一大旗旂を飜すに

至りては其力實に與かりて功あり。此の偉人此の大教役者今や當世文壇の一傑士松村介石君により我國に紹介せらる。此の著四十三頁の小冊子に過ぎずと雖ども一の險句なく一の難語あるなく坦々として能くピーチヤルの人と成りを描寫し來つて餘すなし著者の勞以て謝す可きなり

◉**宇宙神教確論**　此の書は是れ宇宙神教の主義を世に發揚せんが爲めに殊に宇宙神教々會の保護の下に飜譯せられたるもの原名を Universalism Assented, on the authority of Reason, the Fathers, and Holy Scripture と稱し英人トーマス、アリン氏の著述に係り未來刑罰無限害惡說に對抗し罪は悉く公正且治療的なるを唱道し普及救濟說を廣く世人に紹介せんが爲めに此の勞を取られしを深く謝せざる可からず實に今日は吾が自由派の一大氣焔を吐く可き時に際せり這時に當り是れ等の著書が續發せんことを望むなり。唯本書に就て殊に目立ちて見へしは高橋五郎氏の序文なり時節柄何となく世人の注意を惹くが如し。

◉**比較宗教學**　第二卷は去月中大日本聖公會書類會社より出版せられ著者は米人アイ、ドウマン氏譯者は米田庄太郎氏本書は新日本文學進步の一助たらん企望を以て批評家の眼を閉ぢて歷史家の地位より事實を蒐錄し之を整列して宗教上近世科學的研究の最良結果を示し益以て眞正なるヒユーマニチーの活力を現はし宗教的觀想の高潔崇嚴を維持せんが爲めにすと云ふ黑耳古祕露等の風俗宗教的儀式狀態を精細に書き表はし之に略評を加へ第八章以下に於ては老子哲學道教 Taoism 羅馬の宗教等を論ぜり飜譯文躰は近來の上出來餘り見苦しきと思ふこともあらざりし。

◉**忠孝活論**　は井上圓了氏の著前著佛教活論等の繰返しに過ず其の略に曰く凡そ佛教組織の中心は眞如にして是に向上下的あり向上は理論門＝哲學、平等、出世間、自利。向下は應用門＝差別、世間、利多にして安心立命轉迷開悟を目的とする宗教也。世間道德の起るは世間を離れて出世間なく萬法を離れて眞如なきが故のみ而して耶蘇教は世外に立て世間道德を以て假物となす故に其の忠孝は死物、不神聖、無精神、便宜、外形的にして假父假君神僕神婢相互間の道のみ佛門の忠孝は全く之れに反し皇室を奉戴し國躰を護持する精神より必至的に生し義務的に發したる活道なりと誇稱せり果して然るや否誰も我物はよく見ふるものなり。

◉**平民叢書文明の弊及ひ其救治**（批評は次號に出づ）　京橋區日吉町民友社發行

◉**慧日破闇**　富田實英君著　越後中頸城郡高田救世教會

◉**評論**　巖本善治氏の教會論稿は益其の論鋒を鋭くし第八號第九號には近時教會門內の傾向會員增加して教會縮少の因由を論する適切慨切其の第一因を眞理は論義の後に定まり宗教上の大確定は宗派間の克爭に在り然るに今の宗教家冷々として此の勇氣なきに歸し迫害は顯正傳道の撿針熱信の處必ず迫害なくんばあらず今の迫害なきは其の第二因第三因は世間に對する慈善救濟及び改革傳道の事業なきこと第四因は今の教會は聽衆が演說會場に集り信徒が佛寺に參詣したる如く清凉なる親密和睦の道なきにより第五は眞正の牧師なきに因ると論斷せり其の他第九號には布川靜淵氏の德川幕府刑法透谷氏の客舍偶錄流水子の文界時評巖本善治

氏の社會良心論等あり

◉三籟　松村介石君の基督教徒各派の旗色は第一舊守派＝信仰派にして聖書に憑りて信仰の標準を定め只々信仰にのみ由りて百事を處理せんとするもの第二進歩派一名學究派是は常に眞理討究に熱注し遂に亦從來の信仰を顧るなし是れ宗教學者として消極的に用ある者此の兩派の中間に立ち活實の道即ち山上の德教を以て立つの道德派を第三とし是れ畢竟道德教のみ宗教の本部は終に副たるに過ぎずと其の他神秘派宣教師派西洋派東洋派義務派愛情派等其の論ずる所氏が現今基督教社會の沈鬱流獘を憤慨するの嘆聲發して是に出たるなり透谷子のほたるは寂寥とし清涼に殘花君のさくら田の雪は已れ其の場にある如くあるは勇ましくあるは哀はれにあるはおどらしめあるは縮ましむるの節いとゞ巧みなり。

◉早稻田文學　には第四十三號より金子馬治氏の詩才論を連載す其の目次を見れば一小き詩才、二おしなべて謂ふ詩的想像、三天才論一節客觀より觀たる天才第二節主觀より觀たる天才(一)無意識靈機(二)無意識靈機の理、四詩才幷に狂氣遺傳及び教育にして其の四十四號にて無意識靈機まで論ぜり然るに紙幅限あるを以て讀者に紹介するを得ず誠に遺憾に堪へず該誌はサスが逍遙子の寓する所我國文學雜誌の粹中の粹なる可し

◉文學界　悲曲茶のけむり（古藤庵）吊歌桂川(戸川殘花)刀鍛冶堀井來助(無聲)劔山呂洞賓(井上活泉)グレー氏風雅の歌(禿木)骨堂に有限を觀ず(天知)以上第六號、吊歌桂川を評して情死に及ぶ(透谷)靜御前(殘花)茶丈記(藤生)白百合を指して袈裟女を吊ふ(天知)茶のけぶり（古藤庵）夫を戀ふる古文(菊女)以上第七號全誌を擧げ寂淨肅靜の文字人をして天外に在るの感あらしむ只あまりに悲哀にすぎて遁世の氣味なきか

◉哲學雜誌　第七十七號　◉思想　第二號
◉眞理　第四十五號　◉同志社文學　第六十七號
◉六合雜誌　第百五十一號　◉中央學術雜誌　第七號
◉自由基督教　第十一號　◉基督教青年　第四號

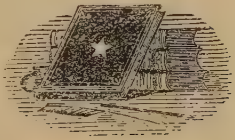
彙報

◉土宜法龍、芦津實全、釋宗演、八淵蟠龍の四氏佛教有志者として萬國宗教大會委員長ジョン、バーロス氏の招待に應じ出席する由◉去月中東京市民の精神的生活に大關係ある寄席改正取締り規則の發布あり◉高島嘉右衛門氏は萬國宗教大會に提出せんが爲め其著書高島易斷を英譯し各大臣各國公使及朝野の諸名士に寄贈せり◉岡山孤兒院概則一天下無告の孤兒を救濟し其父母に代りて養育するを目的とす、二六才以上十二才以下とし何國を問はず幾名にても入院を許す但無告の孤兒たる確實の保證を要す、三上天父の冥助を祈り下天下有志家の義捐金品等を受け之を維持擴張す但如何なる困難に遭遇するも敢て負債をなさず、四普通教育を施

す五入院後小學科程を卒たる兒女は各其才能に應じ院内設置の實業に從事せしめ或は適當なる農工商家に奉公せしめ拔群の學才ある者は高等教育を受けしむ◉第一回全國基督教徒共勵會は去月中神戸市に開かれ役員撰擧をなせしに原田氏衆議の推す所となりて會長となり東方匡、土佐常記の兩氏書記に囑托せられたり◉大西祝氏は去月十八十九の兩日第五回夏期學校に於てショーペンハウエルてふ講演し最も難澁なる哲學問題を明晰に手易に論述せられたる所一同の感心を買へりと◉ローレンス氏は避暑の爲め日光山内に滯在す

前號の本誌

《論林》「文明とは何ぞ」矢部新作氏「支那國教概論」佐治實然氏「安心立命」三並良氏「宗教と教育の關係に就て」元良文學博士「春晴」湖處子「ユニテリアン教私解」土谷忠治氏「兒童の宗教思想に就て」戸城傳七郎氏《雜錄》神人、迷執、希望、妄想、世事、人事、宗教博物館、宗教と教育との再衝突、僧侶腐敗の影響、國民と日本との衝突、《近刊雜書》拾七種《彙報》數件



論林

釋迦牟尼佛畧傳批評

佐治實然

曾て予か起稿せる、釋迦牟尼佛畧傳概論と云へる一篇は、本誌第十九號の紙上に掲載せられたり、今讀者の便を謀りて、其論旨を畧記せむ、其論に曰く、古來佛敎の經論釋に散見する所の、釋迦牟尼佛の傳記の十中八九は、概ね信用を措くに足らす、其故は事を叙するに常に歴史的考證の外に出て、理論的事實の基礎を失ひたればなり、此等の記事も、時に或は、超理的妄信の摸型として、古代に於ける宗敎の光景を觀察するの材料とはなりぬへし、又宗敎的思想の表象として、今時佛敎者の志向を看破するの證劵に供するとを得へし、然りと雖も、古佛釋迦世尊の實歴を尋討するに臨みては、些子の利益をも穫收し能はされはなり、予は本誌第十九號の紙上に於て以上の如く概論せり、其終りに臨みて「予か經典諸書に載せたる釋迦傳記の概論は、漸く盡頭に達せり、次に諸有舊記中、簡明詳畧、其宜を得たる者を擧け、逐條に批評を加へむ」といへる數言を附加して擱筆しぬ、然れば今や其約束の順序を履行せむには、古今佛敎者の几上に編纂せられたる、廣畧數十種の釋迦傳記中より、孰れか其一を、此誌上に平叙せさるを得さる機會とはなりぬ、而して彼十九號紙上に、幾回も縷述せしか如く、一瞬間に廣傳にても畧傳にても、自己の要求に隨ふて得らるへければ、任意に其一を取りて、此紙面に平叙し去るは、尤も爲し易き業なり、然れとも世間の常態として、得るに易きものは得るも面白からす、得るに難きものを得來りてこそ、初めて妙味もあるなれ、快樂も涌出つるなれは、任意と云ふとも、實際には一箇の困難なる方法といはさるを得す、偖て斯くて止むへきにあらされは、取り敢へす、左の一篇を採用して、予か批評の原料に供せむ、左篇は予か朋友豊國義孝君か、廣く經典諸書

に渉獵して、精粹を摘み實を選みて、僅々數頁の中に釋迦傳の起盡を整頓せられたる、其巧手を見るに餘りあり、豐國義孝君は實に温良なる佛學者なり、目下日本新藏協會を設立し、古來「大藏經」と稱へ來れる、浩瀚なる數千卷の經論釋より、必要なる經文信條を鈔出して、而も之を和譯し、鈔譯佛敎要義全書と名けて、廣く會員其他有志者の、淨資を投せし者へ頒布するの淨業に從事せらる、近頃尊重すへき法師なり、左篇は則ち同君か其第一卷の卷首に掲けられたるものなるか故に、形式上より看るも、予か從來の經驗に徵するも、現今吾國の佛敎者の志向を代表すへき釋迦傳として、批評するの價値を保有せりと云ふを得へし、予か批評の原料として、特に此一篇を採用するの旨趣、蓋し茲に在り、

釋迦牟尼佛畧傳

日本新藏經協會主幹　豐國義孝　編纂

釋迦氏は瞿曇の苗裔にして、甘蔗王の後なり、其先を平等王と云ひ、又衆所許と云ふ、是れ印度民主の元始にして、刹帝利種の大祖なり、同姓相承る者凡そ三十三世にして善思王に至る、善思の後、八姓相代り、第九世を大茅草王と云ふ、即ち瞿曇なり、其子壹摩彌王を第十九世と爲す、即ち甘蔗王なり、甘蔗王始め瞿曇の種姓を承け、褒多那國に王たり、二妃を納れて后とす、其第二妃に四子あり、長を炬面と名け、次を金色と名け、次を象衆と名け、季を別成と名く、皆賢勇明武、能く大業を繼くに堪へたり、然るに第一妃、其所生の長壽なるもの、不肖にして父王の後を承ると能はさるを憚り、讒して四子及ひ其母を黜く、竟に母子相携へて雪山の北に移住す、其德に歸するもの日に市の如く、數年ならさるに欝として强國となる、依て國を建てゝ迦毘羅國と稱す、長子炬面等沒するに及んで、季子別成初めて立て王となる、甘蔗王之を聞き歎して曰く、吾子は釋迦なりと、釋迦は能仁の義なり、蓋し其仁にして能く立つを云ふ、遂に取て以て其民に命く。別成王の子孫、迦毘羅國に王臨する者、凡そ九十三世にして大善生王に至る、是れ釋迦牟尼七世の祖な

り、六世の祖を懿師摩と云ひ、五世の祖を憂羅陀と云ひ、高祖を羅瞿と云ひ、曾祖を尼浮羅と云ひ、祖父を師子頬王と云ふ、

評曰釋迦古佛の系譜を瞥見するに、印度國初より釋迦降誕に至るまて、世代の順序及ひ人皇の繼位は、確乎顯然、更に疑團を措く可らさるものに似たり、然れとも上說の由來する所の經典を參照するに、古來佛教者の傳授する釋迦古佛の系譜は、古代印度民族の口碑、若くは傳說を、千古不磨の眞說なりと盲信して、一句一節を增減せさるものたるや勿論なり、其故如何と云ふに、佛教東漸の途に上りし以來、支那及ひ吾國の各宗派の高祖と仰かるゝ諸師すら、尙ほ佛陀の系譜靈蹟に關して、史學的研究を爲せしものなけれはなり、況や其他の末流を汲む者に於てをや、試に支那僧祐禪師の著作なる、釋迦譜第一卷の卷首を繙きて看よ、冒頭第一段として「釋迦始祖劫初刹利相承姓緣譜第一」と云へる名題の下に、直に長阿經の佛說として引用する所の、頗る奇異なる文字に遇ふとあらむ、素より這般の文字も、世界太古の人種間に行はれたる、創世說中に雜錄すれは、必すしも異樣の色を示さゝりしならむ、然れとも方今全世界に赫然たる、佛教の教祖、釋迦金口の說法として讀み去れは、何人を問はす、必す奇異の感情を動かさむ、請ふ少しく其經說を鈔出せむ、

劫初天地欲レ成、大水彌滿、風吹結搆、以成二世界一、此世欲レ成、光音天、福行命盡、來生爲レ人、皆悉化生、歡喜爲レ食、身光自在、神足飛行、無レ有二男女尊卑一、衆共生故名曰二衆生一、有二自然地味一、猶如二醍醐一……其後衆生、遂爲二婬逸一、爲二自障蔽一、遂造二屋舍一……自然粳米、朝刈暮熟、……衆生自藏二已米一、盜二他田穀一、無二能決者一、議立二平等主一……始有二民主名一、初民主有レ子、名二珍寶一、……

祐案……經擧二大數一、似三亦未二周一、昔羲農軒皞、猶莫レ詳二其歲一、況飛行聖帝、壽踰二大椿一、其年世邈絕、豈凡識所レ揆哉、

試に問ふ以上の文字は、眞に經說なるか、果して經說なりといはゝ、予は左の如く論せさるを得す、吾國現

時各宗十萬の僧侶は、目前の道理よりは、又實驗の智識よりは、寧ろ佛祖の言行を默諾するを以て、道義の標準とするか故に、恐くは甲經を取り、乙經を捨るか如き、自由的信仰は、未た夢にたも視さらむ、苟も許容せさらむ、斯かれは必す此等の經說をも信奉せさるを得さるへき、厄境に陷るものなりと云はさるを得す、而して目下佛教の組織上、僧侶の境遇を目して厄境といふは、予か如き局外者より之を云ふのみ、僧侶は意氣傲然として、自ら厄境に在るの感を起さゝるか如し、故に予は數理的推測に據て、左の如く云ふを憚らす、曰く人あり指を僂めて八箇の數を數へ得るならは、同理に依て、五箇の數をも數へ得へし、然れは吾國現時各宗十萬の僧侶は、長阿含經の經說として、這般の怪文字卽ち疑もなき古代印度民族の創世說を信奉するに堪えたる器なるか故に、同理に依りて、四帙の毘陀(ベダ)及ひ摩奴(マヌ)の全書をも服膺し得む、倘は予は科學的實驗によりて、左の如く云ふを憚らす、曰く蚯蚓を餌とする動物は、亦蛇蝮の類をも喰ふを常例とするか故に、毘陀摩奴(ベダマヌ)の學說に默從して、自ら厭ふとを辨へさるものは、推測するに「スカンヂイ子エビイアン」の「エッダア」中に記載せられたる、創世の妄說にも反對せむと欲する思想をも起し得さらむ、此の如く徒らに古書の文字に束縛せられなから、自ら不自由を感せさるものは、文學更新の時に處して、思想の自由なるとをだに解し能はさるものなり、且又學術の貴重なる所以をも知らさるものなり、宜哉、眞宗教の正信仰は、天地と始終を同くするとを了解せすして、朝より夕まて、乃至幼より老に至るまて、常に恒に迷信海裏に頭出頭沒し、黄葉止啼の方便說に眷戀して、牟尼皿大の眼球を括出するの氣象に乏しきや、嗚呼佛教の道德、日に月に退縮して、僅に其餘喘を田翁野媼の間に保たむとするは、强ち教理其物の罪にあらすして、僧侶其人の昏暗なるに職由せすむはある可らす、咄哉、各宗十萬の僧侶、盍そ猛省一番せさる、何そ速に日新の道に上らさるや、

釋迦牟尼佛の父を、淨飯王と云ひ、母を摩耶夫人と

いふ、我紀元前三百六十八年四月八日を以て、生を其國の首都王宮に示せり、幼名を悉達と云ふ、牟尼は其後に改めし所の名なり、其生れし時、扶持する者なくして、自ら歩すること七歩、右手を擧けて天を指し、左手を以て地を指して、天上天下唯我獨尊と唱言せりと云ふ、

評曰、釋迦牟尼佛の降誕及入滅の年時は、邈焉として得て明知すへからす、古來吾國佛敎者正統の相傳は、甚た古代に失せり、而して今日の佛敎者は已に其失誤を曉れるものゝ如し、曉りて之を改めざるは、唯各宗高祖の敎典に違背し、管長の叱責を受けむことを恐るゝか故なり、近時有名なる島地嘿雷師の著作、三國佛敎畧史の凡例を閲讀するものは、予か言の誣妄ならさることを知らむ、嗚呼古聖そくらてす師は、自己の尊奉する所の哲理の爲に、一身を犠牲に供せり、而して方今の學者は、思想を枉け、氣息を殺して、躬親ら暖飽を求むるの手段に備へり、是れ之を文明といふ乎、將又之を澆季と名けむ乎、

又曰、襁褓裏の嬰孩も尙ほ能く關節ある發音を爲し得る乎、呱々の聲は隱約の間に關節ありとす、然れとも此は是れ無義語なるのみ、嬰兒の無義語を發するは、唯是れ世間尋常の瑣事、何そ史上に錄して敎祖を賞嘆するに必要あらむや、分娩の後餉時を經さる嬰孩も、扶持する者無くして能く步行に堪ふへき筋骨あるか、必す哺乳動物界の定則は、斯る事實の實在を許容せさらむ、佛敎學者は敎祖釋迦佛の傳記に附するに這般の怪說を以てし、恬然として自他に慚愧するの情緒を起さゝるは如何、若夫れ慚愧の情緒一たび動くあらは、何そ速に自ら欺き他を瞞するの手段を廢して、正當に佛陀の功德を稱讚せさるや、佛陀は自然の法律は宇宙と終始を共にすと公言せり、然れとも赤兒能く步み、狸奴能く言ふことを敎へしか如何、或曰嬰孩にして能く言ひ能く步む、已に是れ非凡なり、而して言ふ所の語義、直に佛敎の本質を發揮して露堂々たり、是れ則ち佛陀の大覺世尊たる所以なりと、嗚呼佛敎者の佛に佞する此に臺至するや、試に思へ此佛の出家する因緣は直に

下に現るゝか如く、生老病死の四苦、即ち吾人か認めて生理的經過と稱する者は、佛陀の身邊を圍繞せしにあらすや一箇の肉團にして生老病死の順序を免れさるものは、尋常普通の生物なるのみ、約言すれは、釋迦牟尼佛と雖も、物質界動物分類の表面に入り來るときは、吾人々類に均しく、多少の尊貴をも有せさるへし、頭上より蹠下に至るまて、耳目手足等を概括して、單に有脊動物科哺乳類に攝屬せらるゝや必然ならむ、其然り、佛陀の佛陀たる所以は、可見の肉團を要せすして、彼れか本來の靈光自ら一段の光彩を放てるとに注意せさる可らす、昔は黃檗の希運禪師天台山に登るの途次偶ゝ水上を步行せし妖僧に逢着せしかは、禪師直に呵責一番、之れを斥けたりと、予は宇宙間に重力の支配を受けさる物質の存在を信認せさるか故に、其信認、延て水上を步行せし所の妖僧か、希運の目前に現れしとをも許容せさるなり、然れとも之を一時の寓意ある話頭として、水上を步行するは宇宙の大法に乖戾せりと看破せる希運禪師の決斷力は、今時の佛教學者の暗鈍なるに優ると數等なるを、賞嘆して止まむのみ、今時の佛教學者は身心を擧けて趙理的濁浪に沈溺せしめ、太古蠻民の殘羹冷肉に飽て、意氣揚々たるものにあらすや、

（未完）

偉人としての耶蘇基督

松居松葉

緒論

無際無限空を呑み、虛を藏めつる自然は、今はむかし吾人が未來を數ふる能はざるが如く等しくまた數ふる能はざる往昔に於て、大喝一番光明を喚破し去り、繼てわが宇宙萬有を作成しぬ。かくいへばとてわれを捉りて、直に衆神譚的聖經記者を專念信仰するものなりといふとなかれ、吾人はたゞ彼が功妙奇怪なる古譚的の趣味湛然たる說明を借りむと欲するのみ。創世紀を記したる彼等の或者はいふ、神は七日にしてこの宇宙萬有を作れりと。齷齪たる地上の基督教徒よ、汝等が小理想をもつて、その一日を千年に配し萬年に較し、以

てこの神韻縹渺、無意識中に成れる無韻の詩篇が有する大妙想を汚がし去ることをやめよ。願はくはこの詩篇に謂ふ所の一週日をして、地下に於ける一週日と等からしめよ。思ふに自然の大能力大手腕は、七日を以てこの宇宙萬有を作成すに足れりしならむ。あらず、彼が意思の一たび動くところ、事物は沈默の中に姿を現じて、萬有は立ろに備はりしならむ。われをしてかの小牧師、かの小聖經解釋者と等しかるべき臆測を逞ふせしめたらむには、自然は一瞬間に於てこの世界を作り、日月星辰を作り、また無邊無極の蒼天を作り成したらむと思惟するも怪むに足らず、蓋し彼等は自然を以て大智大能の一巨漢（ジャイアント）となせばなり。されどわれは、彼がこの宇宙萬有を作成したる手腕の敏速なるに驚嘆するものにあらず、たゞわが彼が室前に額附きて、隨喜の涙を揮ひ讃美の聲をふり絞らんとするに至るものは、彼が用意周到緻密にして、一事一物に向つてこと／＼くその特色を與へつること是なり、その特性を頒ちたること是なり。

仰き看る蒼々浩々たる大圓寰、測るに深長厚の面積なく、窮むるに東西南北の方向なし。九重杳渺として尤も達しがたく、萬古穹窿如何でか窺ひやすからむ。この間懸くるところ、容るゝところの日月星辰、知らずその數百千萬、しかも一としてその特色なきものなく、その特質あらざるはなし。俯して看る渾然たる一圓球、東西に寛く南北に短く、四の三は洋々たる海を湛え、その一は巍々たる陸を起す、この間載する所、藏むるところの森羅萬象いくそばくぞ、たゞに一種類の生物を採り來りて撿するも、その品類の多き實に驚くべきものあり。況してや全世界に羅列するところのものを盡して、その數を知らんと欲せば、過去、現在、未來の三時代の人々をして、こと／＼くその指を屈することを勉めしむるも、尚その足らざるを感ぜざるを得ざらんとす。特性！　特質！　これ自然が吾人に示したる事業の中に就いて、尤も驚くべき尤も見事なる大觀にあらずや。

佛者の所謂『天是天地是地、山是山水是水』といふ大づ

かみの特質はいはずもあらなむ。同じ彙類の植物が他の彙類の植物に於ける特性、同じ科等の動物が他の科等の動物に於ける特質、――かの浩大無究の自然の事業に比し來れば、富士山麓の砂一粒にもあたらざらん細微の事物の特質――を見るに至つては、吾人は轉た、自然の妙用大によろしく小によろしく、巨に適し細に適せる大能力に打たれずんばあらず。等しくこれ花なり、されど純清素潔の梅と嬌艶妖麗の百合の花とは、その香氣に於て、その形狀に於て、その色彩に於て、はたその審美的階度に於て、如何ばかりの差違ありとするぞ。等しくこれ鳥なり、されど金衣爛々たる鶯と悪相醜聲の梟とは、その啼く聲に於て、その形狀に於て、はたその羽毛の色彩に於て如何ばかりの差違ありとするぞ。香氣の差違、啼聲（なくね）の差違、形狀の差違、色彩の差違、みなこれ彼と此とが有する特性の差違なり。特性！　特性！　吾人はもし絶えて自然の特性なるものを索めば、思ふに彼が宇宙萬有に幾千萬億の特性を與えたるその大能力こそ、彼が特性なるらめ！

されど事實は時として吾人を裏切（ベトレー）するものなり。吾人は屢々諸般の萬有が其特性を失ふとあるを見る。事古りたりとして、笑ふことなかれ、最も古く傳はれる事實は最も新しき事實の證明者たるを得べし。江南の橘は一度淮北を逾えて枳となり、さるでにあの蜂蜜はその味苦し。自然は吾人に一の法則を默示すらく、一は一のみ二なるべからずと。橘は橘のみ、橘にして枳ならばこれ二なるにあらずや、蜜はよろしく甘かるべし苦がるべからず、蜜にして苦ければこれ蜜の特色を失ふ者なり。自然は嘗て一種の法則を作つて、宇宙の萬象をこの中に驅り入らしむ、而して今俄かにみづからその法則を破る、知らず矛盾は自然の法則か。自然は嘗て萬物に向つて其特性を與ふ、而して今俄かに其特性を奪ふ、知らず矛盾は自然の法則か。

遮莫（さはれ）、吾人をして沈思一番尚一層考ふるところあらしめよ。橘の枳となりしはこれ淮北の風土が影響の結果なり、蜜の苦味を帶びたるは、さるでにあの土の苦ければなり。松の直く棘の曲れるは、もとその自然なり。

まかれども外物の勢力の加はりて矯柔する所あれば、松の曲り棘の直からんもまた望み得べし。あるぴんの山風雪烈しくして樹木は草より低く、八丈が島炎熱甚だしくして草卉樹よりも高し。これその地方の風土季候が、彼等動植物に影響して、その特色の一部分を變化したるものにして、もとより其特色を失却したるものにあらず、此の如きは自然の普通なる理法にして、毫も怪むに足らず、あにまた自然の矛盾ならんや。豈また事實の吾人を裏切るものならんや。萬有は常に其反抗力の程度に應じて多少外界の事物の影響感化を避くる能はざるものなり。

自然は彼に厚くして此に薄き繼母の如きものにあらざるなり。彼は慈眼博愛の觀世音なり。彼は赫奕たる光明を放つて八方世界を遍照す、東にあるもの其光明の惠に浴し得べくんば、西にあるものもまた其恩寵に與かるを得べし。さればその理法もまた從つて彼に適して此に適せざることなく、上下左右萬有萬象に遍通して、一分に特殊なることなし。動植物界に於ける同一の理法はまた等しく吾人人間の間に應用せられて、吾人が內界外界ともに、外物のために影響せらるゝ所あるは、吾人が日夕目睹する所のものなり。われ動物學者にもあらぬ分際もて、輕々しくかゝる事をいはんはいと僣越に似たるべけれど、姑く浮世の學者が傾向に從つて、この人類を一族（モノゼント）なりとせば、知らず今日の如く幾多の民屬を地球の表面に現出するに至りしは、果して何の爲めなるかを。吾人はこゝにぷりちやあどの分類の正しきか、ぶるーめんばつちの分類のおもしろきか、將たまた十一種族に分ちたるぴつかりんぐの分類法のよかるべきかを問ふことを望まず。吾人はたゞ何故に同一の源より出でたる人間が、或學者のために全くその種を異にしたるものなりと分類せらるゝまでに、相異の點を現はすに至りしかを怪まずはあらず。かのへれん人がありあん族より分れたるは何が故ぞ、ありあん族がどりあん、いをにあんの二種に分れたるは何が故ぞ。われは歷史家を氣取り人類學者を氣取りて、こゝに山鳥の尾のながながしき證據呼はりをするの要なし。た

ゞいふこれ實に土地季候等の外物の影響したる結果に他ならずと。而してこは一種族一民屬の上にのみ止まらず、一人一箇の上に於て尤も多く然るを見る。もんてすきゆーの季候説豈に幾分の理なからむや。

然れども、無意非情の植物、理性を具せさる動物、總べて形躰を是主とするものに於てこそ、風土季候なんどの形躰に向つて多くの感化力を有するところのもの、その影響する所殊に深くして且多かんめれど、感情を有し理性を具ふる精神的動物なる人間に向ふては、その感化影響を與ふるところのもの、また隨ふて精神的ならざるべからず。近代の歴史家は吾人に教えていふ、血統（レース）、周圍（サアラウンヂング）、時勢（エポック）、これ人間が思想感情を作るの三要素なりと。然り、然り、この三勢力は常に吾人人間の内部外部より吾人の感情思想の上に種々の動作をなすものなり。思ふに自然の吾人に特性を附與するや（大躰に於ては人間一般に遍通なれども、その小部分のみにつきていふ時は）その多分は血統（レース）てう名の下に與へらるゝなり。然れども吾人が前に動植物に於て發見し得たる理法は、周圍、時勢の二勢力と其名を變じて、かの血統をば襲撃し、その襲撃したる結果は其幾分に影響する所なくしては休むとなし。譬へば彼二勢力は白熱火中に熱せられたる鉗鍋の如し、その裡に投ぜらるゝところの人間は、その大本の全質を（人間としての遍通の特性）こそ失はざれ、形狀その他の點各々の小特性の如きもの）に至つては、全く或はその幾分を變更せらるゝことを免るゝ能はざらむ。彼の一國の民族、一時代の人心が各々同一様なる色彩形狀を歴史の上に殘し去るは、猶ほ彼の熔爐の中なる金屬の形狀は、その熔爐の形狀によりて决定せらるゝが如く、彼等もまたその周圍（地味、氣候、習慣、制度、教育等の條件）時勢（當時の精神等）によりて决定せられたる結果に外ならざるなり。

さるにまた近頃の歴史家は、かの三要素の外に個人（パルソン）の力をも、勉めて看宛がさざらんとするものに似たり。さる歴史家はいふ。『社會の進歩は抜群の人物の事業と分離すべからざる關係を有す。世の大變動は、その健

全なると否とを問はず、かならず特にこの事に干るべき一箇人の氏名と相連鎖す……國民は戰亂の時に於ても、平和の時に於ても、常に彼等に嚮導せらると』いふ所太甚だ好し。然れどもわれをしてわか龐雜なる考を遠慮なく吐かしめば、その意思が一種の反動力となりて社會の現象を動搖して、社會を奴隷にせんずる勢力ある箇人は、さながら水中に立つて溺れず、能く千重万重の波濤に耐ゆるのみならず、かへりてみづから一派の波を作りて、推來る波をば推かへすが如きものならむ。されど知らずや彼が推かへしたる波は、再びその爲めに起されたる新らしき波を作りて、彼が四圍に打ち寄せ來りつゝあるとを、況んやまた彼がよく水中に立つて波濤に堪ゆるに至りしは、既に波濤のために影響せらるゝと、幾回又幾回、幾回の影響の後ち漸くにして水中に立つを得るに至りしものなるをや。語を換へていへば、彼が社會を奴隷にするを得るに至りし以前、彼は既に四圍の勢力の感化影響を受け居たりしにて、其影響感化の結果こそ彼を時世の奴隷たらしめざるに至りしなり。吾人はばつくるとともに全然自由意思(フリーウイル)を否定せんとするものにあらず、されど吾人をして詩歌的(ポエテカル)に叫ばしめよ、人間は境遇の奴隷なりと。(われは前に擧げたる諸勢力を併して單に境遇といふ、その字の簡なるを撰びてなり)

然らば則ち千古の偉人耶蘇基督は如何に？　彼は如何にこれら境遇のために影響せられしぞ？　彼は如何にこれら境遇のために感化せられしぞ？　(未完)

ベルリコ道義要論 (承前)

法學士　宮本平九郎譯

第七章　人たるの價直、

其素行によりて峻德あるを示し、吾人に敎ふるに人の宜しく務むべき所を以てする如き人々を以て之を吾人に比するに、吾人は名聲の點に於て既に之と比肩する能はざるを知るべし。然れども人の貴むべきは徒に此處に在らざるを以て、吾人は無形なる內部の價値(インテルノブレーヂオ)に因て常に之と比肩するを得。何をか內部の價値といふ、

則ち人は懦弱無智の動物に非ざるを自ら感ずる毎に、又人生の智識を稟有して常に上進するを得る者なるを感ずる毎に、吾人の高尚なる感情の發展すること則ち此れなり。

現在或は過去の歴史を繙き、其卑陋賤むべきの小人多きを見て以て速了にも人類の賤劣なるを誹らんと欲するときは、又一方に於ては其名譽の史上に赫灼たる大人豪傑の事を追想せよ。寛厚なる詩人バイロンは曾て余に此れ則厭世主義（シザントロピア）を脱却する唯一の方法なる所以を説いて曰く、

世界の豪傑にして常に第一に余の心頭に上るはモーゼなり、人民をして全く卑屈の域を脱せしめたるモーゼなり、壓制、奴隷、偶像敎の域より人民を救出せしモーゼなり、旅制時代の宗敎と開明時代の宗敎との間を連絡すべき善美なる法律寧ろ聖經を人民に附與せし、モーゼなり。モーゼの德義と其制度とは則ち神が之に因て以て人類中の熟練の政治家、勇剛の武夫、卓絶せる國民と、且盛者虚飾家の俄に必衰すべき理由と、各國民未來の開化とを豫言する天任を負へる正義の大熱心家とを世に出してしめんと欲する手段なるのみ。

二三豪傑殊に我か敬愛するモーゼを觀察して余は常に熱心に次のダンテの高尚なる句を反覆吟詠し胸中自ら智の湧くを覺ゆ

Che di vederli in me stesso m'esalto!（大人豪傑を見る毎に自ら大人豪傑となりしかと思ふ）

右の英國の大詩人の語は實に余の心中に印して決して磨滅せず、鄙吝の念時に或は方寸に萠して余を苦むることあれば、此の語を回想して心中自ら大に慰むる所ありしは幾回なりしを知らざるは余の好んて自白する所なり。

古來及び現在の大人豪傑は、人性を以て不善なりと判斷する人々の想像の誤謬なるを矯正するには充分なり。大古に於て豪傑の人已に多し、羅馬の世界に於て亦已に多し、中古の暗黒時代と近代開化の諸世紀とに於ても亦已に多し。彼處に一身を眞理の犠牲に供せし

人なれば、此處に人民を塗炭の裡より拯ひし人あり、又加特力教の諸高僧が吐く所の深遠なる哲理の驚服すべきものあり、而して勇敢なる武夫健將と、正義の保護者と、文化の復興者と、詩人、學士、技術家の一世に名ある者は宇内何れの處か求めて之を得ざらんや。

大人豪傑の性質の吾人と異なるは、其遐年を延き、偉大の命運を有するかために然かく見ゆるにあらず。否、其原に溯れば彼等も決して半神（セミディい）にあらざるは猶ほ吾人の如し、彼等も亦婦人の胎内より生れ、艱難し、啼泣せしも亦猶吾人の如し。其不良の意向と戰つて不善を恥ち大に克巳の德を養ふに盡力せざるべからざるも亦猶吾人の如くなりしなり。

諸國の歴史と今日尚存在せる古代の紀念物とは吾人をして世界に生存せし大人豪傑の少きを追憶せしむ。而して初め些の名聲もなく、其精神の運用と善良の行爲とに依て、人の名と同愛の情とに對し尊敬を加表する所の人は日に月に多きを加ふ、此の同愛の情は人をして高尚なる人物を慕はしむるに至る、否、寧ろ神を慕はしむるに至るものなり。

世間に非凡の善人多きを想ふは決して妄想にあらず、然し此く想ふも敢て人類を唯美の一點よりのみ觀察するにあらず、又之がために世間には無識不良の徒多きを認めざるにあらず。世に不良の徒無識の輩多きは誠に眞なり、然れども人の尊むべきは則ち人は其智を用ゐて非凡の者となるにあり、克己して不善人たるを避くるを得るにあり、敎育と身分の如何に關はらず人は常に高尚なる德義心に養はれて達人たるを得るにあり、又此くして人は靈智なる人類の尊敬を受くる權利を有する者なるにあり。

人類に向て無上の尊敬を致し、人を以て常に無限の完全に向て上進すべき者と見なし、其生活する間は草木禽獸と同く物質世界（モンド、マテリアーレ）の法則に支配せらるゝ者と見做さず、寧ろ之を不死の理想世界（モンド、インモルターレ、デルレ、イデエ）に屬する者と見做し、且人は少くも動物界を脱出するの價値を有し、他動物に對しては「吾人は獨り汝等のみならず、吾が周圍の萬物に超越するものなり」と放言するを得る者なりと認

めなば、吾人は人類に對して同感の情發揚して禁止する能はさる思ひをなすに至るべし、また人類の窮厄迷誤に陥るを見るも猶其尊貴なる所以を追憶し之に對して一層の憐情を増すに至るべし。是を以て吾人は王者の自ら卑屈に陥るを見て之を痛み、時としては眞心國王の過失を蔽ひ、時としては之をして故位に復歸せしめんために手を延ばして之を淤泥中より救出せんとを熱中するに至るべし。而して吾人は王者が能く其威嚴を保持し、苦惱困厄に處するも尚ほ毅然として持する所あり、大困難を凌軼し高尚なる意氣を以て漸次神聖なる摸型に接近するを見る毎に大に之を喜ぶべし。

第八章　愛國心を論ず

人と人との間を結合せしめ、之を德義に導く一切の情操は實に高尚のものなり、犬儒者 Cinico は大に詭辯に富み、寛厚の感情は總て之を非難し、常に愛國心を減殺せんとして一視同仁主義を煽動す。其徒の唱ふる所を聞くに曰く「我々の國は則ち世界なり、我が生れたる一局所は毫も我か住所の選擇に干渉する權利をも有せず、我が眼より見れば、其局所の價値は我に適當する所ある他の廣大なる地に勝る能はず。愛國心とは或る人類をして他の人類を嫌忌するの情欲を盛ならしめんために採用する利己心の一種に過ぎざるのみ。」我が讀者は此の如き卑賤なる哲理の玩弄物となる勿れ、此の哲理の性質は人類を退歩せしめ、其德義を認めず、人類を教育する所のものは總て之を呼て空想、呆愚、邪惡となす。嗚呼高尚なる意向と社會幸福の萌芽とを擧けて皆之を非難せんとして誇大の言語を疊用するは實に容易の業なれども、亦大に賤むべきの極なり。犬儒教は人をして永く汚泥の中に沈淪せしむ。之に反して、眞正の哲理は人類を汚泥中より救出するに在り、此れ則ち宗教的の哲理にして愛國心を尊重する所のものなり。

吾人も亦全世界は吾人の本國なりと云ひ得ざるとなさず。世界中の人民は皆其始め一大人族より分派せる者なり、則ち其萬國に蔓延する當初に在ては主宰者は則ち神自躰なれども、唯一の政府を以て之を統治す

る能はざる如き一大人族の支分して各國民となれるは疑なし、故に吾人々類を直に一族と見做すは、一般人類をして慈仁ならしむるには强盛なる理由なりと雖も、此の如き觀察の方法は、未だ他の合理的論法を打破するに足らざるべし。請ふ左に之を論せむ。

人類が種々の國民に區分せらるゝは確定の事實なり、一國の人民は宗教、法律、習慣、言語、起原、名譽、痛苦、希望等を一にし、たとひ此等の諸點に於て盡く一致せざるも、少くも特種なる同情同感の連鎖に由り此等の諸原素の大部分に於て一致する人類の集合を指して一國民といふ。一國々民中の利害の同軌と同感の情とを指して一般に之を利己心（イゴイスモー）と名つくるは、猶ほ父の慈と子の孝とを以て父子間の徒黨（コンギウーラ）となし、以て之を賤めんとすると同く、奇怪千萬なる議誹の方法なりといはざるべからず。

眞理は許多の面を具ふるものなるを常に記臆せよ。道義的感情は皆開發せしむべからざるものにあらざるを記臆せよ。然れども道義的感情にして斥除（エスクルジーヴォ）的なるときは恐らくは有害のものとなるなからんや、道義的感情にして斥除的のものならざるときは決して有害のものにあらず。一般人類を愛するの情は高尚なる一種の感情なり。然ども之がために己れの生地を愛するの情を驅逐すべからず。生地を愛するの情も亦高尚なるものなり、然れども、之がために人類を愛するの情を遠ざくべからず。

人類は互に相親睦和緝すべき神聖なる良能（イスチント）を有するを證する理由許多あり、之がために人は互に相敬し、相扶け、相惠むに至るものなるに、此等人世の情態を贊揚せざる如き卑陋の情神を有するは實に恥つべきの甚しきにあらずや。

歐洲人にて旅行せる二人あり、地球の或る一部にて邂近せり。其一人ハトリノ人にして其他の一人は倫敦人なり、二人共に歐洲人なり、此の歐洲人といふ共有の名義は則ち相互の愛情の連鎖となり、愛國心（余は此くいはん）となり、從て互に緩急相助けんとするの賞揚すべき交誼の生ずるものなり。

又互に言語相通せざる三人ありと見よ。彼等は常に同一言語を用ゐざるを以て、彼等の間には同國人といへる感情の存し得るを信せざらんか、其之を信ぜざるは誤なり。齊く此れ瑞西人なり、其一人は伊太利區の人にして他の一人は佛蘭西區の人、又他の一人は獨乙區の人なり。而るに政治上の一致は此の三人の言語の同一ならざる點を補ひ、三人をして共に相友たらしめ、之をして同國にあらざる其本國の幸福のためには戮力死を誓つて身を殉するに至るべし。

尙、伊太利又は獨乙に於ける他の現象を見よ。諸聯邦の人民は種々相異なる法律の下に生息し、從つて別種の人民となり、加之、時としては互に相攻伐を逞ふせざるべからざるに至る、然れども彼等は總て同一言語を用ゐ、或は少くも同一文字を用ゆるを以て、其共同祖先の名譽を尊び、同一文字の名譽を分擔し、同一嗜好を有し、輔車相依り、緩急相助くるの交互的必要を有せり。此の如き理由彼等をして互に相待つこと寛にして互に相愛敬するに至らしむ。

愛國心は其目的とする所大國にせよ小國にせよ常に高尙なる情操たるに於ては一なり。凡そ一國民として其固有の名譽を有せざるものなし、又多少重大なる勢力を有する國君なきはなく、又記臆するに足るべき歷史上の事實、善良なる制度、通邑大都、其自國の名譽となり自國の特質たる一種特異の證跡、剛勇を以て名ある人、政治を以て名ある人、技術に學問に名ある人物等を有せざるはなし。則ち各人が其先天の愛あるために。其鄕を愛し、其市を愛し、其村を愛するの道理は皆こゝに本くなり。

然れども愛國心をして徒に小天地を跼蹐せしめ、我々は此の如きの地に生れたりといふ如き無益の自尊倨傲心を養成せしめ、遂には他の市、他の鄕、他の國民に對して怨を買ふに至らしめ、以て愛國心の實を得たりとなすに至りては、宜しく之を謹まざるべからず。夫れ卑陋、嫉惡、殘酷なる愛國心は一の德義にあらず、反て一の惡德なり。

第九章　眞正の愛國家

眞正に高尙なる感情を以て本國を愛せんとせば、先つ同國人の、交を結ぶも敢て慚しからざるのみならず、反て賴て以て譽となすに足る如き人と歡を結ぶを勉むべし。自ら宗敎と善良の風俗との破壞者となる事と、能く其本國を愛すると云ふ事との到底枘鑿相容れざるは、猶一方には最愛の婦人の敬愛を得んと欲しながら、一方には其婦人に忠實ならずして之を望むとの到底出來べからざると一般なるを知らざるべからず。

人若し神を辱め、貞操の神聖なるを侮り、誠虔、忠實の諸德を輕じ而して徒に本國本國と疾呼するは、豈自ら信ずるの厚しといふべけんや。此れ則ち僞愛國家にして不良の國民なり。唯一善良の愛國家は則ち德義に厚き人なり。總て其守るべき本務の何たるを了解し、之を愛し、之を踐行するの方法を常に講ずる人なり。」

眞正の愛國家は決して勢家の黨與とならざれども、亦漫に權勢に反對する者にも黨せず、何となれば卑屈と不遜とは其の避くべき弊事たるに於ては同一なればなり。

眞正の愛國家は假令文武の柄を握ると雖も、其目的は自身の富貴を增すに在らずして國君と人民との名譽尊榮を增進するに在り。

假令身は一布衣に過ぎざるも、其國君と人民との名譽尊榮を以て齊しく其熱望の目的となし、百方其術を講じ、之に反對する如き事は一も之を爲さゞるべし。總て社會には弊事の存するものなれば、此の如き人は其弊事を改良せんと希ふと雖も、其行の過激に涉り、或は掊克に因て之を壓抑し或は血を流して之を減却せんと欲する如きことを忌む。何となれば天下の弊事中此の如き方法より恐るべく不幸なるものなければなり。

此の如き人は又內訌を起さず、亦之を煽動せず、否、寧ろ其言論行爲を以て人の師表となり、以て出來る丈け詭激の徒を鎭制し、諭すに寛大平和を主とすべきを以てし、本國の平穩無事なるに當りては其溫柔なること羊の如くなれども、一旦國家危急の秋に迫り、伊人の手を煩すべきの必要生ずるに當ては、乍ち獅子と變じ、猛氣百倍、敵を伐つて之に勝つか、或は唯一死國に報

ずるあるを知るのみ。

第十章　孝を論ず、

汝が世路の起程は家族の中に始まる。徳義の首途の試驗場(パレストーラ)は父母の家なり。自ら本國を愛すと稱して其勇を誇示し、而して天下の大義たる孝 Pieta Filiale といへる本務を欠くの徒は豈云ふに足らんや、豈云ふに足らんや。已に愛國心なし、從つて恩義の何たるを知らざるに至つては其中、勇(エロイズモ)の萌芽を求めんと欲するも倚得べからず。稚兒の智漸く本務の觀念を有するに至つて、天の之に敎ふる所は、則ち汝の父母を愛せといへるとなり。

孝の堪能の强盛なる、吾人は終生力を費して之を保持するを要せざる位なり。然れども已に云へる如く、總て善良なる意向には一の斷 volonta あるを必要とす、然らざれば其意向も遂に餒へて何の用をかなさむ。故に父母に對するの敬は毅然として之を行ふを要す。神を愛し、人類を愛し、本國を愛するの人は何を以て人たり、國民たり、夫の子たる自身を生出せし其人に向て深く敬意を表せずして可ならむや。

父と母とは吾人の此世に出でゝより第一の親友なり、天の理誠に然るなり、吾人が最も多く恩を受けし人なり。故に吾人は謝恩、尊敬、愛、寛大等あらゆる感情を表する愛すべき言辭は、父母に對して盡く之を保有し以て神聖なる恩愛の羈絆を守らざるべからず。然れども吾人は常に父母と共に一堂に生息するを以て、親狎の餘り、父母を遇するに意を留めずして父母の愛を得るを慮らず、之をして逸樂に安んぜしむるに至つては殆ど之を念頭に掛けざるに至ること屢是あり、愼まざる可らず。故に其心の高尙なるを欲せば、行住坐臥常に父母の愛を求めて之に奉養し、以て其心を慰藉せざるべからず。遠遊方なく、其父母に對して尊敬と從順とを欠くは不道德の至りにして人間の通弊なり。人世の良風美俗は、人々意を用ゆるの愼密鄭重なるを期して僅に之を望むを得べし。而して之をなす發軔は實に家族の中に在り。或人曰く「其父母と共に自由に生活するに於て何の不可ある、たとひ父母は其子の徒

に邊幅を修めて己れを愛するを望まざるも、又は其子をして強ひて些々たる讃償を抑制せしめざるも、明に其子に愛せらるゝを知れり」と。アヽ、苟も凡庸の人たらざらんと欲せば此の如き語をなすなかれ。若し自由に生活すと云ふ事にして粗暴を意味するとせば（而して此の自由は實に粗暴なるものなり）其間骨肉の親を求めんと欲するも得べからざるなり。人にして其心と行とを一致せしむるため、又は德行の譽を得んため、又は人類の名譽を上進せしむるため、又は神を敬するために勤苦勉勵する勇なき者は其精神や實に虛弱といふべく、其愛すべく、敬すべく、嘉すべき高尙なる行爲を顧ずして徒に睡生夢死するものと云ふべし。

孝は只報恩の義務なるのみならず、又必要の禮儀 Convenienza なり。たとひ父母頑嚚にして少しも慈なく、其行も亦毫も他の尊敬を受くるに足らざる如き時と雖も、生命の授與者（アウトーリ）と云ふ一事のみにても、之を尊敬するに餘あるべし。但之を遇するに左ほど意を用ゐずして可ならんか。然れども余は敢て之を輕蔑せよといふにあらず、此の如き場合に於ては、其子の持する尊敬は實に尊むべく、之を其人たる天性と品格とに比して未だ多く欠くる所あるを見ざるなり。故に父母の過失を穿鑿するに汲々たる人は、實に愍つべきの甚しき者なり。アヽ、吾人は父母に向て慈愛を報するを肯せずとせば、將た誰に向て之を報せんとするか、思はざるべけんや。

父母必ず過失なく、又其仁慈の全きを望みて而して後之を敬せんとするは無禮不正の甚しきものなり。吾人は常に万物の靈として敬愛せらるゝを欲するも、果して其平生は非難すべからざるものとなすか。豈夫れ然らんや、もし父母にして吾人の心中に描く所の道德智識の理想に外るゝときは、其過失を蔽ひ、務めて他人をして之を知らしめず、只其善美の性質のみを知らしむるを務むべし。果して斯の如くなれば吾人の前途は神聖高尙にして、且十分他人の價値を甄別するの明を得て、人類の狀態は駸々として進步すべし。

「此の白頭翁、誰か其少間にして墓中に安置せられざる

ものなるを知らん」此語や實に凄涼たる思想を表出すれども、亦惻憾寛仁の情靄然たるを覺ゆ。天下の愛友よ、願くは心を此の語に留めよ。ア丶、吾人は不幸にして白頭翁を見るを得るの間は、宜く之を貴び、其苦累をなしつ丶寄る年波を慰めよ。其老耋は已に之を凄涼の境遇に導けり、何ぞ之に加へて其苦惱を增さしむべけんや。汝の父母を遇する應對進退は宜しく父母が汝を見て其心を慰め其情を勵す如く常に嬉々たるべし。其老昏は常に汝を見て笑を帶び、其心は常に汝を見て雀躍する如くんば、父母に取りては無上の快樂にして、又汝の益たる大たり。父母が篤行の子のために祈る冥福は常に神の納受する所となるものなり。

第十一章　耆老と祖先とを尊敬すへき事、

汝の父母と汝の祖先との照影とを尊べ、耆老は誠意之を尊敬すべし。」古代スパルタに於ては老翁の來るに逢へば起つて敬禮し、老人の話すに逢へば己れ口を緘し、路に老人に逢へば歩を讓るべきは少壯者の守るべき一の國法なりき。然るに今日は法律を以て之を吾人に强ひざるを以て、吾人は宜しく禮讓(ホッセクイオ)に因て自ら之を行ふべし、之を倘尊ふべしとなす。蓋し此種の禮讓は之を行はざる人も勉めて人中に之を矜るを好む如く、人の心中に無形の快味を感ぜしむるものなり。

昔し亞善の一老人ヂウオキー、オリンピチー(劇場)に入りて其坐席を求めつ丶ありしに、適ま場の坐席は盡く充滿して立錐の地なきまでなり、時に同國人なる二三の惡少年あり、老人を見て之を招きければ老人は大に喜び其招を應じ蹣跚として彼等の傍に至りしに、豈圖らん彼等は之を善待せざるのみならず大に之を嘲笑せり。此くて其老人はそのま丶右より左へと次第々々に排擠せられ漸くスパルタ人民の居所に到りけるに、スパルタ人は其本國の習慣を守るに忠實なれば直に起立して老人を迎へ席を讓りて之を坐せしむ。是に於て曩に老人を薄待せし亞善人は其對手人たる寛厚のスパルタ人のために大に威望を損じられ、拍手喝采の聲四方に起れり。老人は涙を流して叫て曰く「亞善人は禮を知り、スパルタ人は之を實行す」

マッヱドーチの亞歴山(余は好んで大王の稱を呈せん)は戰勝攻取、顯榮を極め、常人ならしめば乍ち倨傲の心を生すべきに、大王は決して然らず、老翁を見れば大に之を尊敬せり。大王一日大雪のために戰勝の前途を遮られければ少許の薪を拾ふて之を焚かしめ自ら床に踞して暖を取れり。時に軍中一老翁あり、年已に耄して寒氣に弱り戰慄するを見、直に馳せて老人の許に至り、大王は曾てダリオーの大帝國を覆滅せしめたる隻手を以て件の老人を伴ひ歸りて其坐に復せり。

「老者と婦人と不幸者とに對し不敬なる人のみ唯惡人となす」とパリニーは云へり。パリニーは其門人をして耆老を尊敬せしむるに於ては大勢力を有せり、一日パリニーは一少年の重大の失錯ありしを聞き大に之を怒りしに、後路に出てゝ其少年の一老僧に代て數人の無頼漢に向ひ其過を謝しつゝあるを見て、パリニーは直に走りて少年の頸を抱き叫んで曰く、曩に吾汝を一の惡漢と信じたり、今は吾汝が老人に向つて憐憫を有するを目撃して、汝の德行あるを信ず。

吾人の幼稚の時、少壯の時に當り、能く忍んで吾人を教導し、其全力を用ゐて吾人の性質と精神とを教育するに勤めし老者は就中殊に之を尊敬すべし。故に之を遇するや優々、其過失を寛假し、其晌其勞に報ゆるに彼等が吾人のために費せる勤勞と滿幅の愛情を以てせよ。あらず。義氣を皷して少年の教育に一身を委ねし人は、後日如何の奉養を受くるも、其報を得る決して充分と云ふべからず。親の持する注意は決して傭兵等の有する如き輕忽なる用意の比にあらず。親は人の志氣を高尙ならしめ、且之に與ふるに、人を愛しまた愛せらるゝ權利を以てせり。

總て上位の人には孝敬を致せ、上位の人は尊貴なればなり。總て本國のため人類のために大勳勞ある人には尊敬を致せ、其書と其肖像と、其墳墓とは天下の神聖なるものなり。吾人若し幾世紀の過去と、野蠻時代の遺物の今日に殘存せる者とを觀察し、又現時の諸弊事を慨嘆して、其過去の迷想情慾の結果たるを認る時は、吾人は敢て吾人の祖先を輕視せんと欲せずんばあら

ず。然りと雖も祖先を判斷するに當りては、宜しく寛仁の心を以てせざるべからず。蓋し祖先は或は今日吾人が慨嘆する戰爭を企圖したり、而れども其戰爭や幾分か必要に出て又恕すべきの狀態あるは、吾人判定の久しく誤りし後に漸く之を曉りしにあらずや。祖先は實に或は不幸を速くべき外國の干涉を特みたり、然れどもまた幾分か必要に出て又恕すべき狀情なからずやは。祖先は實に吾人の欲せざる制度を制定せり、然れども其制度は豈當時の時勢に適應せずとなさんや。又其制度は當時に存在せる社會的諸要素を能く斟酌して規定せしものにして、當時に在つて豈必しも最上ならずとなさんや。

批評の眼は宜しく明透なるべきも、祖先に向て嚴酷なるべからず。祖先を譏謗する如きは尤も之を愼まざるべからず、又「諸子我が行の適理なるを見よ」と墓中より呼んて吾人に云ふ所の祖先を尊敬せざる如きは、固く之を愼まざるべからず。

老カトー子の云ひし下の語は人能く之を知れり「後昆をして吾人の生活を是認する所以を會得せしめんとするは容易の事にあらず」と。

（未完）

述懷（其三）

虎堂學人

二客の好んで世態を談ずる者あり一は苦茶を啜り荐りに歎じて曰く嗚呼已ん哉々々堯舜既に去りて復聖賢なし孔道今や亡びて人々澆季に流る漢祖は治むるに法三章を以てし家康は百條の掟規を布ひて民皆皷壤悅服す民法何ぞ繁なる刑法何ぞ濟に堪へん文法を以て天下を規矩せんと欲す巧に法網を遁るの狡徒踵々として其跡を絕たざる亦宜ならずや君子道を得ざれば須く退ひて山野に遁るべし現代は實に異端邪說の路に塞がる所たりと一客則ち糖果を喫し徐に口を開ひて曰く吾子の言何ぞ夫れ迂にして且愚なるの甚だしき吾子夫れ十九世紀の氣運を知らざる乎開國僅に數十年其駸々たる文明の進步世界何れに往てか我長足に比するものあらんや食ふに肉あり出るに車馬あり此美なる文明國於戯吾子

亦固陋の言を爲す勿れと是に於て乎吾人は案を叩ひて感慨稍や久しきを覺ゆ二客の言ふ所看よ是れ明かに我が現時の社會に對する一般思想を代表せるものには非ざる乎

我が德敎世界に於ける思想の現象抑も亦此の如きのみ蓋し我が現時の德敎世界は實に是れ儒佛と西敎との衝突混亂よりして俚俗に所謂合ひの子なるものを成育せしめたるに異ならず蒙古白皙兩人種間の合ひの子たるや其質白皙人種に及ばず其力亦蒙古人種に劣るを免かれざるとは生理學者往々にして之を說く所現にや我が德敎世界の現象たる亦維新以前に於けるの秩序なく去りとて歐米現時の美なる境涯をも見ず歐化の徒舊守の輩交も擧つて不滿を訴ふ其見る方邊各相異なりと雖も歸着の斷定率ね一に出るが如し儒敎之を支ふるの力なし佛敎の化力輙く之に及ぶを得ず西敎之を回らす亦頗る容易ならざるに似たりとは吾人が前號に於て述べたる所の如し加之ならず護國と愛理の關係往々撞着矛盾の皮觀あるよりして宗敎の眞相亦容易に世人の顧考を距るの傾向あらんとす德義々々と德義の好文字之を口にし之を筆する蓋し亦近代より囂すしきはあらじ稱して現時を德義退步せりとなす德義果して退步の性を有する乎假に德義は退步せりとなす其退步の最も甚しきは社會孰れの部分に於て然りとなす乎特に其部分に於て然るは抑も何の理ぞ儒敎の徒動もすれば事物の摸倣的發達を痛歎す誠に然り同時に彼徒は如何にして己れか自家撞着を免かれ得へき乎耶敎固執の輩嘗て自由討究を數多の敎義に試みしことなくして漫然愛の本源を彼敎に專有視す彼輩如何なる理想に依りて以て至大至高の眞理を明解し得るとなす乎嗟呼疑問百出之か解說竟に如何吾人請ふ徐に之に應する可ならん歟

曰く進步とは何ぞ退步は何の謂ぞ進むと云ひ退くと名くる此等の觀念象を抽て考へ來らば之か標準何れにか求むる一に倍して二を得是れ數の進みたる乎二を分して半となす是れ果して退きたる乎夙に起き夜はに寢ね衣食以て我れに給す我れ何に向て進退孰れを爲しつゝある乎此等の禪僧的問答は暫く措き吾人は須く不完全

なる平素の觀察と經驗とに依り茲に理想の眞理に近くを以て所謂進步の義定に充てんと欲す彼の慨ひて德義退步と叫ふ者何を以て德義退步と稱する乎宇宙万有皆等しく自然の大法に由て僞より眞に移り惡より善に進み醜より美に赴くの性を有せざるはなし其僞なるを知るは是れ一步眞に移りたればなり其惡なるを感ずるは惡一步を距りたればなり其醜なるを知る是れ其美に一步を近づけたるの證に他あらんや太古の社會は暗黑なり理想の社會は光明なり涅槃と云ひ天國と稱す之を譬ふれば太陽の如し電燈固より千里を照さずと雖も其暗黑を距ること幾許ぞや現時未だ黃金世界に達せざるにもせよ誰か將た今を以て野蠻の社會となすものあらんや德義の衰頽を憂ふるは是れ其德義已に進步の性ある所以を證するに足る夫れ然り漫に厭世を唱ふる者吾人其意を知らず漠として樂天に醉ふ者に至りては亦吾人の直に與せざる所嗟呼樂天を知らざる者以て厭世を解する能はず厭世を過ぎらざる者豈焉ぞ眞の樂天に安んずるを得んや

吾人は曾て兼好法師の「つれ〴〵草」を閲す中に法師が世の心を名利に勞する者を慨き才能は煩惱の增長せるものなりと述べたる一句を讀むに及んで轉た當時宗敎思想の其人心に及ぼしたる影響如何を想見せずんばあらざるなり蓋し宗敎なるものは本來弊害の伴ふあるべきものに非ず其弊害あるは畢竟するに之が取捨其宜しきを得ざるに職由せん佛敎亦多少之に洩るゝを得んや佛敎の我が人心に及ぼせる其利益は措て問はず所謂弊害と稱するに足るべきものゝ如きに至りては彼の方式に偏重せるよりして爲めに理想の自由を喪はしめ延て個人的及社會的の動作をして稍や其活氣活動を減殺せしめたるの一事は是れ聊か爭ふべからざるに似たり加之ならず佛敎道德の所謂悟道脫得なるものゝ如き普通一般人々の一切遵守すべきの大道を超越し更に少數者の依て以て完全なる界域に入らんと欲するが爲めに特設したるの秘道に外ならず此社會を遁脫し俗界と一切の關係を絕ち獨り隱れて靜寂なる生活を遂げんとするは到底社會に對する百般の責務を盡すと兩立すべきに

あらず方式的の羈絆を脱して內心自由に達するの道を開くは固より可なり獨り之を以て一般智愚賢不肖の修むる公道の上に置き强て外形的行爲を擧げて之を無益と悟り特に少數なる隱遁者をして彼の所謂悟道脫得を恣まになさしむるとせば其悟道脫得は人類として果して何の必要かある世を去り俗を棄て獨り靜寂無爲なる生活を遂げんと欲せば社會の進步は何に依りて乎以て之を見るを得べしとなす人類生存の大目的竟に那邊に存する乎一方に於ては個人的社會的進步の分子を含有せざる抽象的秘敎的の道德獨り行はるゝと同時に他の一方に於ては公共的道德漸く方式的の羈絆に浸染するに至りては古來二三の佛敎國動もすれば活氣活動的の精神を沮喪せしめて爲めに一步を宇宙的文明の進步に讓るの傾向ありしが如き亦其一因と稱するに足るべき歟プライデレル氏の所說吾人の心を獲たるものと謂ふべし

彼の儒敎は則ち如何儒敎の性質之が詳論に至りては暫く之を他日に讓り吾人は儒敎の我國に及ぼす影響如何を簡明するあらんとす本來儒敎は宗敎にあらず假ひ天帝旻天なる語は詩書數々之を示し彼の天命を畏るゝは所謂君子三畏の一に數へられたりと雖も孔子未だ嘗て其天の何者たるを解きしを知らず子貢孔子に問ふて曰く死者有知乎、將無知乎と孔子は之に答へて曰く吾欲言死之有知、將恐孝子順孫妨生以送死、吾欲言死之無知、將恐不孝之子棄其親而不葬、賜欲知死者有知與無知非今之急、後自知之と（孔子家語）將た亦子路の鬼神に事へんとするの問に對し未能事人、焉事鬼と應へ若くは未知生、焉知死との如き其他務民之義、敬鬼神而遠之等の言よりして之を見れば吾人は思ふ孔子其人未だ其所謂天と云ひ鬼神と稱するものゝ性質を究知せざりしと儒敎の範圍は人間世界の一事のみ儒敎に神示なし神示の有無吾人は敢て之を以て宗敎必須の要素と認むるものにあらずと雖も要するに吾人は儒敎に確然たる一貫の眞理なきを認めずんばあらず或は曰く夫子之道忠恕而已矣と或は曰く道二仁與不仁而已矣と然り而て其忠と云ひ恕と云ひ將た亦仁と云ふものゝ定義解

釋に至りては衆人萬樣殆ど判然たる一定の釋義なきが如し唯だ夫れ此の如し故に儒敎の道德主義たる特殊の社會格段なる世態に之を適用して頗る其美果を收めたること和漢其例に乏しからずと雖も宇內萬邦古今を極め萬世に亘りて之を一型塑に投せんこと難豈全くなしとせんや儒敎の徒此理を悟らず慢然相背ひて不知不識の間に撞着矛盾を來さんと欲す是れ何を以て然りとなす乎

蓋し惟ふに儒敎一たび我國に入りてより泰西の新說輸して我に入りし迄其數千年の間佛敎と相提携して我國の道德を維持し降りて維新の革新と共に一旦其勢力を失ひたりしと雖も世人は其後十數年間全國に靡き亘りたる歐化主義の醒覺に次て再び儒敎の道德主義を其反動の潮勢に浮ばしめたることは吾人が前號說く所の如し抑も儒敎の道德主義たる云ふ迄もなく其基礎五倫の上にあり君臣父子夫婦昆弟朋友は彼の所謂天下の達道にして社會の關繫亦秩序として曾て一點の非難を容るべきなし其間然すべからざるの德敎道義何が故に奇矯偏僻なる忠孝主義――忠としては伯夷叔齊を要め孝としては河野儀平を望むが如きの忠孝主義を奬勵するに至りし乎、夫治外婦治內、夫婦外內以經二物と云ひ女正位乎內男正位乎外、男女正天地之大義也と書として毫も婦に奴隸的の責務を負はしめざるの敎訓何か故に極端矯激なる男尊女卑の特風を生せしむるに至りし乎抑も道德なるもの其主義固より一貫亦多岐多端たるべき筈なしとは雖も之を格段特殊の一社會に適用せんには亦其社會に應ずる格段特殊の敎訓を施さゞるべからず思ふに中華の國孔子の時に當りて風俗敗頹邪淫漸く行はる是に於て乎男女七歲にして席を同ふせざるの敎あり且夫れ支那の太古人々其家族の統系を尙ふや猶ほ我が封建の時代に異ならず加へて世は殺伐たる戰國の時期生死頗る繁く子孫の殖加其必要を感ずること亦極めて多かりしが故に所謂一妻一妾の敎制藉ひ薄弱ながらも尙多少の論據ありたるが如し儒敎主義の徒之を是れ察せず其歐化の輩を目して摸倣崇外の者と云ふと同時に己れは漫然相背ひて支那三千年前の型塑を我が今日

に適用せんと欲す撞着矛盾と謂はずして將た何ぞや忠孝彼れ何者ぞ吾人は忠孝の大切なるを確信す忠孝は吾人が先天的に有する最高義の一として不可あることなし忠孝は實に人類が其の存在の目的を達せんが爲めに欠くべからざるの手段なり唯夫れ手段なり是れ豈に目的其者ならんや人之行莫大於孝、孝莫大於嚴父、嚴父莫大於配天と或は當不誼則子不可以不爭于父、臣不可以不爭於君、故當不誼則爭之、從父之命又安得爲孝乎と孔子の見解誠に此の如し君使臣以禮、臣事君以忠と云ひ勿欺也而犯之と云ひ或は亦た君子之事君也、務引其君以當道志於仁而已との言の如き古來聖賢の敎訓誰か將た之を否なまんや此間然すべからざるの敎義は膠柱固執なる儒敎の輩に依り歐化主義の反動として再び我が社會を風靡し來り德敎世界恐慌の時期に際して奇矯極端なる忠孝主義を復活せしむるの傾向あるに至る慕古厭今の思想現代多數人士の腦裡に乏しきの今日に當りて支那三千年前の當時を支配するに必須最効なりし德敎主義を其儘我が今日に移さんと欲す彼れ如何なる力を用ひて以て西敎の輸入を防壓し得べしと爲す乎吾人が本論冒頭に於て引用せる厭世的君子の言詮し來れば寔とに自家の撞着矛盾よりして抽象的に我が現代を批評し去らんと欲する者たるが如し此等の所謂堯舜の徒是れ豈に焉ぞ以て我が德敎世界の式微を挽回するに足らんや東洋諸敎寔とに斯の如し彼の普通一般基敎の徒なる者吾人を以て之を見れば亦頗る之に類するもの多く存するあるを如何せん抑も宗敎に須臾も欠く可らさるの要素は實に所謂感化力なるもの是れなり此感化力たる吾人は基敎に於て最も其强勢なるを認むるに躊躇せず從來我國に於ける基敎の傳道方法に就ては局外の觀察よりして之か是非巧拙の論評を敢下すべきの點亦少なからすと雖も其感化力を重く我か感情的頭腦に訴へ來りしか如きは僅々たる短歲の中能く其敎徒の數――吾人は特に敎徒の數と言ふ――を增すに與つて力ありしに相違なかるべし加へて久しく儒佛の下に理想を支配されつゝ來りたるの腦裡に一朝基敎の敎義を理想上より吹込みたらんには假ひ傳道よりして得る所

の結果其數少且微なるにもせよ必ずや永遠を期して亦動かすへからさるの根蔕を我國に固植せしむることを是れ極めて難しと謂ふへからず豈唯に然るのみならんや斯の如くにして初めて眞の敎義を普及せしむるを得べきのみ吾人は敢て固執的にバイブルを戴くものにあらずと雖も亦盲目的に之を誹るを欲せず之を究むる或は敢て怠らざるに連れ所謂基督敎徒の撞着矛盾を其信仰上に爲しつゝあるを知ること愈々其多々なるを覺ゆ彼の動もすれば即ち基敎を以て我か國躰と相容れさるものとなし或は往日法典問題の囂しき時に當りて個人主義は大に我か社會の慣習秩序を破毀すと叫びたるものゝ如き其言固より確たる論據の存するなく一部感情的の斷案多少之が支配を爲しつゝありたるは吾人容易に之を證明し得べしと雖も今日一般基督敎徒の固執的信仰に於ては到底此等の誹りを拒むに辭なからん基督敎徒自ら基督の訓義を誤まる彼れ焉ぞ能く其撞着矛盾を免かるゝを得んや吾人は將に二三の實例を徵し來りて之を論するあらんとす

本元眞理

伊東洋二郎

他より反對を惹起することを得さる必然の眞理、之を稱して本元眞理と云ふ、而して此本元眞理は人心に固着して須臾も離るゝことなく、知る所の自己と知らるゝ所の事物と、其兩者の關係を直覺再現する智識と、推論との基本となるものなるは、敢て多く論を俟ず

本元眞理は前に云ふが如く、果して人心に固着するものとすれば夫の「吾レ思フ故ニ吾レ在リ」と云ふ自己の存在を認定すると共に、本元眞理も亦た自己に存在するものと認定せさるを得さるの理なり、然るに或神學に於ては人心に本元眞理の存在することを是認するにも拘はらず、夫の希伯書に所謂「汝彼ヲ天ノ使タチヨリ少シク劣ラシム」との經言に依憑し、甚だしきは人類の靈魂は身躰の作用を拒んで之を止むることありと談せり、若し此說の如くなれば人類の靈魂は全く靈妙なるものと云ふことを得さるのみならず本元眞理も

亦た全く人心に存在するものと云ふこと能はさるにあらさる乎、夫れ本元眞理は人心に固着して常に智識と推論との作用搆成を刺動する所のものにして、心理學上直覺の彙類法に依りて之を措斷する時は種々の議論も起るべしと雖も、苟くも本元眞理の自己に存在することを見認る以上は、假令人類の靈魂が身躰の作用を拒んで之を止むるに至るとも亦た此本元眞理の自己に存在せずと云ふを得さるにはあらさる乎、然り彼れ神學家が人類の靈魂が身躰の作用を拒んで之を止むるに至ることありと說く所以のものは、天地万物の大原因たる神の存在を信するに依り、唯、神のみ不可思議なる靈力を有せる者と爲すが故なるのみ、何ぞ彼れ神學家が人類を蔑視するの甚だしきや、若し然らされば彼れ神學家は奚ぞ神の不可思議なる靈力を有せることを見認ると共に、人類の靈活なる智識を有せることを見認さるや、人類の靈活なる智識を有せることを見認る時は其基本たる本元眞理は常に自己に存在して智識推論の作用搆成を刺動して以て人類の靈力を顯はすなり、然らば則ち假令人類の靈魂が身躰の作用を拒んで之を止むることありと云ふも亦た共に本元眞理も始終去來するものと云ふを得べけんや論じて玆に至れば彼れ神學家が把執する所の說の前後撞着することを知るに足るべきなり

抑も神學の意義たるや神に關する諸般の事物を稽査攷究し且諸般の科學を完全にし人類の智識及德性を最も高尙に發揮せしむるにあれば彼れ神學家の把執する如く人類と神との間に太だしき懸隔を立るは人類の智識及德性を高尙に發揮せしむるに當りて其最も神學の意義に副さることを非難せさるを得す今其然る所以を云はゝ則ち彼れ神學家の人類と神との間に大なる懸隔を立て唯、神を最大靈活なるものと爲し人類を劣等のものと蔑視し去るが如きことは是れ信仰的感化の部分に屬して決して神學其者の意義に副ざればなり然れども善し一歩を彼れ神學家に讓りて彼れが所說を是認するとせん乎我輩は恐る人類が宇宙万有に對し悉く不可思議のみを以て充し延て人類の疑惑を增進し人類智識の

作用推論の構成等を全ふし人類の人類たる靈力を顯はすことを得さらしむるに至らんことを是に於て我輩は以爲らく輓近社會進歩の機運に伴ひ、又更に將來に向ふても神學が人類の智識及德性を高尙に發揮せしめんことを期せんと欲せば則ち彼れ神學家の如く人類と神との間に大なる懸隔を立す「ユニテリアン」の如く神を天父と信すると共に神を人類の同胞と信する心を起すことを奬勵するを眞正なる神學の意義に契ふものと同一ならしむ可し然るに一に神學上の定則を墨守して神學を攷究する所の人を其定則の範圍に拘束し更に甚だしきは神學の意義を誤解して神學を講習する所の者を信仰的の範圍に誘掖せんとするが如きは眞正なる神學の目的にあらさるや必せり然れとも若し斯る神學を以て眞正なるものと爲さん乎、我輩は神學なるもの丶價値未だ其何處に有るを知る能はさるなり

夫れ神學なるもの丶價値ある所以は人類個々に存在する本元眞理を基本として、智識の作用を概活にし推論の構成を敏捷にし、以て大に人類の人類たる靈力を圓滿に啓沃するにあり、否な神學は高等なる地位に在りて諸般の科學を基址と爲し而して諸般の科學が解く能はさる所の疑問を神學は能く之を解き、又神學と科學的理法と合理的大道との三者合同して諸般の疑問を解く塲合もあるなり、斯く三者互に相賴り相助けて背馳する所なきは畢竟神學の濶大包容にして能く個別の中より普及なるものを發見し、複雜の中より秩序あるものを發見し、偶然の中より必然なるものを發見する力を有するを以てなり神學果して普及、秩序、必然等を發見するを以て其目的とするが故に價値を有するものとすれば本元眞理の自己に存在するを認知し之と同時に「ユニテリアン」の云ふが如く神を天父と見認めつゝ又神を人類の同胞と見認るは社會成立の原則と進歩的現象に最も能く契合したるものと云はさる可らず

雜録

○削足而適履

今の宗教界能く自己の主義を確持して動かざる者果して幾人か有る、能く己れの本領を持續し能ふ者果して幾許ぞ、懷ふて茲に至る每に憤慨に堪へざる者あり。彼れ是れと云へば此は其れと唱へ、論議每に枝葉に馳せて曲辯詭論、俗界に入れられんとを是れ職とす、何ぞ其の墮落の太甚しきや。今日の宗教は世民の導火に非ずして、世民は實に宗教界の導火なり、彼の評論子をして奇異なる口調を以て、宗派心の必要を說かしむるも亦所以なきに非ず。都べて宗教の宗教たる所、必ずしも一世の虛勢を張り、一時の歡呼を買ひ、時流に關聯して俗者の謳歌喝采を得ば、以て事足れりとす可きに非ざるなり。是の如き當世的偉業、時流的英名は永遠無窮なるものに非す、此の種の德行事業未だ劇に最終の戰勝者として旗を揚ぐ可からず。基督の所謂博愛純愛改悔敢爲等の諸德も、時流風潮に化了し、當世に媚びんが爲めの方便に用ゐらるゝに至りては、豈宗教本色の護持策と稱す可けむや。『所以養而害所養。譬猶削足而適履、殺頭而便冠』の語は、今日の宗教界を攪醒せんが爲めに、淮南子が特更に詠み遺せるの警語ならずとせんや。宗教にして進化を說き同化を唱ふる者、善は則ち善なりと雖とも、妄に其の限界を超へて、人心を迎へんとするが如き傾向は、吾人の屢ゝ見聞する所、其の教義をも曲解して、流行心に投ぜんとを勉むるは、抑も何等の意ぞ、以て己れの天職を果せりと憶ふ耶。若し彼の輩の唱ふる如く、頭徹時流に合し、世俗の通理と吻合するものたらば、豈特に宗教など〻大袈裟に持出すの必要何處にかある。假令佛教にせよ、基督教にせよ、その時流に超絕し、世俗に透脫するの特點あればこそ、施教の要もあらめ、妄に己れを枉げて凡俗に媚ぶるが如きは、是れ鄙夫匹夫の眞似事に過ぎず、血性勇士の爲さゞる所なり。請ふ少しく自己の地位を觀念せよ、思ひ半ばに過ぐるものあらむ。

吾子共に預言者の列に加はる者ならずや、少くも其の片偶に足を踏み入れんと期するものなり、何ぞ殊更に預言するを恐れ、附從者たるを是れ勉むるや。根本的改革、精神的救世は、遂に今日の宗教家に望む可からざるか。

○無我觀と忠孝論

忠孝道を頻りに云々して日も尙ほ足らざるは、宗教界現時の大傾向なり、大流行なり、吾人は其の舌戰辯難の結果、大に忠孝道の眞相を發揚するあらむことを豫期して、喜ぶ所なり、眞理は克爭の間より生ずるものなればなり、然れども曲解詭辯妄に世を瞞し、時世に媚ぶるに至らむことを恐る、是れ吾人の杞憂に非ず、現今の大惡潮なり、大流弊なり、此の惡潮流は復た掩ふ可からず、滔々として全社會に溢浸するなり。學者、宗教家として戰ふは正々堂々眞理の爲めに戰ふ可し、一時の戰勝を期し、一世の豪遊を貪るが如きは、敢へて吾人の與みせざる所なり。今日の忠孝道論には基督教徒每に受大刀となり、非基督教徒戰挑者たるが如し、然り基督教徒正に受大刀たるに相違なきも、是れ決して恐るゝに足らず。吾黨の士よ、妄に立つて曲學阿世の譏を招く勿れ、曲解詭辯小人の態度を倣す勿れ。見よ彼の戰挑者は如何なる辯を弄して基督教の忠孝道を論ずるか、曰く、基督教の忠孝は假物なり、死物なり、不神聖、無精神、便宜的、外形的、虛禮的なりと、吾黨の士よ、此を云々するを止めよ、彼れ等の意に添はんことを勉むる勿れ、吾人も亦其の如何を論ずるは暫く措かむ。飜つて佛教理と忠孝道論とを對照せよ、井上圓了氏一派の言は、宗教を以て哲學の應用なり、世間を離れて出世間なく、現實界を距りて眞如なしと云ふ、吾人の期する所も、宗教を以て哲理の應用となし、理想的信仰の世民を形造らんとするなれば、此の點に對しては深く異論なしと雖とも、たとへ一方便に過ぎずとするも、佛教理中無我觀を說いて『各自有名都無我者、我既都無其如幻耳』(四十二章經)『我が今の此の身は四大の和合なり……四大各離るれば、今は妄身當に何れの處にかある可き。即ち知る此の身は畢竟して躰

無し、和合を相となす、實に幻化に同じ』（圓覺經）とあり。我有りと觀するは愛念執着の迷誤にして、實に此の身は如幻假有のものなりと謂ふ、果して然らば此の世をもて假の世とせるや明かなり。現世既に假有ならば現世に顯象する所のもの、皆假有なりと云はざる可からず。君父の如きは一個出世後の契約なり、現世の關係なり、無窮の楷級に非ず、君父既に假有なり、假有なる君父に事ふる忠孝は、從つて假物なりと云はざる可からず。假物なる忠孝は死物なり、無精神、不神聖なり、故に佛敎の忠孝は死物、無精神、不神聖なりと斷ぜざる可からず、佛者以て如何に答ふ可き。此の論結決して吾人の解説に非ず、唯吾人は、佛者及び非基督敎徒が、基督敎は理想上の天國を説き、上帝（宇宙の主宰者）を尊崇す、是れ國君を蔑辱する者、常に天國の生活を期し、現世の君父を假君假父とす。かるが故に、基督敎徒の忠孝は假物なり、死物なりと誹謗するを以て是れを云ふなり。佛者少しく自省せよ、世に宗敎として何物か理想を説かざらむ、何物か抽象的の一大勢力を論ぜざらむ。理想界を説き、宇宙の大勢力を信ずる者は、不忠不孝なりと稱さる可き耶。吾人は決して佛敎に於いて無我觀を論じ、凡神的大勢力を立つるを以て、直に不忠不孝なりと稱するを敢へてせず、其の立脚の地異なればなり。然るに佛者は、至善至正全智全能なる宇宙の主宰者……博愛……天國等と國家の元首との衝突を云々す、以て天上天下唯我獨尊の釋迦佛……無我觀……唯識所變等と國家の元首との關係を如何にす可きぞ。

○忠孝道の不幸

戰はゞ正に旗色を明にして鬪へ、爭はゞ正に鮮明陣頭に立つて爭へ、無名の爭鬪、悖理曲道の戰端は勇士の敢へて爲ざる所なり」。吾人が今茲に忠孝と云はずして忠孝道と稱する者、一眞理として講じ、一學術として公平に論明せんと欲するが爲めのみ、濫に勅語を婉曲に解譯して、眞理を蔽はんとする者に豫め備ふるなり。彼れ等辭窮し語屈すれば、違勅違憲の語を濫用して學理論に當らむとす、其の卑怯を未萌に防がんとす

るのみ。學者社會素より勅語の制裁なしと云ふに非ず、學者宗教家と雖とも苟も我臣民たる上は、臣民として總べての勅語、總べての法憲に服せざる可からず、然れども學者と學理とは別物なり。勅語同樣の意義語句を以て戰ふは可なるも、敎義の衝突如何を講明しつゝある今日に於て、妄に違勅と速斷し、己れの曲を掩はんとするに至りては、遂に忠孝道の眞相を發揮す可きの時なかる可し。實に是れ忠孝道の不幸なり。彼の眞相は遂に曖昧模糊、五里霧中に埋設し去られんとす、是れ何ぞ忠孝道の不幸と謂はざる可けんや。基督敎徒一たび口を開けば違勅と呼び、口を掛せば敗れたりと罵り、遂に彼れ等は始皇の再生を得ざれば停まざらんとす、正に是れ學術界の闇黑時代なり。

○卜里老猿とは誰ぞ

文人慣用の雅號と匿名とは區別せざる可からず、吾人は可及的雅號をも廢して實名を用ゐんことを望むものなり、雅號何の用ぞ、雅號何の利ぞ、吾人其の意を知らず。然れども雅號は、我邦文人社會慣用の久しきものなれば、弊害の及ばざる限りは、之れを存するも敢へて妨げずと雖とも、苟も事の自他、主義上の論爭、所謂天下分け目の時に當りては、奮然實名を揭げて公論す可し、是れ學者たる者の禮儀なり、正式なり、何ぞ匿名を用ゐて跡を暗ますの要あらむ。卜里老猿とは誰ぞ、彼れ名無き耶、卜里老猿彼れの名耶、抑も匿名耶。彼れ己れの主義を表白し、學理上の公論を爲す、何の憚る所ぞ、蓋し衷心疚しき所存するの故耶、人あり曰ふ、其の論旨甚だ井上哲次郎君の敎育宗敎衝突論に髣髴たりと、又曰ふ、君が衝突論を辯疏せるものゝ如しと、言ひ換ふれば、君が意中より出てたるが如しと、遂に卜里老猿を以て井上博士に擬するに至る、少くも博士が口授を特に筆記せしめたるものと吹聽す。吾人は井上君を信ずるや甚だ篤し、故に君が匿名を以て他を誹毀攻撃するが如き、卑怯策を施し世を瞞せんとする者なるを信ぜず、然れども世は既に之れを疑ふ。君遂に老猿の爲めに寃を受く、老猿なる者、井上君に寃を負はしめて中心恥づる所なきか、老猿の井上君なら

ざるを自白し、世人の疑を解くは、老猿が正に可爲的の責務ならずや。實に主義の表白は身に取つての一大事なり、一大事を匿名とする處は何事ぞ、特に其の論旨の正理公道の爲めに非ずして、罵詈誹謗に渉るの譏あるに至りては、何ぞ速かに名乘り出てゝ、責任の歸する所を明にせざる。

○宗派心とは何ぞ

吾人は前號の誌上に於いて『評論子に問ふ』と題し、今の敎會に、別幟割據、黨爭を是れ勸誘する精神の要何處に在るかを問ひたり、然れども評論子は遂に答ふる所なかりき、否、暗に『宗派心の說』（評論第拾號）と題して變說曲解、終に其の要領を得る能はず。評論子前きには今人が、屢〻宗派の多きことを慨歎するを以て甚だ迂論なりとし、異色を相對照し、別幟を飜し、截然として各宗派を分明ならしむるを勸誘し、今は則ち然らず、今人の所謂宗派なるものを現存せよと云ふに非ず、宗派心とは、堅確なる宗敎心と云ふに均しと曲解せり、評論子の宗派心とは、堅確なる宗敎心か、何故に其の語を用ゐざる、既に宗派心と云ふ、世の所謂宗派の心ならずや、子にして他の意味即ち宗敎心の義に用ゐんとならば、何故に前言を置かざる。子が前言を置かずして之れを謂ふ、世の誤解を招くも亦餘儀なきなり。子既に前言を置かずして世の誤解を招く、其の罪は正に受けざる可からず。そは兎まれ角まれ、子は宗派心即宗敎心と斷定するも、子が其の初に於いて目下の宗派を奬勵するの語氣あり（世人が宗派多きを慨歎するを迂論と云ふを以て知る可きなり）、今や氏は宗派心即宗敎心と曲解辯疏するは、遂に前後矛盾たるを免る可からず、是れ吾人の曲解と云ふ所以なり、敢へて問ふ評論子よ、是れ矛盾に非ざる乎、曲解に非ざる乎、變說と云ふは無理乎、否乎。一片の答辭を吝む勿れ、子よ吾人を以て答ふるに足らずとなし、默して止む勿れ、是れ吾人に答ふるに非ず、世に答ふるなり、道の爲めに曰ふなり。子が答へざるの時は即ち子が破れたるの時なり、子が言はざるの時は即ち子が悟りたるの時なり、子始め脫兎の如く終に處女たるが如き譏を

招く勿れ。終に一言す可きは、子が謂ふ所の堅確なる宗教心とは如何なる義ぞ、世の所謂宗派心なるか、子の論遂に見る可からず。或は宗教に熱心なる精神を謂ふか、熱實なる信仰心か、誠實なる求理心か、子の論を俟たずして三歳童兒も猶ほ其の要を知る、豈貴重の誌面を妄用するの要あらむや。子が假令『苟くも宗教心に切なる者あらんか、何ぞ區々拘拘として、小異にのみ爭ふことを爲さんや』と論結して、世の抗撃を避けむとするも遂に能はざるの業なり。

○日本の花嫁

一種の名に於いて尤物と聞へたる數寄屋橋教會の牧師田村直臣氏は、先頃米國にて一書を出版せられたり、題して『日本の花嫁』といふもの即ち之なり。本書の躰裁寸珍にして小輕なる所、殊に著者の田村氏なると相須つて一見甚だ興趣に富めるを覺ふ、寧ろ手に擧げたる後はまづ笑ふべし、叨に舌端に咄音を加ふる勿れ。本書の批評は植村、横井の兩氏が既に業に盡されたり、ジヤッパンメール又府下日刊新聞にも痛快なる批難抗撃大に之を彈劾せり。本書の名譽と價値とは既に定まれりと謂ふべき乎

福音新報は曰く『……若し日本國民の現狀を憂ひ、其の罪惡を悲しみ、之を矯正せんと欲するの赤心止む能はざるより、此の如き著述を爲せしものとすれば、記事の過誤或ひは恕すべきに似たり。然れども田村直臣氏の日本の花嫁を讀て憂國の言を爲せるものなるを保證すると能はず。讀者多くは之を一場の戲談笑柄のために物せしに相違なしとするならん。余輩は國の恥辱を賣りて、外人の笑柄に供するもの往々にして之有るを悲しむ。若し眞實なる記事ならんには恥辱も聊か忍ふべしといへども虛實相半するものに至りては、余輩また痛嘆に堪へざるなり。

日本の花嫁は記して曰く、我らは（日本人）愛と禽獸的の情慾とを同一視す。曰く、我人民は清潔なる愛を味ひ知らず……今田村氏は上文の如き奇怪なる文字を弄して、同胞を外國に誹れり。余輩は氏のために深く之を愧ぢ、また之を悲しまずんばあらざるなりよし眞實なることにもせよ、自國の事は一々之を外國に告ぐるの必要なし。或ひは之を隱蔽するの義務あり。況んや虛妄の記事を列ねて自國の耻辱を海外に風聽するをや。余輩は此の種類に屬する著書の輕薄を爪彈きす。』

基督教新聞は曰く『……吾人また一本を入手し閲讀せり、或る凡情に充滿せらる米國の青年男女を悅ばすに適當なる著作をなせし田村氏の技倆には實に感服せり、然れども此の書に付ては實に失望し且つ慚愧せり、吾人が失望せし所以は其の記事甚だ不精確なるが爲なり、吾人が慚愧せし所以は其遠慮なく平氣にして同胞の耻ちを外人に告

ぐに由りてなり、例せば田村氏は今より二十年以前の古風俗にして今や殆んど跡を絶ちし者を記するに當り宛も現今の事がらの如く現在時の文字を用ひて記せり、又た田村氏の書を讀まん人は東京の市中は帽子を前後倒さに被り男子の靴を穿ち(服裝は日本婦人服)男子の歩武を眞似して歩行する貴婦人に充滿するが如く思はん(序文四ページ)然れども恐らく百日歩ひても日本服に西洋帽子を倒に蒙り男子の靴を穿てる貴婦人に出遭ふ事なからん、一時婦人洋服の流行せし時には洋服を着しあやまつて帽子を前後倒に蒙りしものもタマサカにはありしならん歟、然れども是れとても思へば恥ぢ入る次第、イカデ得々然として平氣平左衛門にして西洋人に吹聽するに忍びんや、況んや日本服に(文意を推考すれば)西洋帽、誠におばけ然たる貴婦人の徘徊する都會なりと吹聽されては日本の帝都も實に面白なき次第と云ふべし、……』

と、日本の如きは之れを以て無恥基督敎師、醜牧師、國辱を賣る者と迄痛罵せり。嗟、凡そこの批評を讀むもの、誰乎又本書を閲讀せんと欲せざる者あらんや。吾人はこゝに於いて該書の所在を尋ねたり、然れどもナカ〳〵に得難くして易く見當らず、聞くが如くんば氏は秘して出さずとやら、蓋し是れ何故ぞ、竊に考ふるに、既に堂々として外國に出版する書の、今特に秘するの眞意那邊にかある。恥らひて然る乎、良心の苛責にある乎。他の抗撃を恐れて然る乎、我が同胞に用なしとして然る乎、將又本書の部數乏しきか爲めに然る乎。兎に角この間、辨疏、理由、遁辭を夾むの餘地多ければ、固よりこれを追窮するの愚を爲すまじ。假りに憐憫を加へてまづこの一詰を免れしむ可し。

想ひ起す往年氏の在米中(前々回の洋行中)某所に於いて某婦人を見初めしが、其の容姿秀麗にして愛す可く、又端嚴溫良の相和するさま、一見の下慕念の禁じ難きあり、遂に追蹤して其行く處に達たりし。而してこの時氏は途すがら思ふよふ、彼れ令孃か花嫁かと、まさかに我が身の妻無きが故にも非ざるべけれども、愈行く程にこれを探ぐるの念迫まり、耳目おのづから張り、意おのづから集まり、片時も忘るゝ能はざりきと。されど鬚に揩級なく、歯に素涅の區別無きを以て、要は知り得ずして斷念するの外無かりければ、氏は頓がてこれを一塲の演說に組み立て、大に彼我風俗の異なれるを訴へ、巧辭を弄して爲に巨額の利を博せり云々。此は氏の逸事中最も有名なる一話にして既に衆の知る處、

シャモ後にて聞けばこの婦人は花嫁なりし。ア丶『花嫁』花嫁は氏の爲に金庫なり、氏は一ト度花嫁の甘味を占めたり、何ぞ以て忘るゝの理あらんや、射利に汲々として他に餘念無き氏が、前後を顧みるに遑あらず、同胞を外國に誹り、不文の醜を曝露するをも愧ぢず、一意歐人の嗜好を迎へて『日本の花嫁』を著はしたる、強ちに怪むべからず、

然れども氏の職や宣教師なり、名のある處は牧師なり、苟も宣教師といふ道德上の地位に於て必ず低度に充すべからず、少なくも廉耻、貞操、義侠、誠實等の何物たるは辯へざるを得ず、然るに氏の爲す處こゝに出でず、利潤に耽りて國を忘れ、阿諛を務めて躰を汚し、同胞を賣り又誹り、國に不忠を極はめて尚この神州の天地に棲めり、吾人は義の爲め、國の爲め、我が同胞の爲めに深くこの雪辱に憂ふ、且つ本書に就て閲すれば文躰は自侮的なり、事實は舊時の日本にありとか覺ふる陋習なり、更に其筆鋒の向ふ處を察すれば、懦夫尚忍びざる掃髯塵的の醜文字あり、而して顧みて其益する處を尋ぬれば、一も以て得るある莫し、遇ゝ得たりとせば歐米人の冷笑と著者の懐中とのみ。

嗚呼思へは、唾棄、爪彈未だ及ばず、吾人は極言して蟊賊と云はん乎、寧ろ閲讀を悔ふ、　（ＴＭ生）

〇偶感

天主教會の獨立は望み難し……教會獨立の最も困難なるは天主教會なり、彼は外國の法王を戴き、異邦人の教會に支配せらる、是れ彼が獨立の困難なる所以なり。日本天主教會の 名稱は適〻以て日本人が異國の法王に支配せらるゝを表彰するのみ。日本天主教會の名稱は以て日本てふ國に於ける法王政治的天主教會の意味と言へば可ならむ、唯單に信徒が日本人なりと言ふに止まらむ。然れども此の日本てふ名稱は以て教會の獨立を認む可からず。天主教會が獨立の困難は彼が法王の權下を脫する困難に等し、人若し法王政治が彼の敎の根本なるを知らば、其の困難の如何に大なるかを推するを得ん、况や以下希臘教に就て言ふ所は、亦以て天主教會に取つても同然なるに於てをや。

希臘敎會は如何…希臘敎會は敎職權と敎會令とに過度の重を置けり。故に主權者外人たる間は、外人高職を占むる間は彼に六分を取らるゝ也、外人の干涉を兇れ能はざる也。彼敎徒中敎會獨立の一方案として財政上の獨立を主張する者あり、されど是殆ど無効也。彼徒が外人の干涉を受けざるを得ざるは敎職權外人の手に存するが爲めならずや。假令敎會に巨萬の財あるも、敎職權の外人に在る間は其配下に在る者なるを知らずや。吾人は彼徒に勸む、敎職權敎會令は便宜の爲に設けたる者なるを悟り、獨立の爲に之を犧牲に供せよと。

新敎諸派の獨立如何…新敎諸派の獨立は早晩達せらるべし、組合敎會其首たり、日本基督敎會、カナダ派メソヂスト敎會之に亞がん、其最も後るゝの恐あるは監督メソヂスト及び英米派監督敎會ならむ、其監督の外國人の手より獨立して日本人の監督の下に立つに非ざれば、獨立の實を擧ぐると太甚難し。されど牧師信徒の精勵は難者必ずしも難しとす可からず、外部の困難は末なり、內部の奮發こそ至要なれ。（さ、と生）

○ブリックス氏

思想の自由、寬大の度量、進取の元氣を有し、進化の大軌道に横はる者を目して妄に異端と稱する勿れ、之れ却つて汝の狹隘迂遠を表白する者也。先き頃米國長老敎會はブリックス氏を以て異端者となし、遂に敎權を停止するに至れりき。吾人は之れを以て長老敎會の價値を定め、ブ氏が元氣自由名譽は爲めに一層の光輝を放てるを信ずる也。人は湛溜水に非ず、山石堤防をも決潰して常に大激流をなす。大激流の向ふ所遂に人力の障ふ可からざる也、異端の稱何のその

近刊雜書

◉文明の弊及び其救治　「平民叢書第五卷」（民友社發行）方今科學は著しき進歩をなし外形の事物は驚く可き發達を爲せり吾人は斯る進歩を喜び斯る發達を賀す、然ども斯發達進歩に眩惑して外形に偏し內心を輕ずる者科學を以て眞理の唯一標準なりと誤想する者現象的智識に狂して形而上的智識（佛敎的放論と區別す）を拒まんとする者粗糙なる感覺を主として宗敎道德の權威を下げしめんとする者あるは現時

の文明に伴ふ（文明の作爲せるものと言ひ得ざるも）大弊害なり吾人此弊害を救助するの必要を感ずると切なり平民叢書第五卷の所論實に此點に在り吾人は該書を歡迎し其功德の多からんを信ず其所論亦凡庸に非ずまゝ哲學的なる所あり論議の大體非難すべき所なし唯原著者（該書は英人エドワード、カーペンター氏に據るものなるを以て）が物理學者化學者醫學者心理學者論理學者等を責むるに過重の要求を以せるの觀ありされど是れ科學哲學の範圍を論ずるに當りて言ふべき非難のみ若し夫れ該書の目的那邊に在るかを察し且つ原著者の所論は諸科學者の偏僻狂奔を痛激せるに出でたるを思へば斯る瑕瑾（該書に取ては）何ぞ言ふを要せむ　（さ、と生）

◉ヘンリー、マルチン　波斯內地熱砂の飄る處荒寥寂寞たる一個の墓碑は屹然として兀立し塔加德史（トカット）と共に千載朽ちざる者は何者英靈の存する處ぞ嗚呼是れ八十年前の大教役者ヘンリー、マルチン氏が骨を埋むる所也彼が献身熱腸の英氣は印度の蠻域に身を投じて傳道を奮行し鋭意堪忍福音を傳へて遂に斃れき實に彼墳墓は幾多の榮譽と敬虔とを貢て兀立するよ　彼墳墓は幾多の　教役者を出し　教役者を奮勵せしめしよ峨然たる墓碑は如何に世の導火たりしぞ吾人はマルチンを懷ひマルチンを開く毎に凡情も感奮し痴愚爲めに清明を得たるが如く激勵せられ衷心誠に敬虔愛慕に堪へざる也今やマルチン傳は青年會の立物丹羽清次郎君の手により邦語に譯せられたり爲めに幾多の青年子女老弱男女に安樂と幸福とを開達す可き世の活路は如何に開通せらる可きぞ。譯者の功勞謝す可き也。

◉眞理　第四十六號「エドワルド、フォン、ダーウインの學說前提の批評」キリストリーブ氏「井上博士の教育宗教衝突論を評す承前」向軍治氏「難句辨」三並良氏は其二神殿に於ける十二歲の耶蘇（路加傳二章四十一節以下）を辨して第一奚尋我耶豈不知我當在我父之所乎と耶蘇が一言の謝辭なきは親子の禮に非ず第二に諸書を考證して遂に全然非歷史的と論斷し第三是れ既に非歷史的とせば之を以て耶蘇の人物を褒貶す可からずと論じて局を結び其他「基督教抗論正議」丸山通一氏等あり。

◉早稻田文學　四十五號「詩才論……天才論（續）」金子馬治氏「ジョンミルトンの傳」與泰賓纂譯坪內逍遙氏閱「狂言作者大熊手（其中）」默庵主人及び名著梗概には「イリアッド」鶴田喜一郎氏其他文界現象四十六號「詩才論天才論（續）終」金子馬治氏雜錄には「劇の人心に於ける影響」紀ノ淑雄氏稿「歌の律呂」「森寬齋翁言行錄」附錄は「萬葉集釋義」島山健氏「英文學史綱領―詩歌の四相―散文―第四章劇壇幷に脚本家」坪內逍遙氏講述其他文界現象等見る可きも太甚だ尠少からず

◉同志社文學　六十八號「中等教育に於ける德育私見」「經濟と道德との關係」丸山通一氏「日本畫沿革考」濱玉園氏「神學校」津下紋太郞氏及び雜錄に米國女文學者」「ちり籠」「茅渟海端艇旅行記」其他文藻新刊等を載せ觀瀾には「宗教記者に一言」と題して吾人が前號に基督教折衷派なる者あるを論せしに其名のみにして實形なしとて滔々と論ぜられた

り若し記者にして之れなしとせばソレマデのこと然れども吾人は記者の言を以て未だ之れなきを證するに足らざるを恨むなり兎に角本誌は雄文健筆の士が手に作るだけありて其光彩其好文字大に愛慕す可きものあり。

◉三籟　「貝拾（和歌）」大西祝氏「人物の標準を讀みて」元良勇次郎氏「活氣論」松村介石氏「發句」尾崎紅葉氏「一臠の肉」百合園主人「巨人談」内田不知庵氏以上第五號所載　◉六合雜誌　第百五十二號「神學界の波瀾及其歸趣」原田覺氏「社會問題の研究」金井延氏「宗教哲學論理法の歷史及批評」森田久萬人氏「元良博士の倫理學を讀む」松本文三郎氏「林羅山の宗教思想」足立栗園氏等　◉哲學雜誌　第七十八號「狐憑病に就て」榊俶氏「シオツペンハワー氏國家哲學」松本文三郎等「佛教の戒律」織田得能氏「ソクラテス前の希臘哲學十三回」大西祝氏等

◉評論：十號十一號　◉文學界：八號　◉基督教青年：五號　◉自由基督教：十二號　◉佛教：七十三號七十四號

彙報

◉自由神學校　は來十月より新學期開始に付品行方正にして高等中學生同等の學力を有する者は試驗の上無束修無月謝を以て入學を許を許す由猶該校には貸費の規程あり其他詳細の規則入用の向は京橋區加賀町八番地自由神學校に申込む可し、但し入學志願者は十月一日迄に申出づ可しとのこと◉送別會　這回萬國宗教大會へ出席の爲めに渡米せらるゝ木村駿吉、横井時雄、小崎弘道三氏の爲め芝濱海水浴に於て送別會を開かれたり猶小崎氏は、去月二十五日の郵船を以て出發の途に着けり

◉神道家の渡米　神道實行教管長は宗教大會へ列席の爲め去月十八日渡米せり◉一致派　鎭西中會は加藤覺氏を容れて教師とし同派の井深梶之助氏は去々月卅日光小太郎氏送別會席上に加覺氏あり進んで按手禮を受けんとす井深氏未だ氏の復職を認めずとて之を拒否せりと云ふ一は容れ一は拒む之れ分裂の兆には非ざる乎？加藤氏も亦厄介者ならずや◉石毛太一氏の逝去　自由神學校生徒石毛太一氏は永日病魔に侵され醫療中なりしが醫藥其効なく遂に去々月卅一日午後を以て黃泉の客とはなれり氏も性質に機敏にして活潑ユニテリアン教徒中の事業家經綸家事務家として人々皆望を屬したりき然るに天無情卒業期を眼前に控ふる氏を捕へて黃泉に導けり嗚呼長大嘆息氏が靈を祭る　◉花嫁事件　田村氏日本花嫁事件に關し基督教青年の或一派は大に運動する所あらんとすと聞く

來號豫告

來號の本誌を見よ！如何に新氣焰を以て諸君に謁ゆるか如何に光彩を添るか如何に學術界の導火たるか如何に宗教界の僞善者を叱咤し來るかを自由神學校教授ローレンス氏は氏が該博なる識と老練なる論法とを以て『佛教の覺醒』を論述して社説に在り論林には大西文學士の寄稿を諸せらるゝあり立花文學士の『知行論』は心理學にて分別し了せられたる知と行とは倫理學上教育學上猶ほ其の一致を主張する必要あるや否を詳述し松本文學士の張橫渠の西銘は張子の宗教思想及び其の性行を細論して遺すなく其の他十八公子松居松葉氏の『偉人としての耶蘇基督』は次號に入つて益々氏が批評眼と詩人的筆力は輕快尊重を加へ佐治實然氏竹內楠三氏の續稿は層一層重きを加ふ猶諸大家の寄稿は列載せられて諸君の滿足を買はんと欲す雜錄の如きも記者が碎心精勵諸君の意に乖らざらむを期す諸君幸に一臂の助力を借し益々本誌の光輝を放たしめよ

前號の本誌

《論林》「日本獨創的基督教」松村介石氏「宗教の新系統其一」竹內楠三氏「文明とは何ぞ」矢部新作氏「感化制度設定の必要」堤法學士「ユニテリアン教私解」土谷忠治氏「ソクラテス降誕會に於て」蓮沼磐雄氏《雜錄》基督教の三潮流、自由派の使命、自由派の戰略、自業自得、佛者の大得意、評論子の大日本教育會評、冷熱調和、殖民事業と宗教家、評論子に問ふ、再挑『天則』に、國光の一喋、哲學科卒業生、眼を開て見よ、及び《近刊雜書披露》《彙報》等なり

社説

佛教家の覺醒

老練子

佛教再興を圖るの劃策は、近頃頻りに日本國に行はるる者の如し。少くも佛教徒の發行に係る諸新聞雜誌は、皆其の教勢擴張に關する記事を以て塡充せられ。有志者は爲めに東奔西走日夜懈らず、特に這回シカゴに於ける萬國宗教大會に對する運動の如きは、彼れ等が最も努めたる處なりき。然るに此の時に際し、卓越なる方法を以て彼れ等が信奉する教理を稱揚し、大に彼れ等を奮興せしめしもの蓋し二あり、即ち一を井上博士とし、一を英人フォンズ氏となす。井上博士は其の論文を、教育時論を始め本誌及び其の他二十四五種の雜誌に於いて發表し、大に佛教を辯護して基督教を排擊せられたりき。而して此の論一たび世に出づるや、非難の聲四方に起り、其の論法の弱點、論斷の誤謬を指摘する敢て難きにあらず。即ち博士が高橋五郎氏に宛てたる公開狀の如き、其の論文を更めて冊子となし、之れを刊行するに當り、諸處を修正せし等の事實を見れば、博士自からも大に這般過失を曉る所ありしものゝ如し。

フォンズ氏は元來英國の人、曩に日本の南部地方に在りて商業を營み、少くとも名義だけは、基督教徒なりしが、大に佛の功德にや感じたりけん、自ら佛教に改宗せりと稱し、熱心に之か弘通を計り、既に英國に於ても之れか傳播を經營しつゝありしか、今や猶ほ進んで深く其材料を收獲せん爲め再び渡來し、間もなく東京に在つて諸方に演説し、基督教を排擊し、日本人に向て彼等が舊來の信仰を保持せんことを慫慂せりと聞きしか、吾人親しく氏の高見を聽くの機會を得さりしかば竊に以て遺憾となす。而して吾人は氏か演舌に關する報告として接手せし所の者の信ならざらんことを望む者なり。何となれは、若し這般の報告一の謬る所

なしとせば、氏か告白せし宗教上の智識は實に淺近なる者にして、其の傳道の方法の如き必すしも哲學的倫理的論法の發表に非すして、單に人民の偏辟心に訴へ、徒らに基督教の牧師、宣教師等を誹譏するに過きされはなり。嗚呼斯の如き手段は唯〻愚痴盲昧の下等人民を煽動して、喝采を博するの點に於ては或は成功するを得ん。然れとも其の處置に至ては具眼者の大に排斥する所なり。吾人は氏か果して這般の過失を實行せしや否やを知らす、唯〻反す〳〵も其の信ならさるとを望む者なり。

這般二氏の破邪顯正的運動は、直接に間接に大に佛教徒を奬勵し、其の狀恰も薪火に灌くに油を以てするか如き者ありしは、正に疑ふ可らさる事實なり。然り而して吾人宗名を「ユニテリアン」教に列する者、此の際に當り果して如何なる見解をか取る可き、請ふ之より少しく縷陳せん。吾人の運動は素より最高最大の意義に於ける宗教の爲めに聊か盡す所あらんと期するにあり。左れは世に若し熱情以て宗教的生涯の發揚を圖るの運動あらん乎、吾人は之を賛美し、之を歡迎するに於て敢て人後に出でざるを覺悟する者なり。然れども其の目的方法の如何を問はず、一も二も之を稱美するの謂に非ず、唯〻高妙の正的を把持し、正義の行路を辿る者を謂ふのみ。是の故を以て吾人は這般佛教徒の運動を觀て以て未た俄に賛稱の意を表し能はざると共に、又容易に之を誹謗損毀するを欲せざるなり。何となれば是れ單に佛教徒のみに關係する事にして、絶へて世界的宗教問題に影響する處なければなり。吾人は常に、若し佛教に於て玄妙幽邃の理得て蔽ふ可らざる者ありとせば、廣く世界に宣言せん事を冀ふて息まず、宗教問題の事一に彼の哲學科學の未た其の終局に到達せざると一般、未だ完全なる解答を得たりとなす可らず。而して吾人は信ず、今後宗教問題を解するに當り、佛教は必らず其重要の大部を寄與すべきを。然るに斯の如く佛教徒と基督教徒と互に相反目して、楚秦も啻ならざるが如き者あるに於ては、宗教の完備將た何の日を待てか望まん。斯く偏辟心を聳起するは適〻以て眞

理の發揮を遲緩ならしむるに過ぎず。故に吾曹は誠意以て徒に愚民の偏僻心を煽動して、公明熱衷なる人士を非難するか如き卑劣手段を驅除せんとを冀ひ、啻に之のみに止らず、其の他何事に於ても斯の如き精神の跳梁するなからんを望む者なり。井上博士及ひ基督教徒の諸論文を精讀通觀するに於ても吾人は未た曾て其の論辨の精神に於て、勝利の正に基督教徒に歸するを思はすんばあらさるなり。獨り吾輩のみならず、苟も身を局外に措き、虚心以て徐に這般の論難を通讀する者、誰か佛教徒か假りに論理の正確に依つて得し處ありとするも、精神的に損失せし所と比較し來らば、其の間啻に滄海一粟の比に非ざるを感せさらんや。

冷淡なる無頓着と、狹隘なる黨派的執拗と二者何に偏するとなく、其の間に處して中道の宜しきを保つは古來最も難き所となす。善良清醇の頭腦を有する人と雖も、自己の信仰を發揚せんとして淫りに他人の意見を全く拒絶し、之を蕩盡せんと企て、己れ躬自から穽中に陷らざる者殆と稀なり。況んや尋常一般の輩に於いてをや。嗚呼今後も吾人が反對者に向つて企望する所は、一に他人の增進せる眞理を承認歡迎し、以て純正なる眞理を愛する熱情の爲めに、所謂黨派的執着心を沒却せんと是れなり。此の企願そ吾人が日夜侃々服膺して懈らざる處なれ。之れが爲め吾人の事業が建設せられ、之れか爲め本誌の發行せらるゝ所なり。然るに今日に至りて猶ほ未た一も吾人をして愈〻益〻耐忍奮勵せしむるに足るべき者あるを見す、思へは實に慨嘆せざらんと欲するも得べけんや。二三の論者は吾人を誤認して罵詈讒謗至らざるなし。然れとも吾人は正義に杖つき、信仰を傘にし、未た曾て毫も其の行路を枉けさる者、蓋し神が平等に總ての人類に賦與せる所あり、而して天下の宗教は、盡く皆唯宇宙的大光彩の片碎たるに過ぎずして、何時しか是等の片々陸離たる細光を結合して、洽く六合を照さん一大光輝を成すべき時節の到來すべきを信する者あるを以てなり。吾輩は未た佛教に贊同して、基督教を駁擊する能はさるもの。將た未た基督教徒に左袒して、佛教に拮抗せざるもの。

自宗に歸依せざる者を蔑視するを以て神意に適ふと信する福音的基督教徒を賛美する能はざる所以、決して或る論者の云ふか如く、去就を曖昧にする者に非す、將た又自己に確信なき爲めにも非ず、唯〻這般の問題は實に重要にして、しかも深遠難解の者なれは、輕々に論去すべきに非ざるを慮ればなり。妄誕を郤けんと欲し反て眞理を塗抹し去つて天國（黄金世界）の降臨を遲からしめんとを恐るればなり。

何人も自己の確信する所は遠慮會釋なく言ふて可なり、徒らに腹を張らして何の益かある。然れども只た愼んで怨恨、悪意、悪言を避けよ。人々若し自己の黨派に對する熱情を轉して、以て眞理の發揮に務めなば、天國の降臨期して待つべきなり。

論林

理性の權威

文學士　大西　祝

理性なる者、人或は之を尊崇して宇宙の獨尊者となし之に越ゆるの權威あるなしとし、或は之を忌み嫌うて成るべく之に面せざらんと欲し、或はその示す所を疑はしとして之を輕視し去らんとす。斯く種々の斷定と感情とを以て對せらるゝ理性は何たる者ぞ。凡べての權勢は皆その面前に跪く可き者なる乎。將た理性以上の者ありて、吾人に天地の秘密を語る乎。理性は凡べての事物を照す如くに見えて、己れみつからは闇黑の中に匿るゝ乎。人の何ぞ其名を呼ぶとの繁くして、其性を捕ふるとの少きぞ。之を輕蔑せむと欲する者、之を忌み嫌ひ怖るゝ者、之を崇拜する者、皆同一の性躰を見て爾かする乎。何を捉へて之に尊敬若しくは嫌悪の感情を注く乎。

何故に理性とは名けらる。理を見るの性能、是れ其字面上の意義なり。最も手近く解釋すれば、眞を觀て之を妄と相判つ所の吾人の性德を理性と云ふ。心理上之を分析し得べくんば、如何なる心的作用に歸すべき乎。其此心理上の說明の如何に拘はらず、兎に角眞理と非眞理とを見わくるとを以て理性の特質となす。是れ極めて手近くして又極めて通し易き見解ならん。理性は斯く眞妄を辨別する吾人の性德なるのみならず、其性德は個人的價値を有するに止まらずして、一般普通の效力ある者と見做さる。即ち理性を具ふる幾多の個人ありて、彼等を通して同一の眞理の承認さる可きものとせらる。若し自他の見る所の相異るあらば、是れ未た自他に於ける理性の指示の明瞭ならざるによるのみ。此れが明瞭ならば、自他の間齟齬撞着のあるべき筈なし。理性の眞若しくは妄とする所は、一個人にのみ取りて然るにあらず、普通に然るなり。我理性の眞理とする所は（理性としての位地より見て）他人に取りても眞理たるべきなり。眞理は個人のものにあらず、徧通のものたり。斯くの如き理性ありて、斯くの如き眞理を見わくるを得と思ふ、是れ論證を假らず寧ろ論證に先ちて其根據とする所の、終極の假定若しくは信仰若しは要求なり。吾人は斯る眞理の存在して、之をわが知り得るの性德あるとを要する也。

かゝる大體の說明に止めば、敢て異論を挿むべき餘地なからん。然るに更に一步を進めて、理性なる者か眞理を看取する唯一の又は最高の機關なる乎、將た他に理性の及ばざる處に悟入し、その明にし得ざる處を感得する能力ある乎、理性の示す所は無制限に隨順すべき者なる乎、將た之を制限する者ある乎と問ひ來れば、之に對する答辭は、人によりて決して一樣ならず。人往々理性以上に權威の存するありとす。或は敢て理性と相撞着するにあらず、又敢て理性に優れりと云ふにあらざるも、おのづから其照示する所の範圍の理性の照示する所と相同しからぬ者ありとす。理性の價値に就いて學者の見る所の斯く相異なるは、理性なる者の何たるかを明にせざるに大に原因せずや。惟ふに、し

ばく〜理性と相列べられ、若しは之に超越せる者とせられ、若しは之に反對せる者とせられ、若しは之と異名同物と見做さるゝ所の者を掲けて、その理性に對する關係に就いて少しく論明する所あらば、種々の事件の便益を與ふることなきにあらざるべし。

理性と信仰　理性と最もしばく〜相對せしめらるゝは信仰なり。此兩者は動もすれば全く相反する者と見做さる。テルトリアンの如きは、不條理なるが故に我れ信すとさへ云へり。又或は道理と信仰とは究竟すれば決して相撞着する者にあらず、信と理とはその獲取さるゝ途に於てこそ異なれ、その示す所の事柄に於ては一なり。眞正の宗敎は眞正の哲學、眞正の哲學は眞正の宗敎なりと唱ふる學者あり。斯く信理を和合すべき者と見る、是れかのスコラ哲學の據て立ちし根本假定なり。或は信理の先後を論して、先つ信仰より入らざるべからず、然れとも更に進んで其信仰の理由を知了し得る者は、之を知了するを可とす、理由を知りて信するは、知らずして信するに優れり、但し凡べての人悉く理由を知了し得るにあらず、信仰は如何なる人も之を懷くを得、又信仰をさへ懷き得ば、既に懷くべき必要の事件は之を獲得したりと謂つべしと説く者あり。又或は理性に合する事件と、之に越ゆる事件と、之に反する事件とを區別して、信仰は或は理性に合し、或は之に越ゆることあるも、決して之に反することなしと唱ふる神學者あり。是れ恐らくは信仰を辯護せむとする者に取りて最も便利なる見解ならむ。

斯く種々に信仰と理性との關係を説きなすが、その謂ふ信仰とは何物ぞやと問へば、スコラ學者の謂ふ所は、中世紀の基督敎會の敎へたる宗義に外ならず、近世の神學者の謂ふ所は概ねバイブルに記されたる事柄を指すなり。然るに若しその謂ふ信仰と理性とを相反するとある者とし、而してその相反する時には、理性を捨てゝ信仰に就くを要すと云はゞ、何故にその如くするを要するかと問はざる可からず。「何故に」と問ふことを許容せば、唯だ不條理なるが故に信ずとは言ひ放つ可からず。何故に不條理なることを信するかと問はる可け

ればなり。之が答を爲して、條理の明なる事は信するの要なし、信すべきは條理の見えざる處にありと云はん歟。然れども何故に條理の見えざる、若しは條理に反する事を信する乎。何故に之を疑ひ、或は否むことをせざる乎。斯く「何故に」と問ひ來らば、遂に信することの理由を與へざる可からず。理由なきを以てその信すべきとの理由とはなす可からざる也。而して吾人は遂に「何故に」と問はざるを得ず、問うて其理由を得ずば、信するも信せざるも。要するに一個人の勝手次第の事とならん。何故に信する乎、其理由を缺くを以て、唯だ我は斯く信ず、若しは信ずることを欲すと云ふの外なからん。而してその欲する所を以て他人に迫るを得ず。他人は又その欲する所あるべければなり。他を非とし自を是とすべき理由あるなし。然らば則ち信仰は一個人上のものとなり畢らん。之を他人にも通す可きものと爲さんには、其信仰の理由を與へざる可からず。其理由を論ぜんとせば、遂に理性に訴へざる可からず。

或は云はん、信仰には全く理由なきにあらず、然し信仰する事件の一々に就いて其理由を質すを要せず、但だ其事件が神の啓示に出でしことを慥むれば足れり、神の啓示することが、其事件を信仰すべき理由たるなり、聖書に記載されたる教訓事蹟の一々に就いて其理由を尋ねずとも、その道理に合するか否かを問はずとも、又縱令ひ吾人の私に道理とする所に反する如く見ゆる所ありとも、只だ天啓に出でたる所の聖書に記錄しあるの故を以て、之を信して可なりと。然れども聖書に記述しある所を神の啓示に出でたりとするには、其理由なかる可からず。其記述の一々に就いて、その合理なるか、不合理なるかを撿するに先ち、其全躰を引きすべて之を全く信すべき者となすには、爾かするに足る非常の理由あるを要す。然るにその理由とする所は果してそれほどの事を立するに足る者なるか否かを何によりて判すべきか。如何なる理由にても足れりとは固より云ふ可からず。之を判する者は、かの所謂理性にあらずして何ぞや。常人の行ふ可からざる奇蹟を行ひ。一點の過誤と虚妄を有せざる基督の弟子等の記述

せる所なるか故に、其教訓事蹟の一々に就いて其眞否を質さずとも、之れを一括して信して可なりと云ふか。然れども基督は實に人間の行ふ可からざる奇蹟を行ひ毫末の過誤を有せずとは何によりて知り得るか。其弟子等の筆になれる文書は、神の默示を得たる者なりとは何によりて知り得るか。斯く問ひ來れば遂に信仰の根據を道理に基けざる可からざるを知る。信仰の理由を問ふことを許さば、其信仰の上に立ちて之を審判する者あることを許さゞる可からず。而して此者は是れ理性にあらずや。理窟を云ふとも無益なりとは何者の痴漢の言ぞや。信仰は道理を離れて立つ者にあらず、道理に據りて立つ可き也。理性の看取する道理を外にして信仰の根據ある如くに云ふは甚だしく誤れり。信仰なる者も亦理性の管轄内にあるべきなり、之を離れては信仰は吾人の空想界の迷見たるに止まらん。

或は問はん、信仰若し道理によりて立てられざる可からずば、何ぞ之を知ると云はずして信ずとは云ふ乎、其理の看取せらるゝ事件は、是れ吾人の知識する所にあらずやと、知識と理性との關係は後に云ふ所あらんが、今こゝには知と信との區別されなから、倘ほその共に等しく理性の管轄内にあるべき所以を辯ぜん。其所以は前述の旨意より推せば寔に見易しとなす。信仰若し一個人の氣隨氣儘に任す可からざる者ならば、其據て立つ根據なかる可からず。而して其根據は吾人の理性の承認する所となりて、始めて他人にもその受け容れられんことを求め得べきなり。是れ嚮に論したるが如し。されば信ずとは其據て立つ理由を見ざるとの謂にあらず、但だ其直接の理由を觀ざるの意なり。而して知るとは（若し之を信と區別せば）其直接の理由を觀るを云ふ。例へば某の爲す事が、斯く々々の困難を救助するに益ありと知りはせざれど、其益あらんことを信ずと云ふは、其益ある事の直接の理由を知らずとの意なり。其益あることの理由を全く知らずとにはあらず。某の平生の智慮と行爲とが、此場合に於てその爲す事を有益なるべしと、信せしむるの理由となる。さすれば平生の智謀より推して、此場合に於ける彼れの行爲

を有益なりと知ると云ふも不可なく、又信ずと云ふも不可なし。其直接の理由（即ち此特殊の場合に於て丁度如何なる關係が、其行爲をして有益ならしむるか）は知らざるよりして、信ずとは云ふべく、而も其平生の智謀が、其行爲の有益なることを證する充分の理由となるの點よりして、知ると云ふも不可なきなり。即ち信ずと云ふも、知ると云ふも共に均しく、その據る所の理由を審判する理性の管轄内にあるを見るべし。イがロを眞とする充分の理由なることを知り、又ロがハを眞とし、ハがニを眞とし、ニがホを眞とする充分の理由を知ることを知れる場合には、ホが眞なることを知れりと云ふべし、イとホとの連鎖となるロハニを未だ知らざるも、イのあるを知るによりて、それとロとの間に如何の連鎖のあることを知れる場合には、未だ其連鎖の何たるを知らざるよりして、ホを知ると云はずして信ずと云ふべし。

希伯來書の記者は曰く『それ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とするもの也』と。然し何故に未だ見ざる所を眞とするか、其理由あるを要す。只だ無闇に未だ見ざる所を眞とせざる以上は、未だ見ざるに拘らず、之を眞とするに足る程の證據を認めざる可からず。されば遂に訴ふ可き法庭は、理非を判ちて證據の足不足を見定むる吾人の能力ならざる可からず。是れ嚮に論したる所なるが、爰に又少しく考ふ可きは、未だ見ざる所を眞とすと云ふことの意義なり。未だ見ざる所を眞とするを信ずと云はゞ（之を神の約束に就いてのことのみとせずして廣く云へば）凡そ將來に關して吾人の推測すること、幷に過去に關しても他人の證言又記錄等によりて推し定むることは、皆信仰の範圍に屬すと云ふべき也。然らば直接の理由を知らざる時のみならず、之を知れる時にも其事の未來に屬する者は、之を知ると云はずして信ずと云はざるべからず。此見解に從へば知と信との差別は、現實經驗せしと未だ實驗せざることによりて定むべし。然るにその謂ふ經驗なる者は何ぞやと問ひ來らば、遂に信知の區別の見難きに至らん。未だ五官に觸れざる者は未だ經驗せざる者、未

だ見ざる者なりと云はんか、而して未だ見ざるが故に之を知れるにあらず、但だ信ずと云はん歟。その如く云はゞ、今机上にある葡萄を見るも、その物の葡萄たることを(嚴密の意味にては)知るとは云はず信ずと云ふべきならん。何となれば、只だ目にその形と色を見るのみにて、未だ手に觸れず口に味はざればなり。而して葡萄なる物は、唯だ色と形のみならず、手ざはりと味ひとをも含むべきなり。若し斯る場合に於て、その葡萄たることを知ると云はゞ、凡そ若干の理由によりて(未だ實見せざるも)或る事柄の存在を推定したる時には、其存在を知れりと云ふを得べし。そは今机上に見る一物の手ざはりと味ひとが、葡萄の手ざはりと味ひたることも、其色と形とによりて推定するに外ならねば也。斯く論じ來れば未だ見ざると既に見しとの差別によりて、信知を相別たんとするの困難なるを知るべし。

信と知とは認定することの確かさの度によりて別つべからざるか、即はち確かなるを知と云ひ、確かならぬを信と云ふ可からざるか、是れしば／＼人の依りて以て信と知とを區別する過なるが如し。然れども此區別に從へば、信ずると知るとは只だ程度の差別に過ぎずして、知は信よりも確かにして、信は知よりも確かならずと云ふに止まる。されば比較上の差別にして、丁度何の點よりを信と云ひ、何の點よりを知と云ふかは甚だ定め難からん。又若しその如き點を定めずば、甲に對して信なるとも、乙に對して知なるを得べし。又信仰なる者は必ず多少不確の分子を含むこととならん。則ち智識と等しき程に確かなる信仰とてはなきこととならん。斯く信知の區別は人の喋々する所なるに拘はらず、之を明にし難き者なるが、予は直接の理由を知ると知らざることによりて區別するが最も便利ならんと考ふ。故に予が見る所に從へば、知にも確かなるあり確かならざるあり、信にも亦確不確の差別あり、直接の理由を知るも、其理由の充分ならざるは知の不確なるなり。直接の理由の何たるを知らざるも、何等かの十分の理由あることを知れる場合には、其信仰は確かなるなり。斯く直接の理由を知ると知らざることによりて知

と信とを區別するが、少くとも或場合に於ては最も便利ならんと考ふれども必ずしも他の別ち方（實驗するとせざるとに據りて別つと確實の度によりて別つと）を非とするにあらず。通俗には此等の中、或は一、或は他の別ち方に據りて信知を區別すると屢〻あり

或は云はん、理由によりて以て一事件の眞なるとを知るは、是れ推理の作用の用ひらるゝ範圍に限る、而して推理するには先つ如何かの最初の根據なかるべからず、極りなく根據の根據となる者に遡る可からず、甲の眞なるとは乙なる理由によりて知り、乙の眞なるとは丙なる理由によりて知るとするも、丙の眞なるとは何によりて知るか、更に丁戊に溯るとするも、遂に何等かの最初の出立點なかる可からず、而して其出立點は理由を推究する推理の作用によらず（即ち間接に知るに非ずして）直接に知らざる可からず、理由によりて以て眞とするをば知ると云はゝ、直接に眞とするを何と云ふ可き、是れ寧ろ一種の信仰にあらずや。然らば吾人の知識の最初の根底は、信仰にありと云ふ可きならずや、知識は究竟するに信仰によりて立てる者にあらずやと、斯く論ずる者あらん。惟ふに推理の最初の出立點を知識と云ふべきか、信仰と云ふべきかは、要するに名稱の爭に陷らん。之を直識と名けて、理由を追求する間接の知識と區別するも不可なく、又之を最初の信仰と名くるも敢て非なるにあらず。何れに名くるも、要は只だ直接にその眞なるとの慥めらるゝを云ふなり。論じて此點に來れるからに、次には理性と直覺との關係を提し來らむ

（未完）

張横渠の西銘

文學士　松本赤太郎

西銘は張子の世界觀にして、天に事ふる道を敎ふるものなり。學説能く人の性行を變ず、而かも人の性行亦學説を構成するに與て大なる力なくんばあらず。張子の敬畏憐憫なくば焉んぞ西銘の敬畏憐憫あるを得んや。西銘の一言一句は悉く張子の丹心より出でたるにあらざるなく兩者は表裏相實す、かるが故に苟も西銘

の意思を明かにせんと欲せば、先づ張子の性行を知るを要す。今呂與叔撰ぶ所に從て張子行狀の梗概を擧げんか。

張子は世々大梁の人なりき。祖父は宋の眞宗の朝に仕へて集賢院學士となり、父は仁宗の朝に仕へて殿中丞知涪州事となりたる人なれば、其家系は甚しく高貴ならざりしも決して卑賤にはあらざりしなり。張子は幼にして郿縣横渠に寓せり。由て横渠を以て其號となしぬ。彼が及第進士に擧げられたるは嘉祐二年の頃なりき、尋で丹州雲巖の縣令に遷り、著作佐郎簽書となり、渭州の簽判を歷たり。後召されて入對し、崇文院校書となり、同く太常禮院を知しぬ。熙寧十二年召されて都に至りしが、議論禮官と合はずして其志を伸ぶる能はざりき。會疾あり謁告して歸途に上りしが、臨潼に行次するに及んで疾甚しく、遂に館舍に卒したり。淳祐の初め官之れを郿伯に封し、孔子の廟廷に從祀したり。

張子少より孤となり自立したるを以て、其志氣自ら凛乎として犯す可らざるものありき。張子初め喜んで兵を談し、年十八の頃慨然功名を以て自ら許し、上書して范文正公に謁したり。公一見して其遠器を知り、之を成就せんと欲し、乃はち責て曰ひき、儒者自有名敎、何事於兵と、因て勸めて中庸を讀ましめたり。張子之を愛讀したりと雖も猶ほ未だ以て足れりとせざりき。則ち又釋老の書を訪ひ累年其說を盡究したり。然れども得る所なきを知て反て道を六經に求めたり。後二程子に見え、共に道學の要を語るに及んで、自信して曰ひき、吾道自足、何事旁求と。乃ち異學を棄てぬ。日益久くして學益明なり。

張子人に敎ふるに德を以てしたり。當時穀に志す者甚だ多きを憂ひ、從容として學者に語て曰へらく、孰能少置意科擧、相從于堯舜之域否と。學者其語を聞て多く之に從ひたり。横渠の地至て僻陋なりき。張子僅かに田數百畝あり以て歲計に供へたり。約にして能く足れり。人其憂に堪えざりしに、張子は之に處て益安く、飲食臭味は才かに足を取て、嗜好の末を以て其心

を累はす事あらざりき。終日一室に危坐し、簡編を左右にし、俯て讀み、仰て思ひ、得る事あれば則ち之を識し、或は中夜起ち坐して燈を取り以て書したり。其道に志し、思を精する未だ始より須臾も息まず、亦未だ曾て須臾も忘れさりしなり。學者問ことあれば、多く告るに禮を知り、性を成し、氣質を變化するの道を以てし、學必ず聖人の如くにして後に已まんとしたり。聞者心を動かし進むことあらずと云ふ事なかりき。又以爲へり、之に敎ふる能く之を養て然して後信ありと。故に貧にして自給する能はざりしと雖も、苟も門人の貲なき者には糲蔬と雖も亦之を共にしたり。然れど張子は其義にあらざれば敢て一毫も人に及ぼすを欲せざりき。問に學者に答へては多しと雖も倦む事なく、能せざる者あれば未だ曾て其端を開かざる事あらざりき。其至る所必ず人才を訪ひ、語ぐ可き者あれば必ず丁寧に以て之を誨へ、惟だ其成就するの晩きを恐れたり。張子の自得せし所神化を窮し、天人を一にし、大本を立て、異學を斥くるにありき。曾て門人に謂て曰へらく、吾學既得ㇾ於ㇾ心則修ニ其辭一、命ㇾ辭無ㇾ差然後斷ㇾ事、斷ㇾ事無ㇾ失吾乃沛然、精ㇾ義入ㇾ神者豫而已と。熙寧九年秋張子異夢に感じ、忽ち書を以て門人に屬して、立つる所の言を集め、出して門人に示して、此書予歷年致ㇾ思之所ㇾ得、其言殆於ニ前聖一合ニ與大要一、發ㇾ端示ㇾ人而已、其觸ㇾ類廣ㇾ之則吾將ㇾ有ㇾ待ニ於學者一、正如ニ老木之株一、枝別固多所ㇾ少者潤澤華葉爾と曰ひ、之を正蒙と名けたり。

張子慨然三代の治に意有りき。其雲巖に在りし時、政治大抵本を敎ふし、俗を善くするを以て先と爲し、每に月吉を以て酒食を具て鄕人の高年を召し、縣庭に會し、親ら爲に勸酬し、人をして老を養ひ、長に事ふるの義を知らしめ、因て民の疾苦を問ひ、及び子弟を訓戒する所以の意を告げたり。敎告する所あれば常に文檄の出てゝ悉く民に達する事能はざる事を憂ひ、每に鄕長を庭に召して、諄々口諭して往て其里閭に告げしめたり。民事に因て庭に至り。或は行て道に遇ふ者あれば必ず問ひぬ、某時命ㇾ某告ニ其事一聞否と、聞けば即

ち已み。否らざる時は則ち其命を受る者を罪しぬ。故に一言の出づる愚夫孺子と雖も預り聞かざるなかりき。渭に在りし時渭の帥蔡公子正特に尊禮せられしは、張子が夙夜從事して之を贊助せしが爲なりき。塞に並ぶの民常に食に乏しきを苦めり。張子府に言て軍儲數十萬を以て之を救ひぬ。神宗位を嗣ぐの初め召して治道を問ひし時、三代を漸復するを以て對を爲したり。神宗說んで大に之を用ゐんと欲したれど執政と合はずして告歸したり。張子人を治むる先務を論ずるに當り、未だ始より經界を以て急となさざりしはあらず。嘗て曰へらく、仁政必自經界始、貧富不均、教養無法、雖欲言治皆苟而已、世之病難行者未始不以亟奪富人之田為辭、然法之行悅之者衆、苟處之有術、期以數年不刑一人而可復、所病者特上未之行爾と。而て縱ひ此法を天下に行ふ事能はざるも、張子は猶ほ之を一鄕に驗し、方に學者と古の法を議し、共に田一方を買ひ、劃して數井となし、上み公家の賦役を失はず、退て其私を以て經界を正し、宅里を分ち、斂法を立て、儲蓄を廣め、學校を興し、禮俗を成し、菑を救ひ、患を恤み、本を敦し、末を抑へ以て先王の遺法を推して當時に行ふべきを明にせんとしたり。然れども其志未だ就らずして沒しぬ。當時冠婚喪祭法なく、節序燕褻して嚴ならざりき。張子之を正さんと欲したりしが會期功の喪に遭ひたるを以て始て喪服を治し、輕重禮に從ひ、家祭始めて四時の薦を行ひ、曲に誠潔を盡したり。聞く者始は或は疑ひ笑ひしと雖も、終には乃ち信して之に從ひ一變して古に從ふ者甚衆かりき。

張子の家庭を始むる亦見るべきものあり。其家の童子は必ず洒掃應對して長者に給侍せしめ、驕惰を警め、凶狠の病根を未發に去り、女子の未だ嫁せざる者は必ず祭祀を親らし、酒醬を納れしめ、孫弟を養ひ以て成德を就さしめんとしたり。嘗て曰へり、事親奉祭豈可使人為之と。張子人の善を聞ては喜ぶ事甚しと雖も、亦人の悲を聞ては憂顏色に顯はれたり。歲適大に歉らざる事ありて、人相食むに至りし時、家人米の鑿

けざりしを悪んで、將に之を呑んとせしに、張子亟之を止て、飢殍滿レ野、雖二蔬食一且自愧、又安忍レ有レ擇乎と曰ひたり。時に甚だ咨嗟して案に對して食せざりしもの數四なりき。

張子は氣質剛毅にして、德盛に、貌嚴なりき。然れども人と居ること久しければ、其親しむ事日に厚きに至れり。家を治め、物に接する大要己を盡すに厚くして、人を咎むるに薄く、人未だ己を信ぜざれば、躬に反し、自ら治めて以て人に語らず、未だ諭らざる有りと雖も安じ行て悔ることなかりき。故に識ると識らざるとを問はず風を聞て張子を畏れたり。張子沒するの日嚢中索然たり。門人の長安に在る者來奔し、哭して賻襚を致して、始めて之を葬むるを得たり。

張子の性行大畧斯の如し。此性行を有する人にあらずんば焉んぞ西銘の言を發するを得んや。乞ふ是より西銘の言思を考へん。

西銘の大指は人は全く天地より生せられたるものなるが故に人の天地に事ふる當に子の父母に事ふるが如くすべしと云ふにあり。其言に曰く、

乾稱レ父坤稱レ母、予茲藐焉、乃混然中處。

張子固有の哲學に於ては、太虛を以て宇宙の大元としたるなり。太虛は渾淪磅礴思議す可らざるものと雖も、此太虛より氣を生じ、此氣則動靜の機、陰陽剛柔の始となり、陰陽感遇聚散して、天地萬物を分化するに至ては、其の跡歷然として見るべし。氣と云へば無意無心の物質の如く思はるゝの嫌なきにあらざれど、張子は物にして心、心にして物なるものを氣と名けたるなり。而て若し天地一切同一元より出でたりとすれば、吾が資て以て體とする所は亦天地兩間に塞がるの氣ならざる可らず。吾が得て以て己の性とする所は亦天地健順の性ならさる可らず。故に曰く、

天地之塞吾其體、天地之帥吾其性。

是れ孟子が萬物皆備二於我一と曰ひ、或は程子が一身之內百理具備、背在レ上故爲レ陽、胸在レ下故爲レ陰、至レ如二男女之生一已有二此象一、天有二五行一人有二五臟一心火也、著豈天地間熱氣、乘レ之則便須レ發レ燥、肝木也、著豈天地間

凪氣、乘レ之則便須レ發レ怒、推レ之五臟皆然、孟子將ニ四端ニ便爲四體、仁便是箇木氣象、惻隱之心便是箇生レ物春底氣象、羞惡心便是秋底之氣象、推レ之四端皆然と、敷衍して人を一小天地と見、天地の運行と吾が心身の運行とを同一視したると其意を同ふするものなれど、張子は稍もすれば一歩を進めて吾體性即天地之體性と考へんとするの傾向を有し居たり。而して張子が天地萬物は皆多少の情を有し、人間と相感應して復び其父母たる太虚に歸沒せんと望むと考へたるや否やは余未だ之を明にする能はずと雖も張子は明に天地を父母と感ぜしが故に、己と同生の人類及事物を以て同胞なり、黨與なりと觀じ、之れに對して同情同感なき能はずとしたり。曰く、

民吾同胞、物吾與也、

物を與と呼ひて人と區別したるは人は陰陽の氣の正なるものを得、天地體性の全に通ずれど、物は則ち否らず陰陽の氣の偏を得て、天地體性の全に通ずる事能はず人の貴に勝かざる所あるを以てなり。而かも其本源を尋ぬれば同一の天地より出てたるものなれば、張子は之を視る事己が儕輩の如くしたるにあり是に於てか慈悲の心は一切の事物に及び、天地に參し其化育を贊するに至る。而て張子か人類に對せし所を見るに惣へての人を以て皆同等なりとせしに非ず本は一なれど、其本の顯はるゝに及んでは自ら差等なき能はず、從つて之に對する心も殊別ならざるを得ずとしたり。則ち天地に繼承し人物を統理する大君は是れ天地の宗子なり。大君を輔佐し衆事を綱紀する大臣は天地の家相なり。聖者は兄弟中の天地と德を合するものなり。賢者は才德常人に過きて兄弟中等夷を拔する者なり。惣して是等は同胞中の秀なりと雖も亦一方には高年孤弱の憐むべきものあり。是等に對しては天下の老幼一なるの理を悟て吾が老を老とし、吾が幼を幼とするが如くせざる可らず。殊に天下の疲癃、殘疾、惸獨は皆吾が兄弟の顚連にして無告の者なるを思はざる可らずと考へたり。

右擧けたる所は吾が體性の自て來る所を明にし、人は

天地の子なる事を述べ、天下を以て一家と爲したるなり。抑人は既知より未知を推すを常とするものなるが、事物發生に就て人の最も明に知る所は夫婦相和して一家を生ずるの事なり。古來東西哲學者宗敎者の多くが天地發生を人事に擬し、陰陽相和して天地萬物を生ずとしたるが如きも、皆是れ卑近明白の事より推して、秘奥玄妙の理に及ひたるにあらざるなし。易に天地絪縕、萬物化醇、男女搆レ精、萬物化生と曰ひ。又周子の言に無極之眞、二五之精妙合而凝、乾道成レ男、坤道成レ女、二氣交感化ニ生萬物一、萬物生々而變化無レ窮、とあるが如きも皆是れなり。張子が天人相互の關係及人物相互の關係を説かんとするに當て、亦一家親子兄弟の事に擬したるは等しく是れ吾人の日常經驗する曉り易き道理を擴めて、遠く天地に及ぼしたるものなり。而て張子獨特の妙は啻に人類的解釋をなせしのみならず天地に對し一種の熱情を有し居たる事なり。此熱情は張子をして眞實に天地を人化して感せしめたるが故に、直に又張子をして天地に對して人道を實行せんとするに至らしめたり。何をか人道と云ふ。案するに支那古來の道德は其發達の模樣大に西洋と趣を異にするものありて、家族の首長たる父母を以て道德の中心とし、從て孝を以て百行萬善の源としたり。之を古典に鑑みて其然るを證せんか。孔子曰く、先王有ニ至德要道一以順ニ天下一、民用和睦上下無レ怨、又曰く、夫孝德之本也、敎之所ニ由生一也、子思曰く、君子不レ出レ家而成ニ敎於國一、孝者所ニ以事レ君也、弟者所ニ以事レ長也、慈者所ニ以使レ衆也、斯の如く古來儒敎に在ては道德は皆孝より出づるとし、弟と云ひ慈と云ひ畢竟孝より推移し來りたるに過ぎずとしたり。有子が君子務レ本、本立而道生、孝弟也、其爲レ仁之本與と曰ひ、孟子が堯舜之道孝弟而已矣と曰ひたるが如き皆孝を以て學の本領としたるなり。而して猶ほ之を詳にせんと欲せば孔子の言を聞かざる可らず。曰く身躰髮膚受ニ之父母一不ニ敢毀傷一孝之始也と是れ身を保を以て孝中の事としたるなり。又曰く立レ身行レ道揚ニ名于後世一以顯ニ父母一孝之終也と是れ道を行ふも亦孝中の事としたるなり。又曰く德敎加ニ于百姓一刑ニ于

四海ニ盖天子之孝也と是れ德敎を人民に及ぼすを以て亦孝中の事としたるなり。又曰く能保ニ社稷一而和ニ其民人ニ盖諸侯之孝也と是れ國を保ち、百姓を安んずるを以て亦孝中の事としたるなり。又曰く言滿ニ天下ニ無ニ口過一行滿ニ天下ニ無ニ怨惡ニと是れ言行皆道を得るも亦孝中の事としたるなり。又曰く以ニ孝事一君則忠と是れ亦忠を以て孝中の事としたるなり。又曰く謹ニ身節一用此庶人之孝也と是れ謹節も亦孝中の事としたるなり。又孔子は吾志在ニ春秋一行在ニ孝經ニと曰ひたり。要するに支那先王の道に在ては孝より大なるはなく、仲尼の敎に在ては孝より先なるはなかりき。博愛や德義や敬讓や禮樂や好惡や皆之を孝の一德に歸し。災害生せず、禍亂作らざるも亦總て孝の一德に歸し。亂や爭や總て之を不孝に歸し、不孝の罪を五刑の上に置き、之を以て大亂の張本となしたり。故に後世の人主書を讀まされば則ち已む、苟も書を讀む者は必ず孝經より始めたるなり。縱ひ朱熹氏の考へし如く孝經を以て後人の擬作なりとするも、古の明王聖帝より孔孟の一流に至るまで孝を以て德の至、道の要としたる事は疑ふ可らざるの事實なり。且つ支那社會の構造及一家の組織なるものは固と孔孟の敎により成立せられたりとすれば、孝は實に支那人心に深く其根底を有するの思想とせざる可らず。夫れ天は至高至大なり。是に事ふるの道も亦至高至大ならざる可らず。而て支那人の知る所の至高至大の道は孝に外ならず。張子が人に對する底の道を移して直に天に事ふる底の道としたるは、其旨深しと謂つ可し。而て張子の卓見とも稱すべきは、從來人類間にのみ行はれ居たる道を擴めて上は天に及び、下は禽獸草木瓦石にまで達せしめたるにあり。換言すれば張子は孝道の行はるゝ範圍は天地と其廣さを同ふするとしたるなり。尤も孔子の言にも夫孝者天之經也。地之義也。民之行也。とあり。又曾子も孝の高大なるを形容して、孝置ニ之而塞ニ乎天地一溥ニ之而横ニ乎四海一施ニ諸後世一而無ニ朝夕一推而放ニ諸東海一而準、推而放ニ諸西海一而準、推而放ニ諸南海一而準、推而放ニ諸北海一準、と陳べ、孝は一切天地人物間に普く行はるゝが如く言はざりし

にあらずと雖も、孔子曾子は重に人倫の崇とする所を示したるにて、天地に對しての教を主とせざりしなり。張子が人間日用の域を超え、天を父母の如く考がへ、之に對する亦孝を以てせざる可からずとし、對天孝の一義より凡ての人物に對する倫道を演繹し來りたるは古代の儒教に稍一變動を與へたるものとせざるを得ず。而て張子が日常彝倫に重を置きしにも拘はらず、かゝる高遠の處に倫道の根底を求むるに至りしは、蓋し曾て一旦老佛の道に出入したるに因らずんばあらず。張子縱ひ異學を棄てたりと思惟するも、豈遽に累年盡究したる深遠幽邃の境を全然脱離するを得んや。則ち再び六經に反るに及んで、遂に六經の所説と釋老の所説とを融合するに至りしなり。張子の學問は六經に胚胎し、釋老に養はれたりと謂て可なり。西銘の言、其皮相よりすれば人道を説きたるものにて、古學と大差なし。然れども其奥を窺へば、便ち是れ全然天に事る底の樣子を述べたるものにて、頗る宗教的の香味を帶ふる所あり。而て張子の思想は又唯心哲學的なる所あり、大ニ其心一則能體ニ天下之物一、物有レ未レ體、則心爲レ有レ外、世人之心止ニ於聞見之狹一、聖人盡レ性不下以ニ見聞一梏中其心上、其視ニ天下一無ニ一物非一レ我、と曰ひしを見れば、人は天地の心、心は天地を裹むと云へるが如く觀じたるにはあらざるかと思はるゝ所あり。然れど張子は西銘に於ては然かく想像を恣にするを敢てせざりしなり。

以上擧げたる所は西銘の統論なり。西銘の後段に於ては天に對する細目を實例に托して敍述し、天に對する須く人に對するが如くすべしとするのみならず、人道を完うするは即はち天道を完うする所以なりとしたり。而て張子の説が古來の儒教と趣を異にする所は、五倫五常其の因て出づる根源を思量するにあらずんば、之れが意義を解する能はずとする所にあり。然れども張子は徒らに幽暝を觀取し、一箇恬靜廉介の人となるを以て足れりとせず、寧ろ人間社會に勞働し斯民を救ふを以て己れの本分と思惟したり。故に張子の意に在ては、人物を離れて未た曾て天地なく、天道を離れて

未だ曾て人道あらざりしなり。是れ張子の說が異學と同せざる所なり。張子の所見斯の如くなるを以て彼れ天に事る功夫を說くに當てや、止に宏大空漠に流れざりしのみならず、實地により敬畏恐懼憐憫を致へ用意極めて愷切なるものありき。其言に曰く、

于時保レ之子之翼也。樂而不レ憂、純ニ乎孝一者也。

是れ夙夜に天の降監する所以の意を奉じ、之を樂んで憂へざる天の孝子たる狀態を示したるものにて、周頌に我其夙夜畏ニ天之威一、于時保レ之。とあり又繫辭に樂レ天知レ命、故不レ憂とあるに契合するものと謂つべし。又右に對し天の不孝子の狀態を示して曰く、

違曰ニ悖德一、害レ仁曰レ賊、濟レ惡者曰ニ不才一、

天理に循はずして人欲に徇ふは、是れ天を愛せざるものにて、天の悖德の子なり、天理を戕滅して、其所生の本根を絕つ者は、是れ天を逆殺するものにて天の賊子なり。惡を長して悛めず、世々其凶德を成す者は、是れ天の不才の子なり。抑天の我に予ふるに是形を以てするものは、又是道を行はしめんが爲なり。然るを是形有りて、是道を盡す能はずは、是れ是形に從はざるものにて、天に相似ざる者と云ふべし。人は是形を具へて、而かも能く是道を盡す天の克肖の子となり、天地の心を窮めて善く其志を繼き、天地の用を知て善く其事を述ぶる者となる事、猶ほ孝子の父母に於けるがごとくならざる可らず。曰く、

知レ化則善述ニ其事一、窮レ神則善繼ニ其志一。

張子が知レ性知レ天則陰陽鬼神皆吾分內と曰ひしも亦此意か。然らば如何にして性を知り、神を窮むるを得るか。張子は之に對して明白なる解答を與へざりしが如しと雖も、張子が平生工夫したる所より考へ來れば、周子の言ひし所と大同小異なるべし。曰く觀ニ天地生レ物氣象一、又曰く無レ不レ通、生ニ於通レ微、通レ微生レ於レ思、故思者聖功之本、而吉凶之機也、易曰君子見レ幾而作：：：知レ幾其神乎、と是外靜に天地を觀じ、內深く性を見すれば自ら天地の心と、其進退消長盈虛するの用とを知るを得て、天地の化育を助くるを得るとしたるなり。周張程朱は凡て善く思ふて性を見するを以て天を

知るの道としたり。然れば性を養ひ心を存する事は道學者の爲めに極めて必要なりしなり。則ち張子は夙夜懈らず、心を存し、性を養ひ、屋漏に愧ぢざるを以て、能く天に事へ己の所生を忝かしめざるものとしたり。是れ孟子が存二其心一養二其性一所三以事二天也とせしと其意を同ふするものなり。

張子は既に天に事る全般の道を抽象的に說き了せり。而て倘ほ進んで史乘に徵して箇々具躰的の例を擧げ其所說を明にせんとしたり。其意に曰く飮酒を好んで父母の養を顧みざるは不孝の至なり。故に人欲を遏むる禹の旨酒を惡むが如くして以て天の養を顧みざる可らず。又德は天の賜にて我之を得て私すべきものにあらず。宜しく昔者潁考叔が其孝を施ひて莊公に及ぼしたる如くせさる可らず、張子が惡二旨酒一崇伯子之顧レ養と云ひしは孟子の以下博奕好二飮酒一不レ顧二父母之養一爲二五不孝之一一と其意を同ふするものなり。又育二英才一潁封人之錫レ類と云ひしは、孟子所謂得二天下英才一而敎二育之一三樂也と契合するものなり。伊尹が天之生二此民一也、使三先知覺二後知一、使三先覺覺二後覺一也、予天民之先覺者也、予將以二斯道一覺二斯民一也、非二予覺一之而誰也と云ひし如きも、亦同一轍の思念より出でたるものにして彼是相參照して聖賢の覺悟の存せし所を明にするを得るなり。

倘ほ進んで張子の意に曰く舜は親に事るの道を盡して嘗て其勞を厭はず遂に瞽瞍をして豫を底さしめたるは其功大なりと謂つべし。舜は親に事るの道を盡すと共に天に事るの道を盡し、天心を豫ばしたるものなり。人は皆宜しく天の舜とならざる可らずと。張子が不レ弛レ勞而底レ豫舜其功也と曰ひしは孟子の舜盡二事レ親之道一瞽瞍底レ豫、天下之爲二父子一者定。此之謂二大孝一との語に據りしものなり。又張子の意に曰く人は逃る所なきに及んで倘ほ能く天命を信じ、鼎鑊の苦も且つ避けずして、其節操を全ふして始めて天を敬すと謂ふを得可し。昔者申生が烹らるゝ事を待ちしは恭の至なり。父母全うして子を生む、子全うして之を歸す。曾子の如きは純孝の人と謂つべし。况んや天の我に與ふる所

一善の備はらずと云ふ事なし。故に天に事る者は能く其天に受る所の者を體し、之を歸すに其全を以てし、以て天の曾子たらざる可らず。又子の父母に於ける東西南北唯た令のまゝに之れ從ふ。伯奇の如き則ち是なり。况んや子の我に命ずる所、吉凶禍福人欲の私有るにあらず、天の公平申生伯奇の父の妄なると、日を同ふして語るべきものに非ず。故に天に事る者は能く從ふに勇んで令に順ならざる可らずと。

終に張子は富貴に處するの道を教へて曰ひき、

富貴福澤將ㇾ厚ニ吾之生一也。貧賤憂戚庸玉ニ女於成一也

天の富貴を我に與ふるは我をして善を爲さしむる所以なり。貧賤憂戚は我に拂亂すれど、我をして志を爲さしめんとする者なり。天地の人に於けるは父母の子に於けると一般にして甚た恩惠に厚きものあり。然るを小人は我意を主として天心を知らず、故に富貴の時は天に慢り、貧賤の時は天を怨む、君子は己の私を去り、天の公に就て吉凶を見る、故に周公の富を以ても驕るに至らず、顔子の貧を以ても其樂を改めず。其狀は猶ほ孝子の親に事るや、愛せらるゝ時は則ち喜んで忘れず、惡まるゝ時は則ち懼て怨むる事無きがごとし。止に患難に當り天を怨まざるのみならず、賢者は却て患難を天の賜とし、己が心志を苦め、己が筋骨を勞し、己が體膚を餓やし、己が身を空乏し、行己が爲す所に拂亂するを以て、却て心を竦動し、性を堅忍する所以とし、之に由て天の將に大任を己に降さんとする事を信じ、喜んで天の命に順ふに至る。孟子曰く莫ㇾ非ㇾ命也、順受ニ其正一と、是れ之を謂ふなり。其覺悟斯の如くなりて人は始めて天の孝子となるを得へし。且つ子の存するや親に事へて、其志に違はされば、沒する時は則ち安くして親に愧る所なし。人の世に存する亦然り。其唯一の務は天に事へて其意に逆はざるにあり。其一生長敬恭謙以て天に順へば、沒する時は則ち安くして天に愧る所なし。一時も正を得て斃れんとするは是れ仁人の心なり。斯の如きを善く始終を全うする天の孝子と謂ふ。張子が西銘の言を結ぶに、

存吾順事、沒吾寧也、

との一節を以てしたるは、其意極めて深長なりと云はざる可らず。張子は西銘の首に人の天より出づる模樣を描き、西銘の尾に人の復び天に歸る模樣を描き、其中間に仁人一生の綱領を說きたり。君子の人にあらずんば其言思の醇なる夫れ安んぞ斯の如くなるを得んや。而て張子が死生渝らざるの心を保ち、縱容道に從ひ、苦心力索の裏に在り乍ら其言行に於て綽々餘裕ありしは、彼が純理哲學の上より塵想を脫逸して大悟したるありしに因らずんばあらず。正蒙大和篇に曰く、

天地之氣雖ニ聚散攻取百塗一、然其爲レ理也順而不妄、氣之爲レ物散入無レ形、適得ニ吾體一、聚爲ニ有象一、不レ失ニ吾常一、太虛不レ能レ無レ氣、氣不レ能レ不ニ聚而爲ニ萬物一、萬物不レ能レ不ニ散而爲ニ太虛一、循是出入、是皆不レ得レ已而然也、然則聖人盡ニ道其間一、兼體而不レ累者存レ神其至矣、

又曰く

盡レ性然後知、生無ニ所得一、則死無ニ所喪一、

太虛の氣聚て人物をなし、此氣散すれば人块然太虛に復歸す、故に生別に得る所なく、死別に喪ふ所なし、一切は不增不減なり。其生死聚散の間にありて人物の分とする所は、只太虛の動靜に順て運行するにあり。是れ張子が哲學上の所見なり。西銘に於て表出せる張子の事天底の道德思想は又此哲學思想より遷化し來りたるものあり。抽象的の道理を說くに具躰的の事物を以てし、乾坤を父母とし、人物を兒子とし、兩者の間に行はるゝ道を孝としたるなり。抑も程朱は智底の眼孔を以て天地を觀じたるが故に重を理に置きたれど、張子は之に加ふるに實際情底の眼孔を以てしたるが故に、正蒙に於て理底に觀する所のものを、西銘に於ては人底のものと感じたるなり。若し夫れ乾坤を人底のものと觀じ、父母に擬し熱心に之に事ふるに至ては知らず識らず宗敎の境界に沒せざるを得ざるなり。張子が濂洛關陝の學者中に在て、一種の特色を表出せしは蓋し是が爲ならん。余は張子を以て天を敬畏し愛慕したる一種の宗敎家と稱するを躊躇せざるなり。儒敎に

宗教の種子なきが如く考ふる者多しと雖も、是れ程朱一派の眼孔を以て儒教を見るが故なり。孔孟以前三代虞唐の世に溯りて、儒教の淵源より觀じ來れば、荒誕迷妄は措て問はず、天を敬畏し、上帝に使事する純乎たる宗教的思想は至る所に散在せざるなし。程朱等天を唯理なりと云ふ、若し之を自家の見なりとすれば可なり、然れども古聖も亦唯理を指して天と名けしとせんか、僻見の甚しきものなり。古聖所謂天と程朱所謂理とは決して同一のものに非ず。張子が正蒙に於て述ぶる所は程朱等の謂ふ所と稍相近きものあり。然れども西銘に於て謂ふ所は寧ろ古學の謂ふ所と相近しと謂はざる可らず。蓋し張子の言思は、宋學と古學と融合せられて生せしものならん。宋代の碩學張子を評するもの一にして足らず。程子は之を評して、孟子以後不レ有ニ人及一レ此と云ひ、朱子は訂頑(西銘)之訓示ニ我廣居一と云ひ、游氏は之を以て此中庸之理也と云ひ、雙峯饒氏は西銘一書規模宏大、而修理精密と云ひたり。其他張南軒、揚龜山、臨川呉氏の徒之を賞嘖して至らさるなし。是れ西銘が支那學問の粹を發表したるを證するものなり。要するに西銘は張子の學の醇なり。張子の一生の粹なり。張子の學と其一生とは一點に聚り凝て金玉の言語となりしなり。學問の功夫に於て、性行の公明なるに於て張子は深く貴重すべきの人なり。

釋迦牟尼佛略傳批評（承前）

佐治實然

前號に掲けし所は釋迦牟尼佛の略傳に就て其唯端緒を示せるのみなりしか、今や正に佛陀の本傳に入る、進て節一節を讀むに、吾人をして轉た半は黑雲に蔽はれたる滿月を觀るの感あらしむ。而して半輪の清光、尙且冷露を玉の如く看取せしむるの概あり。然るに本傳の如きは明に偏僻なる佛學者の迷想を合糅したる者なれは、釋迦其人の行履を充分に得て現はさゝるは勿論なりと雖も、又一讀の勞必すしも徒然ならさるを保證せむ。請ふらくは讀者仔細に看よ。

摩耶夫人悉達を生み七日にして殂す姨母波提夫人代

りて之を育ふ悉達幼にして大人の相を具へ無師智自然智を備ふ且其資性沈欝にして夙に隠遁の志あり八歳にして佉樓蓮華の六十四書に達し十二歳にして筋力あり能く强弩を射る其他百般の技藝に至るまて通曉せさるものなし

評曰、本節の如きは偉人英雄等の行實を紙上に叙するに當りて必す缺く可らさる文句なり。恰も吾人か常に他の稚兒を見る毎に、直に「可憐」の一語を發すると同一の筆法なるゆへに、讀者に對して格段なる趣味を與ふるの力なき者と云ふへし、唯無師智自然智に就ては、少なくも四五十年前に出版せられたる冊子の解釋は、今已に聞き厭きたれは、現今の敎育を受けたる佛學者に依りて嶄新なる解釋を聞かまく欲する而已。且又資性沈欝の四文字は、一篇の系脈讀者必す着眼すへきの處。

始め悉達生れし時卜者あり占して出家成佛の相有りと爲す父王其或は大位を繼くに至らすして山林に遁逃せんとを慮り百方之を止むるの計畫を爲す

悉達歳十五初めて立太子の禮を行ふ十六歳にして耶輸陀羅妃を娶り尋て塵王瞿夷の二夫人を納る父王太子の爲に屢々園囿宮殿を興し數多の釆女を集め珠を聯ね錦を翻して日夜絃歌酒肉の樂を盡さしめ以て之か志を沮めんとす然れとも太子終に之を悦はす却て益々欲塵を捨んと欲す

評曰、本節の如きは敢て批評を下すへき點あるを見す。但し園囿宮殿絃歌酒肉の娯樂を以て、人生に於る最要最大の快境なりと誤認するは、輿臺皂丁の朋黨なるのみ。例へは龍驥を覊するに朽繩を以てせむとす、誰か其愚を嗤はさらむや。父王徒らに犬馬の愛に流れ、其子の品性を鑒識するの明を缺けり惜むへき哉。

太子十九歳の時一日園林を遊觀せんとして王城の東門に出つ偶々老人あり頭白く背傴り杖を柱へて羸歩す太子之を觀て嘆して曰く日往き月來り老の至ると電の如し此身安んそ恃むに足らん我れ富貴なりと雖も豈獨り免れんや世人何そ怖畏を生せさるやと遂に園に至らすして宮に還る他日復南門に出て病人を見

西門に出て死人を見る太子嗟嘆すると前の如く悄然として宮に還る後に北門に出てゝ比丘を見る太子問ふ汝は是れ何人そ答て曰く我は是れ比丘なり又問比丘とは何そ答て曰く世間の無常を観して能く結賊を破り永く無爲を得て解脱の岸に到る之を比丘と云ふと太子其甚宿懐に合ふを喜ひ言く我決定して是道を修せんと又宮に還れり

評曰、資性沈欝の萌芽此に至りて漸く露る。他日樹下成道の本旨は、今日悄然たるの心緒をして、安然に歸せしむるの方法を發見するに外ならす。而して他年此萌芽の生長するに當りてや、直幹空を凌き、天を摩す。其繁茂するや。樹蔭廣く亞細亞を掩ふ。其洞源は、實に四門經行の動機に在りと云ふへし。但し無師智自然智を得たる太子にして、北門比丘の問答を爲せし理由を發見するに苦しむ。予常に思ふ信を古典に托する者は、往々斯る前後矛盾の記事を排列して却て自ら其會通に窮するは、古今同般の通弊なりと。

此時侍士憂陀夷太子に告て曰く人の世に在るや宜しく人の行に順ふへし國を捐てゝ道を學ふは恐らくは人の道に非らん願くは五欲の樂を受けよ太子答へて曰く我豈徒らに國を捐るものならんや亦五欲の樂無きにあらす但た生老病死の四苦を畏るゝと切なるを以てなりと

評曰、本節の問答は其卑陋なると聞くに堪へす、其凡庸なると觀るに足らす。然れとも人情より云へは則ち人情なり、此を翻案して稗史小説の間に置くも亦可ならむなり。唯箇の審美審善なるもの果して焉にか在る。

玆に於て太子出家の志愈ゝ切なり即ち父王に見え請ふて曰く恩愛の集會せる者は必す別離するとあるへし願くは我をして道を學はしめよ一切衆生と同しく解脱せんと欲す唯願くは我をして出家せしめよと父王許さす太子則ち復請ふて曰くまさに四願を得んと要す一に曰く不老二に曰く無病三に曰く不死四に曰く不別父王若し此四願を我に與へは敢て出家せすと淨飯王之を聞きて益ゝ憂ひ命して東宮の四門に衛卒

を置き之を警しむると甚た嚴なり

評曰、人の子となりて親の許さゝる所を爲さむと欲す、蓋し孝と謂ふへき乎。世の中の親こゝろは强ち闇にあらさるへし。然れとも子を思ふの餘、正道に踏み迷へる事實は古今東西其例少なからす。予は本節を讀みて淨飯王の心事を察し、端無く同情を表せむとす。而して太子の復請する所は、人子の本分として內省疚しからさるか。四願を以て父王に要求するは太子の盛德を累すに足らさるか。嗚呼區々たる孝道を重むする者は、千古の佛業の成就する者と孰れか優る。且夫れ偉丈夫たる者必すしも細節に拘はらされは、往々倫理の標準と爲す可らさるものありといふときは、予は唯ゝ口を緘して止まむのみ。

太子一夕慨然決する所あり夜半將に城を出てんとする時に耶輸陀羅妃異夢を感す曰く月地に墜つ曰く牙齒皆落つ曰く右臂を失ふと駭き覺て太子に告く太子慰て曰く月尙ほ天に在り汝か牙齒及ひ右臂も亦儼然として存す夢必す虛なり敢て愁ふると勿れと其復眠るを覗ひ窃に愛馬犍陟に御し計を以て宮中を遁れ出づ唯車匿なるもの從へり

評曰、夢必す虛なり、敢て愁ふる勿れと。實に然り、雖然、太子か嚮に侍士に對する頗る慇懃にして、今父王及ひ正妃に對する語を見るに、瞼邊一點の淚痕を留めさるか如し。人也者は宜く斯くあるへき乎、曰く否か。

太子王城を出てゝ顧みて曰く我若し生老病死の苦を斷せされは誓て宮に還らす我若し無上道を得て法輪を轉すると能はされは再ひ父王に見えす我れ若し恩愛の情を盡さゝれは還りて波提夫人及ひ耶輸陀羅妃を見すと言ひ訖りて馬に鞭ち馳せて雪山の麓に達す時に二月八日の天明なり

評曰、泰西の學者常に論して曰く、佛敎に所謂 Nirvana(涅槃)なる語は、Annihilation(滅盡)の意味に外らすと。又論して曰くAnnihilation(滅盡)は、本來生物の性情に反せり、必すやA peace and bliss(安樂と福德)意味ならむとは予は此二者の解釋孰れか佛陀の本旨に

的中するや、茲に論斷するの必要を觀す。然れとも單に本節を讀む者は、一般に後來佛陀の唱導する涅槃は、前者の解釋に的當するものなりといはむか。予も亦然か云はさるを得す。雖然、支那本邦に流傳する所の大乘佛敎に依りて涅槃の語意を考ふるときは、後者の解釋を以て的中する者と定むるを可とす故に知る、諸宗敎の敎理の變遷は恰も無血虫の變形と一般、蠢爾たる蛆虫も、翩々たる胡蝶となるか如きは、敢て怪むに足らさるとを。

(未完)

吾黨の覺悟

土谷忠治

事業とは困難を意味するものなり、最も大なる事業は最も大なる困難を意味し、或る意味に於いて更に大なる困難は更に大なる事業を含畜するなり。正成の烈忠は如何、秀吉の英名は如何、赤穗義士の義士たる所は如何、ワシントン、ナポレヲン、フランクリン、リンコルンの行蹟は如何に困難を意味するぞ!、更に上つては釋伽の困難は如何、莊嚴榮華の宮殿玉樓を棄て、一天萬乘の王冠を擲つて殆と人界を脫す、其の困難決して常人の忍ぶ可からざる所、況んや難行苦行死に頻するに於いてをや、又更に上つては基督は如何に、常人の最も忍ぶ可からざる所は死より太甚だしきはあらざる可し、而して彼れは遂に死を見ると鴻毛より猶ほ輕きにあらざりしか。古來聖賢勇士――眞の神子たる本分を盡せる人士に就いて觀じ來れば又以て吾人が言を證するに足る可き也。以是乎吾人は事業は困難を意味すとこそは唱ふなれ。然れども困難直に事業なりと呼號する者に非ず、將た困難せんが爲めに動作すと云ふ者に非ず、事業には困難の伴ふものなるを意味するなり、則ち動作せんが爲めに困難に遭遇すと稱ふるなり。基督の基督たる所は誠に十字架上に在り、釋伽の釋伽たる所は確に難行苦行に在り。困難は實に吾人の良師なり。困難を離れたる事業は決して成功の滿足を覓む可からず。是の故に吾人は或る意味(即ち正當なる)に於いて困難を歡迎する者なり、否吾人は歡迎す

るを肯てせずと雖ども、吾人が企劃の遠大なる所、自然は更に之れに相應せる困難を降すことを止まざるなり。吾人が拒んで受けざらんと欲するも、吾人が事業を企劃せんと欲求する間は決して能はざるなり、酔生夢死爲す無きの人間たらざる間は、活物たる間は、呼吸の絶えざる間は、決して免かる可からざる必然の結果なり。かるがゆへに寧ろ進んで之れを歡迎し、優待するの勇氣あるに如かざるなり。吾人が此の活社會の巖頭に立つて狂瀾を犯し波濤を蹴て彼岸に達せんと欲せば、寧ろ人間たらんと欲せば、神子たらんと干めば或る意味に於いて好んで困難を迎へざる可らず。世は以て如何なることか困難と觀ずる、黄白を棄て、利欲を去り、我譲を擲ち、名利を離るゝ等敢へて易しとなさず、況んや理想界に逍遥し、天國に上り、世界的宗敎問題を提出し、合理的信仰を建設し、自由の大思想を宗敎界に注射せんと企つる吾が黨自由派の事業に於いてをや。敢へて其任輕しと爲さゞるなり、其の辛苦堪ゆ可しと爲さゞるなり。然れとも基督を想へ、釋伽を攷へ、其の他聖賢の事蹟を顧みよ、如何に吾人を打撃する乎、如何に吾人を感激せしむる乎、如何に吾人を慰諭せしむる乎。唯信ぜよ、唯滿足せよ、唯祈れよ、爾の信仰は爾を安全ならしめ、爾の滿足は爾を困難より救ひ出し、爾の祈禱は爾を天國に導くに非ずや。

吾人の身命は既に天に捧げたるものに非ずや。故に吾人は天命に從はん爲めには其の身命を犠牲に供するも惜しむ所に非ず。吾人は唯天に逆ひ心に反して身命を傷めんことを恐るゝなり、換言せば終生虚々囁嚅として爲す無きの鄙夫たらんを懼るゝ也。

世の困難何のその、世論の喧囂吾人に於いて何かあらん、靈神界に遊び正善純愛の域に達せん爲めには。天國は吾人を迎へて席を備へ、基督は吾人を介して神前に跪坐せしむ。唯信ぜよ、唯祈れよ、唯安ぜよ、信仰祈禱滿足の門には幸福來るなり。

虎穴に入らずんば其の子を獲べからず、苦痛を經ざれば事業を捕捉すべからず。吾人が今や一旗色を飜し陣頭に宣戰する者、困難辛苦の吾人を焦心毀顔せしむる

は豫め覺らざる可からず。若し吾人にして無爲的政策に出てん乎、都合主義を取らんか、將た守舊政略に出てん乎、是より易きは非ざる可し。隨つて困難辛苦は遂に見舞はざらん。然れども此の見舞はざるは其の死せるなり、眠れるなり。數十年前佛者は如何に困難と離隔せるぞ、其の結果は如何、幾多の死僧眠侶を出せるぞ。賴朝霸業の衰滅は、平家の滅亡は、德川幕府の破倒は如何に、自然の趨勢然らしむる所なりと雖とも又彼れ等が次第に困難と離隔して太平に眠れる所以に非ざる乎。花の滿開は凋落を意味し、松柏の霜雪は春陽を意味す。

然れども困難は每に案外の邊より來る、今にして小心翼々誠心せざる可からず。吾人は純正基督教の弘通發揚を劃策する所のもの、所謂合理的信仰を宣言する所の者たり。或る者は曰く、信仰は條理を以て談ず可からずと、或るは曰く、信仰は條理以外に立つものなりと、或るは曰く言ふに言はれぬ個所ありて存す、これ信仰の起る所以なりと。これ劈頭第一に起る批難なりと雖とも、信仰果して不條理なる乎、信仰果して條理以外に立つ乎。眞理と信仰。これ矛盾乎、眞理を棄てゝ猶信仰に就く可きか、迷信固陋の時代は早くに過ぎ去れり、豈今日に其の聲を聞くとは想はざりき。然れども此批難迷信豈吾人を弱むるに足らんや。唯吾人を圍繞して而かも其の內部より起る兩端の困難こそ存するなれ、此の困難辛苦こそ吾人の最も畏れ誡しむ可きとにぞある。一は往々僞善に傾き、事物を冷淡に觀過せんと是れなり、以て或者が言ふに言はれぬ個所ありと云ひ、條理以外に立たざる可からずと云ふ所以乎。一は往々執拗に失し、事物を片目的に觀察する是れなり、以て或る者が言ふ如く信仰と眞理とは矛盾する者なり、信仰と眞理とは全く別物なりと結斷する所以乎。

歷史は吾人に保守を敎へ、進化は吾人に急進を勸む。保守獨り眞理なるに非ず、急進豈處世の指針ならんや。或る時は進み或る時は顧みざる可からず、是れ最も吾人の困難とする所なり。

或る者は吾人の主義を消極的破壊的なりと批難す。然れども熟々惟へ、破壊は實に建設に伴ふ必然の出來事なり、片目的に破壊の點をのみ觀察して遂に其の建設の點に及ばざる者は何ぞや、吾人は實に破壊せり、建設せんが爲めに。吾人は眞理に就かんが爲めに否理悖道を沒却せるなり。請ふ少しく吾が動作に注視せよ、片目的に觀察する勿れ。

然れども吾人の事業は實に偉大なり、其の責務は誠に重し、其の偉大に其の重きだけそれだけ困難の偉大なるあり、重きあり。然れども唯信せよ、唯滿足せよ、唯祈れよ、神は吾人を棄てざるなり、神は仁惠なり、基督の十字架は如何に、神の榮光は彼れを闇道に導ける乎。此の覺悟ぞ肝要なれ。

雜錄

○神靈的生活

心の智惠 は頭の智惠に優れり、心の信仰と希望と愛情とは自然に能く未來の事物を決定して、純然たる智力の推論よりも遙かに善き結果を生ぜしむるなり。

常に喜べよ ソハ神は常に近く在して、其の補助は得られざることなければなり。喜べよ！ソハ希望を立つるは正しく且つ善きことにして、世に希望なきことは恰も是れ神なきに等しければなり。

眞理 は一として吾々の生活を進めんか爲めに、神より來れる所の詞ならざるはなし。吾々は只た新眞理を食ふて生活するものなり。吾々の精神は新思想を以て養はる可きものなり。

地球の能く充ち固まりて虚きものと見へざるは、是れ其岩あり山あるが爲めならずして、唯だ其中に『愛』あるが爲めなり。凡そ宇宙の中にて眞に充ち固まれるものは何ぞといはゞ、只々愛の一のみなる可し。

此世にて『害惡』と戰ふには、撓まず屈せず全力を奮ふて之に當らさるべからず。されど斯くするには只た信仰にのみ依賴して疑ふことなかるべく、只た希望にのみ依賴して懼るゝことなかるべし。盖し吾々か害惡と戰はんとする勇氣を出す前には、先つ之を制服し得べしとの希望を生ぜざる可からざるなり。

世人が『誤謬』を放棄するに至るまでには先つ一個の

偉人出で來りて其誤謬の中より眞理を甄別し、而して此眞理を純粹なる形式に組織せざる可らず。基督が爲せる所亦た是なり。氏は異敎及ひ猶太敎中の惣べての眞理を蒐集して、之を其福音中に開發したりしなり。吾人が斯程までに近視「眼」種族ならんとは、不思儀にもまた恐る可き哉。吾人は常に人間の眼を貴ふことく甚しきは何ぞや。

如斯く甚たしきに、吾人が神の眼を輕視すること如斯基督敎は抽象的信條に非ずして、只た思想を統紀せるものなり。哲學組織に非ずして、只た一大靈魂の身に及ほす所の勢力なり。

余輩は只た出來得る丈の進歩をして『滿足』せざる可らず。今日は余輩が爲し得る所のものを爲したるを喜び、明日は一層善き機會を得んことを待て。

請ふ神が『結合』したる所のものを、人をして分離せしむることを止めよ。何をか神の結合したるものとなす。曰く理性と宗敎、責任と自由、信仰と事業、科學的進歩と靈神的發育、及ひ神の愛と人の愛と是なり、

（い、は生漫譯）

○エマルソン氏の宗敎眼

大心靈（Cver—Sour）人は常に其の背後より話しかけらるゝも、頭をめぐらし、而して其の說者を見る能はざるなり……其の喨々たる音吐は、あらゆる語種を以て語り、あらゆる全世界の人類を指導して漏す所なしと雖とも、誰れも其が形躰、風彩を捕捉窺知せる者なし。人若し全く其の耳語を聽き、其の指導に服從し得ば、遂に彼れは其のものと不二合躰して、永く其の思想より分離距隔し能はざるなり。是に至りて彼れは其のものなるが如くに見へ、遂に復た其のものとなり了せん。彼れ若し飽かざるの聽耳を以て傾聽せば該博豊富なる智識は隨つて至り、彼れを敎導し、隨つて其の音吐は、嚠喨たる樂聲となりて耳底を感動せん。是に於いて洪水に漂はされしものゝ如く、恍として人界を逸脱し、衣食家屋は敢へて問ふ所に非ず、遙に慾界を距つて理想界を逍遙し、神聖なる生涯は彼れが頭上に落下せん。然り。然りと雖とも彼れの眼にして若し事物に惑溺し、吾人を指導する所の耳語を忽に觀過せば、其の語音次第に微らぎ、遂に復た指導を受く可からず、喧囂錯々たる無意の音響、僅に耳底に存する

のみ、大心靈遂に何處にか捕捉す可き。

日々吾人の身邊を圍繞して、起り來る出來事に就いて少しく考察を費せば、吾人が這般の出來事を處理するに當りて、吾人が意志の發作より、更に高倘なる規律の存して然ることを發明す可し。而して又吾人が日夜孳々勞苦するも、遂に無益の徒勞に過ぎずして、唯平易單純任意の行爲に於いてのみ、單り安康を得可きを見る可し。斯く敬虔以て自から足れりと安るずる者こそ、始めて其の神聖を企圖す可きなり。信仰と愛＝虔誠に此の信仰ある愛は、以て吾人半生の憂慮を除き却る可きなり。嗚呼吾が同胞のものよ、神は眞に存在せり。萬有の心中に一の心靈あり、更に各人の意志の上に脱逸して何人も此の宇宙を惡害し能はざる一心靈の存するなり。而して此の心靈が、自然界に一種不可思議の魔力を以て浸沈せり、則ち其の敎訓に從へば榮へ、之に遡うて其の被造物を傷害せんと欲せば、其の手腕腋下に固着して動かす可からざるか、或は却つて己が胸憶を打擊して堪ゆ可からざるなり。世上の事々物々都べて吾人に信仰を敎へざるはなし。吾人は唯々諸々服從を是れ要す、然らば我れ等に保護あるなり。嚴肅端然清聽を是れ要す、然らば眞理の餘音嫋々として耳底に徹す可し……若し人爲的の不幸なる干涉に依り、自然界の運行阻破せられざりせば、事業、社會、文學、美術、學術、宗敎等、あらゆる都べてのこと、今日よりは一層の進醇を見る可きや知る可く。創世の當時抽き出されし天國、及び人類の心底に理想せられし天國は、明かに自から組成せられしや知る可きなり。則ち薔薇空際、日輪は、彼れの天眞爛熳を表はし、當初の理想は依然として彼に懸れるなり。

吾が信仰

吾人は確信熱誠なる勇士の善美なる事蹟古譚によりて、太甚だしく刺衝感激せらるゝを見るなり。そが刺衝打擊の一琴線は、縱令其の年紀風土の差異を以てするも、未た些かの差異をも見出さゞるなり、然り、言語の種別を以てするも、寂漠荒寥たる亞刺比亞土蕃に行はれし宗敎を以てするも、文明の先驅たる佛蘭西士人が信奉せる宗敎の高下を以てするも、倘ほ一も影響を見ず、毎に全世界を蔽へる明道明德の君子を一貫して、一宗敎の存在せしことを悟見すべきなり＝即ち彼等の事蹟より觀察して、熱實なる愛理の人、善良誠實なる人士、及び同情に富める人士に於い

て同一徹に出てし所。以て正行勇敢の所行に於いて一致の宗教＝依是吾人は次ぎの如く確信して動かざるなり。抑も世の怪疑學派なる者が、頻りに沒理怪疑を說くと雖とも、其の事蹟より發射せる所の一條の道火は、燄々赫奕として復た覆ふ可からず、以て怪疑學派を後へに破倒せしむるに足る可きなり。

吾人が信仰の最初の單純なる基礎たるものは、他にあらず。蓋し自然界の創造者＝宇宙の主宰は、或る純眞潔淸なる心識を索めて、そが內に彼れ自身が存在の證跡を遺さずして而して止む可きにあらざると。實に道念は、依て以て宇宙が成立創造せられし所の法則を各人に明示せると。吾人は自然界を一貫して意趣一致の均一目的契合の仁惠を洞見すると、即ち世に善は愈々益々進んで善たる可く、惡も次第に前進して善遷す可き一大動力が、常に宇宙に遍滿存在すると等を承認許諾するは、則ち吾人が最初の單純なる信仰の基礎を形ち造るものなり。

吾人は今日各教徒が、彼れ等の以て職分として熱心庇護す可き教權をば、妄に拋擲して保持せざると云ふの訴告を、喜んで聽許する者なり。實に世運は次第に推移すべき大運力、心意は漸次開達の運に向ひ、湍々焉として暫くも停滯するとなき大潮流なり。吾人は此の社會に、眞正なる宗教の莊嚴全盛の華期を歡迎するもの、天に向つて最善最美の要求を捧ぐるを以て其の最高なる祈禱と思念するもの、得て復た求む可からざるの一基督の存在を見て敢へて怪まざるもの、人類は無限の希望(ホープ)を享有せりとするもの、耶蘇がなせる所の事蹟は即ち特筆大書せる各人類の事蹟なりと速信するものゝ如き。此の賤劣なる(斯る願望、欲求、祈禱、信念を賤劣と云ふ可くんば)靈魂の階級が、此の社會に包括含容せらるゝは、吾人の以て大に歡喜に堪へざる所なり。(河北隱士摘譯)

○教會の前途

世運の開達、人心の進步は、端なくも教會內部を驅つて種々の變動を起さしめ、大瀾濤大恐荒は將さに來らんとして甚だ平穩ならず。見よ批評學及び獨立思想の銳鋒は叨りに教會の門口に向ひ、業已に自由主義の一大打擊は轟然其の中に落下せり。於是乎、人類一般の宗教的精神は一大活力を加へ、大に振興するを再び目にせん。果して然らば如何なる宗教を將來に見るを得

べき乎、將來の宗教問題を決定せんとする者の輕々看過す可きとならず、即ち舊禮拜、故儀式の復活を見るに至らん乎。將た又爾來學術の揣摩見により建設せられたる教會破壞せられて、舊殿廢堂再び利用せらるゝに至らん乎。決して然らざる可し。眞正なる神の教會が建設せらる可けれど、其の教會や信條、宗派、人種的に屬せずして、適さに正義、純潔、親愛を信仰する所の神子等が彼此の差別なく、拜壇の下に跪坐團欒する人情（ヒューマニチー）的の教會なるべきなり。今後人々は雲を衝くの堂宇を建つ可き乎。將た洋々たる洋琴の音、鏘々たる琴瑟の響、果して能く人心に宗教思想を喚發すべきか否かを知らず。然れども神の預言者に教訓せられたる正義の訓誨は、永世消滅すべきを知らざるとは、或る西字雜誌の記載する所なり。

○ヘンリー、ドラモント氏

曾つて『心靈界に於ける自然の法則』『世界最大のもの』及び其の他有益の諸書をものし、該博の識、卓越の見、懸河の辯、以て雷名を世界の神學界に轟かせしヘンリー、ドラモント氏は、近頃米國に在つて進化論を講演せしが、其の論中明かに基督教理に反せる異端の分子ありとて、氏を排斥せんとする論議紛々たりとは「クリスチャンレジスター」の報ずる所なり。這般の出來事にして果して信なりとするも、學術、哲學の進歩啻に昔日の比に非ざる今日に於いては、其の好侶伴を叫合する誠に容易なる可く、又氏に向つて同情の感を抱くもの決して尠きにあらざるべきを思へば、氏は鎖細の痛痒をも猶ほ覺えざる可し。唯憫む可きは頑迷固陋の輩、蠢々乎として徒らに安眠をこれ貪り、眞如の曙光を承認する能はざるとにこそ。然れども亦是れ啻に彼岸の火のみにあらさるを觀じ來れば悵然奮然。氏たる者幸に自愛せよ。

○天主教界の新現象

聞說らく、經典歷史の教授ファーザー、ジャム氏は、曩きに天主教徒の夏期學校に臨み一場の演說を辯じ、全世界洪水の事實を批難せりと、瞥見し來れば是れ鎖事のみ、未だ喋々するの價値なきものゝ如し。然れとも雲霓の有るところ早晩必らず雨あり、綠草の點綴するところ遠近必らず淸泉あり。天主教は嘗て世人の以て最も迷信者の聚合せる所となす處なり。而して此の天主教にして今や斯くの如く批評學の浸潤する所と

なる、誰れか雲霓ならずとせんや、誰れか緑草ならずとせんや。唯願ふ、陰雨益々生じ來り、大雨沛然益を傾け、頑迷の汚穢を淨め、妄誕の塵埃を蕩盡し去り、早くも雨後の清涼を眺望するの時期來らんことを、濡れぬうちこそ露をも厭へ、洪水の事實を否定するも、舊約書は稗史なりと論斷するも、等しく是れ聖典を批判せるものなり。シャム氏たる者百尺竿頭更らに一歩を進めよ、此の時に際し吾人敢へて疾風となり、迅雷を喚起するの勞を辭せざらん、

○マッコレー氏の着京

かねてユニテリアン大會出席の爲め歸米中なりしクレー、マッコレー氏は、去月二十九日海路無恙着京せられたり。氏が這回齎らし來る所の新智識、新方針は、今後の本誌に向つて一光彩を放たる可く、又ユニテリアンの前途新氣焔の勃騰するを見る可し。請ふ刮目一番其の活運動を視よ。

○佛者と俗法

佛者と俗法何ぞそれ關聯するの甚しきや。吾人曩に佛者が俗人の厄介たるを慨したりき。而して今又日本の寺院法なる左の記事を見る。是に至て其の墮落の太甚しきを懷ふ。末派の僧侶吾人之れを問はず、唯一二具眼の佛者に注意を請ふのみ。佛者中具眼者なしとせば則止む。

豫て關係者に附して諮詢中なりし寺院法は此程に至り取調も略ぼ濟みたるやにて尙各派管長に交付し其上の手續に及ふへしと云ふ但該法案中の重なる點は政府の保護すへき寺院を勅願建立及ひ舊宮家山門準門跡等由緒あるものゝみに限り自餘の寺院は盛衰興亡一に自然に放任するに在り斯くて山師坊主生臭法師等の貪慾を防かんとするなりと又た管轄上に就ては本山と末寺との關係等を規定し例の騷動宗に於ける醜體の如きを防遏せんと期するものゝ如し寺院も俗法の厄介となるに至りて世は降れりと。

○再び折衷派に就て

吾人前々號に於て折衷派なるものを論ぜり。然るに同志社文學の如きは實形なきの故をもて塗抹し去らむとするも、實形とは抑何ぞ。世に折衷派基督教なる看板こそ揭げざれ、明にこれあるを如何せん。彼の徒必ずしもオルソドックスなる者に非ず殆と吾か自由派に密接し、而かも時に或は其の主義をも枉げて同化を說き

軟化を勸むるが如き状態なきにしも非ざる可し。然りとて又全く自由派なるものと同徹なる乎、否大に然らざるものありて存す。これ吾人の折衷派と稱する所以のみ、他に悪意あらむや。猶言ふ可きとあり、然れども紙幅の許さゞる所、後日復た論ずるの機を得ん。

○時事偶感

『いのち』の奇言、 曩日「日本之花嫁」を著はして其の轟名(?)嘖々たる田村直臣氏の手に作ると聞へたる『いのち』は、そも何に感じたりけん妙な統計を載せたり、曰く「基督教會に三奇人あり… 各奇人村を其字の下に持つ… 村の上に冠する字は曰く植、曰く内、曰く松」と田村氏の手に作る雜誌が記せり。吾人植村松村内村三氏の果して奇人なるや否やを知らずと雖も、猶ほ一氏の村を持せるを忘れしか、序手に之れをも加へては如何。其の人は奇人(?)を脱して俗物となり、殆と亂臣と認められしか、或は三氏と騈列するを自ら恥ちたるか、然らば殊勝々々。敢て問はんいのち記者に。

牧師と法律問題 法律は爾の名譽を復するに足ると想ふ勿れ、法律は僅に爾が敗徳加害の行動に就て決裁の力あるのみ以て内心の正否を判す可からず。吾人相馬事件を見る、其の何れか是なるを知らずと雖も、原被共に道徳上罪なしと稱す可からず。星亨氏の誹毀事件彼れ假令ひ勝訴すと雖とも、彼の名譽は遂に恢復せらる可からず。相馬星彼れ一は平々たる世襲の貴族のみ、一は尋常一般の一狀師のみ、彼等の爭ふ所は多く俗事に關る、又以て法律問題ある珍らしとなさず。然れども苟も其の名籍を宗教界に列し而かも牧師とか教役者とかの地位に在りながら、著書の故をもて訴告せんと頻に强談を試む。告訴せばせよ敢て壯士を用ふるの要あらん。人皆愚なりと思ふ勿れ、爾の脅喝手段に乘る者は爾の愚を措て他に覓む可からず。兎に角エライ者なり、牧師先生の法律厄介とは。嗚呼壯なる哉。

人身攻撃 とは何ぞ、著作とは何ぞ、著作とは自己の内心を發表せるものには非ざる乎。然らば著作の批評(今は道徳に關する物に就て言ふ)は勢筆者の内心に立ち入らざる可からず、其の著作にして内心の發表に非ずして單に射利營業的に止まらざる限は。固より其の悪意を以て誹毀せんとするは大に否なり、然れとも攻撃と誹毀とは自ら區別あり。事實を叙述する敢

て誹毀と云ふ可らず。

近刊雜書

◉早稻田文學　第四十八號は次號よりの一大改革の呼聲を豫送して曰く「一詩文に關する評論、二古今東西の詩文人に關する傳記評論、三哲學審美論に關する講説評論、四美文の飜譯、五美文の創作等なり」と云ふ早稻田曙曉の一聲鏗確に世人を刮目せしむるの價格あるを信ず

◉中央學術雜誌　第十號「背德と悖德」は明治の一大疑獄たる相馬家騷動を論じ法律は背德加害の所爲を罰す可きも社會に於ける正邪理非の標準は道德人情仁義愛等種々の規則に係るものにして假令相馬家錦織何れ勝訴に歸すと雖とも兩者何も悖德たるを免れず其關係者星亭及び收賄せりと嫌疑ある者皆悉く悖德たるを免れず而して之を論辯するの辯士講談師記者亦然りとて次の一句を遺せり「己の悖德を忘れて他の悖德を笑ひ笑ふ者は又た笑はれ苟も相馬事件に關係する者は悉く道德の前に死す」と其他「金と銀及び物價」「美人論」と織田法學士の行政法講義あり

◉三籟　第六號松村氏の「社會の制裁」は政治家の悖德を叱咤し富豪家を打擊し來つて殘す處なく丹羽清次郎氏亦富豪家を警醒せんとす何ぞ三籟と富豪家とは轢するとよ其他百合園主人の「閒靜」戸川君の「愛犬」美妙君の「魔界天女」等いつもながら新光彩の見るべきものあり

◉文學界　第八號は古藤庵の「朱門のうれひ」を以て殆と塡められたり

◉評論　社會の人上は先進誘導の人中は混沌未定の人下は惡僻固結の人と區別す可く就中世上最多數を占むるは混沌未定なる中人にして彼は惡化す可く又善化すべし實に社會の氣風は中人の惡化善化に在るなり而して能く中人を化了する者は上流に居して率先啓導するの公役を爲す者の人物及非凡少數の率先者の啓發と上中等人士の反響より起る輿論の傾向なりと論ぜしは第十三號「氣風論」なり其第十二號には透谷氏の「熱情論」及び靜淵氏の「德川家康の仁政主義」等なり

◉共勵會雜誌
◉心海 ｝兩雜誌何れも去月の誕生にして前者は共勵會員間相互の氣脈を通じ其の主義方法を全國に唱道擴張せんとする時事雜誌にして其の任とする處は一信仰を修練するの機會を與へん二宗教上の働を奬勵し三秩序的運動の機關を備へんとするに在りと云ひ後者は正教會より發刊せられしものにて其發刊の旨意に曰く「文明開化は元是人心格物致知の特性にして各自適宜に此特性を切瑳琢磨の自由あり……本誌の發刊を計りしは則ち所謂人心の特性を切磨して庶幾は社會の隆盛に添ふる萬分の一助たらんとを努むるに在り……」と其載する所倫理の範圍、基督教の三大派、唯物論に就て、五世紀における基督教哲學思想、悟眞と誤謬等なり今後駿河臺上其の教會と共に高からんを望む

◉眞理　四拾七號教海雜話(三並良氏)教育閑話(ボルヤン氏)基督教抗論正義(丸山通一氏)良心の現象及び本踪(キリストリープ氏)等

◉基督教青年　第六號田村氏著「日本の花嫁」評、人生篇、我等が先覺に顯はれし神、十九世紀の豫言者ロベルトソン等、

◉日曜叢誌　第四拾六號臨終、罪、倫動貧民區立教育及傳道、舊約聖書人物＝ケインとアベル等閱讀の價値正にこれあるべし

◉佛教　第七拾五號高田道見氏の精進波羅密、岡村學順氏の宗教の自力及他力、井上晉氏の僧爵考其他佛教徒が世間と離隔するを頻に慨嘆する所など佛教雜誌中の意氣あるもの他も宜しく少しく該誌に倣ふ所あれ

右之外去月中本社に寄送せられたるもの左の如し

◉同志社文學　第六拾九號　京都市　同志社文學社
◉六合雜誌　第百五十三號　東京本郷區東竹町　警醒社
◉哲學雜誌　第七十九號　東京本郷區本郷六丁目　哲學雜誌社
◉護教　自百十二至百十六號　東京府南豐島郡澁谷村　護教社
◉佛教通信講義　第貳號　東京麴町區上六番町　光融館

◉佛典講義錄	第拾五號	京都西洞院御前通下鍛冶屋町	鶴龍協會
◉自由基督教	第壹號	東京麴町區飯田町四丁目	自由基督教社
◉正教新報	三百六三百七號	東京神田區駿河台北甲賀町	愛々社
◉能仁新報	自百七十三至百七十七號	名古屋市南伊勢町	能仁社
◉信仰之友	第貳拾參號	東京淺草區福富町	信仰之友發行所
◉いのち	第二十一號	東京芝區白金三光町	自營館
◉反省雜誌	第八號	京都下京區東中筋北小路下ル	反省雜誌社
◉傳燈	五十二五十三號	京都下京區東寺町	眞言宗傳燈會
◉大同新報	第七號	京都府葛野郡大內村	太同書院
◉國教	第廿五廿六號	熊本市安巳橋通町	國教雜誌社
◉九州教育雜誌	第十三號	熊本市南新坪井町	九州教育雜誌社
◉大日本教育會雜誌	第百卅一號	東京神田區一ツ橋通町	大日本教育會
◉女鑑	第四十七號	東京麴町區平川町五丁目	國光社
◉婦人雜誌	第六十八號	東京日本橋區橘町一丁目	婦人雜誌社
◉北海之光	第四號	函館青柳町五十番地	北光社
◉德風	第十二號	愛知縣碧海郡知立町	德風發行所
◉振民	第五號	鳥取縣氣多郡小鷺川村	振民社
◉花の園生	第三十二號	京都府葛飾郡花園村	花の園生社
◉法藏	第二十一號	京都市東六條	西村法藏舘
◉法話	第六十二號	東京淺草區北清島町	法話發行所
◉道之友	第四十二號	名古屋市下花屋町	道之友發行所

彙報

◉歡迎會　かねて歸米中なりしマッコレー氏には去月二十八日無恙再び渡來せられたるに付て自由神學校生徒の發起を以て盛大なる歡迎會は去る三日を以て唯一舘樓上に於て催され氏が在米中の見聞を演說せられたり◉リスカム氏の遠逝　かねて自由神學校の教授としてユニテリアンの爲めに功勞尠なからざりし氏が過般中病魔に侵され歸米鄕地に於て療養を盡せりと雖とも醫藥遂に其の効なく去月五日を以て空しく鬼籍に上れりと云ふ吾人此の訃音に接し長大嘆息天何ぞ此の士人の命數を奪ひ去るの太甚しきやを訴へずんばあらざるなり◉自由神學校の始業　同校は夏期休業中の處愈々來る五日を以て始業せらるゝと云ふ◉大西氏の結婚　文學士大西祝氏は去月七日東洋英和學校卒業生にて好評ありし松井いく子と合卺の式を擧げらる司式は綱島佳吉氏媒介は松村介石氏夫妻なりし同月十六日には午後五時より知己朋友凡そ八十餘名を富士見軒に招待して丁寧なる晩餐の饗應あり一同歡を盡し興を極めて正に散會せしは午後九時過なりき因に云ふ同日招待に應ぜしは中島元良橫井本多井深德富松本高野諸氏等何れも知名の基督教徒なりき。◉協議俱樂部の田村問題　現今基督教社會一物議たる田村氏著「日本の花嫁」問題は遂に協議俱樂部の議に上れり同會は去月十五日午後七時より京橋區日吉町共存同存舘に臨時集會を開きたり會する者橫井植村嚴本氏等皆錚々の聞あるもの而して出席者の賛同を得て「田村氏の著書は牧師の記述すまじき者且爲めに世上の物議を惹起し基督教社會の事業を害せること少からずと認むるに付其職を辭せらるゝの宜しきことを忠告すべし」と決議し本田岩本の二氏其の勸告委員に當れりと田村氏なるもの如何ぞ生色ある慚愧以て天に謝し歷縲以て地に謝す可きなり辯駁書とは何の鳴呼ぞ◉本願寺と保險事業　とは讀賣新聞の報ずる所曰く「……其說く所の趣は純益金の二分を本山に與へる等の個條にて……若し果して本願寺にて之に應ずるものとせば取りも直さず本願寺自から營利の俗界に沈淪する譯柄にして甚だ以て宗教の本旨に悖るものと謂ふ可し併し保險熱の高き今日なれば爲にする所あるの徒が構造せる浮說かも知るべからず」吾人も其浮說ならんを望むなり

前々號の本誌

日本獨創的基督教（松村介石氏）宗教の新系統（竹内楠三氏）文明とは何ぞ（矢部新作氏）感化制度設定の必要（堤法學士）ユニテリアン教私解（土谷忠治氏）ソクラテス降誕會に於て（蓮沼磐雄氏）及び基督教の三潮流、自由派の使命、自由派の戰畧、自業自得、佛者の大得意、評論子の大日本教育會評、冷熱調和、殖民事業と宗教家、評論子に問ふ、再挑「天則」國光の一斑、哲學科卒業生等

前號の本誌

釋迦牟尼佛略傳批評（佐治實然氏）偉人としての耶蘇基督（十八公子松居松葉氏）ペルリコ道義要論（宮本法學士）述懷（虎堂學人）本元眞理（伊東洋次郎氏）及び削足適履、無我觀と忠孝論、忠孝道の不幸、卜里老猿とは誰ぞ、宗派心とは何ぞ、日本の花嫁、偶感、ブリックス氏等

次號の本誌

には大西文學士の續稿立花文學士の知行論堤法學士の道德と法律との關係其他宮本法學士、松居松葉、佐治實然、矢部新作、竹内楠三諸氏の續稿寄送せられたるに付紙面の許す限り登載して讀者の一粲に供せん其他毎號雜錄近刊批評彙報等を載す

前號の誌上に立花文學士、松居松葉、竹内楠三諸氏の寄稿登載すべき樣豫告したりしも紙幅の都合により次號に廻すこととせり讀者之を諒せよ

特別廣告

日本西村謙三先生譯
宮中顧問官　西村茂樹先生序
米國哲學博士ビックスビー氏著

道德之危機

洋裝上等クロース　全一冊
製金文字入極美本
紙數本文三百廿四頁
定價金七拾五錢
特別賣價五拾錢

本書は米國哲學博士ジェイ、チーハビックスビー氏が當代哲學の大家として著名なる彼の英人スペンサー氏の著書「倫理の基礎」の立論の外に專らにして內に遺す處あるを慨し之れを精細に評論し**科學的智識に基き道德學の一新機軸を發表**せるものなり、博士の見識と其の精密なる**論理的分析法**はス氏が極端なる進化論の自家撞着なる謬見を明かにするに足れり、特に本書は西村謙三先生の雄健なる筆法と練達なる語學上の智識とに依りて飜譯せられたる者なれば**行文流暢旨趣一貫**能く原意を盡して遺す處なし、今や**德教衰頹の危機に際す**憂國の士は本書に依り蓋し大に得る處あるや必然なり

發行所　東京々橋區加賀町八番地　**日本弘道會**（ゆにてりあん）